
新世紀エヴァンゲリオン～未来への案内人～

鉢嶺来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン〜未来への案内人〜

【Nコード】

N8253L

【作者名】

鉢嶺来

【あらすじ】

5 / 6 累計ユニーク43000突破ありがとうございます！

注意書き：人様の作品に似通ってしまっている部分があるそうです。
嫌悪感を抱く方は読むのを控えてください。

今度は被らないように他の作品などをじっくり見て、書きたいと

思います。

誤字について感想くださった方、ありがとうございます。

6/12に修正いたしました。

ゼーレの計画通りにサードインパクトは起きた。

シンジは自らの行いを悔い、呪い、絶望して深い眠りへとつく。
最後に残したアスカの言葉「シンジ」、あれはどういう意味だったのか？

そして目が覚めたとき、目の前には自分自身が立っていて…

しかも自分の姿は碇ユイそっくりな女の子になっていて！？

TVアニメ版をベースに時代逆行、パラレルワールド、性転換といった物が含まれます。苦手な方は戻るボタン！

超絶短い後日談あります。

<http://ncode.syosetu.com/n3401m/>

プロローグ（前書き）

TVアニメ版、旧劇場版をベースに時代逆行、パラレルワールド、性転換といった物が含まれます。苦手な方は戻るボタン！

ブローグ

「サード発見、これより排除する」

「悪いな、これも任務でね」

少年に銃口を向ける3人の大人たち。

ドン！ドン！

銃声はその銃とは別の方向から聞こえ、2人の大人が倒れる。

少年の下へと走る一つの影。

咄嗟に銃口を少年からその影へと狙いを変える。

影は膝を上げ、残った1人の大人の顔面へと直撃させる。

そのまま銃口を大人へと向け。

「悪いわね」

そう言ってドン！と銃を放った。

「さあ、行くわよ」

ドコへ...？

ボクハモウナニモシタクナイ…

「ぐずぐずしない!」

そう言つと少年の手を無理やり引つ張り歩き出す。

イタイヨ…ミサトサン…

少年は抵抗もしないままだ引きずられていった。

「OK、アスカ、エヴァシリーズは確実に殲滅しなさい、直ぐにシンジくんも上げるわ」

エレベーター内で携帯を耳に当ててミサトはアスカと話す。

アスカ…アスカガ…ブジ…?

ガーッという音とともにエレベーターの扉が開く。

それとともにミサトはシンジの手を掴み一目散へダッシュした。

「見つけたぞ!サードだ!」

「チルドレンは全員殺せ!生かしてここを通すな!」

ダンダン!ダン!

浴びせられる無数の銃声。

「うっ！」

そのうちの一発がミサトへと当たる。

しかしミサトは止まらない。

初号機へと通じているリフトの前の防壁を降ろす。

「これで…少しは、時間が稼げるわ…」

ジワリと、ミサトから血が滲み出る。

チ…チ…ダ…

「ミ…ミサト…さん、血が…」

そのシンジの声にミサトがシンジの方を見て微笑む。

「んふ、やっと普通に喋ってくれたわね」

「は、早く手当てしないと…」

「いいのよ、もう、それより…」

ミサトの顔が厳しいものになる。

「シンジくん、最後の命令よ、エヴァに乗りなさい」

「……」

シンジの顔が曇る。

「…僕は、エヴァになんか乗らないほうがいいんです…
トウジも傷つけた、カヲル君も殺した…僕なんかが乗らないほう
が皆のためなんだ…」

「そうやって、また逃げるの!？」

「……」

「あなたにはあなたにしか出来ないことがあるはずよ…
もう1回、エヴァに乗って、そして全てにケジメをつけてきなさい、
い、

その後はあなたの好きなようにしなさい」

「でも…僕は…!」

シンジの言葉は途中で止まった。

ミサトの唇がシンジの唇に重なったからだ。

濃厚なキス。

鉄の味しかない…キス。

「大人のキスよ、帰ってきたら続きをしましょ」

そう言ってミサトはシンジの右手に自分の口ザリオを渡した。

「ミサトさん！なら、ミサトさんも一緒に…！」

シンジの言葉はまたも遮られる。

今度は防壁を破ってきた侵入者によって。

ドン！とミサトの手によってリフトに押される。

「アスカを…お願いね、シンジくん」

「ミサトさん！」

上がっていくリフトの金網を掴みながらシンジは叫んだ。

壁に背を当ててミサトの身はずるりと崩れていく。

「こんな…ことなら、カーペット…替えて、おけばよかった…かな、
ねえ…ペン…ペン…」

シンジはロザリオを握り締めていた。

僕がうじうじしていたからだ…。

また、1人、守れなかった。

だから…せめて…せめて、アスカだけでも…！！

「あああああああ！」

絶叫するアスカ。

アスカのシンクロ率は118%を超えていた。

体にかかるフィードバックもハンパではない。

痛みを堪えながらアス力は槍が飛んで来た方向を見る。

そこには倒したはずの量産機たちが再生を繰り返しながら立っていた。

翼を生やし、跳び、弐号機へと群がろうとする量産機。

「コロシテヤル…コロシテヤル…コロシテヤル…」

アスカの思念と叫びが弐号機の手を伸ばす。

だが、降り注ぐ5本の槍は無残に弐号機を貫いた。

ドオオオオオオオオオオオオオオン……

ほぼ同時にネルフ本部から光の翼を纏った初号機が姿を現す。

シンジの視界に無残な姿の弐号機が入る。

プツン、とシンジの頭の中の何かが切れた。

「汚い手で…アスカに触るなああああああ！！」

音速を遥かに超えたスピードで瞬時に5体の量産機を薙ぎ倒す。

そして一本、一本、弐号機に刺さった槍を抜いていく。

最後に刺さっていた槍を抜き終わるとほぼ同時に違う槍が初号機に向かって飛んで来た。

A・T・フィールドが展開される。

初号機は弐号機を抱えその場を跳んだ。

初号機の展開したA・T・フィールドは侵食され槍は初号機が立っていた場所へと突き刺さる。

倒したはずの5体の量産機も復活していた。

「発令所！聞こえてますか！？」

シンジの叫び。

「シンジくん！もう充分よ、逃げて！」

通信から聞こえたのはマヤの声だった。

「…もう、僕は…逃げません…！」

「シンジくん・・・」

「それより、こいつらを倒す方法は無いんですか!？」

「残念だけど、S2機関が搭載されたエヴァシリーズを倒すことは不可能だ・・・」

今度はシゲルの声。

「なら…時間を稼ぎます…その間に、アスカをお願いします…!」

発令所の3人はシンジのこの発言に驚きを隠せなかった。

以前のシンジには考えられない発言だ。

シンジは言うと同時に地面に突き刺さった槍を抜いてそのまま空へと力任せに投げた。

槍はそのまま大気圏外へと飛び、月まで到達する。

(槍さえなければ…少しは時間を稼げる…!)

シンジの考えは間違っていなかった。

シンジの現在のシンクロ率は200%を超えている。

このA・T・フィールドを破る方法はロンギヌスの槍を使うしかないのだから。

シンジは近づいてくる量産機を殲滅しながら次々と槍を宇宙の

彼方へと放る。

この死闘は3時間近くにも及んだ。

発令所ではシゲルとマコトが外へ行く準備をしていた。

「ちょっと2人とも、どこへ行くの!？」

マヤが叫ぶ。

「シンジくんの負担をちよつとでも減らさないとダメだろ」

「ああ、頼まれたしな、「アス力をお願いします」って」

そう言う2人は頷き。

「いいですね、副指令？」

「構わんよ……」

冬月のその言葉を聞くと、2人は発令所を飛び出した。

(どこにいる碇……、お前の息子は今懸命に戦っているぞ……)

・ジオフロント・地下・

「さあ、一つになろう…レイ」

ゲンドウは右手を差し出しレイの体内へと侵入する。

…が、その目論見は崩れ去った。

ゲンドウの右手は跡形も無く消滅し、後ろへと後ずさる。

「碇くんが呼んでいる…」

そう言つとレイは巨大な白い人型になり上へ上へと昇っていった。

発令所のマヤにレイの白い手が憑き抜ける。

「…ひっ…」

声にならない声を上げ、マヤは体を震わせた。

「…何…今の…？」

シンジはよく戦っていた。

初めから勝ち目のない戦いに。

終わりの無い引き算。

9から何回引いてもそれは0にならなかった。

頭を砕き、腕を挫き、足を切断しても、尚も再生を繰り返す。

シンジの疲労はピークに達していた。

唯一の救いは突然現れたシゲルとマコトが弐号機からアス力を助け出したことだった。

「……？」

数が足りない。

いつの間にか3体、量産機が消えている。

「はぁ…はぁ…どこだ…？」

ゴウ！と言う音とともに空から凄まじいスピードで「何か」が飛んできた。

それはロンギヌスの槍。

しかもオリジナルだった。

それは初号機のA・T・フィールドを容易く貫通し胸へと突き刺

تونس

「あああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああ！！」

――

シンジの絶叫が轟く。

「オリジナル！？老人たちめ……ここで起こす気か……！！」

冬月^{ふゆづき}が^が呟^{ささや}く。

初号機がゆっくりと空へと舞い上がる。

それに呼応するかの様に量産機も後へ続く。

初号機を中心に巨大な壁画のようなものが現れた。

ズン！ズン！

レプリカの槍が2本、初号機の両手に突き刺さる。

「約束の時は来たれり……」

「今こそ、初号機とそのパイロットを依り代として、計画の成就を……！」

初号機の前に巨大なレイがゆつくりと現れる。

レイの姿は次第にカラルになり、そしてまたレイへと変わる。

その手は初号機を包むように覆う。

瞬間、シンジの頭の中に膨大な知識が流れ込んだ。

人類補完計画の全容、ゲンドウの思惑、ゼーレの思惑、レイに芽生えた感情、カラルの意思。

その容量は100MBのハードディスクに1TBの容量を無理やり詰め込むようなものだった。

結果、シンジの精神は砕ける。

全てはゼーレの予定通りに。

世界中から赤い十字架が立ち上がり、全ての動植物は赤い液体へと還元される。

人間という垣根を捨てて、全てが混ざり合うかの如く…

意識を取り戻したシンジの目の前にあるのは赤いL・C・Lの海と横たわっている赤い髪の少女だけだった。

それから、シンジはアスカのためだけに生きていた。

アスカの口に無理やりL・C・Lを流し込む。

ただ、生かすためだけに。

アスカの口の両端からだらりとL・C・Lが流れる。

（アスカ…ごめん）

シンジは自分の口にL・C・Lを含むと血の味を我慢しながらアスカの口へと自分の口を運ぶ。

そう何日過ごしただろうか。

アスカの目が動き、シンジを捕らえる。

「アスカ！」

シンジは思わず叫ぶ。

「……シンジ……」

これが赤い髪の少女の最後の言葉になった。

シンジの目の前で少女の体が弾ける。

赤い赤い、L・C・Lへと。

それから数日、シンジはもう生きる気力も失っていた。

（僕がもっと早く…しっかりしていれば…）

鈴原トウジという親友に怪我を負わせることはなかった。

（僕がもっと早く…しっかりしていれば…）

綾波レイという少女を自爆させることはなかった。

（僕がもっと早く…しっかりしていれば…）

渚カヲルという存在を殺すことはなかった。

（僕がもっと早く…しっかりしていれば…！）

葛城ミサトという姉を見捨てることはなかった。

（僕が…しっかりしていれば…！）

惣流・アスカ・ラングレーがこんな目にあわずに済むことはなかった。

…

……

……

シンジは考えるのをやめた。

考えたって何も戻らない。

全てはこの赤い海に等しく溶けて混ざり合っている。

もう疲れた……

このまま死のう、そうシンジは考え、両目を瞑った。

そして、そのまま意識は遠のいていった。

回帰（前書き）

エヴァのコアファンには正直あまりお勧めしません。
色々細かなところが違っていると思いますし^^；

回帰

じーわ、じーわ

蝸が鳴く。

まるで真夏の様な暑さの中、道路の真ん中で1人の少女が倒れていた。

「駄目か…仕方ない、シェルターに行こう」

電話ボックスの受話器を置くと少年はちらりと手元にある写真を見る。

胸の辺りに「ここに注目」と書かれてあるその写真の美女と待ち合わせしているはずだった少年はトボトボと歩き出した。

「やっぱり…来なきゃ良かったかな」

数百メートルほど歩いたところで少年は少女に気付く。

「た、大変だ…！」

急いで少女に近寄る少年。

「脱水症状でも起こしたのかな？もしもーし、大丈夫ですか？」

その声に少女は「…うつ」と呻きを漏らし微かに目を開ける。

人の…声…！？

ガバッと起き上がる。

そして目の前の少年を見て、愕然とした。

僕が…いる…？

目の前に自分自身がいる。

夢だろうか・・・？

それにしても暑い。

世界が赤い海に満たされたあの日から暑さなんて感じなかったの
に…

赤い海…、そう、赤い海はどこに行った？

辺りを見回す。

あるのは霽のかかった道路と遠くにある公衆電話。

そして目の前にいる「自分自身」。

何だ…？何が起きた…！？ここはどこだ…？

「あの…大丈夫…ですか？」

目の前の「自分自身」が話しかけてきた。

「あ、ああ、大丈夫…っ？」

今度は自分の出した声に驚いた。

明らかに声が高い。

「君、シェルターに避難しないの？僕はこれから向かおうと思ってただけど…。」

シェルターに避難？まさか…まさか、ここは…

「君！今は西暦何年！？」

「え…2015年だけど…それがどうしたの？」

自分が知ってる年代より1年違う。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

その時、遠くで爆発が起きた。

戦闘機がミサイルを撃ち込んだのだ。

「戰鬥：！？」

少年が驚く。

少女が見るのはミサイルを撃ち込んだ先。

「……使徒……！」

「え？」

少女の呟きに少年が何事かと思う。

「ここはやばい！どこか他の場所へ！」

少女はそう言々と少年の手を取り走り出した。

「ちよ…ちよつと待って…」

少年は戸惑うように呟く。

瞬間、爆発が2人を巻き込んだ。

「うわー！！」

爆風で軽く4〜5メートルは吹き飛ばす。

そこに一台の青いルノーがドリフトを決めて現れた。

この車…！

少女の思ったとおりの人物がルノーから降りてくる。

「おまつたせー 待たせちゃったかしらん？」

ルノーから降りてきたのは葛城ミサト本人だった。

「碇シンジくん、で、間違いないわね？…と、そっちの女の子は…
？」

「いや、あの道端で倒れてて、それで…ってうわぁ！！？」

少女は泣いていた。

顔をくしゃくしゃにして、恩人の元気な姿がまた見れたことで。

「シンジくん？女の子を泣かしちゃ、駄目でしょ？」

「ち、違いますよ、葛城さん！き、君、大丈夫？」

「うん…だいじょう…」

そこで気付いた。

『女の子』という単語に。

そして思い出す、自分の声色が高いことに。
恐る恐る胸を触る。

「わ、わ、わ――――！！！！」

急に叫ぶ少女に思わず2、3歩後ずさるミサトとシンジ。

「ぼ、僕……女……の子……？」

自分の顔をペタペタ触りながらその少女は言った。

ミサトとシンジはそんなの当然でしょ？と言いたそうな顔をしている。

「まあ、こんな所に放って置くことも出来ないか……」

ミサトは溜め息をついた。

またリツコに小言言われそうだわ……

「あ、戦闘機が逃げてく……」

シンジがぼつりと呟く。

ミサトはその言葉に反応し、振り返る。

「ちょっとお！N2地雷を使っわけえ！！？」

ミサトは2人に覆いかぶさった。

「わっ」

「伏せて！」

一瞬の沈黙の後、大爆発。

ルノーは錐揉みしながら吹っ飛びミサトたちは地面を転がった。

「やったぞ！」

「どうやら碇君、君の出番は無かったようだね」

「映像回復、映します」

「どうせあの爆発だ、何も残ってはいない」

「爆心地にエネルギー反応！」

「なんだとお！？」

回復した映像から映し出されたのは異形の形をした怪物。

「街一つ犠牲にしたんだぞ！」

「我々の切り札が……」

その映像を見ながら落胆する者たち。

「やはりA・T・フィールドか……」

「ああ、使徒相手に通常兵器じゃ齒が立たんよ」

そう言うつとゲンドウはサングラスの下に隠された笑みを作る。

映像の彼方へという異形の怪物は仮面のような顔を再構築するかの様に2つ目の仮面を抉り出す。

「ほう、自己回復能力もあるのか」

その刹那、映像が途切れた。

「おまけに知恵までついたようだ」

「はい…はい、わかりました」

今まで指揮を取っていた人物が受話器を置く。

「上からの御用達だ、君たちの出番だよ」

「碇君、我々ではあの怪物に何の対抗手段もなかったのは認めよう」

「だが…君なら、勝てるのかね？」

ゲンドウは人差し指で軽くサングラスを上げると

「そのための、ネルフです」

と言った。

「大丈夫？」

「ええ、口の中がしゃりしゃりしますけど・・・」

「僕も、大丈夫です」

「なら結構、それじゃやるわよ、せーの！」

そう言つと3人は縦になったルノーを力いっぱい背中を押す。

ドス・・・ンと言つ音と共にルノーは正位置に戻つた。

「あの、葛城さん」

シンジがミサトを呼ぶ。

「ミサト・・・でいいわよ、碇シンジくん、それと・・・」

ミサトが少女を見る。

「あなた・・・名前は？」

「ひゃい!？」

少女が固まる。

名前・・・!?!?どうしよう、シンジって名乗っていいのか!?!いや、駄目だ、

今はどうやら『女』になってるみたいだし、それに目の前に紛れもなく『僕』がいる・・・

「どうしたの?名乗れない訳でもあるわけ?」

ミサトは怪しげに少女を見た。

シンジはキョトンとした顔で少女を見ている。

「あの、え〜と、そう、『シズク』です、僕の名前はシズク」

「名字は・・・?」

「え?あのみ...碇...ですけど」

「なんですってえ!？」

ミサトが目を丸っこくして言った。

シンジも驚いている。

「あ、あれ…そんな驚くことですか？ど、どこにでもある名字じゃないですか…は、ははは」

「ま、まあ、確かにそんな珍しくない名字だけど…でも本当に偶然？」

「偶然ですよ、偶然…それよりも車どうするんですか？」

「確かに…これじゃ動きませんよ、ミサトさん」

「ああ、それなら大丈夫よ」

ルノーは道路を走る。

落ちてたバッテリーを使つて。

「こんなことして…いいのかなあ…」

シンジが不安げに呟く。

「いいの、いいの、私公務員だから」

「関係ない気がしますけど…」

「可愛くないのねー」

そう言いながらミサトは携帯で電話を掛ける。

「ええ、彼の安全は確保したわ、あと成り行きで民間人を一名確保、事を急ぐから一緒に連れて行くわよ」

携帯の相手の声がよほど大きいのか耳から遠ざける。

「仕方ないでしょ、あの状況で置き去りにするわけにもいかないし」

間違いない…これは『あの日』だ、あの日のあの時間にいる…

シズクは戸惑っていた、が、それ以上に自分の中には沸々と湧き上がる喜びの感情があった。

何が起こったのかはわからないけど…これで…もしかしたらあの未来を変えられる？

あの最悪な未来を…トウジをミサトさんをカヲルくんを、みんなを、綾波を…そしてアスカも…救える…！？

シズクはカートレインに乗ったルノーの中から天井を見上げて微笑んだ。

「あ、そうだ、シンジくん、これ読んどいてね」

ミサトはそういつと『ようこそ、NERVへ』と書かれた小端子をシンジに渡した。

「ネルフ…父のいる所ですね…」

「まあね、お父さんの仕事、知ってる?」

「…人類を守るための、大事な仕事だと…先生からは聞いてます」
シンジとミサトのやり取りを見てシズクは思う。

このままじゃ駄目だ、と。

何の因果かは知らないが自分はここでは「碇シンジ」ではない。
と、いうことは必然的にエヴァには乗れないということになる。

ならばどうしたらいいか?

答えは簡単だ、ここの「シンジ」を変えていくしかない。

そしてそれをやれるのも自分しかない。

幸い「自分自身」だ。

今、現在何を考えているのかは手に取るように分かる。

「ねえ、シンジくん」

シズクはシンジに話しかけた。

「な…なに？」

「何か思いつめてるようだけど…？」

慎重にシンジの表情を読み取る。

「シンジ」は兎角壊れやすい。

些細なきっかけで殻に閉じこもることだってあり得る。

「わかる…かな、やっぱり…」

シンジは俯きながら言った。

「なんとなく…ね」

「父さんに呼び出されたんだ、『来い』って、ミサトさんも父さんの関係者みたいだし…」

やはりだ、とシズクは思う。

この頃の自分にあるのは父親に対する、期待と、不安。

「お父さんは苦手？」

シズクの問いにシンジは首を横に振った。

「わからない…、もう3年も会ってないから、突然呼び出されて戸惑ってるだけなのかもしれない」

少しの沈黙。

「あの…碇さん？」

「シズクでいいよ」

自分の名前がシズクである、という再認識の意味を込めシズクが言う。

「シ…シズクは、さ」

シンジは少し頬を赤く染めた。

シズクはそれを見て変な気分になった。

他人から見ればそこにいるのは間違いなく少女。

だがそこに存在する魂は紛れもなく少年なのだ。

目の前の男、それも「自分自身」が自分を見て頬を染める、という行為はなんだか訳の分らない気分させる。

「どうして、あんな所に倒れてたの？」

尤もな疑問だ。

だが生憎シズクにはその問いに返せる答えを持ち合わせていなかった。

まさかサードインパクトが起きて死のうと思って目を瞑ったら目の前は過去でした、

なんて言っても笑い話になるだけだ。

だから、とりあえず、の理由をつける。

「わからない…倒れる以前の記憶が、ないから」

シズク自身、そこらの小学生でももっとマシな理由が思いつくんじゃないかと本気で思った。

「記憶が…ない？」

「うん、自分の名前と年齢以外は何も覚えてないんだ」

ミサトはそう言うシズクを険しい表情で見ていた。

「あ、ミサトさん」

シンジが何か話題を変えようとミサトに話しかける。

「なに？」

と、切り替えされたところで振る話題がないことに気付く。

「あ、あの、これからこのネルフって所に向かうんですか？」

「まっね」

「父のいるところに…行くんですよね…」

そしてまたシンジは俯く。

それをミサトは横目で見ながら

「苦手なのね、お父さんのこと」

そう言っふつと笑みを零し、

「私と一緒にね」と言った。

一連のやりとりを聞きながらシズクは思い出す。

泣いている自分を。

逃げ出している自分を。

僕は…何をしにここに来たんだろう…

シンジが思う。

「それを知るために、今、ここにいる」

シズクがぼつりと呟いた。

シンジはハッとなってシズクを見る。

ミサトも眉を寄せてシズクを見た。

シズクは天井を見ていた。

「え？」

何故自分の考えていることが分かったのかシンジには理解できなかった。

ミサトには呟きそのものの意味が分からない。

ますます眉間に皺がよる。

「そつでしょっつ。」

シズクは優しく微笑みながらシンジへと視線を移す。

「そう…だね、シズクの言うとおりだ」

「大丈夫、自分で決めたことなんだから、きっと、前へ進めるよ」

「そう…かな？」

「うん」

シンジはシズクの言葉に吞まれていく自分の感覚がなんなのかわからなかった。

他人の言葉をここまで素直に聞けたのは初めての経験だった。

僕でも…変われるんだ

そう思ったとき、シンジの顔には笑みが零れていた。

最初の日

- ネルフ司令室 -

「冬月、後を頼む」

そう言い残し席を立つゲンドウ

「3年ぶりの対面か…」

冬月は振り返り、ゲンドウが去った扉を見ていた。

自らの目的の為に生き、実の息子ですら道具と言い切る。

全ては計画のために。

深く、溜息が出る。

私も同類だな

それを認め、行動を共にしているのだから。

- ネルフ内部 -

「おっかしいわね、確かこっちはずなんだけど…」

頭をぽりぽりと掻きながらミサトが言う。

「もしかして、迷ったんですか？」

と、シンジ。

「ごめんねー、まだ慣れてなくて」

「さっきも通りましたよ、ここ」

ずばつとシンジの突っ込みが入りゲンナリするミサト。

そういえば『前』も迷ってたっけ

些細な事が戻って来た事を再確認させてくれる。

苦笑しながらシズクはシンジとミサトのやり取りを見た。

「大丈夫、システムは利用のためにあるのよね」

そういったミサトはどこかへと連絡を取り始めた。

するとすぐにピンポンパンと連絡の合図になる。

『技術局一課、E計画担当の赤城リツコ博士、至急作戦部第一課、

葛城ミサト一尉までご連絡ください』

「これで大丈夫よん」

ミサトはウインク一つ、シンジとシズクに決めて見せた。

目の前のエレベーターが開く。

そこには金髪黒眉毛の女性が立っていた。

「あら、リツコ…」

赤木リツコはズいっとミサトを押すようにエレベーターを降りる。

「何やってたの、葛城一尉？人手も無ければ時間も無いのよ」

「えへ…ごめん！」

そう言ってミサトは片手を顔の前にやり謝った。

ふう、と呆れたようにため息をつく。リツコはシンジへと目をやる。

「例の男の子ね」

「そう、マルドウツクの報告書によるサードチルドレン」

次にリツコはシズクへと目をやった。

「この子は…？」

明らかに顔が怪訝になる。

「さっき連絡したでしょ、保護した民間人、名前は碓シズクちゃん」
リツコはマジマジとシズクを見る。

特に顔を念入りに。

シズクの顔は中学生の幼さは残るものの正に碓ユイそのものだった。

（この顔で、名字が碓…そしてサードチルドレンである彼と一緒にいた…？これが全て偶然だとしても言うの…？）

「あの…僕の顔に何かついてますか…？」

シズクはドギマギとした口調でそう言った。

リツコはすっと視線をずらし、

「いいえ、何でもないわ」

と言った。

「よろしく、碓シンジくん、E計画担当、赤木リツコよ、リツコでいいわ」

「あ、よ、よろしく願います」

「こつちよ、ついて来なさい」

リッコが施す。

「あ、シズクちゃんはこの先は駄目よん」

ミサトがシズクを人差し指で制止した。

「問題ないわ、その子も一緒にいくわよ、葛城一尉」

リッコの思わぬ発言にミサトは目をひん剥いて驚いた。

「何言ってるのよ！リッコ！民間人に機密見せる気！？」

（その子がただの民間人、なら見せないわ…）

リッコの耳打ち。

（どういうことよ…？）

（今は詳しいことは言えないけど、もしかしたらこの子はただの民間人じゃないかもしれない、ということよ）

（はあ…？まさか名字で判断したんじゃないでしょうね…）

（ミサトじゃあるまいし、そんな軽率な判断はしないわ、もっと重要で危惧されることよ）

ミサトはそのリッコの言葉にボリボリと頭を掻き、

（わあかったわよ、その代わり、後で訳、きっちり教えなさいよ）
と耳打ちした。

「あの…僕はどうすれば…？」

シズクは2人を見上げる。

「あ、ああ、いいわよん、ついて来なさい、こっちよ」

助かった、とシズクは思った。

すんなりシンジと共にエヴァのあるケージに入れるとは思ってなかったからだ。

2人の耳打ちの内容は気にはなったが、とりあえず第一段階、クリアといったところか。

『繰り返します、総員第一種戦闘配置、対地迎撃戦用意』

暗闇のリフトの中、戦闘配置の通報だけがやけにはっきり耳に聞こえた。

「ですって」

「これは一大事ね」

二人とも他人事のように話す。

「で、初号機はどうなの？」

ミサトのその声にほんの僅かだけ反応するシズク。

尤もここにいる誰もが気づかない程度だが。

「B型装備のまま、現在冷却中」

「それ、本当に動くのぉ？まだ一度も動いたことないんでしょう？」

「起動確立は0.000000000001%、オーナインシステムとはよく言ったものだわ」

「それって動かないってこと？」

「あら失礼ね、0ではなくてよ」

二人の会話を聞きながらシズクは初号機のことを思っていた。

母さん…

- ネルフ本部、ケージ -

「……」

そう言って立ち止まるリツコ。

バツと室内の照明が照らされる。

そこにあるのは巨大な紫色の顔。

「顔……巨大ロボット!？」

シンジの驚きの声を横にシズクはその紫色の巨人を見上げる。

久しぶり……、母さん

その顔には自然と笑みも零れる。

リツコは怪訝そうにシズクを見る。

初号機を見ても動じない……どころか、笑ってみせる……?

それはリツコの中でシズクの警戒を上げるのに充分な行為だった。

それはそうだろう。

いきなりこんなものを見せられれば100人中100人が驚く。

それを一目見て、驚くどころか笑って見せたのだ。

ズズズ…

軽い振動がリツコを我に返す。

視線をシズクから初号機へと移す。

「正確にはロボットじゃないわ、人の作り出した究極の汎用人型決戦兵器。」

人造人間エヴァンゲリオン、その初号機よ」

「これも…父の仕事ですか…」

「そうだ」

不意に響く声。

その声にシンジは顔を上げる。

父さん…か…

シンジに続きシズクも顔を上げる。

そこに笑みはなかった。

絶対に止めてみせる…父さんも、ゼーレも…

シズクは右拳を堅く握った。

ゲンドウはサン格拉斯の奥からシズクを見る。

自分の計画の根底を成す女性に似たその少女を。

ゲンドウがシズクを見て何を考えているのかはその表情からは窺い知れなかった。

ゲンドウは静かに口を開く。

「……………出撃」

ケージ内に響く声。

「出撃！？零号機は凍結中でしょ！？」

ミサトが叫んだ。

そしてリツコの方に振り返る。

「まさか…初号機を使うつもりなの？」

「他に道が無いわ」

リツコは淡々と声に出す。

「ちょっと、レイはまだ動かせないでしょう？パイロットがいないわよ」

「さっき届いたわ」

「マジなの…？」

おそらくミサトは全てを分かった上で聞いている。

以前は何のこともわからなかったが、今はわかる。

そうか…『シズク』である僕は部外者、部外者には目もくれないよね

隣のシンジを見る。

シンジは声を荒ながら叫んでいた。

周りの人間はシンジを物として見下す目をしていた。

シンジはどこか期待していた自分が心の中にいたことを忘れ、拒絶する。

「シンジくん、駄目よ、逃げちゃ、お父さんから…何より、自分から」

「わかってるよ！でも…出来るわけ、ないよ！！」

シズクがシンジの直ぐ隣に立った。

「なら、乗らなければいいんじゃない？」

シンジはその声に顔を上げる。

「……え？」

「だって、乗りたくないんでしょう？」

「ちよっ…部外者が口を挟むのは…」

ミサトが声を荒げる。

シズクはミサトを無視して言葉を続けた。

「でも、このままじゃ何も変わらない」

「変わらない…？」

「変わるために、来たんでしょ?。」

「変わる、ために……………」

会話の中、ガラガラという簡易ベッドが移動する音が聞こえた。

綾波……………!

シズクはその簡易ベッドに誰が乗っているのかを思い出す。

「パーソナルデータをレイに書き換え、急いで!。」

リツコの指示。

父さんか…

心の中での舌打ち。

瞬間、ケージ内に轟音が響き渡る。

使徒の攻撃によってネルフ本部の真上がぐらついた。

「……ここに気付いたか……」

ゲンドウが呟く。

もう一撃、本部そのものが大きな地震に襲われたような振動が来た。

激しい振動によってライトが落ちる。

「うわっ！」

シンジが尻餅をつく。

ライトはシンジ目掛けて直撃のコースを取った。

ガゴン……！

ライトはシンジに当たる前に初号機の手によって弾き飛ばされた。

誰もが驚きに目を開いた。

シズク以外は。

「インターフェイスもなしに反応している?…というより、守ったの?彼を?…いける!」

ミサトが微笑する。

シンジはレイの元へと走り、ベットから落ちたレイを抱き上げた。

「……………うつ……………はあ、はあ」

痛々しい包帯が全身に巻かれ、苦痛で表情が歪む。

こ…こんな娘があれに乗るの…?

シンジの掌には赤い血が広がる。

歯をぎゅっと食い縛る。

逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ…

そう思い込もうとした時、声が乱入した。

「逃げないのと前に進むのは違うよ」

シズクだった。

シンジは呆然とシズクを見る。

「どうする？その子を守るために前へ進む？」

微笑みを絶やすことなく聞いてくる彼女にシンジは何故か温かいものを感じた。

「逃げないだけでは…何も変わらない…？」

シンジの問いに更なる微笑みで答えを返す。

「そっだ…そっだよね、やります…僕が乗ります」

最初の日（後書き）

いまだサキエルと戦っていないとかWW

サキエル戦

「ミサトさん」

シンジとリツコが出て行った後にシズクがミサトに声をかけた。

「何？今、ちょっと忙しいんだけどね」

「あの…シンジくんが戦つてるところ、見れませんか？」

「はい？」

何を言っているんだろう、この子は…

まさか発令所に連れて行くわけには行かないし…

そんなミサトの表情を読み取ったのかシズクは僅かに微笑みを浮かべ

「あ、やっぱり無理ですね、いいです、外で見ますから」

と、爆弾発言を投げかけた。

「外お？あんた死に行くつもり！？」

思わず声を荒げるミサト。

「でも、シンジくんが乗る決意をしたのは自分自身の選択かもしれませんが、

喉けたのは僕ですから…責任は取りたいんです」

そう言ったシズクの顔に微笑みは無かった。

シズクにあるのは責任でも義務でもない、一個の断固たる『決意』。

この子…本気だわ…

ミサトは顎に手をやり考え込む。

その時、一つの声が割って入った。

「構わん、発令所へ連れて来い、葛城一尉」

ゲンドウの声だった。

父さん…？

シズクはゲンドウの思惑がわからずゲンドウを見上げる。

「しかし…部外者を発令所に入れるのは…！」

「かまわん、と言っている、今は使徒撃退が最優先事項だ」

ミサトは少し沈黙したが、シズクの方を向き

「わかりました、シズクちゃん、こっちょ」

と言った。

「第一次接続開始」

「エントリープラグ、注水」

シンジは自分の足元からせり上がって来る赤い液体を見て思わず息を止める。

「大丈夫、肺の中の空気を全部吐き出して、肺がL・C・Lで満たされれば直接酸素を取り込んでくれるわ、直ぐに慣れます」

シンジの息が限界に達し口をあける。

「ぶはっ、うっ…気持ち…悪、い…」

「我慢なさい！男の子でしょう！」

シズクは目の前のやり取りを見ながら最後の日を思い出していた。

真っ赤なL・C・Lの海が寄せては返す、あの地獄の風景を。

だが同時に希望も持っていた。

なんの因果かは分からないがこの時間に戻ってきた。

きっと未来を変えてみせる。

その思いで胸が一杯になった。

改めてシズクは初号機を見る。

シンジくんを…『僕』をよろしく、母さん

「双方向回路、開きます」

「シンクロ率、41.3%」

「凄いわね…」

リツコの弦きが聞こえる中、シズクは淡々と物事を見つめていた。

（でも今のままじゃサキエルには勝てない…

この時、僕がエヴァをロクに動かせなかったのは何故だ？）

少し考える。

そして苦笑した。

簡単なことだ、僕自身、エヴァを信じてなかったんだから

「ねえ、シンジくん」

シズクがシンジへと声をかけた。

突然の声に振り返るリツコとミサト。

『え、シズク?』

「うん、シンジくんはさ、もう一步を踏み出したよ」

『そ、そうかな』

嬉しそうな声に混じる、若干の不安。

「そうだよ、それなら一緒に一步を踏み出してくれるその子を信じなきゃ」

『信じる?...このロボットを?』

シズクは軽く頷く。

「そう、そんなに緊張してちゃ何事も上手くいかないよ」

『で、でもこれからあんな奴と戦うと思うと...』

そりゃそうだ、とシズクは思った。

自分も今でこそ慣れたがもしこれが初体験だとすれば取り乱しているに違いない。

…というか取り乱した記憶がある。

ポリポリと頬を人差し指で掻き、

「大丈夫、シンジくんなら出来るよ。その子を信じると同時に自分も信じなきゃ、ね？」

そのシズクの声にシンジの不安は随分取り除かれた。

「自分を信じる…か…ありがとうシズク、やってみるよ」

「頑張って」

にっこり微笑むシズク。

そんなシズクをシンジはモニター越しで見て頬を染めた。

「シズクちゃん、気持ちは分かるけど、部外者が口を挟まないで」

ミサトの声。

「…すいません」

今は張り合っても仕方ない。

苦笑を浮かべシズクは謝った。

そんなシズクに小さく溜め息をつくミサトはすぐに真顔になり、
ゲンドウと冬月のいる方向へと振り返る。

「構いませんね？」

「勿論だ、使徒を倒さぬ限り我々に未来は無い」

ミサトは頷き、目をスクリーンへと移す。

「発進！！」

号令と同時に初号機が射出口から出口へと向かう。

「くっ…」

体にかかるGに思わず苦痛の声を漏らすシンジ。

「いいわね、シンジくん？」

ここで駄目って言っても降ろしてくれないだろうに…

苦笑するシズク。

「はい、僕は…僕を信じてますから…」

シンジが答える。

シズクはシンジが羨ましく思えた。

あの時、あの場所で自分が同じ事を言いたかった。

しかし、それは叶わぬ願い。

ならば今、自分に出来ることを全力でする。

シズクは真顔でスクリーンを見た。

頑張って…

「いい返事よ、シンジくん」

ミサトはウィンクを飛ばす。

そしてキッと目を見開き叫んだ。

「最終安全装置解除、エヴァンゲリオン初号機、リフトオフ!!」
ガコン、という音と共にセーフティが解除され、初号機が地面に立つ。

そつえば…トウジの妹が怪我しちゃうんだ…

シズクの目線は初号機から地上へと移される。

どこだ…どこにいる…?

画面を舐め回すように見て回る。

その様子をリツコはじっと見ていた。

初号機を見ていない…?使徒を見ているわけでもない…一体何を
見ているの…?

「シンジくん、今は歩くことだけ考えて」

ミサトの指示が飛ぶ。

『はい…（歩く）』

一歩、初号機が踏み出す。

発令所からわっと歓声が上がった。

シズクと、リッコ以外の。

いないなあ…もう歴史と違うのかな…

そう思った時、シズクは自分で自分が可笑しくなった。

変なの、歴史を変えようと思ってる僕が歴史が変わっていることにガッカリしてる

首を静かに横に振ると初号機に目を移す。

途中、リッコと目が合ったがあえて無視をした。

現に『こっち』の僕も以前の僕とはまるで違う…

と、その時、サキエルが初号機に向かって突進してきた。

『うわっ』

驚いて立ち止まるシンジ。

落ち着くんだ…！僕は、僕を信じるんだ…！だから…！！

バシィ！！

掌底のように打ち込まれたサキエルの左腕を咄嗟に薙ぎ払う。

『…！…のおお…！！』

流れるように左足でサキエルを蹴り上げようとする。

「よっしゃあ！上手い…！！」

ガッツポーズを取るミサト。

…が

初号機の放った蹴りはサキエルに当たる直前、

赤い光の壁に弾き返された。

『うわあ…！！』

「…A・T・フィールド」

思わず呟くシズク。

その瞬間、リツコのシズクに対する疑いは揺るぎのないものに昇華した。

一体何者なの…？この子は？

『どうすればいいんですか！？』

発令所に響く焦りとも取れるシンジの声。

「それはA・T・フィールドといって一種のバリアみたいなもののよ
理論的にはエヴァにも同じものを張ることが可能なはずです」

分からないものを考えていても仕方がない、今は使徒殲滅が最優先なのだ、と考えたリツコが
スクリーンに振り向き、淡々と述べた。

『か、可能なはずって…』

不安そうなシンジの声。

「シンジくん」

重なるようにシズクの暖かい声。

『シズク?』

「信じなきゃ?」

『……………うん』

エントリープラグ内、シンジは静かに目を閉じた。

瞬間、発令所がざわめく。

「初号機、シンクロ率上昇! …… 50% …… 60% …… 63・4%!」

「初号機よりA・T・フィールドの展開を確認!」

「なんて子なの…」

思わず呟くりツコ。

今日、初めてエヴァに乗った少年が使徒と肉弾戦をし、あまつさえA・T・フィールドを張ったのだ。

それは確かにシズクの一言一言をシンジが受け入れた結果なのかもしれない。

だが操縦しているのは紛れもなくシンジ本人なのだ。

エヴァに乗るために産まれてきた子…なのかしらね

リツコはそう思いながらも興奮を隠せないでいた。

『このお!!』

体全体で覆いかぶさるようにサキエルを押し倒す。

「シンジくん、胸にある光球を狙って!!」

ミサトの声がする。

『うわああああああああああ!!!!!!』

ガギン!!

「目標、A・T・フィールドを展開!」

「初号機からもA・T・フィールドを確認!位相空間を中和していきます!!」

ドゴッ!

A・T・フィールドを中和されたサキエルのコアに初号機の拳が届く。

『ああああああああああ!!!!!!!!』

発令所に響くシンジの声。

そこにいた大人たちは何も言わず…いや、何も言えず
ただその光景を見ていた。

何度も、何度もサキエルのコアを殴り続ける。

ピシッという音と共にコアにヒビが入った。

誰もが勝てる、そう思ったときだった。

「シンジくん、気をつけろ!!」

不意に走るシズクの声。

刹那、サキエルのコアが不気味に光り、体全体で初号機を包むように抱きつく。

「自爆!?!」

ミサトが驚愕する。

瞬間、激しい振動が第3新東京市を襲った。

サキエルと初号機のいた場所を中心に十字の光が天へと昇る。

「パイロットは!？」

呆然と見ていたミサトがはっとなって叫ぶ。

「…初号機の反応を確認!」

「パイロットは健在です!!」

今度こそ、発令所から真なる歓声が上がった。

「よもや…あれ程とはな…」

冬月が呟く。

「問題ない、使徒は倒した、それだけだ」

「しかしな、碇…」

「シナリオの修正内だよ、冬月…」

そう言つとゲンドウは手で口を隠したままニヤリと笑つた。

サキエル戦（後書き）

対第3使徒サキエル戦。4話で1話分が終わるとかWWW

新生活

「では、MAGIにもデータがない…と？」

「はい、それともう一つ」

「何だ」

ゲンドウの問いにリツコは書類に目を落とす。

「DNA鑑定の結果、碇シズクのDNAが碇シンジのものと同じであることが判りました」

若干、冬月の眉が上がる。

ゲンドウは微動だにしない。

「老人たちか…」

溜め息をつくように漏らす冬月。

ゲンドウは表情を変えずに淡々と命令を告げた。

「赤城博士」

「はい」

「碇シズクをここに」

「わかりました」

- ネルフ病棟 -

シンジは使徒戦の後、軽い身体検査を受けるため、病棟の方へと来ていた。

シズクも何故か呼ばれて、検査を受けた。

これは先のDNA鑑定のためリツコが仕組んだことだ。

シンジが拳を数回、握る。

僕が…あの、化け物を倒したんだ…

シンジは今まで味わった事のない充実感を手にしていた。

シンジが検査を終えて、ドアを開けると先に検査が終わっていたシズクが立っていた。

「シズク…」

「お疲れ様、シンジくん、ちょっと、付き合ってくれるかな？」

「え、あ、うん」

二人はそう言うつと病棟の奥へと向かって歩き出す。

「ねえ…シズク、どこへ行くの？」

シンジの疑問。

「あや…、さっきの女の子の事、気にならない？」

さっきの女の子、というのが青い髪をした少女の事だというのが直ぐに分かった。

「あ…、気に…なる」

「だから、ちょっと、お見舞いに…ね」

そう言うつとシズクは一つの病室の前で立ち止まった。

ネームプレートには「綾波 レイ」と書かれている。

「でも、よく名前とか分かったね？」

シンジの率直な疑問に冷や汗をかきながら、

「え、あゝ、ま、まあね、と、とにかく、入るよ」

と、シズクは言った。

こん、こん。

控えめのノック。

「綾波、入るよ」

カラツという音を立てて、病室のドアが開く。

ベッドには横になったまま、こちらを見ているレイがいた。

「体は大丈夫？」

シズクが優しく微笑みながらレイに言った。

しかし、シンジの見たところ、とても大丈夫そうには見えなかった。

先ほどと同じように包帯で何箇所もグルグル巻き。

痛み止めの点滴が効いているのか、それほど辛そうには感じなかったが、

それでも通常の怪我のレベルを超えていた。

「ええ」

レイがそつけなく答える。

「そつ、良かった」

シズクはそんなレイを見て微笑みを絶やさなかった。

暫しの沈黙。

「…貴方たち…誰？」

これはレイの尤もな疑問だろう。

先ほどのことは痛みであまり覚えていなかった。

「あ、ああ、僕は碇シズク。こっちが碇シンジ、サードチルドレンだよ」

「そつ………」

そつ呟いた後、レイは赤い瞳を一回瞬きする。

「碇……？」

「あ、うん、彼はと…ここの総司令、碇ゲンドウの息子さん、僕は同じ苗字だけど関係ないよ」

ここで初めてシンジとレイの目が合った。

「あ、あの…初めまして…碇、シンジです…」

「……………」

「そ、そのー、そう、怪我は大丈夫なのかなー…なんて…」

「…ええ、もう何とも無いわ」

そうレイが答えた後、再び病室を沈黙が襲った。

「…なぜ…」

「「え？」」

口火を切ったのはレイだった。

「なぜ、私を心配するの？」

レイにとっての疑問。

シズクにとっての愚問。

「それは目の前に大怪我をしてる子がいたら誰でも心配するよ、ねえ、シンジくん？」

「う、うん」

シンジはぎこちなく頷く。

「わからないわ」

思わず腕組してしまうシズク。

「うゝん、綾波も大切な人が怪我とかしたら心配にならない？」

「大切な…人…？」

「うん」

少し考えた後レイは淡々と述べる。

「わからないわ」

「うゝん、でも、まあ、そんなところだよ、僕らは綾波が大切な人だから心配になったんだ」

三度の沈黙。

シンジは沈黙に耐えかねていた。

レイの口が開く。

「私が…エヴァのパイロットだから？」

そのレイの問いにシズクは静かに首を横に振った。

「違うよ、綾波がエヴァのパイロットじゃなくても、僕たちはきっと心配している」

一呼吸置いて、シズクは話しを続けた。

「僕たちは綾波に友達になって欲しいんだ、でも友達になって欲しいから心配してるんじゃない、
純粹に一人の女の子が怪我をしている、だから心配して来てるんだよ」

シズクはちらりとシンジの方を見て、

「ねえ、シンジくん？」

と言った。

シンジは少し戸惑ったように、

「う、うん、さっき、タンカで運ばれてきたときには本当に吃驚したし、心配もした…」

あんなに血を出してたし…」

レイはシズクとシンジの答えに二回、目をパチクリとさせ、

「……………やっぱり、わからないわ…、でも…嫌じゃない……………」

レイのその言葉にシズクは満足そうな微笑みを浮かべる。

「今は、それでいいよ、嫌じゃないっていうだけで…僕は凄く嬉しい」

「それじゃ、今日はこのくらいで帰るよ、もう面会時間もとっくに過ぎてるしね、

また明日も来るから」

「……………ええ」

「行こう、シンジくん」

「うん、あ、綾波、それじゃまた…」

病室から出てエレベーターに向かう間、シズクは今後のことを考えていた。

これからどうしようか…なんとかしてネルフに入れないかな…
はは…流石にそれは無理か…な…

「シズク？」

シンジが心配そうにシズクを見る。

「あ、ごめん、ちょっと考え事、でも良かったよ、綾波の怪我也思ったより重症じゃないみたいだし」

シズクはシンジにそう言って微笑んだ。

「うん、そうだね」

シンジもその微笑みを見て安心したのか笑顔でそう言った。

そうこうしている間にエレベーターの前に着く。

チン、という音を立てて、エレベーターの扉が開く。

…と、そこにリツコが立っていた。

「リツコさん…？」

「シズクちゃん、ちょっといい？」

「は、はい…」

「ごめんね、シンジくん、喫茶店でも行って待っていてくれるかしら？会計はこちらで持つから」

「え、あ、はい、僕は構いませんけど」

「それじゃ、行きましようか、シズクちゃん」

「はい…（リツコさんが僕に用事…何の用だろう？）」

シズクは疑心暗鬼になりながらエレベーターへと乗り込む。

ふと目の前には心配そうなシンジの顔。

シズクは軽く微笑むとすぐ戻るから待ってて、と言った。

シズクとリツコが暫く歩いて着いた場所。

そこはネルフ本部司令室だった。

用があるのはリツコさんじゃなくて父さんか…

「失礼します」

「入れ」

リツコの礼に重く、冷たい声が返ってくる。

二人はゲンドウと冬月の二人だけしかいない、だだっ広い司令室の中へと足を踏み入れた。

「さて…シズク君といったかね」

ゲンドウの代わりに口を開く冬月。

「はい」

「率直に聞く、貴様は何者だ」

威圧感たっぷりに開かれるゲンドウの言。

サングラス越しで見えないはずの視線がシズクに突き刺さる。

「知りません」

シズクはそう答えた。

「そんな言い訳が通じると思っているのかね？」

冬月が諭すように言う。

「事実です、シンジくんに助けてもらった以前の記憶がありません」

嘘では無かった。

ただ、付け加えるとするならば『これからの記憶はある』ということ。

それと『ゲンドウ』と『ゼーレ』の計画を全て知っているということだ。

まあ、言っても信じてもらえないだろうし…

ふむ、と冬月が顎に手を当てる。

「時に：老人たちは元気かね？」

これは冬月の策だ。

『老人たち』と接触しているならばよほど訓練されていない限り、多少なりとも動きがあるものだ。

「はい？」

しかし、シズクから出た言葉は素っ頓狂なものだった。

よほど優秀な機械で調べてもこの言葉が相手を騙すためだとは判定しないだろう。

しかしゲンドウと冬月の頭はこれを『相当訓練を受けた者』と、勘違いさせる。

まあ、この二人に「未来から来た」と言ってもそれこそ相手にされないだろうが…

尤も、それはこの二人でなくても同じことが言える。

次にゲンドウの口から出たのは意外な言葉だった。

「ネルフで働け」

冬月とリツコは驚きの表情でゲンドウを見る。

それを聞いてシズクは思わず微笑んだ。

本人は狙ったわけではないが、
この行動が更にゲンドウ、冬月、リツコの3人に『老人たち』の
手の人間ということを植えつける。

「あの、条件つけてください」

シズクは自分でも驚くほど冷静だった。

あんなに恐怖の対象だった父親。

恨みの対象でなかった父親。

だが、その行動の理念がただ、自分の妻に会いたい。

ただそれだけのために計画を遂行し、ただそれだけのために全ての
人間を道具として見た男。

なんて小さいんだろう。

父さんはこんなにも脆く、弱い人間だったのか。

と、シズクは思った。

「なんだ？」

ゲンドウの威厳を込めた声。

それももう、シズクには通じない。

「僕、多分シンジくんと同じくらいの年なんで学校の手配、それと住む場所を…」

「用意しよう」

「あと」

「まだあるのかね」

半ば諦めたように冬月が呟く。

「給料は、ちゃんと貰えますよね？」

「規定分、払おう」

その言葉にシズクはニツコリと微笑むと

「ありがとうございます、では、僕はこれで」

そう言って司令室を出て行った。

シズクが去った扉を見つめる冬月。

「これで…いいのか？碇」

「構わん…利用できるものならば利用する。
そうでなければ…消せばいい」

「シンジくん、お待たせ、あ、ミサトさんも」

少し小走りになって喫茶店へと入るシズク。

そこにはシンジの他にミサトも居た。

「あらあ？もしかして二人でデートの約束う？私、お邪魔だったかしら？」

ニヤニヤしながらシンジを見るミサト。

「ちちち、違いますよ！シズクも何か言ってよ、もう！さっきからこの調子なんだ！」

真っ赤になって否定するシンジ。

「残念ですけど違いますよ、ミサトさん。」

あ…そうか、ミサトさん上司になるんだ…なんて呼べばいいのかな…？」

「何、何の話？」

シズクの話が読めず聞き返すミサト。

「僕、ネルフで働くことになったんですよ」

ふーん、とミサトはコーヒーをずっとすすると勢い良くそれを吐き出した。

「シズクちゃんか！？ネルフで！？なんでえ！！？」

シズクが微笑みながら右手人差し指を自分に向けて

「あれですか？ヘッドハンティングってやつ」

と言った。

「ふざけないで」

「やだなあ、ふざけてませんよ、実際、と…碇指令に直接「ネルフで働け」って言われたんですから」

「ご丁寧に「ネルフで働け」の部分は物真似入りだ、ちつとも似てないが…」

「凄いな、シズク…もう、父さんに認められたんだ…」

「ん、それとはちょっと違うかもしれないけどね」

シンジの父親に対する思いは良く知っている。

だからこそシズクはそう答えた。

ミサトはどこかへと電話している。

恐らくリツコさんあたりだろうな、とシズクは思った。

ボタン、と携帯電話を折りたたむ音が聞こえミサトはシズクに振り返る。

「確かに……信じられないけど、ネルフスタッフになってるわ」

「そうだ、僕、どこに所属になるんですか？」

ミサトはオーバーに両手を上げて

「パイロット……フォー スチルドレンだって、今さっきマルドウックから報告があったそうよ」

「へえ…パイロ…ええええええええええ！？」

フォーッってトウジだろ！？それが僕になっ たってことは…
トウジは…もうチルドレンになることはない？

シズクの顔にふつふつと笑いがこみ上げる。

トウジは3号機に乗らなくてすむ？ということとは、トウジは救われた！？

シズクは思わず両手を天井高く突き上げて笑った。

「ど、どうしたの突然、驚いたと思ったら笑い出して」

シンジはシズクの反応に戸惑っていた。

シズクは我に返り慌てて体裁を取り繕った。

「ふふ、秘密！さ、シンジくん、行こう！」

「あら、どこ行くのよ、あんたたち」

ミサトの問いに。

「部屋の申請ですよ、引越してきたばかりですからね」

とシンジが答えた。

「え、シンジくん、お父さんと一緒に住まないの？」

「ええ、一人の方が気が楽ですし、それにお互い一人の方がいいんですよ」

少し、声のトーンを落とすシンジ。

「シズクちゃんは？」

「もちろん、一人暮らしです、これから多分、今までも…」

シズクも声のトーンを落とす、が、こちらはシンジと違い半分芝居だ。

「あー！もう聞いてらんないわ！！若い二人が、揃いも揃って暗い！！」

と、怒鳴ったように言うとミサトは携帯電話を取り出し電話をかけた。

「あ、リツコお？シンジくんとシズクちゃんだけどさあ、家で引き取ることにしたから」

『ミサト！？あなた、何言ってるの！？』

「だいじょび、だいじょび、流石に中学生や同性相手に手え出さないわよ」

『当たり前です！！』

ミサトは携帯を耳から遠ざけて相変わらず冗談の通じないやつ、と思った。

「ま、そういうことだから手続き、お願いね」

『ちよっ、ミサト、まだ話しは…』

ミサトは何の躊躇いもなく電話を切る。

「そういうことだから、二人ともよろしくね」

ミサトは二人に向かってウィンクを決める。

「え？」と呆けた顔でシンジ。

「はい！（上手くいった！）」とパンと手を鳴らすシズク。

こうして再びミサトの家での暮らしが始まった。

新生活（後書き）

ミサトと同居、シズクがチルドレン登録です。

この世の地獄？ミサトカレー（前書き）

ちょっとシリアスから抜けます。

この世の地獄？ミサトカレー

「碇、シンジ君とあのシズクという娘、一緒に住まわせて良かったのか？」

冬月はリツコから上がってきた報告を目に通してゲンドウに問いかける。

「問題ない」

ゲンドウは手を顔の前で組みながら、

「奴がどんな命令で動いているのかは知らないが、まだ行動には移すまい、

それまで精々利用できるだけ利用させてもらう」

「そうか…」

「問題ないよ、冬月、全ての事象はリンクしている。
そう、全ての事象はな…」

そう言ったゲンドウはニヤリと笑った。

「今日は二人が家に来る記念すべき日だからね、歓迎会よん」

そう言い、ミサトはルノーを走らせる。

「あ、ミサトさん」

「なあに、シズク？」

「買出しに行くのなら、コンビニじゃなくてショッピングモールに行きたいんですけど…」

「なんで？」

「料理、大したものは出来ないけど、作りますから、色んな材料が手に入るショッピングモールの方が都合がいいんですよ」

「へー、シズクって料理作れるんだ」

「人並みに、ですけどね」

ミサトはバックミラーでシズクを見ながら、

「それでも大したもんよ、わったしカレーしか作れなくてさあ」

と言った。

あれをカレーと呼ぶのはカレーに対して失礼よっ！とかアスカ言ってたな…。

そう思い出してくすりと笑うシズク。

「あ、今笑ったでしょ」

「いえ、違うことですよ」

「そう？ならいいんだけど」

くくつと含み笑いするシンジ。

「どしたの？シンジくん」

今度はシズクの隣の席にいるシンジに目を向けるミサト。

もちろん、ミラー越しにだが。

「いや、なんか、二人とも本当の姉妹みたいだなあ…と思って」

「あらそう？シンジくん、妬けちゃった？」

「そ、そんなことないですよ！」

ミサトのからかいに慌てて否定するシンジ。

そんな会話をしながら一行はショッピングモールへと着いた。

「何作る気なの？」

シンジが棚に置いてあったパプリカをまじまじと見ながらシズクに尋ねた。

「ん、ハンバーグあたりにしようかなって思ってるんだけど…」

「そう、良かった、それなら僕にも手伝えそうだ」

シンジの言葉にシズクはきょとんとした顔をして、

「手伝ってくれるの？」

と、聞いた。

「もちろんだよ、シズクは恩人だしね」

「ありがとう」

そう言うとシズクは微笑んだ。

シンジくんじゃないけど…こうして見るとカップルというよりは仲のいい姉弟よね

後からついてくるミサトは二人を見てそう感じた。

「こんなところかな」

合い挽き肉をカゴに入れてシズクはそう言った。

「あ」

シズクはそこでふと立ち止まる。

「ミサトさん」

「ん、なにシズク？」

「あの…パジャマとかも欲しいんですけど…」

シズクの言葉にミサトはポリポリと頭を掻いた。

「あゝ、そっか、シズク荷物何にも持っていないんだっけ」

ミサトはニヒツと笑みを浮かべ

「よろしい、心優しいお姉さんが買ってあげましょう」

食料品の会計を済ませると2階にある男物の売り場へと行くこと
するシズク。

「シズク？どこ行くの、そっちは男物よ」

あ、そっか…、今女なんだっけ…

シズクは頬を人差し指で搔くと。

「すいません、すっかりしてました」

と、言ってミサトの後についていく。

「もう、結構おっちょこちょいなところ、あるのね」

ミサトはそう言っと今度は女物の方へと向かう。

コーナりの入り口でシンジが「僕はここで待ってるよ」と言って
戦線離脱。

シズクはミサトと二人でコーナーへと入っていった。

「シズク！こんなのどう！？」

そう言って後ろ手にパジャマを隠しながら含み笑いをするミサト。

「ほら、じゃ〜ん」

ミサトが取り出したのはスケスケのモはやパジャマとも言いがた
いデザインの物だった。

「着ません！」

シズクは真っ赤になって怒った。

当然である。

女になったばかりだ。

というかそもそもそんなことすら関係ないぐらい厭らしいデザインだった。

シズクはシンプルな売り場にいた。

うーん…こんなところかな

ピンク色のシンプルなデザインのパジャマを手取る。

本当は青か薄い緑色の物が良かったのだが残念ながらこここの売り場には無かった。

それで少し恥ずかしいがピンク色にした。

まあ、誰かに寝てるところ見られるわけじゃないし…いつか

「ミサトさん、これ、これにします」

そう言ってまだ卑猥なパジャマと呼ぶべきかどうかの物の前に突っ立ってるミサトの前に行った。

「あら、そんな控えめのでいいの？」

「いいんです」

「それじゃ、シンジくん悩殺できないわよ？」

「しませんから！」

「はいはい、それじゃ、心優しいお姉さんが買ってきてあげるからね」

ミサトはケタケタと笑いながらシズクの手からパジャマを取った。

「すいません、給料入ったら返しますんで」

「いいのよ、これくらい」

そう言いながらミサトはパジャマをレジへと運ぶ。

買い物を済ませ、ルノーに乗った3人は夕暮れ時を走る。

「ねえ、ちょっと寄り道してもいい？」

「あ、はい、どうぞ」

答えたのはシンジ。

その答えを聞くとルノーは大きく旋回した。

街の展望台へとやってきた三人。

ここは…

シズクは感慨深い、何とも懐かしい気分になった。

「なんか、寂しい街ですね…」

シンジの声が隣からする。

時計をチェックしてミサトが呟く。

「時間だわ」

すると、ミサトの声に合わせて次々と地下からビルというビルが生えてきた。

「すごい！ビルが生えてくるー！」

シンジの驚きの声。

「ここが私たちの街…そして…」

ミサトの言葉の続きを言うようにシズクが先を言った。

「君が、守った街だよ…シンジくん」

シズクは懐かしそうに生えてくるビルを見ていた。

「僕が…守った街…」

シンジはミサトとシズクに振り返る。

ミサトとシズクは何も言わずただ静かに頷いた。

ミサトのマンション。

そこにがっくりと頭をうな垂れるシズク。

その横には顔が引きつったままフリーズして動かないシンジ。

二人は今、葛城ミサト邸の玄関にいた。

ま…前よりも…酷くなってる…

ちなみに『前回』の1・7倍くらい酷い。

ここに…人が、住めるの？

ようやく思考が戻ったシンジが思い浮かんだ言葉、

・夢の島。

小学生のころ歴史の授業で習ったことがある。

セカンドインパクトが起こる前に関東地方にあったゴミで出来た埋立地だ。

実際に見たことは無いがこんな感じだったのだろうと一人納得する。

「どうしたのお、遠慮しないで入りなさい」

ミサトはこの二人の行動をどうやら「遠慮」と受け取ったらしく、

目の前でおいでおいでと手を振っている。

「あ、は…はい…」

シンジの返事。

どうやら初めて夢の島を見たシンジより、

その夢の島が1・7倍程に巨大化していたのを
目の当たりにしたシズクの方がダメージが大きかったようだ。

「お邪魔します…」

シンジが片足を中に踏み入れようとする。

「ちょっつち、ストップ！」

ミサトがシンジを片手で制した。

「な、なんですか？」

「いい？シンジくん、ここは今日からあなたの家。

お邪魔します、じゃないでしょう？」

初め、シンジは何のことかわからないといった顔をしていたが

直ぐに言葉の意味を理解すると照れくさそうに

「た…ただいま」

と、言った。

「お帰りなさい、シンジくん」

ミサトも満面の笑みで迎え入れる。

その光景を見てようやくショックから立ち直ったシズクは

少し目を潤ませながら、しかしはつきりと笑顔を作りシンジに続いた。

「ただいま、ミサトさん」

「お帰り、シズク」

居間へと足を運ぶと更に酷い状態だった。

散乱するビールの缶、缶、缶。

つまみらしきものが入っていたと思われる袋、袋、袋。

「さて…シンジくん、どこから片付けようか？」

シズクがやれやれと言った感じでおでこを肘で拭く。

「どこからって…見えるもの全部ゴミだけど………」

「あゝあゝ、いいのよ別に、掃除なんて」

掌をヒラヒラさせながらミサトが言う。

「駄目です」

「これじゃあ、何もすることが出来ませんよ」

腕まくりをしながらシズクが前者を、ゴミ袋に既に空き缶を入れ始めながらシンジが後者を言った。

「そう、わかったわ、私も手伝うわよ」

「いいですよ、ミサトさんは先にお風呂にでも入ってきてください、その間に終わらせますから」

シズクは右手でミサトを制してそう言った。

「でも…いいの？」

「はい、居ても邪魔ですから」

「ぐっ…」

ぴしゃりと言い放つシズク。

性格、変わってきたな、と自分で思った。

ミサトはシズクに言われがっくりと肩を落とす、脱衣所へと向かった。

「シズク…言い過ぎだよ」

苦笑しながら次々ゴミを片すシンジ。

「この部屋の様子じゃ、更に汚すことはあっても片付くなんてこと、絶対無いよ」

シズクもゴミを片付けながらそう言った。

脱衣所からミサトがひょこつと顔を出す。

「ミサトさん？忘れ物ですか？」

シンジが言う。

ミサトはニシシシという笑みを浮かべ、

「シンちゃん」

「はい？」

「覗いちゃ駄目よん」

と悪戯っぽく言う。

「「そんなことしませんよ！」「」」

シンジとシズクの声が重なった。

「なんでシズクも一緒になって言うのよ」

「あ、いや…その…」

思わず反応してしまった…

シズクは誤魔化すように部屋の掃除を再開する。

「はっはーん」

「な、なんですか？早く入ってきてください」

言いながらも少し顔が赤い。

「シズク、シンちゃんのこと、好きなの？」

「違いますよっ」

本人は真面目に言ったつもりだが、先ほどの顔の赤みが抜けていないので

ミサトはそれを照れと勘違いしてニヤリと笑った。

「またまたあ…ってあれ？シンちゃん？」

ミサトがシンジのいる方を向くとシンジは顔をゆでだこにして俯いていた。

あのねえ…

シズクは心の中で苦笑するしかなかった。

30分後、すっかり綺麗になった部屋を見たミサトが一言。

「ここ…誰の家？」

「誰って、ミサトさんの家ですよ」

笑いながらシンジ。

「ミサトさん、お風呂借りますね」

「遠慮しないで入ってらっしゃい、シズク、疲れたでしょ？」

「ええ、それはもう」

ほう…と溜め息をつくシズク、その後、思い出したように、

「おかずはあと焼くだけですから、絶対に、絶対に、何もしないでくださいね」

「はいはい、わかったわよ、入ってらっしゃい」

「絶対ですよ！」

念には念を押して、シズクは脱衣所へと消えていく。

しかし、その念も無駄な努力に終わることをシズクは知らない。

これはもう夕食で掃除のお礼をするしかないわね

ミサトは世にも恐ろしい計画を考えていた。

シズクは脱衣所で上着のボタンに手をかけたまま固まっていた。

落ち着けシンジ…じゃない、シズク…自分の体なんだから、
見ても全然大丈夫、これからこの体でやってかなきゃならないん
だから、

このくらいで動揺してどうする…いや、でも女の人の裸を見るな
んて…

綾波の時…以来かな…って何考えてるんだ！

ようやく決心を固め、服を脱いだのはそれから5分後のことだっ
た。

しかしシズクは浴槽に入ってる最中も体を洗ってるときも

髪を洗い流すときもほぼ天井を見続けていた。

「ミ、ミサトさん、駄目ですよ、勝手に調理しちゃ」

ぐつぐつと煮立っている鍋の前に立つミサトとそれをおろおろし

ながら見るシンジ。

「平気、平気、私に出来ないことは無いわ、特にカレーには自信あるのよね、

シズクとシンちゃんが作ってくれたハンバーグと合わせて、ハンバーグカレーよん」

鍋をお玉でかき回しながらミサトは言う。

「部屋はあんなに汚かったのに…」

ぼそつとシンジ。

「あんか言ったあ？」

さわやかな口調に鬼の形相でシンジを見るミサト。

「い、いえ、楽しみだなあ…て、ミサトさんのカレー…」

「でしょう？今出来るから座ってて」

お風呂から上がったシズクが見た光景。

それは白目を向いてテーブルに前のめりになっているシンジとすでに酔っ払いモード全開のミサトという地獄絵図だった。

この世の地獄？ミサトカレー（後書き）

怖いもの見たさに一度食べてみたいものです、ミサトカレー
w

学校生活

「フォースチルドレンとして登録…か、思い切ったことをしたな、碇」

パチン、と将棋の駒になる。

「……………」

ゲンドウは黙って駒を打つ。

「しかし…正に生き写しだな…彼女は…」

「外見で私の判断を鈍らせようなどとも考えたのだろう…が、どんなに似ていてもあれは別だ」

「全ては心の中に…か…」

ぴくつとゲンドウの駒を打つ手が止まる。

「冬月…」

「待ったはなしだぞ、碇」

30秒ほど考えた後、ゲンドウは駒を打つ。

「パイロットとして登録はいいが、肝心の乗り物がないぞ?」

「問題ない、明日にはあれが届く」

「あれ…？あれの建造を早めたのか、しかしシナリオが大幅に狂うぞ、

老人たちやネルフ支部の連中も黙ってしまい」

「誤差修正内だ、それにもしあれが老人たちの駒なら老人たちにも手は出せまい」

「ふむ…問題ない…か、だがこれはどうかかな？」

パチッと冬月が駒を打った。

「……………」

ゲンドウの手が止まる。

「…投了だ」

「まだ、お前には負けんよ」

そう言うと二人は基盤をしまいはじめた。

シズクとシンジがミサトの家に来てからの日課。

それはレイへのお見舞いだった。

二人は一日置きに交互にお見舞いに来ていた。

しかし、シズクは兎も角、シンジは話題選びに毎回苦戦を強いられていた。

「え…と、綾波はここに来る前とか、何をしてたの？」

「……………何も」

「え？」

「……………」

「え…っと、す、好きな食べ物とか何かな？」

「……………特にないわ」

ほとんどお見合いである。

シズクの場合。

「綾波、今日はお弁当作ってきたんだ、食べてくれる？」

「……………お弁当？」

「そう、これ」

そう言つとパカッとお弁当箱の蓋を開ける。

メインは野菜の天ぷら。

そのほかにも肉は一切使われていない非常にベジタブルな弁当である。

「どうかな？結構、自信あるんだけど…」

レイはじつとお弁当を見つめ一言。

「……………美味しそう」

「そ、そう？食べてみてよ」

レイはアスパラを選んでパクリと一口食べてみる。

モグモグモグ……………暫く咀嚼が続く。

ゴクン。

「どうかな？」

「……………美味しい」

「良かった、綾波の好みがよく分からなかったけど嫌いなものとか入ってない？」

これはシズクの嘘である。

前回の体験からレイが肉を苦手としているのは知っていた。

だから弁当の中身も細心の注意を払って肉を使わなかった。

こくこくと首を縦に振るレイ。

「美味しい…シズクの弁当は美味しい…」

何度も「美味しい」という単語を繰り返すレイ。

「良かった、綾波に気に入ってもらえて」

「……………で」

「え？」

「……………レイでいいわ」

そう言われた瞬間、シズクは余りの嬉しさにその場で飛び跳ねそうになった。

「レ、レイ、シンジくんも料理上手なんだ、今度お弁当作らせてくるから食べてみてよ」

レイは少し考えた後。

「……………シズクが言うなら」

と言った。

「うん」

そう言ったシズクは満面の笑みを浮かべていた。

かくして、シズクとシンジはこの日から交互に弁当作りもしなければならなくなった。

しかもメニューを考えるのが一苦勞である。

前日のお弁当とメニューが被るといけないので互いのお弁当作りも見学する。

だがこのシズクのお弁当大作戦のおかげでシンジとレイの間柄も急速に縮まった。

「綾波、今日はいいいジャガイモが手に入ったんだ、
素材を生かそうと思ってシンプルに蒸かしてみたんだけど、
かな？」

パク、モグモグモグ。

ゴクン。

レイの喉が鳴る。

「どうかな？やっぱりジャガイモにはバターかなと思って思い切っ
てバターを効かせただけだ」

「……………美味しい」

「そ、そう、…はは、やっぱり人に褒めてもらって嬉しいね」

レイは赤い瞳できょとんとシンジを見た。

「……………褒めてもらう事は、嬉しい？」

「うん、綾波は違うの？」

「……………わからない」

そう言つとレイは思考モードへと突入する。

「…………でも、碇君や、シズクにお弁当を作ってきてもらった時のこ
の感情は…
ひょっとしたら『嬉しい』ということなのかも知れない…」

それは前回よりも早く、しかも確実に良い方向へとレイが感情を芽生えさせ始めた兆候だった。

数日後。

「学校ですか？」

朝の葛城邸。

シンジは卵焼きを掴みながらそう言った。

「そう、シンちゃんもシズクもまだ14歳なんだから、本業を忘れちゃ駄目よ」

そう言いながらほうれん草のお浸しをつつくミサト。

「そうですね、いつからです？」

これはシズクだ。

「今日よ」

「へえ…今日、って今日!?!」

「そうよん」

「た…大変だ！シンジくん、早くしないと…！」

「う、うん」

ただいまの時刻午前8時20分。

二人は慌てて家を飛び出した。

「そんな慌てなくてもいいでしょうに」

そう言いながら卵焼きを口に放り込むミサト。

「さて、と…」

そう言つとミサトは自分の部屋へ向かい、机の上にある携帯を手
に取った。

「もしもし？ええ、今出たわ、後よろしくね」

「はい、碇シンジ君と碇シズクさんね、この暑さの中走ってきたの」

「ええ…それは、もう…」

どこか抜けた女教師と話して二人はどっと疲れが出た。

何せ家から学校まで全力疾走、休憩無しである。

二人だけでマラソン大会でも開いたのかというくらいの走りっぷりを二人は見せた。

「シズクさんは何で男物の制服着てるのかしら？これに向こうにある更衣室で着替えて来てね」

そう言っただけで女教師はシズクに女子の制服を渡す。

「あ、はい、それじゃシンジくん、また後で」

「うん」

- 同時刻、教室 -

「なあ、トウジ、知ってるか？」

そう言ったのはメガネの少年、相田ケンスケだ。

「なんや唐突に」

トウジと呼ばれたジャージ姿の少年は気だるそうにケンスケの問いに応える。

「今日、転校生が来るんだよ、それも二人」

「はーん、この時期に転校してくるたあ、難儀なやつだな」

「ふっふっふ、聞いて喜べ、その内一人は女、それも相当な美少女らしいぜ」

キラーンという音を立てて光るメガネを中指でくいつと上げる。

その一言でクラス中の男の視線がケンスケに集まった。

・更衣室・

「じ…これ、はくの？」

シズクの手にあるのはスカート。

「女であることには大分慣れたけど…スカート…って…」

はあ、と溜め息をついて、意を決したようにスカートをはいた。

ガチャ。

更衣室の扉が開く。

「あ、遅かったねシズク」

シンジがシズクの方を見ると、顔が真っ赤になったシズクが恥ずかしそうに俯いていた。

「あ、あの…似合…うかな…？僕、スカートとかはかないからさ…はは…」

「う、うん、似合ってるよ」

シズクのスカート姿にシンジの顔も赤くなる。

シズクはシンジの一言でとりあえずほっと胸を撫で下ろした。

- 教室 -

優しそうな老教師が壇上につく。

「では、みなさんに転校生を紹介します」

少し緊張した面持ちのシンジ。

対してシズクはまだ恥ずかしいのか顔が赤い。

「では碇シンジ君から…」

「あ、はい、い、碇シンジです、よろしくお願いします」

笑いながらペコリと頭を下げるシンジ。

「ねえ、結構可愛いんじゃない？」

「笑顔がチャームिंगグよね」

こそこそとした話し声が聞こえる。

クラスの女子の会話である。

残念なことに（？）シンジには聞こえてはいないが。

「では続いて碇シズクさん、お願いします」

「はい、碇シズクです、よろしくお願いします」

そう言うとシズクはにっこり微笑んだ。

その声がシズクの耳に届く。

ケンスケ…

そして目に飛び込む。

…トウジ……！

シズクはふらふらとトウジの方へと歩きだした。

トウジの目の前で立ち止まる。

「な…なんや？転校生……」

「シズク…？」

シンジも不思議そうにシズクを見る。

注目を浴びている本人はそんなことお構いなしに
その場所に座り込み、トウジの足を確かめるように触り始めた。

「お…！お、ま…え、な、なにし、しとるんや…！？」

思わぬ行動にしどろもどろになるトウジ。

ポーズも埴輪のような状態で固まっていた。

足が…ある…

「転校生！ええ加減にせえ……よ…？」

トウジは我に振り返り文句を言おうとしたがシズクが微かに震えていることに気がついた。

シズクは自分の知らないうちに泣いていた。

足があるのは当然だよ、まだあの前なんだから…

でも転校初日にトウジが教室にいるってことは、トウジの妹が無事ってことのはず…

やっぱり……未来は変えられるんだ…！

「おいトウジ、何したんだよ？」

ジト目でトウジを睨むケンスケ。

「い、いや、あの、おい転校生、ワシが泣かしたのか？」

すまん、謝るから、と、とりあえず手離してくれんか？」

「あ…ごめん」

ぱっとトウジの足から手を離す。

「どうしたのさ？シズク」

シンジも駆け寄ってきた。

「うん、なんか…昔知ってる人に似てる気がしたから…」

「え！記憶が戻ったの！？」

シズクは静かに首を横に振り、

「うっん、そうじゃないけど…」

沈黙。

「なあ、碇っていったか」

とケンスケ、これはシンジに対しての問いだ。

「え、うん」

「記憶がどうのってどういうこと？」

「シズク、記憶喪失なんだ」

「お前は彼女のこと知らないのか？」

「知らないよ、最近知り合ったばかりだし…」

「え、兄妹じゃないの？」

ケンスケが驚く。

「違うよ、苗字が同じなのは偶然、一緒に住んではいるんだけど…」

これはシズク。

そしてその一言にクラスの大半がにわかに殺気立つ。

（この野郎…”俺”のシズクさんと（違う）一緒に住んでるだとい！？）

（転校早々、裏切り行為とはいいい度胸だ…！）

「碇シンジ君…一緒に住んでるというのは、どういうことかな？」

メガネをきらりと光らせぽんとシンジの肩に手を置くケンスケ。

シンジの背中には滝のような汗が流れた。

「あ、それはね、僕とシンジくんがネルフの関係者だから…」

ようやく立ち上がると涙を拭きながらシズクは言った。

「ネルフ…？」

「シ…シズク、いいの！？そんなこと言って…？」

「いいよ、どうせ直ぐにはれるんだから」

「ネルフってあの…？」

がばつとケンスケがシンジに問い詰める。

「わっ、唾！」

「何やケンスケ、どないしたん、興奮して」

「これが興奮せずにいられるか！ネルフだぞ！！」

今度はシズクの方へと近寄っていくケンスケ。

「もしかして、この間、避難したときに闘ってたロボットに乗ってたのって…」

「あ、それ僕…」

ざわつと教室中が沸き立つ。

「えー、碇君ってあのロボットのパイロットなの！？」

「すごい！！」

「ああ、凄い、凄いよ！いやー、ホント凄いやつと友達になったな
ー！！」

とこれはケンスケである。

「友達…」

シンジはその言葉に少しジーンと来たようだ。

そんなシンジを見てシズクは思う。

無理もないか、今まで友達らしい友達なんていなかったもんね

「じほん」

壇上から咳払いが一つ。

全員が一斉に振り向くとそこにはちらちらとこちらを見ている老教師がいた。

「授業：始めてもよろしいですか？」

全員がこくこくと頷いた。

「よろしく、碇さん」

シズクの隣の席は少しご機嫌斜めの洞木ヒカリだった。

見ず知らずの女の子が自分の想い人にベタベタと接触したのだ。

それは不機嫌にもなるだろう。

しまったな…

シズクは今更自分の取った行動を後悔した。

「よ、よろしく…あ、シズクでいいですよ…それと…ごめんなさい…」

「なんで謝るの?」

「いや、だって機嫌悪そうなの、僕がト…あの男の子に触ったからでしょ?」

ボツという音を立ててヒカリの顔は真っ赤に染まった。

「な、な、なんで…」

「いや、勘って言ったら…それまでなんだけど…」

無論、嘘だ。

「か…勘って…」

「もう、怒ってない…?」

心配そうにヒカリの顔色を窺うシズク。

ふう、とヒカリは溜め息をつき。

「…うん、もう怒ってない、私は洞木ヒカリ、ヒカリでいいよ」

「うん、よろしく、ヒカリ」

そう言ってシズクは微笑んだ。

学校もこんなに楽しい…前は義務というだけで通ってたのに…

少し俯く。

なんて…なんて勿体無いことをしてたんだろっ…

そう思ったと同時にシズクは自分の人生はきつとこれから始まるのだということ思った。

老教師の授業をBGMに学校という空間を楽しむ。

シズクはその日一日、2回目となる学校生活を満喫した。

シズクのエヴァ

『目標をセンターに入れて…スイッチ!』

狙い済ましたように立体映像の使徒のコアを打ち抜く初号機。

ネルフでは今日も今日とてチルドレンの訓練が行われている。

今日からはシンクロテストだけじゃなく本格的な訓練を取り入れはじめた。

まずは射撃訓練。

シンジは言われたことを忘れないように復唱しながら次々とターゲットを撃破していく。

「よく乗る気になってくれたわね、シンジ君」

リツコがコーヒーをすすりながら言った。

「そお？別に乗らない気満々だったとは思わないけど」

返すのはミサトだ。

「報告では随分内向的な子だって聞いていたから心配だったのよ」

「あ、それはわかるわ、でも会ってみたら意外と、
そっじゃなかったのよね、まあ、良くある事なんじゃない？」

「そうかしら…」

リツコはシンジの訓練を見ているシズクをちらりと見てそう言った。

「ご苦労様、シンジ君、上がっていいわよ」

コーヒーを飲み干したリツコがそう言った。

『はい』

シンジはふうっと額の汗を拭う。

「それとシズクちゃん」

「ふへ？」

オペレーター席の横でココアを飲んでいたシズクは突然呼ばれたのに間抜けな声でリツコを見た。

「なんでしょう？」

「貴方用のエヴァを見せるわ」

「僕用…？」

シズクが少し考え込む。

なんだ？この時点でエヴァは初号機と零号機、
あとはドイツにある飛鳥の弐号機しかないはずだぞ…？

「ええ、こっちょ」

用件を言ったリツコは直ぐに踵を返し、スタスタと第7ケイジの方へと歩いていく。

「あ、ちょ…リツコさん、待ってくださいよ」

シズクは慌ててその後を追いかけた。

……レイ？

ふと、前から歩いてくるレイに気付く。

「丁度良かったわ、レイ、こっちに来て」

リツコがレイを呼び止める。

「はい」

「あら、どうしたの？」

丁度、訓練から上がってきたシンジがミサトと一緒に歩いてきた。

「シンジ君も丁度いいわ、彼女は綾波レイ、ファーストチルドレン、零号機のパイロットよ」

そう言ったリツコの言葉を聞きながらシズクはニコニコし、

「知ってます、改めてよろしくね、レイ」

「ええ」

「知ってる？どこで知ったの？」

リツコが不審そうにシズクを見て言った。

「病院です、シンジくんが包帯姿の彼女は誰だ〜っていうんで探したんですよ、ね？シンジくん？」

「え？あ、まあ…はい」

ホントは違うのだがシンジはシズクの眼力に完全にやられて思わず頷いてしまった。

なんだか蛇に睨まれた蛙状態だった。

「それから学校が始まるまでシンジくんと一日置きにお見舞いに来てたんです」

「あら、そう」

リツコは釈然としない顔をしながらそう言った。

「シンちゃん、レイのこと狙ってるの？一日置きにお見舞いだなんて」

「ち、違いますよ！変な事言わないでください！ミサトさん！！」

ミサトはシンジをからかい、シンジはそれに全力で顔を真っ赤にさせて否定する。

いつもの光景だった。

ま、レイに限ってそういうことはないだろうけどね…

ミサトの心の声、それは今までのレイの性格を的確に捉えて得た考えだった。

「それじゃ、シンジ君も知ってるのね？」

「はい、綾波、改めてよろしく」

「ええ」

「それじゃあ行きましょ、シズクちゃんのエヴァはもう少し先よ」

そう言ったリツコはツカツカと歩き始めた。

ケイジに着くまでの間、シズクはレイと話ながら歩いていた。

尤も、シズクが話題を振って、それに対しレイが「ええ」とか「
…そうね」とか

相槌を打つ程度のものだが、それでもミサトは驚いていた。

はじめて見るわ、レイがこんなに喋っているところ…

- 第7ケイジ -

「これは……」

シズクの目の前に現れた巨大な漆黒の顔。

それは紛れも無く3号機だった。

「3号機…出来てたの？」

ミサトの問い。

「一昨日ね、それから急ピッチで搬入作業を急がせたのよ」

なんで……？3号機ってトウジが乗ったエヴァだろ？そしてそれは使徒に寄生されて…そして…

少し寂しそうでそして悲しい表情になるシズク。

「…シズク、大丈夫？」

レイの心配。

レイが心配してくれたこと、そして3号機が自分のエヴァであるということ。

つまりトウジが3号機に乗ることがないということ。

この二つはシズクに微笑みを取り戻させるには充分すぎる内容だった。

「大丈夫、ありがとう、レイ」

少しの沈黙。

「これに…僕が？」

わかってはいたがやはりどうしても言葉で確かめておきたかった。

「ええ、エヴァンゲリオン3号機、これが貴方のエヴァよ」

良かった…これでトウジは完全に救われたよね…

「で、早速だけどシンクロテストを行いたいので、宜しくて？」

「あ、はい」

- 管制室 -

リツコ、ミサトとオペレーター陣の目の前には
レイ、シンジ、シズクの3人のエントリープラグ内の映像が映し
出されている。

「では、いい？始めるわよ」

リツコの声。

『『『はい』『』『』』』

「シンクロテスト、スタートします」

マヤの声が響く。

シズクは静かに目を閉じた。

「シンジくんは流石ですね」

モニターを見ながらマヤが言う。

数値は67・2%を指していた。

「また上がったんじゃない?」

「ええ、そうね、興味が尽きないわ、彼には」

「レイちゃんは…37・5%です」

「シンちゃんの約半分ね…それでも記録更新じゃないの?」

「ええ、あともう少し上がれば安全に起動できるレベルまでいくわ」

「今は戦力が一つでも欲しいときだもん、頼りにしてるわよ、レイ」

「シズクちゃんは、え?…5…51・7%!?」

「驚いた…、シンちゃんの初搭乗時より高いじゃない!」

ミサトが感心したように言う。

「……………」

「どしたの?リツコ?」

「いえ…素晴らしいわ…」

シズクは考えていた。

なぜ自分が3号機とシンクロできるのかを。

普通、エヴァはコアにパイロットの肉親あるいはそれに近いものの

魂を注入して、そこにパイロットを守ろうという意味が存在してエヴァが動く。

じゃあ、3号機には誰の魂が入っているのか。

僕の肉親というと、父さん？…はは、あるわけない、現に生きてるじゃないか、父さんは…

となると、やっぱり母さん？…でも母さんは初号機の中だから無理だよな…

だとすると、全くの第3者か…でも僕に近い人ってなると…

シズクの発想はあながち間違っではいなかった。

3号機のコアに使われたのは零号機と同じリリス、だった。

尤も、ガフの部屋から無作為に選ばれたレイの「入れ物」にリリスの魂をわずかに注入したもの。

つまりはレイの『3人目』が入っている。

レイの匂いにする…まるで前に零号機に乗ったときみたいだ…

「シズクちゃん、どう、実験とはいえ初搭乗の気分は？」

リツコの問い、これは純粹なる好奇心から来たものだ。

『そうですね…なんか、レイの匂いがします』

「レイの…匂い…？」

リツコの顔が若干曇る。

『何て言うんだろう…なんか、こっ、レイに包まれてるような、そんな感じです』

「…そう」

「どうしたのよりツコ、神妙な顔しちゃって」

「いや、何でもないわ…（まさか気付いた？…まさか、ね…）」

そう言い一口、コーヒーを口に運ぶ。

「3人ともお疲れ様、上がっていいわよ」

その一言で3人は今日はお役御免、解散となった。

「明日からレイ、学校来れるんでしょ？」

「……ええ」

「じゃあね、綾波」

「……ええ」

二人はレイに別れを告げると家路へとついた。

レイは二人の後姿を見えなくなるまで見つめていた。

・翌日・

「おはよう、レイ」

「おはよう、綾波」

「………… おはよう、シズク、碇くん」

学校で何気なく挨拶したこの二人が、

再びクラスメートから質問攻めにあつたのは言うまでもない。

シズクのエヴァ（後書き）

シズク用のエヴァです。3号機です。

シャムシエル戦・思い出せない事・

確か明日だったな…

「どうしたの？シズク」

考え事をしていたのが顔に出ていたのか、ヒカリに声をかけられハッとする。

「いや、なんでもないんだ」

そう言っただけと笑う。

前回の人生では考えられないことだな、とシズクは自分で思った。こうして自然に笑えるなんてね…

そう思い、シンジの方を見る。

シンジはトウジとケンスケと談笑していた。

『前』の君からは考えられなかったんだよ、シンジくん

シズクは目を細めてシンジを見つめた。

それにしても…

ふと顎に手を当てるシズク。

何か：大事なことを忘れてるような：

結局、『大事なこと』を思い出せないままその日は過ぎていった。

- 翌日 -

一夜明け、シズクはまた考え事をしながら朝ご飯を作っていた。

『前回』の人生の正に今日、第4使徒シャムシエルが来たのだ。

「シズク〜？どうかしたの、神妙な顔して」

ミサトがテーブルに頬杖をつきながら声をかける。

「いえ、別になんでもないですよ」

「ふ〜ん、ねえシズク」

「な、なんですか？」

次にミサトの口から出た言葉はシズクにとって予想外の言葉だった。

てつきり、考え事をすることを聞かれると思っていたからだ。

「言葉使い、直した方がいいわよ」

「え？そ、そうですか？」

「そうよ、折角、そんなに可愛くて料理も出来るのに
時折男っぽい言葉使いなんて…ふわあああ…勿体無いわあ、ホン
ト」

ミサトはまだ眠いのか欠伸を交えながら喋る。

「放つといて下さい（自分だって欠伸しながら喋ったりしてるして
るじゃないか…）」

少しむくれる。

この頃、日ごろからヒカリやレイと一緒にいることが多いせい
か考え方が少し、女の方に傾いてきているのかもしれない。

「嫁の貰い手が無くなるわよん」

そう言うミサトに対して

「…ミサトさんにそっくりお返ししますよ、その言葉」

と、シズクは言った。

ミサトは頬杖をついたままピシッという音を立てて石化した。

「あ、尤も、ミサトさんには関係ないですね」

「どついう意味よ？」

「だってミサトさんには加持さんが…」

と、ここでシズクは慌てて両手で口を押さえた。

一瞬、ミサト家のリビングが静寂に包まれる。

「…か…かじーーーーーー！！？」

ミサトが大声で叫んだ。

「な、なんであんたが加持のこと知ってんのよ！」

ミサトはシズクのエプロンを握り締めながら凄んできた。

「あ、い、あ、ほら、あの、連絡があっただですよ…内緒にしてろって

言われたんですけど…つい、今口が…」

「連絡！？何のために！！？」

「し、知りませんよ、加持さんに直接聞いてみたらいいじゃないですか」

シズクはもう自分で何を言ってるのかわからなくなってきた。

「…そう、そうね…で、私と加持について何か聞いてるわけ？」

「え…そ、そうですね…恋人…とか？」

そのシズクの言葉を聞いた瞬間、ミサトの顔が赤鬼のようになって

た。

「だあれが恋人ですってー！あの野郎おー！！」

「へえ…ミサトさん、恋人がいたんですか」

遠くから様子を見ていたシンジが言う。

「違う！」

ミサトはその言葉に即座に反応し首だけを反転させてきっぱり言い切った。

素直じゃないんだから…

シズクは苦笑する。

「さ、そんなことより朝ご飯食べましょうよ」

ミサトはぶつぶつ言いながら席につく。

今日の朝のメニューはポテトサラダ、出し巻き卵、焼き鮭、若布の味噌汁、そして白いご飯だ。

「あ、うん」

シンジも席につく。

箸を取りサラダを食べ始める。

「あれ？そういえば、今日はご飯なんだね」

とシンジ。

ミサト家では手軽さもあってか朝はパン食が多い。

これはミサトが料理スキル0だからという理由も大きなウェイトを占めている。

つまりシズクとシンジがご飯を作ったとしてもミサトの当番の日
は決まってパンなのだ。

シズクはそんなミサトの栄養が偏らないようにと自分の時は出来るだけご飯食にしようとしていた。

「うん、駄目だったかな？」

「そんなことないけど…ミサトさん？食べないんですか？」

そう言われたミサトは「加持…殺す…」とブツブツ囁くのをやめて

「え、あ、食べるわよ、うん、やっぱりシズクの料理は美味しいわね」

と次々料理を口に放り込みそう言った。

「…ぷつ、あはははははは」

そんなミサトのやり取りを見て、シンジは思わず吹き出した。

「何よ、シンちゃん、そんなに私が面白い？」

「い、いや、そ、そんなこと…ぷっ…ないんですけど…ははははは」

そんなこんなでミサト家の朝食は和気藹々と終了した。

「ご馳走様」

「ご馳走様、シズク、美味しかったわよん」

「お粗末さまでした、じゃ、ミサトさん、行ってきます」

「行ってきます」

「はい、いつてらっしゃーい」

ミサトは学校へ行く二人を笑顔で見送ると自分の部屋の机に移動して

ぱらぱらと一冊のノートを開く。

ノートには「サード&フォース監督日誌」と題されていた。

あのバカ…シズクに接触して何考えてるのかしら…

ミサトはそんなことを思いながらノートにペンを走らせる。

- 同時刻・ドイツ -

「へーつくしよい」

無精ひげの男が豪快にくしゃみをする。

「風邪ですかあ？加持さん！」

赤い髪をした少女が加持と言われた男の腕に絡みつきながらそう言った。

「いや…誰かが噂をしてるな、こりゃ」

加持は頭をぼりぼりと掻くとそう呟いた。

「なあ、碇、ちょっと付きおつてくれへんか？」

学校に着いたシンジを待っていたのは仁王立ちしたトウジだった。

「…いいけど？」

トウジがシンジを教室から連れ出す姿をシズクは横目で追っていた。

トウジの妹は助かったはずなのに…なんだろう？

・屋上・

シンジとトウジが向き合っている。

トウジの横にはにやけ面をしたケンスケもいた。

二人の間にはピリピリとした空気が流れていた。

「…で、鈴原くん、何か用？」

シンジの言葉。

それに対したトウジの返答は土下座だった。

「碇…ありがとう！」

「…へ？」

てっきりトウジのムードからして怒られるんじゃないかと思っていたシンジは吃驚して

思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

いきなりの土下座で、お礼である。

頭の中が？でいっぱいになるシンジ。

「あ、ありがとう…って？」

「妹から全部聞いたんや！お前がもしあの時、化け物と戦ってくれなかったら

今の元気な妹の姿は無かったってな！ほんつま、ありがとう！！」

「い、いいよ、お礼なんて…僕全然気付いてなかったし、
たまたまそうなったんだから、それより顔上げてよ」

これはシンジの本心である。

シンジに取ってサキエル戦でトウジの妹が助かったことなど知る
由もなかったのだから。

頭を床に擦り付けているトウジを起こそうとするシンジ。

「碇…いや、碇さん！ワシをどついてくれ！！」

「ええ！？で、出来ないよ、そんなこと」

尤もである。

「いや、それじゃ恩人に対して今まで
何もしてなかったワシの気が治まらん…ワシをどついてくれ！！」

トウジがほれっと言つよつに顔面をシンジに近づけてきた。

- 教室 -

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。...

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。...

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。...

三つの携帯電話が同時に鳴る。

1つはレイ、1つはシズク、そしてもう1つは現在屋上にいるシンジのものだ。

シズクとレイはバツと携帯を見る。

「え？どうしたの？」

とヒカリ。

「ごめん、ヒカリ、買い物はまた今度」

そう言つてシズクは携帯を握り締めたまま立ち上がった。

「レイ、シンジくんに言つてきて、僕は真っ直ぐ向かうから」

「…了解」

・屋上・

「本人もこう言ってるんだし、殴ってやれば？」

ケンスケがニヤニヤしながらシンジに言った。

「でも…」

「こいつ、今時珍しいこういう恥ずかしいやつなんだよ」

「恥ずかしいやつとはなんや！ワシはなあ…！」

ケンスケの方を向いてムキになるトウジ。

「な？軽い気持ちで一発ガツンと」

そのケンスケの言葉にトウジは再びシンジの方を向く。

「そや、はよやってくれ」

「そ…そんな……………」

シンジはどうしようか本気で悩んでいた。

そして覚悟を決めたように、

「じゃ、じゃあ一発だけ…」

「おう！」

トウジはビシッと仁王立ちする。

シンジは拳を握り締める。

と、その時、屋上の入り口から声が聞こえた。

「……碇くん」

三人は一斉に入り口を見る。

そこにはレイが立っていた。

「非常召集………」

「あ、うん」

そう言ってシンジが入り口へと向かう。

途中、トウジの方へと振り返り、

「ごめん、この続きはまた今度！じゃあね、『トウジ』、『ケンスケ』……！」

「あ、ああ」

呆氣に取られたように呆然としてシンジとレイを見送る二人。

「なあ…ケンスケ」

「なに？」

「あいつ…今、ワシのこと名前で呼んだな？」

「ああ、俺のこともね」

そう言つとトウジはケンスケの頭をもみくしゃにしながら

「はは！ははは！それじゃ、ワシも碇のこと名前で呼ばんなー！」

「いて、痛えよトウジ！」

と言つた。

・ネルフ本部・

「碇指令の居ぬ間に第4の使徒襲来、意外と早かつたわね」

そう言つのはミサトだ。

「前は15年のブランク、今度はたったの3週間ですからね」

「こっちの都合はお構いなしか、女性に嫌われるタイプね」

「委員会から再び、エヴァンゲリオンの出撃要請が来ています」

「っさいわねえ、言われなくても出撃させるわよ」

・ 3号機・エントリープラグ内・

『3号機、起動します』

『シンクロ率53・1%』

『ハーモニクス全て正常、直ぐにでも実戦可能なレベルです』

『いい、二人とも?』

ミサトの通信が入る。

「『はい』」

『地上に出たと同時にパレットガンによる一斉射撃いいわね』

『はい』

それに答えたのはシンジのみだった。

シズクは右手を何度も握っては開き、握っては開き、を繰り返している。

負けるわけにはいかない…未来を変えるために僕はここに存在してるんだから…！

『…シズク？』

「…あ、は、はい！」

『大丈夫？』

「はい、行けます！」

初陣だものね…やっぱり緊張してるのかしら…

そうミサトが思う。

でも何もしてあげられない。

唯一してあげられることは少しでもいい作戦を考えて、1%でも勝率を引き上げること。

そう思ったミサトに迷いは無かった。

『エヴァンゲリオン初号機、3号機、出撃！！』

・避難シェルター内・

「ちくしょー、まただ、こんなビッグイベントだっていうのに！」

ケンスケがハンディカムを覗き込みながら叫ぶ。

「なんや？」

「見ろよこれ、報道管制っていうやつだよ、

上で起こってること俺ら一般人には見せられまんってさ」

半ばヤケクソ気味にハンディカムの画面をトウジに見せる。

「そりゃ、しゃあないやろ」

「トウジ、ちよつと話が……」

突然声を潜めるケンスケにトウジが何か感じたのか。

「……ああ、ああ、わかった、委員長！」

「何よ、鈴原？」

「ワシら二人、便所や」

「もう、ちゃんと済ませておきなさいよ！」

ヒカリの声を尻目に二人はトイレへと向かった。

「で、なんや？」

半分諦めたような口調でトウジが言う。

「死ぬまでに一目だけでも見たいんだよ、上で行われてる戦闘をさ」

ケンスケの目は正月にお年玉を貰う子供の様に輝いている。

「ケンスケ…お前なあ…死んでまうで」

「トウジもさ、シンジの戦うところ、見てみたいだろ？」

「ああ？…そりゃ、まあ…な」

「じゃあさ、決まりだろ！？行こっぜ！！」

そう言うケンスケにトウジは両手を上げて、

「分かった、分かった、付きおうたるわ、
ほんつまお前は自分の欲望に忠実なやつぢゃなあ」

と言ってケンスケの後を追った。

二人を待っていたのはイカのようなそうでないような赤い使徒だった。

両肩と思われる部分から伸びているうねうねとした光る触手が印象的に映る。

「凄い、凄い、来て良かったー!!」

ハンディカムを片手に大はしゃぎするケンスケ。

「シンジはどこや？」

そうトウジが呟いた瞬間、初号機と3号機が地上から凄まじい勢いで地上へと上がってきた。

折りたたみ式の出入り口が開き、初号機と3号機が姿を現す。

「すっげー！3号機もいる！ということは碇も出撃してるのか、零号機は……ないな、綾波は留守番か」

「お前、なんでそないに詳しいんや？」

呆れ顔で尤もな意見突っ込むトウジ。

シズクとシンジはまた右手を握っては開き、握っては開きを繰り返していた。

『A・T・フィールドを展開、作戦道りに、いいわね？』

ミサトの通信が入る。

「『はい』」

二人の返事とほぼ同時に初号機が第4使徒シャムシエルの前に出た。

『このおー！』

ズダダダダダダダダダダダ！

凄まじい数の弾丸がシャムシエルの体へと当たる。

濛々と立ち上がる爆煙でもうほとんどシャムシエルの姿は見えなくなっていた。

『バカ！爆煙で敵が見えない！！』

ミサトの声。

「シンジくん、それじゃあ駄目だ！」

シズクが叫ぶ。

『くっ…ミサトさん、どうすればいいんですか！？』

シンジの声には焦りの色が感じられた。

「接近戦を仕掛けます」

シズクの声が後に続く。

『お願い、シンジくんはその隙を見て態勢を立て直して』

『は、はい！』

「はぁああああー！」

プログ・ナイフを右手に装備し、3号機がシャムシエルへと突進していく。

50%弱だと少し重く感じるけど…！

ビシュツという音を立ててプログ・ナイフを横に薙ぐ。

シャムシエルは片方の触手を伸ばし、プログ・ナイフを受け止めた。

「ちい…」

受け止められたと同時にシズクはプログ・ナイフを離し、そして両の足で跳んだ。

シャムシエルの触手がプログ・ナイフに巻きついたからだ。

空中で回転するとシャムシエルの方を向き、着地する。

- 発令所 -

「凄い…」

発令所の人間はそれを見て誰と無く呟いた。

シンジと違い、多少の訓練期間があったとはいえ、初戦でこの動きは驚嘆に値する。

「いいわシズク！その調子よー！！」

ミサトの激が飛ぶ。

しかしシズクにこの言葉は届いていなかった。

こいつ…予想より全然強い……………！！

以前の時は怪我やエヴァの損傷などを気にしていなかったのですが、腹部に重度のフィードバックを受けながら倒したが

なまじ経験を積んでいる今は出来るだけダメージを受けずに戦おうと体が勝手に反応する。

加えて50%弱という低いシンクロ率が思った以上にシズクの戦いの呼吸を乱していた。

「はぁぁぁ！」

前蹴りから正拳突きのコンビネーション。

だがシズクの意味から一呼吸置いて3号機が反応するためどうしても1テンポ遅くなる。

それがシャムシエルの素早い触手の前では致命的だった。

軽く裁かれて足を払われる。

シズクはそのままブリッジをしてバック転の要領で距離を取った。

どうする...どうする...?

『いのっ！』

体制を立て直した初号機がシャムシエルへと突っ込んだ。

「シンジくん！？迂闊だ！！」

シズクが叫ぶ。

ガキイ！！

右の触手で攻撃を弾かれると同時にしゅるりと左の触手で初号機の右足を絡め取る。

シャムシエルはそのまま初号機を放り投げ、3号機の方へと振り向いた。

『うわあああああああ！！』

『シンジくん！！』

発令所に響くミサトの声。

丘の上のトウジとケンスケ。

必死にハンディカムで撮影してるケンスケに青くなって空を見上げているトウジ。

「おい、ケンスケ…」

「何だよ、今いいところなんだぜ、あの3号機と化け物が戦おうつて時に…」

「紫のロボット…こっち来るで…」

「あん？」

二人の間に沈黙が走る。

どンドン空から近づいてくる紫の巨体。

「うわあああああああああああ！……！」

ドスウウウン……

丁度二人は初号機の人差し指と中指の間にいた。

二人は身を寄せ合って震えている。

あかん…もう駄目や…やっぱ来るんやなかった…

そんな、まだ全部撮りきってないのに…

それぞれの考えの中、恐る恐る初号機を見上げる。

そして、シンジも二人に気付いた。

『な、なんで二人がここに!?!』

シンジの叫び声と共に発令所にトウジとケンスケの姿、そして二人のパーソナルデータが映し出された。

『シンジくんたちのクラスメート!?!』

『なんでこんなところに!?!』

そしてそれを見たシズク。

「…お、思い出した…忘れてた重大なことで…この事だー!?!」

シャムシエル戦・思い出せない事・（後書き）

もつシズクっ たら思いもよらずドジっ子（何

シャムシエル戦・決着・

どうする…どうする…!?

シズクは考えながらもどうすることも出来ない自分に苛立っていた。

3号機が一步出ようとするとシャムシエルが一步ずれる。

シャムシエルが攻撃してくれば3号機はそれを払い、また同じ体制へと移る。

いわゆる膠着状態だった。

どうする…? 思い切ってシンクロ率を上げるか?

だけどそれが発端として皆に疑心暗鬼を持たせることになったら…

一方、シンジは、

くそ! どうしろってんだ! ? むやみに動いてこの二人を潰してもしたら…!

想像してシンジの顔から血の気が引く。

「な、なんで動かんのや! ?」

「俺らがここにいるから、動きたくても動けないんだ！」

「しまっ……」

シズクがちらりと初号機の方を見たその瞬間、

シャムシエルは突然初号機へと接近を開始した。

「くそ！待て！！」

直ぐに後を追う3号機。

しかしその間にも触手が初号機を襲う。

シンジは地面にいる二人に被害が及ばないように咄嗟に触手を掴んだ。

「ぐうううううう！！」

触手が発光し、高温により初号機の両手を焼いていく。

- 発令所 -

ミサトは下唇を噛んでいた。

…これしか、ないか…

「シンジくん！その二人を操縦席へ、二人を回収したら一時退却
いい！？」

「許可の無い民間人をエントリープラグに乘せられると思っている
の！？」

ミサトの提案に真っ向から否定したのはリツコだ。

「私が許可します」

「越権行為よ、葛城一慰」

「全ての責任は私が取るわ、初号機は現行命令でホールド、その間
にエントリープラグ排出して！」

「は…はい」

うう、先輩と葛城さん、怖いよお

とはマヤが心の中で思ったことである。

命令の直後、初号機の後頭部が動き、エントリープラグが排出さ
れた。

『その二人！乗りなさい！早く！！』

「なんや？」

「あそこだ、行こう、トウジ！」

トウジとケンスケはミサトの声に言われるがまま、エントリープラグへと入っていった。

「がぼっ…なんや！水やないか」

「あゝ…僕のカメラ…カメラが…」

慌てふためく二人、だがシンジに二人を気遣う暇は無かった。

「神経パルスに異常発生」

「異物を二つも混入してこれ？凄いものね、シンジ君」

リツコが褒めるのも無理はない。

シンジのシンクロ率は65%を超えていた。

シンジは二人を回収した直後、触手を自分の方へと引き寄せ、シャムシエルを蹴りで引き離そうとした。

だがシャムシエルはその寸前に初号機の手首に触手を巻きつかせた。

「ぐうっ！」

手首に激痛が走るシンジ。

『シンジくん、何とか後退して!』

ミサトの指示が飛ぶ。

「シンジ、逃げる言つとるで」

「わかってる…けど、こいつを何とかしないと…!」

シンジの言葉とほぼ同時にシャムシエルの触手が解かれる。

「シズク!」

3号機はシャムシエルを羽交い絞めの様な形で押さえ込んだ。

『ナイスシズク!今よ、シンジくん!』

「で、でもシズク一人残して…」

『シンジくん、今は二人を安全な場所へ、僕は大丈夫だから…』

シンジはそんなシズクの声に少し考え、

「……………わかったよシズク、直ぐに戻るから」

『ん、待ってる』

そつ言つと初号機は後退していく。

残されたシャムシエルと3号機はお互い向かい合っていた。

もう四の五の言ってられない…こいつを倒すには今のシンクロ率じゃ駄目だ…！

「ミサトさん！」

『どうしたの、シズク！？』

「こいつは強い…戦いに専念するために通信を一旦切ります」

『ばっ…それじゃ作戦を伝えられないじゃないの！』

ミサトは声を荒げた、しかし時既に遅し。

「3号機、通信を切っています」

「あの、バカ！」

ミサトはぎりつと歯を噛んだ。

「これで邪魔者は入らない…行くぞ、シャムシエル！」

「3号機、シンクロ率上昇…え？」

驚きの声を上げるマヤ。

「どうしたの、マヤ？」

「シンクロ率の上昇が止まりません…！70…80…90…98・2%！！」

「なっ…！」

一同が一斉に驚いた。

それはそうだろう。

天才児と言われたセカンドチルドレン、
惣流・アスカ・ラングレーでさえ最高シンクロ率は82・4%だ。

それをエヴァに乗って間もないシズクが軽く超えた数値を叩き出したのだ。

カシュツという音と共に残された一本のプログ・ナイフを右手に
装備する3号機。

「たあっ！」

シズクの声と同時に先ほどとはまるで別の物であるかのような動きでシャムシエルへと近づく。

シャムシエルは音速に近い速度で触手を唸らせて3号機の進行を阻む。

ぎりぎりで触手の乱舞を避け続ける3号機。

くっ…本体そのものの動きは…大したことないのに、この触手は厄介だ…！

シンクロ率を上げて、倍近いスピードで動けるようになったとはいえ、

まだ車で言えば「ならし」状態である。

そんな状態の3号機を音速のスピードまで上げることは出来ない。

「目では…見えてるんだけど…な…！」

丁度3号機を狙った触手に対して、絶妙のタイミングでプログ・ナイフを当てる。

続けざまに来るもう一本の触手に対しては左腕をかざし、A・T・フィールドを張った。

『二人とも、わかっているの?』

静かだがとても威圧のあるミサトの声がモニターから響く。

「はい…えろう、すみませんでした」

「…ごめんなさい」

二人はがつくりと肩を落とし、うな垂れるしかなかった。

「ミサトさん、僕はシズクのところに戻ります」

『ええ、急いでね』

「はい」

シンジはそう言つと再び初号機の所へと走った。

「全くもう、どうしてこう!」

ミサトはすっかりお冠である。

「シズクは回線を切る!シンジくんの友達は脱走する!」

シズクとの通信を切断されたままのミサトはやり切れない表情で

文句を言う。

「落ち着きなさい、ミサト」

リツコは冷静にミサトをたしなめた。

「使徒にエネルギー反応！」

「えっ？」

シゲルの言葉に顔を向けるリツコとミサト。

「これは…信じられません！」

「どうしたの？」

「使徒のエネルギーの流れが変わっていきます」

ふとモニターを見ると異様な程に触手が短くなったシャムシエルがいた。

触手というよりも突起に近いだろう。

「…自己進化したのね…」

リツコの呟きは誰の耳に入ることなかった。

なんだ…？触手が短く…

シズクは発令所への通信を開く。

「3号機との通信、回復します」

『ミサトさん！どうなってるんですか、あの形状…』

「わからないの、ごめんなさい、とりあえず距離を置いて戦って」

ミサトの申し訳なさそうな声。

通信回復しても作戦立ててあげられてないじゃないの…

ミサトは再び下唇を噛んだ。

「了解！」

シズクは距離を取ろうとバックステップをする。

しかし、次の瞬間、シャムシエルが信じられないスピードで体当たりをしてきた。

突起となった触手は3号機の方を向いている。

「ちょ…本体の動きが…早…」

ドゴッ…！

素早く反応した3号機の右腕が突進を止めようと前に出された…
が、

A・T・フィールドが突き破られ、3号機が鈍い音と共に崩れ落ちた。

右腕はまるで踏みつけたアルミ缶のようになっていた。

「……………っ!!」

途端に声にならない悲痛の叫びを上げるシズク。

『シズク! どうしたの! ?』

ミサトは只ならぬシズクの声に慌てた。

「いけないわ、マヤ、フィードバックのレベルを一桁下げて」

「は、はい」

「どづいつとよっ」

専門外のことなのでわからないミサトがリツコへと聞く。

「今、あの子は100%に近いシンクロ率で戦っているわ」

「だから…？」

「エヴァがシンクロ制を取っているのは伊達じゃないわ、100%に近いほどパイロットの脳波をいち早く感知して、誤差の少ないレベルで動ける。」

でも、それだけじゃない、100%に近づいていうことは肉体にかかる衝撃も3号機が受けた衝撃がほぼそのまま伝わるのよ」

リツコの言葉をミサトは理解した。

軽症だったとしても間違いなくシズクの右腕は折れている。

「シズク…引いて！」

『…まだ、やれます』

苦しそうではあるが静かで意思の強い声。

ミサトはその声に吞まれてしまった。

ズダダダダダダダダ！！

轟音を轟かせ、シャムシエルに火花が走る。

『シズク！大丈夫！？』

シンジの乗った初号機がパレットライフルを持ちながら突進してきた。

「…なんとか…ね」

着弾した一瞬の隙をつき、シャムシエルから離れたシズクが言った。

エヴァが二体、揃ったところでまたシャムシエルの突起が触手へと戻った。

複数相手だと突起よりも触手の方が有利だとしても判断したのだからか。

こうなったら…もう、玉砕覚悟で行くしか…ない…か

シズクは右腕の痛みを堪えながら考えを巡らせる。

「シンジくん、これから僕があいつに隙を作るから、その間にナイフでコアを叩いて」

『え、隙を作るってどうやって…』

「ミサトさんも僕がどんな行動に取ろうと、

大目に見てください、恐らくあいつを倒すにはこの方法しかない」

『……………わかったわ』

少しの沈黙の後、回線からミサトの承諾の答えが返ってきた。

「ありがとうございます」

そう言つと3号機はシャムシエルの方を向く。

「行きます」

シズクが言うや否や、3号機はシャムシエルに向かって真っ直ぐ突っ込んだ。

『ばか！幾ら何でも無謀すぎるわ！！』

『シズク…！』

二人の声が重なって聞こえた。

その声とほぼ同時にシャムシエルの一本の触手が3号機の腹に穴を開ける。

もう一本の触手を3号機は左手で強引に絡め取る。

「ぐっ…」

右腕と腹部、そして左腕に痛みが走る。

「シンジくん、はや…く！」

シズクの声にはったとなったシンジがプログレッシブナイフを取り、突進する。

シャムシエルは反撃しようと思身を震わせた。

だが3号機の左手は触手を離さない。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！』

ギイイイイイイイイイイイイイイイイイン！！！！

初号機のナイフがシャムシエルのコアを直撃した。

『だああああああああああああああああああ！！！！』

少しずつ、ナイフがコアに食い込む。

約30秒…僕の体が持てば…

………

………

…

29秒後…

「パターン青、消滅、目標、完全に沈黙しました！」

わあ！と上がる歓声、だが次のマヤの一言でまた沈黙が走る。

「3号機パイロット、応答ありません！！」

「救護班！急いで！」

ミサトの指示の下、シズクは病院へと搬送された。

シャムシエル戦 - 決着 - (後書き)

シャムシエル戦の決着です。

レイの引越し（前書き）

14歳であの一人暮らしは普通無いですわ…

レイの引越し

目が覚めたら白い天井が見えた。

「つつ…」

右腕と腹部に痛みを感じる。

ここは…病院か…

シズクはそう思うとまた静かに目を閉じた。

なんか…久しぶりだな…この病室も…

見慣れた天井を見ながらシズクは考えていた。

今回は何とか倒せたけどこんな効率の悪い戦い方じゃ駄目だ…
せつかく未来が分かってるんだから、もう少し要領よく戦わない
と…

コンコン、とドアからノックが鳴る。

「はい」

シズクの声に静かにドアが開く。

ノックの主はレイだった。

「レイ…どうしたの？」

「……………お見舞い…平気？」

「あ、うん、右腕は多少痛むけど他はいたって健康だよ」

「そう……………良かった」

ここでシズクはある事を言おうかどうか悩んだ。

それはレイをミサトのマンションに引越させるといって一大プロジェクトである。

シズクは前回の人生でレイの生活を幾らか知っている。

そしてそれはどう鼻屑目に見ても普通の中学生が送る生活では無かった。

散乱した包帯、錠剤だらけの食事。

尤も、食事の方はシズクとシンジのおかげで随分マシになったが。

「ねえ、レイ」

「何」

「引越しする気、ない？」

「……………引越し？」

レイは赤い瞳をきよとんとさせるとそう言った。

「うん、レイのアパート、一回行ったことあるけど、

あんな所に住んでちゃ衛生面とかでも良くないと思うんだ」

「…来たなら寄れば良かったのに」

「あ、ああ、その日は忙しかったからさ、それよりも…」

シズクは言葉を選びながら、

「だから…そう、ミサトさんのマンションの隣の部屋を借りてさ、食事はみんなで取るうよ、きつと…その方がレイのためにもなるし、楽しいよ」

レイは少し考えた後、

「シズクがそう言うのなら…」

と答えた。

「ホント!？」

「ええ、でも司令の許可を得ないと…」

「と…碇司令の許可、か…」

シズクが少し考える。

「直談判、しかないかな」

そう言つとシズクは一息おいて、

「まあ、取りあえず僕が退院するまでは待つてよ」

「ええ」

結局、シズクは一週間ほどの入院で済んだ。

父さん、確か今日はシャムシエルの倒れてる現場に来てたはずだよな…

「シンジくん、使徒が倒れてる現場に行くよ!」

「ええ!? 退院したばかりで大丈夫なの、シズク?」

シンジは驚いて声を出した。

「大丈夫、大丈夫、このくらい何とも無いって、ほら、それより急ぐよ」

「う、うん」

シズクの右腕の包帯が少し痛々しいがシズクが明るくスタッフに挨拶をして回っているとその痛々しさも消えて失せた。

なんか…レイみたいだな

シズクは自分の包帯姿を見て最初に会ったときのレイの姿を重ね合わせる。

だがそれはこれからはレイにそんな姿はさせたくないという強い心の表れだった。

「シズクー！見てもいいって！」

少し離れたリツコとミサトのいる場所からシンジの声が聞こえてくる。

「うん、今行くー」

そう言つとシズクはシンジの元へと走っていった。

「リツコさん、こんにちは」

「あら、シズク、私には挨拶なし？」

「ミサトさんには朝、したじゃないですか」

「むう」

「ふふっ、ミサトたじたじね」

そう笑うとリツコは、

「シンジ君、シズクちゃん、使徒を見るのは構わないけどあまりむやみやたらに触らない様にね」

「はい」

「注意事項はそれだけよ、後は好きに見てもいいわ」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃあ、行こうか、シズ…」

シンジの声がふと止まる。

目線の先には碇ゲンドウの姿があった。

父さん…！

シンジは瞬時に体が強張った。

それはミサトにも、リツコにも、そしてシズクにも分かる変化だった。

こんなにも…こんなにも『僕』は父さんに萎縮していたのか…

シズクは悲しそうな顔でシンジを見る。

「……………あ」

「どうしたの、シンちゃん？」

ミサトの声。

「いや、父さんの掌、火傷してるみたいだけど…」

「ああ、司令の火傷？今朝の起動実験ね…」

ゲンドウの火傷の顛末をシンジに話すリツコ。

それを知ったシンジは少なからずショックを受けた。

綾波を救おうとして負った火傷…どうして、僕には冷たいんだろ
う…

そんなシンジの心が負一色に染まろうとしていた時だった。

シズクがレイを呼び止めたのは。

「おはよう、レイ」

「……………おはよう、シズク、碇くんも」

「あ、お、おはよう、綾波」

レイの姿を改めて見るシズク。

シズクはレイを見て決意を新たにした。

父さん…碇司令を説得しなきゃな…

「よし、善は急げだ！行くよ、二人とも！」

「え？ど、どこ行くのさ、シズク！」

「……………多分、碇司令のところ…私が、引越し出来る様に」

レイの引越しについてはシンジもシズクから聞いていた。

だがその方法までは知らなかった。

まさかあのゲンドウに直談判だとは露とも思わなかっただろう。

「司令！こんにちは！」

元気にゲンドウへと声をかけるシズク。

どうやら「この世界」のゲンドウへの恐怖心は全く無くなった様だ。

「碇シズクか…何のようだ？」

不気味にサングラスが光る。

次いでレイとシンジがその場に合流した。

「レイをミサトさんの居るマンションに引越させたいんですが許可、もらえますか？」

ピクリとゲンドウの眉が上がる。シンジにはそんな気がした。

「何故だ？」

「一つ目はエヴァパイロットの親睦を図るため、

二つ目は作戦本部長の下にパイロット全員が居た方が何かと都合がいいかと、

そして三つ目はレイの健康や衛生面の理由からです」

「……………」

「駄目ですか？」

「いいだろう、許可する」

「へっ？」

「許可すると言った、二度手間を取らせるな、用は終わりだな、私に行くぞ」

これはシズクには嬉しい誤算だった。

正直、これだけの理由でゲンドウから許可を取れるとは思っていなかったからだ。

なので、ちょっとゲンドウの去る後姿をぽかんと眺めたりしてしまった。

「……………シズク？」

「あ、ああ、やったねレイ！部屋はミサトさんの隣の部屋でいいよね！？」

「ええ」

「シンジくん、ミサトさんに報告！行くよー！」

「う、うん」

目まぐるしい展開にちょっと付いていくのがやっとなシンジであった。

「ミサトさんー！」

元気なシズクの声。

手を振りながらミサトを呼ぶ。

「あら皆、もう見てきたの？」

「そんなことより、重大発表が！」

「はへ？何よ??」

シズクのキラキラとした瞳に呆気にとられながら聞き返す。

「レイが隣の部屋に引越してきまーす!!」

「へー、レイがねえ…て、えええええ!!!!?」

思わぬ発表に思わず後ずさりするミサト。

「だ、だって、司令の許可は?」

そこでふっふーん、と鼻息を吹かせるシズク。

「勿論、取りましたよ、ついさっきそこで」

「えええええ!!!!」

ミサトは衝撃を受けた。

「ついさっきそこで」、というフレーズよりも「取りましたよ」というフレーズに。

「許…許可してくれたの!?!」

「ええ」

「ホ…ホントに?」

「しつこいなあ、ホントですってば、ね?レイ、シンジくん」

「うん」

「ええ」

「それで、部屋の確保をお願いしたいんですけど…」

「あ…ああ、そういうことね、OK、わかったわ、隣の部屋でいいのね？」

ようやく再起動したミサトが聞き返す。

「はい！」

「やったね、綾波」

「ええ」

三人のはしゃぎ様に、ああ、この子たちも中学生なんだなあという思いを巡らすミサト。

だが

「今日のご馳走にしくちや！」

という、シズクの声に今日は早く帰らなくちゃ、という思いの方が強く出たのであった。

「それじゃ、ミサトさん、また後で」

「失礼します」

…ぺこ（お辞儀の音）

と、三者三様の挨拶を終え三人はパタパタと去っていった。

「…良かったの？」

リツコの声。

「良かったも何も司令の許可が出てるんだもん、私に断る理由はないわ」

「…そう」

そう言ってリツコは一口コーヒーを啜る。

「発案者は…多分シズクちゃんよね」

「あ、ええ、そうじゃない？シンちゃんが先導きってるのは今回は考えずらいわね」

「そう」

「あゝによ？何か不満があるわけ??」

「別に無いわ、ちょっと気になっただけよ」

「そう、ならいいんだけど」

そう言つとミサトは大きく伸びをして、

「じゃ、ちよっくら部屋の確保、してくるわ」

「ええ」

リツコは短く返事をし、目をパソコンのモニターへと戻した。

- 葛城邸・リビング -

「結構、買っちゃったね」

どさ、と買い物袋を置くシンジ。

「ごめんね、シンジくん、腕こんなじゃなきゃ僕も持ったんだけど」

そう言いながら軽い荷物を左腕から降ろす。

「いや、いいんだよ」

「そついや肉とか買わなかったね」

「ああ、うん、ねえレイ、嫌いなもの、ある？」

「……………肉」

「へ、へえ、偶然だね」

「？」

シンジは今の会話に若干の疑問を持ったが、大した問題では無かったのでそのまま受け流した。

そっぴゃお見舞いの時に作っていた肉じゃがも綺麗に肉だけ残していた記憶がある。

一方、シズクは内心ヒヤヒヤしていた。

計画では買い物の前にレイの嫌いなものを聞いて、肉を除外するはずだったのだが、

許可が出た嬉しさでそれをつい忘れてしまい、でもすっかりと肉を買うのは控えてしまったためである。

シンジがそれ以上追及してこなかった為、ほっと胸を撫で下ろした。

夕方。

そんな時刻に帰宅できるはずないと思っていたのだが

夕方5時ぴったりにミサトは帰宅した。

多分、日向マコトあたりにでも仕事を押し付けてきたのだろう。

夕食の内容は豆腐ハンバーグをメインとした野菜中心の料理だった。

ちなみに今回はほとんどがシンジお手製のものである。

シズクは右腕が使えないのでどうしてもそうなった。

「ぶつはあ！ご飯を食べながらのえびちゅはやっぱ最高よねえ！」

「ミサトさん、飲みすぎないくださいよ」

「わあかってるって、シンちゃん あ、そだ、はいレイ、あなたの新しいお城の鍵よ」

そう言うミサトはレイにカードキーを渡す。

「…ありがとうございます」

「一応、一通りの家具はついてるから、今日からでももう寝れるわよ」

「そっか、レイ、パジャマとか持ってる？」

シズクの問いにふるふると首を横に振るレイ。

「あー、やっぱりそっか…今度の休みに買いに行かなきゃね」

「何？レイってパジャマも持ってないの？」

「ミサトさんも今度、レイの前のマンション行ってみるといいですよ、意味が分かりますから」

「？、そう？今度暇があったらね」

この言葉を聞いたシズクはあー、こりゃ行かないな、と思った。

夜。

ガチャ。

レイは新しい自分の部屋へと上がる。

新しい部屋独特の匂いがレイの鼻を擽った。

レイはなんだか自分でもよくわからないが幸せな気分になった。

しかし、レイはこの気分が「幸せ」ということがわからない。

ぼふつとベットへと倒れこむレイ。

なんだかわからないが、レイはこの気分に関りながら寝たかった。

そんな気分に関りつつ、レイは引越し第一夜を明かしたのだった。

レイの引越し（後書き）

段々と綾波レイが綾波レイでは無くなっていく今日この頃。
みなさんの反応が怖すぎる件 - - ;

決戦！第3新東京市（前書き）

レイが原作崩壊を起こし始めました。

決戦！第3新東京市

「レイ、実験開始するわよ、いいわね？」

リツコの声が響く。

その場には冬月とゲンドウもいた。

『はい』

「シンクロスタート」

「ハーモニクスに若干の揺れ幅があります」

「誤差修正範囲内ね、続けて」

『……………』

レイはエントリープラグ内で静かに考えていた。

前は絶対だったはずの存在の司令やリツコからの言葉が最近薄らいで聞こえるのは何故だろう…と。

ミサトのマンションに住んでからの日々は充実していた。

食事も錠剤を飲むことは無くなったし、何よりも皆といる時間がこの上なく自分を高揚させる。

上手く言葉には出来ないけれど、「楽しい」とはきつとこつこつ
事なんだろう。

と、レイは思った。

プルルル…

冬月が回線を取った。

「…碇、未確認飛行物体が接近中だそうだが、恐らく、第5の使徒だ
ろっ」

「実験中止、初号機と3号機の発進急げ」

「零号機はまだ使わんのか？」

「まだ実戦には耐えられまい」

シズクはケイジに行く前に発令所に寄った。

ミサトにある事を提案するためだ。

「ミサトさん」

「シズク？駄目じゃない、ちゃんと自分の持ち場に着かなきゃ」

「はい、ちょっと提案したいことがあって」

「提案？」

「僕たちが発進する前に、何かで威嚇攻撃出来ませんかね？」

シズクの言葉に軽く顎に手を当てるミサト。

「もしかしたら、使徒が反撃して攻撃方法がわかるかもしれないし、

そしたら対策も練りやすくなるでしょ？」

「確かに…その通りね」

「もし…あいつが一撃必殺のような何かを持っていたら…」

「迂闊にエヴァを出すのは危うい…か…」

ミサトは手を元に戻すと、

「わかったわ、シズクは3号機で待機、シンジくんにもそう伝えて」

「はい」

シズクはそう言うとケイジへと走っていった。

「第1から13までの自動迎撃システムを作動！急いで！！」

「はい」

地面から自動追尾型のミサイル発射装置が盛り上がる。

青いガラス板のような8面体のその使徒ラミエルは
一瞬も止まることなく静かに空中に浮きながらネルフ本部の直上
へと近づく。

「てえ！」

ドドドドドドドドドドドドドドドド！！

ミサイルが一斉に発射される。

ラミエルにミサイルが当たる直前、
肉眼ではつきりと確認出来るA・T・フィールドが展開され全て
が防御された。

同時にラミエルの先端が光る。

「目標から高エネルギー反応！」

シゲルが叫ぶと同時に第1から13までの迎撃システムは融解し

た。

「強力な加粒子砲…ってやつかしら…？」

リツコは溜め息まじりで言った。

「シズクの言うとおりにして正解だったわね、

エヴァが出撃直後にあれを喰らってたらと思うとぞっとするわ」

「目標、シールドのようなもので地面を掘っています」

「場所はこの真上…直接攻撃を仕掛けるつもりですね…」

「しやらくさい、到着予想時刻までどれくらい？」

「明朝午前04時06分54秒には全ての装甲を破ってネルフ本部へ到達する予定です」

「あと8時間あまりか…」

「到達したらあの加粒子砲で100%やられますね」

「エヴァでの近接戦闘も無理…攻守ほぼ共にパーペキ、か」

「白旗でも揚げますか？」

「ナイスアイディア、でもその前にちょっとやってみたいことある

のよね
「

ミサトはそう言つと電話を取った。

「では、作戦を伝えるわ」

ミサトは3人を会議室に集めそう言つた。

「戦自に行つてプロトタイプのパジトロンスナイパーライフルを借ります、

その役はレイ、あなたにやつてもらつわ、その後は防御担当」

「…了解」

「シズクはそれを使って目標の射程距離外からの砲手を担当、シンジくんは防御役よ」

「あの…いいですか、ミサトさん」

シズクが右手を上げる。

「なに？」

「僕を防御担当にしてもらえませんか？」

「…シズク、この配置にはちゃんと根拠があるのよ、シンクロ率が高いほど命中精度はアップするの、

だから尤もシンクロ率の高いシズクが射撃を担当すべきなのよ」

「わかっています、でも、お願いします、ミサトさん」

「自信：ないの？」

「はい、ありません」

シズクの目は真剣だった。

（またこの目…）

この時のシズクの目にはある種のカリスマがある、とミサトは感じた。

肯定しなきゃいけないような、そんな目。

「…わかったわ、シンジくん、砲手担当ね」

「ありがとうございます」

「いい、シンジくん、あなたはテキスト通りにやって、最後に真ん中のマークが揃ったら

スイッチを押せばいいの、あとは機械がやってくれるわ、

あと一度撃つと冷却やヒューズの交換に時間がかかるから…」

「わかりました」

- 深夜 -

双子山のエヴァ搭乗タラップでシズク、シンジ、レイが座っている。

シンジは先ほどの質問の意図をシズクに聞いた。

「ねえ、シズク…なんで防御担当にしたの？」

シズクはそう言ったシンジを見て優しく微笑みながら

「射撃が一発目に必ず当たるとは限らないでしょ？だから防御担当の方が遥かに危険なんだ」

「それをわかってて…自ら防御担当を名乗り出たの？」

「ん…まあ、ね」

シズクは夜空を見上げる。

「シズクは…さ、何のためにエヴァに乗るの？」

「…守りたいものがあるんだ」

「守りたいもの？」

「僕には昔の記憶がないってのは話したよね？」

「うん」

「でも一つだけ覚えてることがある」

シズクは夜空を見上げたまま会話を続ける。

「自分が何も出来ずに大切な人たちが自分の目の前で次々死んでいくんだ…」

「気付いたら、残されたのは自分一人だった…周りには誰もいなくなつて、

そして次に目を覚ましたらシンジくんが目の前にいた」

シズクはぎゅっと右手を握り締める。

「もう…誰も零さない、誰も傷つけない、そのためならどんなことだつてする」

シズクはそう言つとシンジの方を見て微笑む。

「シンジくんが乗るのはやっぱり変わるため？」

「うん…シズクみたいに立派な目標じゃないよね…自己満足のために、僕は乗ってるんだ」

「変わらないよ」

「え？」

「僕の理由だつて結局は自己満足なんだ…」

シンジくんは自分の意思で自分が変わりたいと思って乗っている、それは僕と大差ない立派な理由の一つだよ」

シンジはその言葉を聞いて恥ずかしくなったのか頬を染めてレイの方を向いた。

「あ、綾波は何のために乗ってるの？」

「絆だから…」

「絆…？」

「私には、他に何も無いから…」

「そんなこと、ないよ」

シズクがレイに声をかける。

「他に何も無いなんて悲しいこと言うなよ…レイにはレイにしか出来ない事がある、

それともレイはネルフ以外での生活、例えば学校生活とかマンションでの生活とか…嫌？」

レイはふるふると首を横に振った。

「…嫌、じゃない…新しいマンションでの生活は私を不思議な気持ちにさせてくれる。」

学校も…シズクやヒカリと一緒にいて、悪い感じはしない…」

「だったら、ここ以外にもレイの存在意義はあるってことだよ」

シズクは立ち上がってレイに右手を差し伸べた。

「そろそろ時間だ、行こう、レイ、僕たちの未来のために」

「…ええ」

レイはシズクの手を取って立ち上がる。

「じゃあ、シンジくん、『また後で』」

「あ、うん」

シンジはそれぞれのエヴァに乗る二人を眺める。

そしてパンッと両手で自分の顔を叩き初号機へと向かった。

一発目を外すと最充填まで時間がかかる…外せないってことか…

街の灯が、波が引くように消えていく。

同時に痛いほどの静けさが包み込む第3新東京市。

それは、段々と日本列島全体へと及び、日本は闇へと包まれた。

「ただ今より、23時59分0秒をお伝えします」

- 双子山 14式大型移動指揮車内 -

ピッピッピ、ポーン。

時報が鳴る。

「作戦、60秒前です」

「シンジくん、日本中のエネルギー、あなたに預けるわ」

- エヴァ初号機・エントリープラグ内 -

『頑張ってね、シンジくん』

「はい」

- エヴァ3号機・エントリープラグ内 -

『シールドの強度は恐らく10秒弱、危険は高いわよ』

リツコの声がプラグ内に響く。

「はい…」

・エヴァ 零号機・エントリープラグ内・

『レイ、もしもの時の防御、頼んだわよ』

「……………」

『…レイ？』

「…はい」

わずかに遅れるレイの復唱。

『大丈夫？』

「…問題ありません」

答えながらレイは先ほどのシズクの言葉と右手の感触を思い出していた。

「初号機はどう？」

「エヴァ 初号機、ハーモニクス異常なし、シンクロ率…71・3%です」

「また上がってるじゃないの」

マヤの背後からモニターを覗き込んだリッコが、興奮気味に目を見張る。

「3号機は？」

「エヴァ3号機、シンクロ率、98・7%」

「やはり、シズクちゃんを射撃担当にしておいた方が良かったんじゃないくて？」

「今更言っても、しょうがないでしょう」

リッコは皮肉を込めた視線でミサトを見る。

・エヴァ初号機・エントリープラグ内・

『シンジくん、いけそう？』

「はい、やれるだけのことはやります」

移動指揮車では設備が足りないために、パイロットの表情まではモニターできない。

だが回線を通じて伝わってくるシンジの声に焦りや動揺といった類のものは感じられなかった。

『頼んだわよ、シンジくん、世界の命運はこの一発にかかってるわ』

「…はい」

『もし外しても焦らず行動すること、焦ってシズクやレイを危険に巻き込んだら元も子もないからね』

「…はい、僕も…みんなを守りたいですから…」

『僕「も」？』

「シズクが言ってたんです、エヴァに乗る理由、みんなを守りたいからって…」

『いいこと言うじゃない、じゃあシンジくん、シズクやレイを守ってあげるためにも頼むわよ』

「はい！」

『おっいい返事、さてはシンちゃん、両手に花でウハウハってやつ？』

「な、なに言ってるんですか！こんな時に…！！」

「…問題、なさそうね」

「そうね、だったら早く始めてちょうだい、時間、押してるわよ」

リツコの突っ込みにミサトはげつと唸った。

「第1次接続開始！」

「第1から第803管区まで送電開始」

マコトの声に従って、レバーを押し込むマヤ。

一斉にモニターの第1ラインが点灯する。

各地に配置された変電施設からうなりが聞こえ始める。

「電圧上昇中、加圧域へ」

「全冷却システム、出力最大へ」

低い振動と共に、氷結作用で白く染まっていく冷却装置郡。

「温度安定、問題なし」

「陽電子流入、順調なり」

「第2次接続」

・エヴァ初号機・エントリープラグ内・

『シンジくん』

「なに？シズク」

『ポジトロンライフルを撃つタイミングなんだけど、ちょっと遅
らせた方がいいと思うんだ』

「え？なんで？」

『え、えっと…根拠は無いんだけど…』

「…ごめんシズク、それは出来ないよ、もし遅らせて使徒が攻撃し
てきたら洒落にならないし」

『…そっか、ごめん、変なこと言って』

「うつん」

『もう直ぐ、始まるね』

「うん」

『シンジくん、焦らないでね』

「…うん」

そう言うとシンジはバイザーを降ろす。

『撃鉄、起こして！』

ミサトの指示が飛ぶ。

ガコンツという音と共に撃鉄が起こされる。

バイザーの円を真剣に見つめるシンジ。

円がラミエルを捕らえたその時、ラミエルに変化が起きた。

「目標に高エネルギー反応！」

ドシューウウウウウー！！

ポジトロンライフルとラミエルの加粒子砲がほぼ同時に発射される。

二つの加速粒子は互いに干渉しあい、力場を曲げてラミエルと初号機の横を掠めた。

「外した！」

シンジが焦る。

『第2射、急いで！』

『目標から再び高エネルギー反応！』

『なんですって！？』

ラミエルの先端が光る。

避けられない…！

シンジが目を瞑ったその瞬間。

零号機がその間に割り込んだ。

シールドがみるみる間に融解する。

『レイ！10秒で後退して！』

シズクの声が走る。

『…了解』

シールドが完全に融解したとほぼ同時に零号機の前に3号機が出た。

3号機のシールドが融解を始める。

「ミサトさん！まだですか！」

『もう少し、もう少しかかるわ！』

3号機のシールドが融解し、加粒子砲が3号機にぶつかる。

「シズク！」

3号機と加電子砲がぶつかる光とは別にその間に赤い光の壁が見えた。

「A・T・フィールド…？」

シズクは自身の目の前にフィールドを最大出力で展開して何とか直撃を防いでいた。

「シズクちゃんの高シンクロ率が思わぬ助けになったわね」

リッコの声。

「でも、あの攻撃に長く耐えられるとは思えないわ、第2射、まだなの!？」

ミサトの焦り交じりの声が飛ぶ。

『シズク!』

レイが叫ぶ。

レイは明らかに焦っていた。

自分の心境の変化などもう感じている暇は無かった。

自分も助けに入らなければ。

その思いで一杯になった。

零号機が両手を前にかざす。

3号機の前に、もう一枚、フィールドが展開された。

「二重のA・T・フィールド…それでも時間の問題だわ!まだなの!？」

「…来ました！第7次最終接続、全エネルギー、ポジトロンライフ
ルへ！」

「シンジくん！！」

シンジにミサトの声は届いてなかった。

バイザーサイトに照準表示が出た瞬間、円をラミエルの中心に合わせる。

ガキイン！！

ガキイン！！

硬質ガラスが2枚、割れるような音と共に、使徒の加粒子砲が3号機を襲った。

「A・T・フィールド貫通！」

「シズク！！」

直接、使徒の加粒子砲に晒されるシズクの3号機。

シズクっ！

レイの叫び。

「シンジくん！」

ミサトの声とシンジがトリガーを引くのはほぼ同時だった。

ドキュ…ツツツ！！！！！！

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ラミエルの加粒子砲と平行するように迸るエネルギー弾。

ズキュウ……ツン！！！！！！

その一撃がラミエルのコアごと、8面体の中心を貫いた。

貫通した背後で起こる大爆発。

ラミエルの体は炎をまとわりつかせ、ゆっくりと、軋みながら倒れていく。

歓声が上がった。

「敵シールド、本部の直上にて停止！目標、完全に沈黙しました！
」

ネルフ本部からのシゲルの声が上がるとほぼ同時にミサトは指揮車を飛び出した。

「シズクっ」

レイはラミエルの撃破を確認した瞬間にエントリープラグを排出。体の前面が融解して、ゆっくりと前のめりに倒れこんでいく3号機。

そして、その中にいるであろう、シズク。

レイは3号機の背後に取り付くと、頸部の装甲を力任せに外した。

強制イジェクトされる3号機のエントリープラグが、盛大にＬ・Ｃ・Ｌを放出する。

「綾波、どいて！」

シンジは初号機の手が溶けるのも構わずに、3号機のエントリープラグを素早く、慎重に抜いていく。

静かに、力を込めたら砕け散りそうなエントリープラグをそっと、地面に寝かせる。

エントリープラグを掴んだ右手は完全に融解して3号機のエントリープラグと癒着してしまっていた。

残った左手を使って、プラグの非常ハッチを剥がす。

レイは剥がされたハッチ部分から中を覗き込む。

生まれて初めて、レイは恐怖を感じていた。

「シズクっ！」

エントリープラグ内に上半身を滑り込ませるレイ。

しかし、そこで動きが止まる。

もし、シズクの身に何かあったら…

考えるだけでレイの体に震えが走った。

レイの瞳がぐったりと横たわるシズクを確認する。

シズクを揺り動かそうとして、手を伸ばす。

そこで、また動きが止まった。

このまま、シズクが動かなかつたら…？

そんな考えが頭を過ぎる。

怖い。

……怖い？

初めての感覚だった。

己の死すらも恐怖とは思わなかった。

胸が高鳴る。

「シズク」

レイは精一杯、擦れるような声を絞り出しシズクの名前を呼んだ。

「……シズク」

「……シズク」

「……シズクっ」

繰り返すたびに恐怖が募る。

目を覚まして、とひたすら願いを込めてシズクの名前を呼び続ける。

「……う」

「！」

シズクが小さく呻いた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……は、うつ」

シズクはもう一度呻くと、大きく背を反らして息を吸い込んだ。

黒いプラグスーツが、大きく上下に揺れる。

シズクはゆっくりと目を開けた。

レイは真紅の瞳を見開いて、じっとその様子を見つめていた。

「……………やあ、レイ……泣きそうだよ……勝ったんでしょ、そんな顔しちや……駄目だよ……」

レイは動かない。

「……レイ？」

そのシズクの声と同時にふわっとレイはシズクにしがみついた。

「……レ、レイ!？」

小声でボソボソと何か呟いているレイ。

「え？」

「シズクは、無事…シズクは無事…シズクは無事、しずくは、ぶじ…」

レイ…

シズクはポンとレイの頭に右手を乗せる。

「心配かけたね、ありがとう、レイ」

シズクは微笑んだ。

レイの中に感情があふれ出す。

レイはしがみつく腕に力を込める。

「…良かった、シズク」

一粒の滴が、レイの目から頬を伝って落ちた。

「シズク！綾波！」

シンジが初号機から降りてきて3号機のエントリープラグ内に顔を出す。

「…やったね、シンジくん」

シズクが微笑む。

「シズクと綾波のおかげだよ…それより、無事で良かった」

「…シズク」

「ん？」

「あまり無茶するなよ、僕たちもいるんだから、全てを自分一人で守ろうとしないで…」

僕や綾波はもちろん、ミサトさんたちだってきつと協力してくれる、だから…」

シンジのその言葉をシズクは左手の人差し指で遮った。

「…わかった、ありがとう、肩、貸してくれるかな？」

「…うん」

「みんな！」

手を振って、ヘルメットを被ったミサトが救護班と共に駆けつけてきた。

よほど急いでいたのか、服のあちこちに葉っぱや枝がくっついて
いる。

ちょうど、レイとシンジがシズクに肩を貸してミサトの方に歩いてくるところだった。

「シズク、無事！？」

「…ミサトさん」

ミサトに気付いたシズクは顔を上げて優しい微笑みを浮かべる。

救護班の用意した担架にシズクは乗せられた。

「シズク…前回といい、今回といい、無茶させてごめんなさい」

ミサトが陳謝した。

シズクがもし防御担当じゃなければ、シンジのA・T・フィールドでは一瞬で貫通され、

勝敗がどうなっていたのかはわからない。

結局、シズクの助言通りに動いて、勝利を勝ち取ったのだ。

「ミサトさん…勝ったんだから、そんな顔しないでください」

「…シズク」

「僕は大丈夫ですから」

そう言って微笑む。

ミサトは改めてシズクの「強さ」を再認識した。

それはシンクロ率の高さやエヴァの扱いの上手さという点ではない。

「意思」の強さである。

こんな目に会って、なんでこんな顔で笑えるんだろう…

ミサトは目に熱いものがこみ上げてくるのを堪えるようにレイの方を見る。

レイは、じっとシズクを見ていた。

「ねえ、レイ」

「何？」

「月が…とっても綺麗だよ……」

シズクは担架に仰向けになったまま、夜空を見上げる。

真っ暗な街の中、柔らかい月の光だけが、全ての地上の生物に、優しく降り注いでいた。

決戦！第3新東京市（後書き）

この辺りから原作のレイが好きな方は読むのを止めたほうが懸命かも知れませんww

使徒の存在意義

シンクロテストは今日も行われていた。

「各パイロットのシンクロ率、表示します」

マヤがコンソールを叩く。

「レ…ファースト、シンクロ率、52.6%」

「レイ、記録更新じゃない」

ミサトは感心したように呟いた。

「……………」

リツコは黙ってそれを見つめる。

リツコ、正確に言えばゲンドウはレイに高いシンクロ率を求めている。

最低限エヴァを起動出来るシンクロ率を保っていればそれで良かった。

だが…ここ最近のレイのシンクロ率は「高すぎた」。

やはり…あの子の影響なのかしら…

「サード、シンクロ率、79.4%」

「シンちゃんも流石ね」

「…そうね」

「フォース、シンクロ率、きゅ、98.8%…ハーモニクス、全て正常値です」

「相変わらず飛び抜けてるわね、シズクは」

「第4、第5使徒戦で見たシンクロ率は本物のようね」

リツコが、冷静に評した。

だが心中はそこまで冷静ではなかった。

実戦上でシンクロ率が瞬間的に高い数値をたたき出す、というのはある。

実際、第3使徒戦でシンジが第4使徒戦でシズクがシンクロ率を上げたのは記憶に新しい。

今までのデータを参照しても、シンクロ率が個人の感情に左右されて変動するのは明らかだった。

だが、これは実戦ではない、まして擬似プラグによるテストだ。

そのテストでシンクロ率が100%に近いというのは、ほぼ完全にエヴァと同期できる、ということと等しかった。

リツコが危惧しているは数値ではない。

その数値を叩き出している人物、つまりシズクだ。

シズクにはあまりに謎が多すぎる。

M A G I にも載っていない謎の少女。

シンジと完全に一致するDNA。

そして、エヴァの使い方。

どれを取っても疑いを置ける。

シズクは静かに目を閉じて考え事をしていた。

もちろん、議題はこれから、のことである。

目下、当面の目標はダミーシステム開発の阻止だろう。

恐らく、時が立てば3号機はバルディエルに乗っ取られる。

そしてそうなれば立ち向かうのはシンジとレイ、そしてアスカだ。

自分はその時、3号機のプラグ内にいるであろうはずなので手出しが出来ない。

自分が初号機に乗っているなら何も問題は無いのに……と少し思った。

シズクは今の自分ならばダミーシステムを押さえ込む自信があった。

だが、シンジでは恐らく無理だろう。

そして、きっとダミープラグは起動される。

ゲンドウのシナリオ通りに。

シズクは静かに首を横に振った。

ダミーシステムの完成は絶対阻止。

これは必須条件だ。

自分が初号機に乗ってバルディエル戦を切り抜けたとしてもダミーシステムの完成は
エヴァ量産機の完成を意味する。

ダミーシステムの概要や開発過程はリリスの記憶の混入によって把握していた。

ダミーシステムはリリス（レイ）のパーソナルデータにより、その基礎研究や開発が進められ、

それをゼーレがカヲルのパーソナルデータに応用したにすぎないからだ。

だからこそ、シズクはレイのダミーシステム開発の関与を阻止する必要があった。

とはいえ、シズクはそこまで細かい計算の元、考えているわけではなかった。

純粹にレイを実験材料にされるのが嫌だという思いの方が強かった。

そういえば…最後に…アスカは僕になんて言いたかったのかな…

ふと、そんなことを思い出した。

確かにアスカは最後に「シンジ」と言った。

最後の言葉、あの後紡ぎだされるはずだった言葉は一体なんだっただろう。

そんなことを思っていた。

シズクがそんなことを考えていたその時、マヤがびっくりしたような声を上げる。

「フォース、シンクロ率低下！90…80…70…」

「まさか…精神汚染！？」

ミサトががばっとモニターに目をやる。

「い、いえ、ハーモニクス、神経系統、全て正常です」

「…どういうこと？」

リッコがモニターのシズクの映像を見る。

その瞬間、ピキッとリッコの眉間に青すじがたった。

なんてことは無い、シズクが集中してないだけなのだ。

「シ、シズクちゃん！」

マヤが焦ってシズクに声をかける。

『あ、はい、何でしょう、実験開始しますか？』

そのシズクの声にマヤは思わず右手で顔を覆った。

「シズクちゃん、もうとっくに実験、始まってるんだけど？」

モニター越しのリッコはニッコリと微笑んで見せていた。

それは悪魔が笑っているように見えた。

『す、す、す、すいません!』

「シズクちゃん、実験終わった後、覚悟しなさいね」

『…っ!』

シズクは蛇に睨まれた蛙のような気分になり大きく溜め息をついた。

「また、君に借りが出来たな」

『返すつもりも無いんでしょう』

ゲンドウは電話の男と応対していた。

受話器からは軽薄な感じの男の声が聞こえてくる。

『政府は裏で法的整備を進めていますが、近日中に頓挫の予定です。例の計画の方もこちらで手を打っておきましょっか』

「いや、君の資料を見る限り、問題はなかつた」

ゲンドウは机の上に置かれた書類を眺めながら答える。

『ではシナリオ通りに…と、そうだ』

突然思い出したかのように話を切り出す。

これはこの男得意の話術だった。

『ご子息とフォースは大層逸材らしいですな』

ゲンドウは黙って受話器を耳に当てている。

『ご子息は何の訓練も無しに使徒を撃破、
フォースにいたってはシンクロ率が95を下らないとか』

「…くだらん」

ゲンドウははき捨てるように呟いた。

『いやはや、興味が沸きますね』

「切るぞ」

そう言うつとゲンドウは問答無用に受話器を置いた。

『日本で会うのが楽しみですよ…なん』

プツッ。

男の言葉が、途中で切れる。

ゲンドウは軽くサングラスを直すと違う資料を見た。

資料には「A完成披露式典と書かれていた。

・翌日

器用にフライパンを煽り、卵焼きをひっくり返すシズク。

レイはその様子をじっと見ていた。

「あふあゝあ
」

眠たそうに目を擦りながらミサトが起きてくる。

「おはようございます、ミサトさん
」

「…おはようございます
」

「おはようございます
」

シンジはサラダを盛り付けながら挨拶を済ませる。

ミサトは手をひらひらさせながら洗面台へと向かった。

「いったただっきまーす！」

「いただきます」

「…いただきます」

「はい、召し上がれ」

4人で食卓を囲む。

すっかり見慣れた光景である。

この頃ではレイも日常生活に必要な最低限な挨拶や会話などもするようになっていた。

「あつ、そうだ、今日、学校に行くからよろしくねん」

「あ、今日でしたっけ」

シズクが言う。

「すみません、忙しいのに」

「いいのよん、別に、3人いっぺんに済ませたほうが楽しい」

レイはずっと咀嚼している。

シズクに言われたご飯は良く噛んで食べた方がいい、というのを忠実に守っていた。

「それじゃあ、ミサトさん、いってきます」

「いってきます」

「…いってきます」

「はあい、いってらっしゃーい」

笑顔で見送るミサトに3人はマンションを後にする。

ラミエル戦以来、レイは随分、日常生活に溶け込んでいた。

シズクはぼーっと教室の窓から外を眺めていた。

外にはラミエルの残骸が残っている。

結局使徒って何だろう…。

何のためにやってくるんだろうか。

使徒が目指すのはセントラルドグマのアダム。

正確には存在していないのでリリースだ。

そしてその目的。

それはアダムとの融合。

そしてサードインパクト。

使徒の存在意義がそこに集約されるのならば、
自分は使徒が来るかぎり、戦い続けなければいけない。

殺さなければいけない。

第18使徒である、リリン、つまりは人間が、生き延びるために。

そのことに迷いはない。

ミサトを守るため、レイを守るため、シンジを守るため、そして
アスラを守るため。

そのために使徒を殺す。

必須条件というやつだ。

しかしそれでも決意が鈍る時がある。

第17使徒 - 渚カヲルの存在だ。

カヲルが生きる、つまり使徒が生き残るということは人間の滅びを意味する。

だがカヲルが死ぬ、ということは果たして幸福なのだろうか、と。少なくとも、シズクにとってそれは幸福では無かった。

最後の戦いで戦っていた自分の相手を思い出す。

あれは使徒じゃない、人間の作り出した忌むべき存在。

使徒も結局はゼーレという存在に利用されているだけなのではないだろうか。

裏死海文書というシナリオにそってただ殺されるためだけに存在する。

そう考えると使徒も被害者なような気がしてならなかった。

「シズク」

背後からレイの声がかかる。

「ん」

「…何、考えてるの？」

「…いや、何でもないよ」

「…そう」

「ねえ、レイ…」

「…何？」

「絆ってさ…いいよね」

「……………」

「ええ」

レイは少しだけ微笑むと確かにそれを肯定した。

キーンッ！！

けたたましいブレーキ音を響かせ、ドリフトを決めながら赤い車が学校の駐車場に入ってくる。

ガラスと窓を開けてトウジとケンスケ、そしてシンジや男生徒が顔を出した。

「いらっしやっただえ！ミサトさん！」

「おおっ！」

「何々！シンジのやつあんな美人に保護されてんの！？」

「シズクちゃんや綾波だけじゃ飽き足らず…このっこのっ」

その前に窓を見ていたシズクやその直ぐ傍にいたレイは
むぎゅつと潰されるような形になっていた。

「ちょ…みんな…押さないで」

「…くるしい」

しかし、男子全員ガン無視。

というよりもミサトを見るのに夢中で声が耳に入っていない。
にこやかにこちらに手を振るミサトに手を振って返すシンジ。

レイとシズクも押されながら手を振り返す。

「やっぱ、ミサトさん、ええなあ」

「うんうん」

「あれでネルフの作戦部長やいうのが、またすごいで」

「うんうん」

「…はは」

シンジは聞きながら家での生活態度を見せてやりたいなんてことを思っていた。

J A 暴走

- 翌日 -

「3号機の胸部主体部品はどう？」

「中破とはいえ、前部を見れば大破と変わりありませんから…新作はしますが、追加予算の枠ギリギリですよ」

リツコとマヤの会話。

内容は先の戦闘での3号機の被害状況だ。

一言で言えば芳しくない、である。

しばらくは実戦では使えないだろう。

「ごめん、二人とも…負担増やしちゃうね」

シズクの素直な気持ち。

「なぜ謝るの？シズクは何も悪くない…」

「そうだよ、次使徒が来たって今度は僕と綾波が何とかする、言っただろ、一人で全部守ろうとするなって」

「うん」

二人の気遣いが嬉しく感じた。

「あ、でもさ、これでドイツから式号機が来れば、もっと楽になるんじゃない？」

シズクの何気ない一言。

だが。

この一言に全員の視線がシズクに突き刺さった。

「シズク、よく知ってるわね、ドイツから式号機が来るの、私、言っただけ？」

ミサトが驚いたように言う。

シズクはここでようやく自分が致命的なミスを犯したことに気付いた。

「…誰に聞いたの？」

リツコが冷ややかな表情で聞いてくる。

「あ、その、えっと…そう、加持さんですよ」

「加持？あんたまだあいつと連絡取ってたの！？」

ミサトが激昂した。

「シズクちゃんが加持君と連絡？初耳ね」

「そうなのよ、あのバカ！機密事項までペラペラ喋って！！」

ミサトが今にも壁にパンチを繰り出しそうな勢いで話す。

リツコはふうつと溜め息をつく。

「……ところであれ、予定通り、明日やるそうよ」

と、視線をミサトに送った。

「……わかったわ」

ミサトはその言葉を聞いた途端、冷静さを取り戻し静かに頷く。

シズクはその会話が何を意味するのかを理解した。

JAの完成披露会。

そして、暴走。

シズクの頭の中では明日のスケジュールが事細かに書き換えられていった。

ガラッ。

「おはよう」

「…………おはよう、ございます」

「クワ…ッ」

「……………」

ミサトが朝寝坊することなく、しかも正装で起きてきたのに吃驚したのか

レイは挨拶が遅れ、ペンペンは嘴をポカンと開け、シンジにいたっては挨拶するのすら忘れていた。

ミサトは驚く面々に構わず、リビングを通過する。

「仕事で、旧東京まで行ってくるわ、たぶん帰りは遅いから、夕食は何か出張って食べてて頂戴」

「わかりました」

シズクは落ち着いた様子で淡々と話す。

「あ、ミサトさん」

玄関を出ようとしたミサトにシズクは声をかける。

「何？」

「いえ、また後で」

「?…うん、まあ、行ってくるわ」

シズクの言葉の意味が分からず、ミサトは出かけていった。

- J A 完成記念式典会場 -

ミサトとリツコはその式場にいた。

「…先ほどのご説明ですと、内燃機関を内臓とありますが」

「ええ、本機の大きな特徴です、連続150日間の作戦行動が保障されております」

日本重化学工業の権威であろう人物がリツコの質問に淀みなく答ええた。

「しかし、格闘戦を前提とした陸戦兵器にリアクターを内臓することとは、

安全性の点から見ても、リスクが大き過ぎる気がします」

「五分も動かない決戦兵器よりは、役に立つと思いますよ」

その言葉には、絶対の自信と若干の嘲笑が混じる。

「遠隔操縦では、緊急対処に問題を残します」

「パイロットに負担をかけ、精神汚染を起こすよりは、より人道的とを考えます」

リツコの口調は、次第に熱を帯びてきた。

ミサトにしか気付かない、ごく僅かな変化ではあったが。

大人気ないんだから、とミサトは思った。

しかし、「パイロットに負担をかけない」とい部分ではある意味ミサトはJ Aに賛同もしていた。

「人的制御の問題もあります」

「制御不能に陥り、暴走を許す、危険きわまりない兵器よりは、安全だと思いたすかね」

ミサトはレイの起動実験を思いだす。

パイロットの意思とは無関係に動き、暴走する零号機。

「…人の心などという、曖昧なものに頼っているから、NERVの兵器は暴走を許すのです」

この言葉に、ミサトはカチンと来た。

自分が侮辱されたのではなく、あの3人が侮辱されたように感じただけだ。

「…その結果、国連は莫大な追加予算を迫られ、某国では二万人の餓死者を出そうとしているのです。その上、暴走などという重要な事件の原因が不明とは…。せめて責任者としての責務は全うしてほしいものですな、良かったですねえ、ネルフが超法規的に保護されていて、あなた方は、その責任を取らずに済みますから」

ぎりっ…とミサトから齒軋りの音がした。

「何とおっしゃられようと、NERVの主力兵器以外、あの敵生体は倒せません」

「A・T・フィールドですか？それも、今では時間の問題に過ぎません、何時までもネルフの時代ではありませんよ」

会場に笑いがこたました。

ミサトとリツコは黙ってその笑いを聞き流す。

「……随分と大人しいじゃないミサト、あなたのことから、もっと怒るかと思ってたけど」

控え室で、ミサトに向かってそう言ったのはリッコだ。

「そうね…でもあいつの言う事も、一理あるかなって」

自分がネルフに入ったのは世界を救うためでもパイロットの人権を守るためでもない。

…父の復讐。ただそれだけのためだ。

その点ではあの男の言ったことはおそらく正しい。

そのことがミサトの心に引っかかっていた。

「しおらしいこと言うのね、ミサトラしくもない」

「……………そうかもね」

「自分を自慢し、褒めてもらいたがってる…たいした男じゃないわ」

そう言ってリッコはルージュを付け直す。

「でも…A・T・フィールドまで知られているとはね」

「極秘情報が駄々漏れね」

「…諜報部は何をやってるのかしら」

忌々しげに言うミサトに、リッコは沈黙で答えた。

リツコは知っている。

この後に起こる惨劇を。

あの自意識過剰な男の顔が青ざめるショーが幕を開けることを。

そしてJ Aは暴走する。

…全て、計画通りに。

「…あ、日向君？厚木にナシ付けといたから、シンジくんの初号機F装備でこっちに寄こして」

ミサトは手短に着替えを済ませながら電話を耳に当ててマコトに言った。

「召集に時間かかるかもしれないけど、ウィングキャリアーなら、第3実験場まで直でしょ？」

『あ、いえ…シンジくんなら、ここにいます。他にレイちゃんもシズクちゃんもいますよ』

「へ？」

電話の向こうから聞こえてきた思わぬ返しに、ミサトはきょとんとした。

『ミサトさん、呼びましたか?』

シズクの声だ。

「シ、シズク!? 何でそこにいるの?」

『別に訓練以外の人にネルフに来ちゃいけないってことはないでしょう?』

「え、ま、まあ、そうね、かえって好都合だったわ、じゃシンジくんもそこにいるのね?」

『はい』

「直ぐに第3実験場まで寄越して、じゃね」

「...どうしたの?」

ミサトの電話の様子がおかしかったのが、リツコが声をかける。

リツコはミサトの行動には反対だった。

この事故は、初めから仕組まれたものであり、エヴァの有用性さえ示せば、自動的に停止するようになっていくからだ。

「あー、びっくりした、3人ともネルフにいるんだもの」

「3人とも？」

「ええ…まあ、こっちに来るのが早くなるから助かったけど…
あら、やだ、シズクの言ったこと本当になったじゃない」

「…？」

「今朝玄関出るときにさ、今日は遅くなるって言ったのに
シズクったらまた後でって言うのよ、まさか本当になるなんてね、
ハハハッ」

ミサトは嘘から出た誠みたいな感じで笑ったがリツコは笑わなかった。

「本気ですか…」

「ええ」

「しかし…内部は既に汚染物質が充満している、危険すぎる！」

「うまくいけば、みんな助かります」

ミサトは凜とした瞳を向け男に言い放つ。

「…ここの指揮信号が切られると、ハッチが手動で開きますから」

「これで、リアクター上部から、内部に侵入できます」

ガシャン、という音に振り向くと、別の管制官たちが、ミサトに協力の意思を示していた。

男は諦めたかのように溜め息をつく。

「希望…」

「え？」

「プログラム消去のパスワードだ」

そう言って、ミサトの顔から自分の瞳を外した。

「ありがとう」

「こちらの不始末を押し付けておいて言えた義理じゃないが…頼む」

「…任せなさい」

ミサトは胸を張って答えた。

ウィングキャリアーのキャビンに入ったミサトは驚きに目を見張った。

そこには自分と同じ放射能防護服を着たシズクが立っていた。

「シズク？何考えてるの！？」

「何ってミサトさんと同じですよ、止めるんでしょう？あれを」

そう言いきったシズクの背後で小さくなってるマコトを発見する。

ミサトは思いつきりマコトを睨んだ。

シズクはミサトを片手で制する。

「日向さんは悪くありません、僕が無理を言ったんですから」

「でも…そんな無茶な！」

「無茶なのは…ミサトさんも、でしょう？」

「…なっ…」

「ミサトさん、自分を犠牲にしてもとか、そういうことは考えないでください」

どきつとミサトは自分の心臓が跳ね上がった。

「な、なに言ってるの、私がそんな事考えるわけないでしょう？」

シズクは真顔でじつとミサトを見る。

「ミサトさん」

「な、何？」

「これだけは忘れないください…僕たちは家族です…
残された家族の事を思って…行動してください」

その言葉にミサトは衝撃を受ける。

幼いころ、父と死別したミサトにとってそれは何も言い返せなくなる言葉だった。

「僕にとってもシンジくんにとってももちろんレイにとっても、
もうミサトさんは掛け替えのない存在なんです」

「シズク…」

ミサトは自分の任務というやつを思い出した。

自分の仕事は、自らを傷つけることじゃない。

パイロットたちをサポートして、有利な環境に誘導し、パイロットたちの命を守ること。

それが自分の任務ではないだろうか。

まさか、中学生に教えられるとは、思わなかったわ

「わかったわよ…一緒に行きましょう、でも、あなたも無理は駄目よ」

「わかってます、僕は僕に出来ることを精一杯やるだけですから」

そう言ったシズクを嬉しそうにミサトは見た。

いや、本当に嬉しかった。

「行くわよ!」

「はい!」

『行きます!!』

ミサトの合図と共に、ウィングキャリアーが高度を下げる。

『エヴァ、投下位置!』

「ドッキングアウト!」

初号機の右手に身をかめながらシズクとミサトは降下する。

『投下、確認』

「シンジくん、お願いね!」

『はい』

着地した初号機が前方を暴走するJAに向かって走り出す。

JAの背中を左手で驚掴みにし、右手を背面へと運ぶ。

リアクター上部に取り付く二人。

「シンジくん、A・T・フィールドをこいつの周囲に展開できる？」

シズクの声だ。

『え…？あ、そうか。フィールドで閉じ込めちゃえば…』

バキイインとJAの周囲にA・T・フィールドが展開された。

JAは成す統べなくフィールドに向かって突進をする。

『シズク、ミサトさん…気をつけて！』

そのシンジの言葉にVサインをするシズクとミサト。

「行きましょう」

「はい」

ハッチをこじ開けて二人は奥へと進む。

「…すごいですね」

灼熱の世界に身を投じたシズクが呟く。

「ここで待っててもいいのよ」

「行きますよ」

「じゃ、さっさと終わらせますが、あと3分切ってるわ」

そう言って先へ進む二人。

「…こりゃ、いいダイエットになるわ」

ミサトが放射能防護服の上から汗を拭うような仕草を取った。

「ミサトさん、ここ…」

シズクは、目の前のコンソールを見て、ミサトを促した。

「ナイスよ、シズク」

ミサトはそう言っくとコンソールに取り付いてパスワードを入力する。

カードをスリットに通し、キーボードを叩く。

「キ・ボ・ウ」

「希望」

変換された文字を入力する。

…が。

ピーーーッ

「Error」の表示が出る。

「も、もう一度やるわよ」

ピーーーッ

二度目も結果は同じだった。

「…プログラムが変えてあるんだわ…どうしよつか？」

シズクに心配をかけまいと軽い口調で言いながら、ミサトは焦りを感じていた。

「ミサトさん、これ」

「ん？」

シズクは壁面に突き出している何本もの棒を指差した。

「これ、制御棒ですよ…押したら引っ込むんじゃないですか？」

「ふうん…これを…ね」

パツと見た感じ、女二人で動かせるような代物には見えない。

「引いて駄目なら、押してみな、ってね！」

しかしミサトは棒に取り付くと一気に押し始めた。

シズクもそれに続く。

「ふんぬー!」

「おおおおおおおおおおお！！」

だが棒はピクリとも動かない。

「はあはあはあはあはあ……憎たらしいくらいピクリともしないわね」

「はあはあはあはあ……時間無いですし……やるしかないですよ、奇跡は自分で起こしてこそ、価値があるんでしょう……」

「いいこと言うじゃない、シズク。せえの……」

「ああああああああああああああああ！！！！」

「もう駄目だ、時間がない！」

JAと初号機をモニターで見ていた男が、叫んだ。

「限界まであと0・1!」

「爆発します!!」

「駄目か…!!」

「動けっ…ってのよおおおおおおお!!」

「うおおおおお…おおお!?!」

少しずつ、沈み込んでいた制御棒が急に軽くなり、一気に沈む。

その反動で転がる二人。

瞬間、炉心をモニターしている八角形の図が、正常値を示すグリーンに変わった。

同時にシズクたちのいるリアクター内も、緑色の照明で照らされる。

「やった!内圧、ダウン!!」

「すべて、正常位置!!」

壊れたトーチカ内に、上がる歓声。

管制官たちも喜びと興奮で手を振り上げた。

「
…バカ」

一人、リツコは誰ともなく呟いた。

これじゃ、私だけ悪者みたいじゃない…。

シズクとミサトはコンソールに寄りかかって息を整えていた。

『シズク…ミサトさん、大丈夫ですか!？』

「ええ、なんとかねえ」

「こっちは大丈夫、そっちは？」

『こっちも無事暴走は収まったよ…とりあえず、無事で良かった』
安堵するシンジの声が聞こえて、シズクもミサトもお互いを見て

笑いあつた。

「……奇跡、か」

一通り笑った後、ミサトが呟く。

「奇跡は用意されていたのよ、確かにね……」

「……いいじゃないですか」

シズクは緑色の照明を眩しそうに見ながらそう言った。

「用意されていた結末だったとしても、僕は僕たちのしたことが無駄だったとは思えません」

「……そうね、本当にそうだわ……」

ミサトはぽんつとシズクの頭に手を乗せた。

J A 暴走（後書き）

次でやっとこさアスカが登場です。TVアニメの話だから式波ではなく惣流ですよ。

オーバー・ザ・レインボウ

「ふんふんふん」

長い赤い髪をそよ風にたなびかせて、少女が甲板の上で髪を掻き揚げる。

「随分とご機嫌だな、アスカ」

啞え煙草をした無精ひげの男が赤い髪の少女・アスカを呼ぶ。

「加持さん！」

アスカは声に振り向き満面の笑みを見せる。

「だって、やっと私の腕を見せ付けるときが来たのよ！」

ぱつと青空に向かって手を広げた。

「やれやれ、困ったお姫様だ」

加持はポリポリと頭を掻いて呟いた。

「碇シンジ君や碇シズクちゃんに足元掬われるかも知れないぞ？」

その加持の言葉にピクリと反応するアスカ。

「確か…サードとフォースの名前よね…それ」

「ああ、サードチルドレン、碇シンジ、初搭乗でいきನりの実戦、使徒を撃墜する」

アスカは手を腰に当てふんつと鼻息を荒くした。

「そんなの、マグレに決まってるじゃないですか!」

「そうかな?その時の瞬間シンクロ率は63・4%を記録したって
いう話しだぞ」

「63・4%!?」

アスカは驚きに目を見開いた。

「フォースチルドレンのシズクちゃんに関して言えばもっと凄い」

「へ、へえ〜...」

アスカが少しドキドキしながら耳を傾ける。

「最近のシンクロ率は98%を超えるそうだよ、彼女は」

「きゅ...98%...!?」

今度こそ、アスカはホントに驚いた。

よろよると手すりに手を掴む。

ぼつとでのやつがシンクロ率98%?

嘘でしょ？

私でさえ最高シンクロ率は82.4%だったのに、それを上回るやつがいるっていうの……！？

アスカは少し俯くとニヤリと笑い

「加持さん、二人のポートレート、持ってますか？」

と言った。

「オーバー・ザ・レインボウですか？」

シンジが朝食を摂りながらそう言った。

「そうよん　そこに弐号機パイロットを迎えにいくわけ」

「僕も行くんですか？」

「シンちゃんだけじゃなくシズクも連れて行くつもりよん」

「……私は？」

レイがほっれん草のお浸しに箸を付けようとしてたところを止め

てそう呟いた。

「ごめんね、レイはお留守番、
流石にパイロットが本部に一人もいないってのは不味いっしょ」

「…そう、ですか」

レイは少し残念そうにそう言った。

シズクは胸が高揚していくのがわかった。

アスカ…！

アスカに会える…！

会ったら何て言おうか？

会いたったよ？

いや、こっちでは会ったことないんだからそれはおかしいだろ。

やっぱりはじめまして、がいいかな。

初めの印象が大事だから、優しく笑って。

「ク、…シズク」

「…はっ、はい！？」

「口まで持ってってる目玉焼き、食べないの？」

ミサトに指摘されて、箸が口元で止まってることに気付く。

「あ、食べます食べます」

慌てて口の中に目玉焼きを放り込んだ。

「あ、それとシンちゃん、お友達も連れてきていいわよ」

「はい、それじゃあ、トウジとケンスケでも誘おうかな……」

太平洋上。

オーバー・ザ・レインボウ艦隊直上。

軍用飛行機に乗ったミサト、シンジ、シズク、トウジ、ケンスケの5人は大はしゃぎでその戦艦を覗き込んだ。

「おい、見ろよ！トウジ、セカンドインパクト以前の戦艦だぜ！！」

ケンスケはハンディカム片手に窓に張り付いている。

「ああ、ああ、さよけ」

「楽しくなかったかな？ トウジくん」

「い、いやいや、ごっつい楽しいっすわ！ ミサトさんがいてくれるだけでワシはもう！」

トウジはミサトの気遣いに感激しながらそう言った。

「あれに… 四人目のエヴァのパイロットが…」

「正確には『二人目』よ、シンちゃん」

アスカ…

それぞれの思惑を胸に飛行機は旗艦に着艦した。

甲板へと出る。

強い突風がミサトの髪をたなびかせた。

「ハロー、ミサト！」

その言葉にミサトたちは甲板の上を見あげた。

手を腰に当てて黄色いワンピースを着た赤い髪の少女がそこに立っていた。

アスカだ…！

紛れもなく、そこにいたのはアスカだった。

シズクの頭が真っ白になる。

何も考えられない。

いっぱい、言いたいことがあった。

話したいことがあった。

言葉が出ない。

手足も動かない。

「アスカ！久しぶりね、大きくなったじゃない！」

「背だけじゃなくて他のところも女らしくなったわよ」

甲板から飛び降りてアスカは言う。

ちらりとシンジの方を見る。

「あんたがサード…」

そしてシズクの方へと真っ直ぐ歩いてきた。

「そしてあんたがフォースね、よろしく」

そう言ってアスカは右手を差し出す。

シズクには全てがスローモーションに見えた。

がばっ。

「……………なっ！」

アスカが硬直した。

シズクがアスカに抱きついたのだ。

「…ひくっ…うう…ぐすっ…あう…うあ」

シズクは号泣していた。

アスカを強く強く抱きしめる。

何？何よ！？何なのよ、こいつ…！！？

握手をしようとしてきた手を思いつきり跳ね除けて

ちよっとシンクロ率が高いくらいでいい気になるんじゃないわよ！

エヴァのパイロットの真のエースはこの私なんだからね！！
って言ってやるつもりだった。

そして呆然としたフォースの顔を鼻で笑ってやる。

そんな計画。

ところがどうしたことが。

こいつはいきなり私を抱きしめてきて咽び泣いている。

…なんなの？

私の計画が全てパーじゃない。

…なんなの？

こいつは一体何なの…！？

「あんた…いい加減、離れなさいよ！」

アスカは怒鳴ってシズクを突き飛ばす。

シズクの涙は止まらなかった。

「アスカあ、いきなりシズク泣かせるんじゃないわよ」

ミサトが冗談まじりに言う。

「ち、違うわよ！こいつが勝手に泣き出して…！！」

アスカが慌ててシズクを指さした。

「と、とにかく、私が来たからにはもう大船に乗ったつもりでいなさい、あんたたち！」

そう言っぴしつと5人に指をさす。

…と、突如突風が吹く。

ブワツとアスカのワンピースが盛大にめくれ上がった。

パンツ！パンツ！パンツ！

同時になる3つの平手打ちの音。

「いきなりなにするんや！」

頬を押さえながら怒鳴るトウジ。

「私のパンツ見たでしよ、安いもんよ」

「シンジ…俺、こいつ嫌いだ…」

「僕も…ちょっと心配になってきたかな…」

同じく頬に手を当てながらケンスケとシンジが囁いた。

「…すん…アスカ…よろしく」

ようやく涙を拭いてシズクがそう言った。

「…ふん」

アスカはそっぽを向いて中に入っていった。

「あ…アスカ…待ってよ…！」

後を追うシズク。

「シズク！」

シンジもそれに続く。

「やれやれ、どうなることやら…」

ミサトは溜め息をつきながらそう呟いた。

ケンスケとトウジはぼかんと眺めている。

「大変だなあ、葛城」

後ろから不意に声がかかる。

その声にびくつとして、ミサトは後ろを振り向いた。

「よお」

軽く右手を上げ加持が挨拶をする。

「か…か…か、加持………!?」

ミサトが2、3歩後ずさる。

「な、な、な、なんであんたがここにいるのよ!」

「アスカの随伴さ、聞いてなかったかい？」

迂闊だったわ…十分に予測できる事態だったじゃない…

と、ここで思い出す。

シズクと連絡を取っている、というシズクの言葉を。

ずかずかと加持の方へと歩き出すミサト。

ぐわっと加持の胸倉を掴んだ。

「おいおい、何だよ」

両手をあげて勘弁してくれよといわんばかりの素振りを見せる加持。

「あんた!シズクに余計なこと吹き込むんじゃないわよ!」

「？」

「惚けんじゃないわよ！あんたとシズクが連絡取ってるってことは知ってるんだからね！！」

俺が…？フォースに連絡…？

「こ…恋人とか、勝手にぼざいたらしいじゃない！？」

俺のことを知っていた…？

加持はニヤリと笑い。

「何だ葛城、何か不味かったか？」

「不味いわよ！もうあんたとは何でもないんだから！アスカのこと
も勝手に言って！

機密事項取り扱ってる責任持つてるわけ！？」

アスカのことも知ってたのか…興味深いな…

「悪かった、悪かった、それじゃな、葛城」

ひよいと胸倉に掴まれた手を解き、加持はするりと船の中へと入
っていく。

「ちょっと！どこ行くのよ！！」

「シズクちゃんのところだよ、連絡は取っていたが直に会うのは初

めてだからな」

そう言つと軽く手を上げて加持は軽快に走つていった。

「ちょっと付いてこないでよ！」

アスカがシズクに向かってそう言った。

「いや、でも…」

「デモもストライキも無い！あんたの顔見てるだけでいらいらすんのよー！」

「ちょ…そんな言い方無いじゃないか！」

流石にシンジが止めに入った。

「何よあんた、あんたこいつの肩持つの？」

「そうじゃなくて、同じパイロット同士なんだから、もうちょっと仲良くやろつよ」

はつとアスカが右手を振る。

「同じ？私とあんたたちを同列に見ないで欲しいわね」

「お、いたいた」

と、そこで加持がやってきた。

「あ、加持さん！」

途端に笑顔になるアスカ。

「やあシズクちゃん…久しぶり…とでも言っべきかな…？」

シズクは加持を見る。

「…加持さん」

「まあ、つもる話もあるだろう、ちょっといいかい？」

「…はい」

シズクは静かに頷いた。

「加持さん、何でそんなやつと…！」

アスカが吼える。

「まあ、ちょっと二人だけの秘密ってやつさ、いい子だからアスカたちはここで待ってな」

そう言つと加持とシズクは奥へと歩いていく。

それを見ていたアスカはぷるぷると拳を震わせていた。

「あの…大丈夫？」

シンジがアスカに問う。

ガツとアスカがシンジに食いついた。

「もー！なんなのよ、あいつは！！」

「さて…初めまして…でいいのかな…？」

「…はい、ミサトさんから聞いたんですね」

「ああ…正直、吃驚したけどね」

「ミサトさんには何て…？」

「適当にあしらっておいたよ、別に連絡を取ってないとかそういうことは言っていない」

「…そうですか、すみませんでした」

「別に謝らなくてもいいさ、それより、
何で俺やアスカのことを知っていたのか…教えてくれるかい？」

シズクは俯いた。

「…それは」

沈黙が続く。

やがて加持はニヤツと笑うと。

「…言いたくないなら、無理に言わなくてもいいさ」
と言った。

「…すみません」

「ところでシズクちゃん」

「はい」

「俺は今、ある任務を遂行中だ、心当たりはあるかい？」

「…？」

何のことだ？とシズクは思う。

…が、次の瞬間、思い出した。

この時の加持の任務…記憶が正しければ「アダム」の搬送だ。

それがシズクの顔に出る。

ニヤリと加持が笑う。

「嘘がつけないようだな、君は」

「あ、いや」

「ここで聞いておこうか、俺は『この任務を全うすべき』か？」

「!」

加持はシズクに選択権を委ねたのだ。

つまり、アダム搬送と言う任務を放棄してもいいと、言っているのと同義だ。

シズクはかなり悩んだ。

ここでアダムの搬送が行われなければゲンドウのシナリオが大きく崩れる。

確かにそれは大きい。

だが、それは同時に加持の命が危ないことを意味していた。

しばしの沈黙。

そして結論が出る。

「…何の任務か知りませんが、僕に加持さんを止める権利はありませんよ」

とつたのは加持の命。

もう、あんな顔のミサトは見たくない。

ゲンドウを食い止めることは後でも出来るだろう。

そう判断しての結論だった。

加持はその答えを聞くと。

「そうか、わかった…」

加持はそう言うと、煙草に火を点けた。

「…と、わかってると思うがこのことは他言しないでくれよ」

「わかっています」

「俺もこれからは本部に常駐することになる…」と言っても君のことだ、

既に知っていると思うがね、まあ何か困ったことが会ったら何時でも訪ねてくるといい」

そう言っ て加持はとりだしたメモ帳にサラサラと地図を書き、シズクに渡した。

「さ、そろそろ行くか、わかってると思うが君もあのお姫様には手を焼くと思うぞ？」

「はい」

そう言っ とシズクは微笑んで加持の後を追っ た。

「よう、アスカ、お待たせ」

加持が軽く手を上げてアスカに声をかける。

「加持さん！」

アスカが加持に笑顔を向けた、が直ぐ後ろのシズクに気付いて直ぐに不機嫌な顔になった。

「おいおい、同じパイロットなんだ、仲良くしろよ」

加持はポリポリと頭を掻く。

「…加持さんがそう言っ たら…」

アスカがそう言ってシズクの前に立つ。

「まあ、足引つ張らない程度にやりなさいよね」

「うん」

ズ…ズウウウウン…

船が揺れる。

「な、何!？」

「地震!？」

アスカとシンジが壁に手を付いて同時に叫ぶ。

「いや…ここは海の上だぞ…」

加持が目を細めてそう言った。

「…使徒だ」

シズクが呟く。

「使徒ですって!？何でこんなところに…」

アスカがそう言って顎に手をやる。

「…加持さん、行ってください、ここは戦場になります」

「お言葉に甘えさせてもらっよ」

加持はさわやかにそう言うつと颯爽と廊下を走っていった。

「シズク…この揺れ、本当に使徒なの!？」

シンジの問い。

「多分…狙いは弑号機だ」

シズクはこう言ったが使徒の本当の狙いは違う。

加持が持つアダムだ。

それはシズクも分かっていた。

だから加持を先に行かせた。

アスカがニヤリと笑う。

「どちらにしても、これはチャンスよね」

「え？」

「あんたたち、ちょっと来なさい!」

そう言うつとアスカは二人の手を取り弑号機がある場所へと走り出した。

トリプルエントリー

アスカに連れられた二人はエヴァ弐号機がある最深部へと辿り着く。

アスカは弐号機の目の前でくると振り返り、手をかざした。

「どう、これが私のエヴァンゲリオン弐号機、

プロトタイプな零号機や初号機とも悪趣味なカラーリングの3号機とも違う、

正真正銘のエヴァンゲリオンよ!」

「…赤いんだ」

シンジがポツリと呟く。

4つの目がこちらを見下ろす。

アスカがエントリープラグ内に入りごそごそと何かをしていた。

ばさつとシンジとシズクに弐号機と同カラーのプラグスーツを渡す。

「…何?これ?」

「何って、着るのよ、あんたたちが」

さも当然と、いうようにアスカが言った。

「ええええ！？これ、女物のプラグスーツじゃない！それに着るっ
てもしかして…」

「そう、あんたたち、感激しなさい、私の華麗な操縦テクニクを
直に見せてあげるわ」

「…無茶苦茶だよ！」

変わってないなあ、本当に

シンジは慌てふためき、シズクは変わらないアスカの姿に思わず
苦笑する。

「ぶつぶつ、言わないでさっさと着替えなさい！」

「わかったよ」

そう言つとシンジは上着のボタンに手をかけようとする。

その瞬間、アスカの鉄拳が飛んできた。

「あんたバカア！？どこに女の子の目の前で着替え始める男がいる
のよ！」

後ろの方行つて着替えなさいよ！！」

「い、ごめん」

シンジは鼻を押さえながらすごすごと式号機の後ろへと回り込ん
だ。

「ほら、あんたも着替えて」

「あ、うん」

シズクも赤いプラグスーツに着替えを始める。

「どう？私のプラグスーツは！」

「ちょっと…胸がゆるい、かな」

当然！

ちょっと得意気になるアスカ。

「あと腰回りも、少しゆるいかな」

ははは…と苦笑まじりに言うシズク。

ムカチン！

やっぱこいつムカつくわ…

アスカは心の中で呟いた。

「ちょっとサード！あんたも早く着替えなさいよ！」

ムカムカしたまま、ずかずかと式号機の後ろへと行くアスカ。

「ちょ…待ってよ！」

アスカがシンジと対面したとき、シンジは丁度スポンを下ろしたところだった。

「きゃあああああああああああ！！」

「うあああああああああああ！！」

「な、な、な、何て格好してんのよ！あんた！！」

「き、君がこっちに来たんだろ！！」

アスカは真っ赤になってシズクの元へとダッシュした。

「早く着替えなさいよ！バカ！！」

…もうお婿に行けない…

シンジは泣きながらプラグスーツに身を包んだ。

ドオ…オオオオオオオオン！！

再び揺れる、艦内。

「近いわね」

アスカが呟いた。

「ほら、あんたたち早く乗りなさい」

蹴るように二人をエントリープラグへと押し込む。

続けてアスカも滑り込むようにプラグ内へ入った。

「…思考言語に支障？あんたたち、ちゃんとドイツ語で考えなさいよっ！」

「え？わ、わかったよ…バ、バームクーヘン？」

「ごめん、ドイツ語はちょっとわからないよ」

「もう！使えないやつらね！いいわ、思考言語を日本語に切り替え！エヴァ貳号機起動！」

七色の光がエントリープラグ内を包み込み、四つの目が光る。

・オーバー・ザ・レインボウ旗艦、管制室・

「二番、三番艦、撃沈！」

「標的、止まりません！」

どたばたと動き回るクルー。

「何をやっ取る！さっさと倒さんか！」

艦長と思われしき男が叫ぶ。

コン、コンと開いてる扉からノックが響いた。

「ちわー、ネルフですが未確認の敵生命体についての情報いりませんかー？」

ミサトが軽い調子で言う。

「ネルフなんぞに用は無い！太平洋上にいる以上、あれは我々の管轄下だ！余計な手出しはするな！！」

「四番館！撃沈！」

「おのれ！何としても落とせ！！持てる戦力を全てぶつけろ…！」

「…無駄なことを」

ミサトはそう言っではき捨てた。

「…何だと！？」

「今を持ってここはネルフの管理下に置きます、艦長には私の命令に従ってもらいます」

「ふ…ざけるな！貴様は子供のお守りでもしている…！」

「あのねえ！そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

早く式号機を発進させろって言ってるのよ！！このまま全滅してもいいの！！？」

ミサトが凄む。

艦長はぐつとにがむしを噛んだ。

「やっぱりエヴァじゃないとなあ…」

「せやなあ…こない骨董品じゃらちあかんで」

ミサトの後ろにいたトウジとケンスケが呟いた。

『葛城い』

スピーカーから流れる加持の声。

「加持！どこにいのよ！あんたもこの頑固親父説得すんの手伝いなさいよ！」

『悪いなあ、急用あるんで俺先行くわ』

「はっ？」

ぱつと窓の外を見る。

戦闘機に乗った加持がコクピット後ろ座席より軽く手を振った。

『やってくれ』

『はい』

そう言つと加持を乗せた戦闘機は急加速して飛び去った。

「逃げやがったわね…あの野郎おおお!!!!」

べつたりと窓に両手と頬を貼り付かせてミサトは叫んだ。

「格納庫よりエネルギー反応!」

「なんだと!?!」

クルーと艦長の声に振り返るミサト。

ドンッ!

という音と共に式号機が空中へと飛び出した。

「なんということを…」

艦長が呟く。

「ナイス！アスカ！！」

『ミサトさん、ケーブルの用意を！！』

シズクの声が通信から聞こえる。

「シズクも乗ってるの！？」

『シンジくんも一緒です、それより早くしないと内部電源が』

『ちよつとあんた、私を置いて勝手に話してるんじゃないわよ！』

「OK、OK、わかったから、喧嘩するんじゃないわよ、艦長、アンビリカブルケーブルの用意を」

「…しかし」

「あんたねえ！死んだら誇りもプライドも糞も無いでしょうが！！さつさと出しなさいっつってんのよ！！」

「……わかった」

諦めたかのように艦長は呟いた。

「…ケーブルは八番艦だ」

「アスカ、聞こえた？八番艦に急いで」

『了解！！』

そう言うとアスカが操縦桿に手を置いた。

式号機が空中を跳ぶ。

…改めてみると…アスカの操縦って本当に優雅というか…凄いな…

シズクは感心する。

幼いころから特殊訓練を受けてきたアスカ。

前回と合わせても一年たらずの経験のシズク。

シンクロ率に差はあれど、シズクにアスカの動きは真似出来なかった。

『式号機、着艦しまーす!!』

ドンッ!と八番艦の甲板に着地する式号機。

八番艦が大きく揺れる。

『アスカ…来るよ!』

『ふん!』

瞬時にカッター式のプログナイフを装備して海中から飛び出した使徒ガギエルを迎え撃つ。

式号機目掛けて飛んで来たガギエルを掻い潜りながら式号機はガギエルの腹を引き裂いた。

ドッボオオオオオオン！

そのまま海へと落ちるガギエル。

『どんなもんよ！』

『今のうちにケーブルを』

『わかってるわよ！一々口を出さないで！』

式号機は背中にケーブルを差し込んだ。

内部電源から外部供給へと切り替わり、エントリープラグ内のカ
ウントダウンが止まる。

『ケーブル、装着！』

『また来た！』

ガギエルが大口を開けて式号機を襲った。

『こんのおおおおおおおおお！！』

八番艦から突き落とされながらそのままガギエルの口の横に式号
機は蹴りを入れる。

ドボオン！

ドボオン！

式号機とガギエルは海へと落ちた。

「アスカ、装備は…？」

「標準B型装備よ、いいハンデじゃない」

ゴポポポッと大きく口を開けるガギエル。

その奥にうつすらと赤い球体が見える。

「コアだ…」

シンジが呟いた。

「あれがあいつの弱点ってわけね…」

アスカが鼻の下を人差し指で擦る。

「…！！」「」

次の瞬間ガギエルは海上の数十倍のスピードで式号機に喰い付いて来た。

ガツと口の上下を両手で押さえガードする弐号機。

だがそのまま彼方まで運ばれるかの勢いでガギエルはスピードを緩めない。

八番艦のケーブルはまるでサメに引つ張られた釣り糸のようにぐんぐんと伸びていく。

『アスカ！大丈夫！？』

ミサトの声がプラグ内に響く。

「こんなの…どうってことないわよ！」

操縦桿の手に力を込める。

その上からそつとシズクが手を置いた。

「あんた、何すんのよ！？」

「僕も弐号機にシンクロする」

アスカはその言葉にげつと唸った。

「弐号機は私のエヴァよ！邪魔しないで！！」

「わかってる、僕はあくまでシンクロを補助するだけ、

実際に弐号機を動かせるのはこの世にアスカただ一人だよ」

シズクの言葉に僅かに沈黙した後、ニヤリと笑い、

「自分の立場ってのがわかってんじゃない…だったらサードもやんなさいよ！」

「う、うん」

シンジは慌ててアスカの手の上に自分の手を置いた。

「ミサトさん、使徒の口の中にコアを見つけました…作戦があるんですけど…」

『…言って見なさい』

ミサトの静かな声が響く。

「弐号機の力でこの使徒の口をこじ開けます、同時にA・T・フィールドを中和、その後、戦艦二隻による特攻、零射程の砲撃でコアを一気に砕きます」

シズクは淡々と言った。

『奇遇ね、シズク、私も丁度同じことを思ってたところよ』

『戦艦二隻を無駄にしるというのか！？』

艦長の声がプラグ内の3人とミサトの耳を劈いた。

『どのみちこのままじゃ全滅するのよ、それしか方法はないわ』

『…くっ、わかった…五番艦、六番艦総員退避急げ！』

『アスカ、約3分かかるわ、それまでに使徒の口こじ開けられる？』

「愚問ね、見てらっしゃい！」

そう言つと3人は手に力を込める。

「いいあんたたち！余計なこと考えるんじゃないわよ！！」

「うん」

「わかつてる…」

（開け開け開け開け開け開け！）

（開け開け開け開け開け開け！）

（開け開け開け開け開け開け！）

3人の心が一つに混ざり合い、式号機の瞳が赤く光る。

序々にガギエルの口が開いていく。

近づく二隻の戦艦。

(開けええええええええええ!!)

式号機の瞳の光の量が上がった。

フオオオオオオオオオオオオ！！！！

ガバツとガギエルの口が上下に開く。

「アスカ、フィールド中和！」

「命令すんじゃないわよ!!」

位相空間が反転される。

そして、二隻の戦艦がガギエルの口へと突っ込んだ。

「脱出！」

アスカが叫ぶと弐号機はガギエルの口の上を蹴り、海上へと出る。

次の瞬間、ガギエルの体が大きく膨らんだ。

ドツゴオオオオオオオオオオオオ……ン

十字の光が波しぶきと共に上がる。

『お疲れ様』

ミサトの声がプラグ内に聞こえた。

「ま、私にかかればあんなやつ、こんなもんよ」

八番艦に着艦した式号機の中でアスカがえへんと威張った。

「どう？ サードにフォース、私の実力がナンバーワンだってことわかった！？」

「流石だよ」

シズクはそう言ってニッコリと微笑む。

「うん： 空中でのエヴァの操り方とか、使徒の攻撃の避け方とか： 凄かった」

シンジは心底感心したように呟いた。

その二人の言葉にアスカは満足気に笑うと、

「まあ、あんたたちも良くやったわよ、これから精々、私の足を引く張らないことね！」

そう言つとエントリープラグを放出する。

出迎えに来るミサトたち。

そして、女物のプラグスーツを着たシンジは
トウジとケンスケに思いっきり笑われたのだった。

トリプルエントリー（後書き）

ほぼ原作通り…だと思います。

確認してないおぼろげな記憶だけで書くところいう文章になる悪い見本w

結局、あの艦隊って何隻いたんでしょうねww

集うチルドレン

S o u r y u A s u k a L a n g r a y

そうチョークで書かれた黒板を背に、自信に満ちた笑みを浮かべる赤い髪の少女。

「よろしく!」

そう言ってアスカは手を腰にやり胸を張った。

「おいおい、よりにもよって同じクラスかいな…」

「顔はいいんだけどなあ…性格がなあ…」

このぼやきはトウジとケンスケである。

「二人とも…そんなこと言ったら悪いよ…」

やはり小声でシンジが言う。

机に向かう最中でアスカが三人に気付いた。

「あら三バカじゃない、同じクラスだったの」

そう言つとふんつと顔をそらして自分の席へと付いた。

「よろしくね、惣流さん」

そう言って微笑むのはヒカリだ。

「アスカでいいわ、こちらこそよろしく」

「じゃあ、私のこともヒカリでいいよ」

アスカは机に身を乗り出すと小声でヒカリに問う。

「ところで…フォース…ヒカリの隣の席のやつって、どんなやつ？」

「え？ああ、シズク？ちょっと言葉使い変わってるけど、とても優しくていい子よ」

「ふん、じゃあさ…」

と言ってちらりとアスカはレイの方を見た。

「あいつに瓜二つなあれは？」

「ああ？レイ？そっくりでしょう、あの二人、
この世には同じ顔した人が三人いるっていうけど、ホントなのか
もね」

「顔はどうでもいいの、中身よ中身」

「いい子よ、とっても、感情を外に出すのが苦手だけど…きっと純
粋な子」

「ふん」

アスカは授業内容をパソコンに記録しているレイを見ながらそう呟いた。

「ファースト！」

放課後、中庭のベンチで読書をしていたレイに仁王立ちで話しかけるアスカ。

「セカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーよ、まあ同じチルドレン同士仲良くやりましょ」

レイはその言葉を聞くとパタンと本を閉じすつと立ち上がった。

そして右手を差し出す。

「なによ…？」

「…握手」

「は、あ、ああ、握手ね、OK」

ガシッと思いつきりレイの右手を握り返すアスカ。

アスカは渾身の力を込めているがレイは顔色一つ変えず握り返している。

「…………頼りにしてるわ」

「当然よ、大船に乗った気持ちでいなさい、あんたの出番なんて無くしてあげるんだから」

「…………ええ」

「じゃあね」

そう言つとアスカとレイは別れた。

思つてたより、素直なやつね……
ドイツにいた頃の報告じゃもつと取っ付き難いやつだつて聞いてたのに

「…………あ、待つて」

不意に声がかかる。

「何よ？」

「あなた……何故髪が金色なの？」

「は？ああ、この髪？私はドイツと日本のクォーターなの、だからドイツ語と日本語も喋れるし、それにどう？この日本人離れたプロポーション！」

アスカはレイの胸をちらりと見て勝ち誇つたように胸を張る。

「……個人差だから」

むかつ。

やっぱりむかつくやつかも…

「でも赤木博士の髪も金色…でも赤城博士は日本人だわ」

「あんたバカあ！？リツコは染めてんの！私のは地の色よっ！！」

「そう…赤城博士の金色はニセモノ…」

「へ、変な子ね、あんたって…」

納得して頷いているレイに、アスカは不思議なものを見たように首をかしげる。

「でも…綺麗な色」

「ふふ、そうでしょ、まあ私には劣るけどあんたのその水色の髪も中々のもんよ」

「…そう」

「それにその目、珍しいわね、日本人で紅い目って」

「珍しい…変？」

ぱちくりと瞬きをしてアスカを見る。

「べ、別に変じゃないわよ」

「…そう」

アスカのレイに関する第一印象、よく分らない子。

こうしてレイとアスカの第一次接触はどちらかと言うと無難に終わった。

・ネルフ本部、司令室・

「……遅かったな、加持一尉」

「苦情は使徒に言っただけで欲しかったですなあ、あそこで襲われるなんて聞いてませんでした」

加持はおどけて肩をすくめると、皮肉な口調で、
持っていたトランクを大きなデスクの上に置く。

「教えても教えなくても君がそれくらいで動じるタマではあるまい」

「さて、どうですか、…そういうば、副指令をお見かけしませんか」

「冬月は上だ」

「また、予算会議ですか、ご苦労が忍ばれますな」

少し、皮肉を込めて、加持は笑う。

「それが仕事だからな、それで、君の仕事の方はどうなのかね」

「問題ありませんよ」

加持はそう言うパスワードを入力し、トランクのロックを解除した。

パシュッ……。

ガコ。

「硬化ベークライトで固めてあります…が、間違いなく生きています」

ゲンドウは四角い『物』に囲まれた胎児のようなものを見てサンガラスのズレを直す。

「これが、人類補完計画の要、ですか」

「そうだ」

ゲンドウが微かに微笑む。

加持は表情を消したまま、その微笑みを見る。

……違うな。

かつて、ゼーレの計画と碇ゲンドウの存在を知ったときに感じた、あの好奇心が薄れている。

今、加持の脳裏に浮かぶのは一人の少女の姿。

彼女の目的、正体、そしてあの容姿、全てが謎だ。

しかしその点ではゲンドウもほぼ同じである。

だが自分が惹かれるのはシズクの方だ。

彼女の行動は、加持に奇妙な高揚感を覚えさせた。

初めて、この稼業に足を踏み入れたときの、何が起こるかわからない、あの高揚感。

加持の興味の対象はゲンドウやゼーレよりもシズクに傾いていた。

< 0 0 - 1 s t C h i l d r e n >

< 0 1 - 3 r d C h i l d r e n >

< 0 2 - 4 t h C h i l d r e n >

< 0 3 - 2 n d C h i l d r e n >

四つの擬似プラグが、モニターに映っている。

アスカにとっては、日本では初めてのシンクロテストである。

「流石、シズクね」

02とナンバーの振られたデータの数値を見てミサトは呟く。

シズクのシンクロ率は96・5%を指していた。

「…そうね、これで3号機が修理中というのが残念だわ、折角色々試したいのに」

「まだ、時間かかるの?」

「あと、3週間は見ないとね」

リツコはコーヒーを啜って答えた。

作業工程は遅々として進んでなかった。主な理由としては予算の問題だ。

「予算を出し惜しんで自分の首を絞めるのでは本末転倒だわ」

「…まったく、委員会は何考えてんのかしらね」

リッコに全くだ、と賛同して頷くミサト。

「…人はエヴァのみにて生きるにあらず、ね」

「まあでも、弐号機とアスカも来た事だし、少しは楽になるわよ、レイもいるし」

「そうね…」

リッコはコーヒーを飲み干すと台の上に置く。

「コーヒー、おかわり入れてくる？」

ミサトがリッコに聞く。

「…ミサトが入れるの？」

「そうよ？なんで？」

「…遠慮しておくわ」

リッコの遠慮ない一言にミサトはげつと唸った。

「で、アスカはどうなの？」

ミサトは03とナンバーを振られたデータを見た。

アスカのシンクロ率は84・1%を記録していた。

「流石にやるわね」

「そうね、確かに噂通りの実力だわ」

「素っ気無い返事ねえ」

「そんなことないわよ、ほら、こっちのデータを見て」

「ん？…ああ、これってドイツ支部の」

「そうよ、これまでのアスカの最高値は82・4%、平均で言えば70%弱といったあたりね」

リツコはそう言いながらアスカのシンクロ率の推移のグラフをめくる。

30%あたりから、上昇を続けたグラフは70%を越えたあたりでほぼ横這いになっている。

「へえ…新記録ってわけか」

「ええ…」

「これってさ、この前の3人での同時シンクロの影響かしら」

「さあね、そこまでは分からないわ、これからの数値を見てみないとね」

「シンちゃんは、お、78%超え…シンちゃんの成長の早さは驚くばかりね」

「そうね、あの子には興味が尽きないわ」

「おっ、やってるな」

背後のドアが開いて、気楽そうな声がミサトとリツコの耳に届いた。

「ちょっと加持、ここは部外者は立ち入り禁止よ」

「固いこというなよ、今日はシンクロテストだけなんだろう？」

「なんであんたがそんなこと知ってんのよ」

「アスカに聞いたのさ、見に来ていつてうるさくてね」

そう言いながらモニターを見る加持。

「これが結果か？ほお…流石、シズクちゃんとシンジ君は噂に違わず凄いな、アスカも上がってるじゃないか」

「こらっ！勝手に見るんじゃないわよ！！」

拳は振り上げるミサトに加持はひょいとかわすと両手を目の前に上げた。

「おゝ怖っ、わかったよ、…にしても、レイちゃんは三人に比べると低いな」

レイの数値は50%を少し超えたあたりで止まっていた。

レイのことはリッコにも気になる点の一つだった。

加持は低いと言ったシンクロ率。

だがリッコに言わせるとこれは高いのだ。

リッコやゲンドウはレイに高シンクロ率を求めている。

最低限、起動レベルを確保している40%前後のシンクロ率。

それがレイという適正素材に求められる数値だ。

ところが、現在はどうか。

高すぎるというわけではないが、レイのシンクロ率は確かに上昇傾向にある。

ハーモニクスの方を見ると揺れ幅が確認できた。

ハーモニクスは安定を示す数値だ。

それが揺れている…つまりレイに感情が芽生えている、ということになるのではなからうか。

「どうかしたかい？ 深刻な顔して」

「！」

いきなり耳元で囁かれて、リツコはびくつと体を震わせた。

「眉間に皺なんか寄せてると、折角の美人が台無しだぞ」

「あら、お世辞…？」

「俺は、本当のことしか言わないんだ」

「かぁーじいー」

二人の会話に怒りの波動をゴゴゴゴと燃やし睨むミサト。

「ふふ…恐いお姉さんが睨んでるわよ」

「おっと…」

加持はそう言うとリツコから離れる。

「ねえ、加持君」

「なんだい、リツちゃん」

「…あの子たち、どう思う?。」

「そうだな…みんな良くやってるんじゃないか?まだ14歳なのにな」

リツコは自分の問いに違う答えをわざとぶつけて来た様な加持の答えに僅かにイラついた。

「あなたから見て、シズクちゃんはどうか?。」

目標を絞り、簡潔に質問する。

「そうだなあ…」

加持は顎を撫でてしばらく考えたような素振りを見せたあと、

「とてもいい子なんじゃないかな」

と、答えた。

「噂通りの実力、見させてもらったわ」

シャワーを浴びながら隣で同じくシャワーを浴びているシズクにアスカが言った。

「……うん」

シズクはアスカの声から明らかに不機嫌なのを感じ取っていた。

シャムシエル戦でシンクロ率を上げた時からこうなることは予想できていた。

だが、シズクはこれで良かったと思っている。

実戦ではシンクロ率を落として戦うなんて悠長なことは言ってもらえない。

第一、シンクロ率をわざと落として手を抜いて戦って、アスカは喜ぶだろうか？

アスカは、他人、それ以上にアスカ自身が思っている以上に多感で敏感な少女だ。

シズクがもし手を抜けば、それに気付くのも遅くない。

そうなった時、アスカのプライドを考えると結末がどうなるかの想像はそれほど難しいものではなかった。

だからこそ、シズクは初めから大きな差がついたとしても手は抜くべきではないと考えた。

実際のところ、シズクにとってシンクロ率

90%台というのは、それほど難しいことではない。

その気になれば100%だろうが200%だろうが、

エヴァに取り込まれる危険を承知でいけば400%にだって持ち上げることができる。

だが100%を超えると安定性に欠ける。

早い話が疲れるのだ。

戦闘の瞬間ならば兎も角として、テスト中に100%以上を維持するというのは無意味である。

だからシズクはテスト中になるべく100%に近い数値で出来るだけ長くいれるようにしている。

これはやがて来るであろう長期戦にそなえての備えだ。

「…まあ、いいわ」

シズクが黙っているのを横にアスカがキュツとシャワーの蛇口を捻る。

「見てなさいよ！絶対にあんたに追いついて追い越してやるんだからっ！」

そう言うと、アスカはシャワールームを出た。

シズクはシャワーのお湯に全身を浴びせながら

はつきり怒るってのいうのは、そんなに悪い傾向じゃないよな、と思った。

しかし、このままで良いわけではない。

このままアスカとの差が縮まらなければやがてアスカの精神は不安定になり、そして…。

それだけは何としても避けなければならない。

方法は二つ、アスカのシンクロ率をシズクのレベルまで、どうにかして底上げする方法。

もう一つが、アスカのエヴァに乗るといふ過剰な執着を取り払うか、だ。

前者の方法は根本的な解決になり得ない。

現在、アスカの精神的骨格はエヴァに乗ることが基盤となって形成されている。

それは幼い頃の壊れた母親との記憶。

エヴァパイロットが持つ、トラウマの記憶。

アスカの心をなんとかして解き放ってやれば…。

シズクはそう考えると、キュツと蛇口を捻りお湯を止めた。

敗北

- 数日後 -

シズクはぼんやりと窓の外を眺めていた。

第7使徒イスラフェル、前回の歴史通りに事が進んでいるならば、アスカが来日して数日後、おそらく今日だ。

細かいことは覚えていないが、確かあの時は学校にいるときに非常召集を受けた気がする。

コアを二つ持ち、分離、合体能力を持つ使徒、イスラフェル。

こいつの撃退方法をシズクは模索していた。

恐らく、今回の出撃メンバーはシンジ、アスカ、レイの三人になる。

3号機は修理中で使えないためだ。

と、なるとシンジに先行させて分離前の使徒の二つのコアを同時に叩く、というのはどうだろう？

だが大きな疑問が残る。

分離前の使徒への攻撃、というのが果たして有効なのか、という点だ。

そしてそれ以上の大問題があった。

役割分担の見解である。

どう考えてもアスカが前衛を勤めようとするに違いない。

ふう…と軽く溜め息を漏らす。

やはり、シンジとアスカでユニゾンをやってもらうしかないのだからか。

結局のところシズクの思考はそこに落ち着いた。

アスカとシンジがどれだけ心を通わせられるのか、が焦点になる…が

そこは自分がどんな手を使ってもフォローする。

ただユニゾンに持ち込むとなると、一度敗北しなければいけない。

つまり三人に危険な目に会え、と言ってるに等しかった。

それがシズクの胸を決る。

3号機が使えるなら…自分一人の単独出撃という手もあるのだが、まあ恐らくミサトが許可しないだろう。

そこで、四人の携帯電話が一斉に鳴る。

来たか、とシズクが思うと同時に鞆を取り、携帯を確認もせず教室を飛び出す。

「シズク…？」

ヒカリが不思議そうに呟いた。

「あのバカっ、勝手に先行してんじゃないわよ！」

アスカが携帯を確認すると、続いて教室を飛び出した。

レイとシンジも続く。

「また…化け物がきたんかな…」

トウジの呟きにクラス中が唾を飲んだ。

- ネルフ本部 -

「3号機は凍結中のためシズクは今回お留守番ね」

ミサトの声が響く。

「はい」

「ふふ、残念だったわね、フォース、見せ場が作れなくて」

可笑しそうに笑うアスカ。

「まあ、安心なさいよ、私がちょいといと片付けてやるから、あんたは特等席で私の日本デビュー戦を見物してなさい」

「…うん」

アスカにイスラフェルの特徴を伝えたかったがぐつと堪えた。

「あの…ミサトさん、僕がレイの代わりに零号機で、というのは無理ですかね」

シズクの発言にミサトにリツコ、アスカやシンジ、当人であるレイも驚いた。

「それは流石に無理よ…、ちゃんとパイロットはいるんだし」

「シズクちゃん、何故そんなに戦いたいなの？」

「そ、それは…」

今回の戦闘では使徒を倒せないから、とは言えない。

シズクは言葉に詰まった。

「シズク…無理はしないで、私が…頑張るから」

「うん」

「ファーストの出番なんか無いわよ！私が一人で出れば済むことだわ！」

「…何故？皆でやった方が勝率は高くなる」

「足手まといがいた方が勝率は低くなるのよ！」

「…私は足手まとい？」

レイが少しうな垂れるとそこにシズクが割って入った。

「レイは足手まといなんかじゃない」

「何よ、フォース、あんたファーストの肩を持つわけ？」

「そうじゃない、けどアスカの言い方は良くない、皆、使徒を倒したいだけなんだ」

「……ああ！そう！わかったわよ、勝手にすればいいでしょ！」

女の子三人の修羅場にシンジはただオドオドと見ていることしか出来なかった。

ズカズカとケイジの方に移動するアスカ。

それに続いて移動するレイ。

シンジもそれに続こうとしたその時、シズクに呼び止められた。

「シンジくん、お願いがあるんだけど…」

「え？」

「アスカが使徒を倒したと思ったら、直ぐに弐号機を使徒から引き離してくれないかな」

「え？なんで？」

「ごめん、理由は上手く言えない…けど、頼めるのはシンジくんしかいない…頼むよ」

「…わかった、シズクの言うとおりにするよ」

「ありがとう」

シズクはそう言つと微笑んだ。

そしてミサトとリツコの方に振り向く。

リツコは先ほどのシズクとシンジの会話の内容が釈然としないような目でシズクを見ていた。

しかしシズクはそんなことお構いなしにこう告げた。

「ミサトさん、僕も移動指揮車で連れて行ってもらえませんか？」

- 移動指揮車内 -

「先の戦闘において、第3新東京市の迎撃システムは大きなダメージを受け、

現在の復旧率は19%。実戦における稼働率は実質0と言ってもいいわ」

ミサトの指示が各パイロットに伝えられている。

「だから、今回は上陸直後の目標をこの水際で一気に叩く！
各エヴァは交代制で目標に対し波状攻撃、接近戦でいくわよ」

『『『了解』『』『』』』

ミサトの説明は前回とほぼ同じだ。

あの頃は戦場が選ばれる意味なんかはわからなかったが
今、改めて聞かされるとかなり厳しい状況だ。

上陸を許せば討つ術がなくなるに等しい。

「…ミサトさん」

「何、シズク？」

シズクの声にミサトは振り返る。

あまり時間は無かったがシズクのここぞという言葉は信頼に値する…とミサトは評価している。

だからこそ、意見を聞く気になった。

「UNにN2爆雷の手配、お願いしておいた方が…良くないですか」

「えっ？」

全員の注目がシズクに集まった。

「…どうして？」

ミサトはシズクの意見に若干の疑問を感じた。

少なくともこの時点で必要性は感じない、そんな提案だったからだ。

「万が一、ということがあります、上陸されてからじゃ、後手に回ります」

「いつものシズクらしくないじゃない、戦う前から負けることを考えるなんて」

「…すいません、でも」

「あの三人を信頼出来ないの？」

「してますよ、してるからこそ、いざっていう時のことが心配なんです」

「…シズク、こんなことは言いたくないんだけど、

作戦部長は私、あなたはあくまでパイロット、進言は謹んで頂戴」

ミサトはあまり使いたくない、職務権限を使って、シズクの提案を却下する。

そうしなければ司令部の権威に亀裂が生じてしまう、そう考えたからだ。

同時にシズクの言葉に若干の不安を抱えている自分がいたことも確かだった。

「…はい、すみません」

シズクはふるふると首を横に振ると回線越しに声をかける。

「みんな…気をつけて」

『あんななんか心配されなくても分かっているわよ!』

『シズク…私は大丈夫』

「シンジくん…頼んだよ」

『う、うん…』

「今回は彼女の出番はなし、か…」

加持が双眼鏡を片手に降下してくるウィングキャリアーを見つめてそう呟いた。

海岸に弐号機と零号機、そして少し後方に初号機が立つ。

弐号機の手にはソニック・グレイブ。

零号機と初号機の手にはパレットガン。

『一体相手に三人がかりなんて、なんだか卑怯よね、趣味じゃないわ』

『これが作戦だもの、仕方ないよ』

『……来るわ』

水平線に上がる、巨大な水柱。

海面から一見すると埴輪のようにも見える、そんな印象の使徒がゆっくりと起き上がる。

イスラフェルは海水が雨のように降り注ぐ中、ゆっくりと顔を上げた。

「ミサトさん…あの使徒、コアが二つありませんでしたか」

「えっ？」

じつとモニターを見つめていたミサトがシズクの言葉に驚いて振り向くが慌てて確認しようと視線をモニターに戻す。

使徒はモニターから体の向きが正面でなかったために胸部が確認できない。

「気のせいじゃない？私には見えなかったけど」

「…今までの使徒とは違いますよ、こいつ」

シズクのモニターを見つめる視線がいつものあの時の瞳だったためにミサトは言葉を失ってシズクを見つめた。

『ミサト！指示はどうしたのよっ！！』

「あっ…、攻撃開始！」

『オーケー！』

アスカからの催促でミサトは慌てて作戦開始を告げる。

「私が先に行くわ、ちゃんと援護すんのよ、二人とも」

見てなさい、私が一番なんだから。

アスカは一方的に宣言すると、残る二機を置いて、疾走を開始した。

レイとシンジは一瞬戸惑ったが同時に前進を開始する。

有効射程に入ったところで初号機と零号機が攻撃を開始する。

弾は全て、使徒のA・T・フィールドに弾かれる。

が、その攻撃は確かに使徒の進行を止めていた。

「いけるっ!!」

それを見たアスカは水没しているビルの頭を足場にして、ソニック・グレイブを振りかぶったまま、宙を跳ぶ。

「だああああああああああっっ!!!!」

瞬間。

閃光の様な斬撃が使徒を襲い、真っ二つになる使徒。

シズクは両断される瞬間をじっと見つめていた。

コアは、無傷。

「アスカ、お見事！」

ミサトの歓声に、指揮車内が勝利の雄たけびに包まれる。

『まあ、私にかかればちよいもんよ』

アスカの得意そうな声が、回線を通して聞こえる。

「シンジくん！」

シズクの声と同時に初号機が弐号機をその場から引き剥がした。

『なにすんのよ！バカシン…』

アスカの声は途中で止まった。

直前まで弐号機が立っていた場所を使徒の攻撃が空振りしていた。

「うっそおう！？」

使徒は二体に分裂していた。

ミサトが、なんてインチキ！と叫ぶ。

「みんな、早く退いて！」

シズクの声と目の前の現象とまるで自分のやったことが前にわかっていったのかという

この結果に驚いたシンジがいち早く我に返って、弐号機を引きず

るように海岸へと上がる。

『ちょ、ちょっと！何すんのよ！敵はまだ、生きてんでしょうが
！！』

「シズク！越権行為よ！三人とも、攻撃を続けて！！」

「効きませんよ…」

「なんですって！？」

ミサトは耳を疑った。

今日のシズクはいつもと違う。

なんというかこの使徒の全てを知っているかのような…。

『「ごちゃごちゃ言ってるじゃないわよ！でりゃあああつ！！」』

アスカは初号機の腕を振り払って、ソニック・グレイブを振り上げた。

「アスカ！駄目だ！！」

そして、エヴァは敗北を喫した。

重い瞳、似たもの同士（前書き）

活動報告にも書きましたが…

アンポンタン・ポカンさんのレビューを拝見しました。

そのタイトルのものを知らなくて

探して読んでみたら恐ろしいまでに酷似していて吃驚しました。

（特に今回の告白シーン、加持に謀報の知り合いが出てくるところ、修学旅行のくだりは焦りました）

ここまで似てるとパクリと言われても仕方ない気がしますー；

既に全話書いてしまっているのぢよつと修正は不可能なんですが見たところその小説は途中で止まっているみたいですし、最後の方までは流石に似ない…と思います。

と、いうわけでE v a n g e l i o n Hという作品を読んだことがあってそれが好きな方は不快感を持たれる可能性があります。可能性のある方は読むのをここで止めてください。

せつかく最終話まで書いてあるので1〜2部ずつと思ってましたが一機に乗せちゃってしばらく頭冷やします。

人と違う文が書けるようになるように… - - ；

重い瞳、似たもの同士

アスカは苛立ちながらネルフ本部内を歩いていた。

「アスカ」

「！」

シンジの声にぎろつと振り返るアスカ。

「あんたがあの時余計なことするから、負けたんじゃない!!」

「ご、ごめん」

レイがシンジとアスカの横に割ってはいる。

「碇くんがあの時、ああしなければ、もっと早く負けていたわ」

レイの言葉にアスカがかーっと赤くなる。

「うるさい！うるさい！私は負けるわけにはいかないの！

エヴァに乗って勝つことが私の全てなのよ!!」

「違う」

「何がよ!？」

「エヴァに乗ることがあなたの全てじゃない…」

他のところにもあなたがいてそのあなたも全てあなた」

「違う！違うっ！！あんたみたいな温室育ちに私の何がわかるっての！」

私にはエヴァしかないんだから！！」

アスカの言葉にレイは少したじろいだ。

レイの言った言葉は今やレイの行動の根本を成す言葉だ。

それをアスカにも知って欲しかった。

だが、アスカはそれを否定する。

シズクはその3人のやりとりを遠くで悲しそうに見つめていた。

どうしたものか…

シズクが溜め息をつきながら歩く。

「よっ、どうしたんだい」

前から歩いてきた加持が声をかけてきた。

「…加持さん」

「暗い顔は似合わないな、折角の美人が台無しだ」

「僕、中学生ですよ」

「はっはっは、そりゃ失礼」

加持はわざとらしく両手をあげるとそう言って笑った。

「ところで…シズクちゃんはその使徒と、どう戦ったらいいと思った？」

「…？」

加持の質問の意図が掴めず困惑するシズク。

「いや、葛城がシズクちゃんが反抗期だとぼやいていたんでね、
だが俺はそうは思わない、もしかしたらあれを倒す名案でも浮か
んでるんじゃないかと思ってね」

「名案ですか…」

シズクにも案という案は浮かばなかった。

というかこうなった以上、一つしかないのだ。

「あの…」

「うん？」

「あの使徒、二体に分裂した後に一体のコアをいくら叩いても効果が無かったですね」

「ああ」

「多分、あの使徒は二体で一体だと思うんです、だからあいつを倒すには

二点のコアを全く同じタイミングで破壊するしかない…と思います」

しかし、この時点で加持はこの案を思いついているはずだ。

何の進言も出来ない自分が歯がゆかった。

だが加持の次の言葉はシズクの予想だにしないことだった。

「なるほど…気付きもしなかったな、よし、その案で行こうか」

「…え？」

「葛城の首もつながるかもな、シズクちゃんのおかげで」

そう言って加持は掌をひらひらさせながら去っていく。

「ちょ…ちょっと待ってください…」

「ん？」

「加持さんもこのアイデア…浮かんでたんじゃないですか？」

「いや、俺は何も思いついちゃいないよ」

これは加持の嘘である。

加持は全く同じことを思いついていた。

これだけ少ない情報で自分と全く同じアイデアが思いつく少女。

やはりこの子は面白い。

「ところで…困ったことはあるかい？」

「困ったこと…ですか」

シズクは小さく溜め息をつく。

「シンジくんとアスカとレイの問題ですかね…」

シンクロ率の順でいって多分シンジくんとアスカの作戦になると
思いますが、

正直な所、現時点であの二人が二つのコアを同タイミングで
同時に破壊することは…難しいと思います」

「それは君の仕事だな」

「…はい、あ、そうだ加持さん」

「なんだい？」

「一つ、頼まれてもらえませんか？」

シズクのその言葉に加持は内面だけでニヤリと笑い

「俺に出来ることなら」

と言った。

・翌日・

ミサトの命令でアスカが葛城邸に引越してきた。

命令内容はシンジとアスカのユニゾン、つまりはダンス特訓である。

アスカは別段気にしてないように

「使徒に勝つためだもの…何でもやるわ」

と言って承諾した。

アスカの踊りは完璧であった。

シンジはよくついていっている、そう言えるだろう。

シズクは黙って二人の踊りを見ていたが内心はかなり焦っていた。

レイも表面上は問題ないようにアスカとシンジを見ているが
先日のアスカに言われた一言がどうしても忘れられないでいる。

式号機パイロットは何故あんなことを言ったのだろう…？

何故自分にはエヴァしかないなんて言うのだろう…？

あの子は昔の自分と同じ瞳をしている。

レイはそう感じていた。

- 更に翌日 -

トウジやケンスケ、ヒカリが葛城邸を訪れた。

みんなが二人の踊りを見る。

この日もアスカは完璧に踊る。

シンジは汗だくになりながら必死について行く。

「アスカ、この特訓はユニゾンの特訓なのよ、もうちょっとシンジ
くんに合わせてあげなさい」

ミサトの叱咤が飛ぶ。

その言葉にアスカは叫ぶ。

「何だよ！？私は完璧に踊ってるわ！！ついてこれないシンジが悪いのよ！！」

「はぁ…はぁ…ごめん、アスカ…」

シンジが汗だくで謝る。

「違うな」

加持の一言が割って入った。

「！？」

アスカが驚愕に目を見開いて加持を見る。

「シンジ君は何も悪くない」

「加持さん！？」

「シズクちゃん、アスカと踊ってみてくれないか？」

「…はい」

シズクはすつと立ち上がり二人の方へと近づく。

「シンジくん、少し休んでて」

「はあ、はあ、うん」

「これはシンジと私の特訓でしょ！？なんでフォースが出てくんのよっ！！」

「いいから踊るんだ」

加持の言葉には肯定せざるを得ない迫力があつた。

そして二人は踊る。

シズクの踊りはほぼ完璧だった。

当然である。

前回の時、嫌というほど踊った曲だ。

体にリズムが染み付いていた。

「…凄い」

ミサトが呟く。

ただ見てただけでこれほど踊れるものなのだろうか…？

もしそうだとしたらこの子は天才だ。

誰もがそう思った。

アス力はそれを見て、突き放そうといわんばかりに踊る。

そして終曲。

アス力が息を弾ませながら膝に手をやる。

「はあ、気が済んだ？ならシンジ、続きやるわよ」

「なあ惣流、おまえ、もうちょい碇に合わせられんのか？」

「何よ、あんた！こいつがついてこれないのが悪いんでしょ！？私の踊りは完璧だったはずよ！！」

「でも、アス力、何だか凄く無理して踊ってる感じがした…」

「同感だな、あれだけ完璧に踊れるんだ、少し相手に合わせるくらいできるはずだろ？」

「…何よ…みんなして！！私が悪いっての！？」

アス力は激昂した。

「じゃあ、次はシズクちゃんとシンジ君に踊ってもらおうか」

加持の言葉。

「加持さん…それは…」

シズクはそれは不味いという風に加持を見る。

「いいから」

「…はい」

そしてシズクとシンジが並ぶ。

曲が始まる。

二人の息使い、タイミング、共に完璧なコンビネーションだった。

元々「自分自身」だったのだ。

それに更にシズクがシンジにシンジがシズクに合わせて踊ろうと意識する。

やがて完璧に合った踊りが終わり、終曲を迎える。

沸き立つ拍手。

アスカはわなわなと震えていた。

「アスカの踊りは完璧だ、だがアスカとシズクちゃん、シンジ君はユニゾンできない、

そしてシズクちゃんとシンジ君はユニゾン出来る、この意味はアスカなら分かると思うが…？」

「私に…レベルを落とさせて言っんですか…!？」

キッと加持を睨むアスカ。

「この特訓は完璧に踊りを行うための特訓じゃない」

加持がきつぱりと言い切る。

「…なら、フォースとシンジがやればいいじゃないですか!」

「それが無理なのはアスカも知っているはずだ」

「…っ!」

アスカはその場を飛び出そうとする。

レイはそれを遮った。

「…特訓、しないの?」

「うるさい、うるさい、うるさい! あんたなんか大ッ嫌いよ!!
司令に可愛がられて育った温室育ちのお嬢様に今の私の気持ちが
わかるもんですか!」

ドン!とレイを両手で思い切り突き飛ばし、アスカは玄関を飛び
出す。

「綾波!」

シンジがレイへと駆け寄る。

「……クライ……」

「え?」

俯いていて良くレイの顔が見えなかったがいつもの雰囲気じゃないことだけは確かだった。

レイはとぼとぼとアスカの後を追う。

「…あ」

「加持さん！」

シズクは加持の元へと走る。

「ああ、これだ」

「ありがとうございます」

「頑張れよ、後は君次第だ」

シズクは返事もせずに走り出した。

夕方の公園。

アスカは一人、ブランコに乗っていた。

何よ、あいつら、私は悪くない。

私についてこれないシンジやフォースが悪いんじゃない。

エヴァに乗って勝たなくちゃ意味無いんだから。

そのためには何でも完璧に出来なくちゃ意味ないじゃない…！

「…アスカ」

その声にあすかは首を上げる。

シズクがいた。

「何よ…笑いにでも来たの？」

「アスカ…」

「気安く名前呼ばないでよ！」

「これ…見てくれない？」

シズクはアスカの叫びに動じず、一枚の書類を見せる。

「…何よ？」

アスカはぴつと受け取ると書類に目を通した。

- ファーストチルドレン・綾波レイの個人情報 -

と記されている。

「こんなもん、私に読ませてどうすんのよ？」

「いいから続きを読んで」

- 氏名・綾波レイ -

- 年齢・14歳 -

- 生年月日・不明 -

- 血液型・不明 -

- 血縁者・不明 -

名前と年齢以外は全て不明で埋め尽くされた文字。

「何よ…これ!？」

「レイのネルフの公式データだよ」

「ネルフの…?じゃあ一般のは」

「無いんだ、名前も年齢も戸籍さえも…」

無い…?

何も…?

じゃあファーストって一体何者なの…?

「アスカはさ、レイのこと、温室育ちって言ったよね」

シズクが静かに語る。

「でもそれはアスカが前のレイを知らないからそう思っただけ、レイに過去は無い、全てはその書類が示すように」

「だから何だったのよ！」

アスカがシズクの顔を見る。

と、同時に驚いた。

いつものシズクの瞳じゃない。

暗く、深い、闇の色をした漆黒の瞳。

「アスカはさ…そんなに肩肘張って疲れない？」

「…それが私の使命だもの、私にはエヴァに乗って勝つことしか存在する価値がないのよ」

「じゃあ、今のアスカはどこに行っちゃうの？」

「…！」

今の私…？

エヴァ以外の私…。

考えたことも無かった。

「一番じゃなくてもいい、エヴァに乗る以外のアスカがいてもいいんじゃないかな…？」

「そ、そんなもの必要…ない！」

少しの沈黙。

やがて、シズクが静かに口を開く。

「昔、さ、僕は自分だけが可愛かった。みんなに優しくしてもらいたかった。でもみんな優しくしてくれないんだ」

何を言い出してるの…こいつ…。

だがアスカは声が出せない。

シズクのその瞳に吸い込まれるように立ちすくむ。

「当たり前だよ、僕は他人に優しくできなかった。

他人に優しくできない自分がどうして他人が優しくしてくれる？でも、僕にはそれが分からなかった、

だから全てを呪った、

誰も優しくしてくれないなら

いつそ人類なんて滅びてしまえばいいって…そう思った」

「何よそれ！完全な逆恨みじゃない！！バカじゃないの！？」

「そうだよ…バカだった、だから自分の大切な人たちが次々死んで
いって

最後に一番大切な人が死んで、そしてようやく気付いたんだ…
僕は、寂しかったんだって…」

シズクは今にも叫びたかった。

その大切な人はアスカだということを。

自分は未来から来たシンジで最後は君を守れずに終わってしまった
ことを。

だが言えない。

だから自分の言葉に出来る範囲で、アスカに何とか自分の意思を
伝えようとした。

アスカにもそれがわかった。

嘘を言ってる瞳と口調じゃない。

こいつは私に本気で何かを伝えようとしている。

「アスカは使徒に負けるのは…嫌？」

「…当たり前でしょ」

「でも、まだ生きてるよね」

シズクの瞳に段々と力が入っていく。

「たとえ負けたとしても、次に対策を練って、勝てればそれでいいんじゃないかな」

シズクの言葉にアスカは自分の考えを根本的な所からひっくり返された気分になった。

確かにその通りだと思ってしまっ自分はどこかにいる。

「無様に這い蹲って、それでいいわけない、わ…！」

「だから、さ、這い蹲らないために、頑張ろうよ」

「…！」

そうだ、とどのつまり、そういうことだ。

こいつは最終的に這い蹲らなければ負けじゃないと言いたいんだ。

それがアスカにはわかった。

「だから…その何ていうか」

シズクの言葉をアスカは右手で遮る。

「…わかったわよ、やればいいんでしょ、やれば」

「…アスカ！」

「私が大人気なかったわよ、バカシンジに合わせて、

それで使徒を完膚なきまでに叩きのめせばいいんでしょう？」

「うん、うん」

「それに…ファーストにも、悪いこと言っちゃったわね」

「レイなら謝ればきっと許してくれるよ」

「そうかしら」

そうアスカが言ったときじりっとシズクの背後から音がした。

シズクが振り向くとレイが立っていた。

「レイ…？」

シズクが微妙なレイの変化に気付く。

アスカは気づかずにレイに近づく。

「さっきは悪かったわね、ファースト、私が悪かつ…！？」

そこでアスカはレイの瞳に気がつく。

光の失った真紅の瞳。

どこを見つめているのかもわからない、虚ろな瞳。

アスカはシズクの言葉を思い出す。

『アスカはレイの前の姿を知らない…』

これが…ファーストの前の姿…？

「……ワナイデ……」

「レイ…？」

「キラワナイデ…キラワナイデ…ワタシヲキラワナイデ…」

表情が固定され、機械仕掛けの人形のように繰り返すレイ。

「ワタシ…ニンギョウ…モドルノハ…イヤ…キラワナイデ…」

つうと一滴の涙がレイの頬を伝った。

パンツとアスカの平手がレイの右頬を払った。

がしつとレイに抱きつくアスカ。

「バカ！本気で嫌うわけないでしょ！！正氣に戻りなさいよ！！」

じんじんと伝わる頬の痛み次第にレイの瞳に光が帯びる。

「セカン…ド…？」

「私が悪かったわよ！勝手に想像して温室育ちなんて言っただから…そんな顔すんのやめなさいよ！！」

こいつは…ファーストは…レイは、自分と同じだ。

似たもの同士なんだ。

そして、多分フォース…シズクも、バカシンジも…。

「私のこと、嫌いじゃ…ない…？」

「嫌いじゃないわよ！嫌いなもんですか！！

あんたが私のこと嫌いでも私があんたを嫌いじゃないわよ！！」

「…私も、あなたのこと…嫌いなんかじゃ、ない…」

レイはそう言つとアスカの腰に手を回す。

「みんな！」

シンジが息を切らせて公園へと辿り着いた。

「遅いじゃない！バカシンジ、さあ、戻って特訓よ！！」

「アスカ…？」

「さつきは悪かったわよ、私があんたに合わせるわよ、

だけどあんたもレベル上げるよう努力は怠らないこと！いいわね

！？」

「う、うん…」

「さっ、行きましょ、シズク、レイ！」

「…シズク…セカ、アスカが…私のこと嫌いじゃないって…」

「うん、レイのことが嫌いな人なんていないよ」

シズクはそう微笑んで言うとアスカに近づく。

「アスカ、さっきの話、みんなには内緒ね」

「さっきの…？ああ、あんたが実は内気で寂しがりやだって話？」

アスカがニヤリと笑う。

「い、今は違うもん！」

「ぷぷつ、真面目な顔して「みんなに優しくして欲しかったんだ」って」

「何でそこ強調するんだよ！」

「いいわよ、内緒にしといたげる、その代わり、貸しだからね」

そう言つてアスカは笑うとマンションへと走って行った。

シズクはふうつと溜め息をつくど、それでも嬉しそうにアスカに続く。

レイとシンジも後を追ってマンションへと急いだ。

「…大したもんだ」

遠くから加持が呟く。

「あんたも、損な役回り引き受けたわね」

ミサトが隣で囁く。

「俺は何もしちゃいないさ、実際やったのはあの子たちだ」

そう言う加持をミサトはかっこつけちゃってと思いながら見上げた。

「いい？シンジ、やるからには完璧を目指すわよ、

あんたが出来るようになったら少しずつレベルを上げていくから覚悟しなさい」

「うん」

それからイスラフェル戦までの間、二人の猛特訓は続いた。

仕上がりは前回よりも良好。

万全の体制でイスラフェルに臨むことが出来た。

「わかってるわね、シンジ」

「わかってる、アンビリカルケーブル切断後、62秒でけりをつける」

『発進！』

ミサトの命令が飛び、初号機と弐号機が地上へと上がる。

2体の使徒の攻撃をぴったりのタイミングでかわし、上段アッパーから踵落とし。

イスラフェルが一つに混ざり合い、二つのコアも混ざり合う。

初号機と弐号機が回転しながら宙を舞う。

放たれる、二つの蹴りが完璧にユニゾンし、イスラフェルのコアを直撃する。

数十メートル吹き飛びながらはイスラフェルは爆発、四散した。

前回とは違い、着地も完璧だった。

シズクはその光景をただただ満足そうに微笑んでみていた。

修学旅行

「これとお、これとお、あ、水着も必要よね!」

アスカはレイと二人でショッピング街を歩いていた。

少し離れてシンジとシズク。

シンジの両手にはすでに山のような荷物が乗せられている。

「ア、アスカア、ちょっと待ってよ」

「早くしなさいよ、バカシンジ!」

「シンジくん、半分持とうか?」

「シズク! 甘やかしたら駄目よ!」

そう言うアスカの袖を引っ張るレイ。

「アスカ…水着、というのが、いいの?」

アスカはレイの問いかけにふむふむとレイを品定めして

「そうね、レイはスレンダーだから白のワンピースとか似合いそうよね」

「明後日から修学旅行だからって…気合入れすぎだよ…」

シンジははあっと溜め息をついて荷物を持ち直す。

「仕方ないよ、中学生生活3年間の中でたった1回の行事だから」

そういつつもシズクは少し寂しそうな顔をした。

この修学旅行には行けない、と知っているからだ。

「シズクー！あんたの水着も選んだげるから早くきなさい！！」

アスカが元気よく手を振った。

「あ、うん！」

そう言うつとシズクはアスカたちの方へと走り、

シンジを表に残して水着売り場がある店へと入っていった。

呆然と立ち尽くすシンジ。

しかし彼の頭の中はアスカたちの水着姿でいっぱいだった。

ぶんぶん頭を振り、妄想を振りほどくシンジ。

「じゃーん、見てみて、二人ともー！」

アスカの提示したのはかなり際どい赤いビキニだ。

「ア、アスカ、それはちょっと大胆すぎじゃ…」

シズクが顔を真っ赤にして慌てふためく。

「……それを着て泳ぐの？」

「レイのも選んどいたわよ」

そう言ってレイに見せるのは白いワンピース。

清楚な感じがとてもレイに合う。

女物の水着を探す日が来るとは思わなかったなあ…

苦笑しながらシズクも適当に水着を探した。

「シーズークー！」

にひひっと笑いながら近づくアスカ。

「何？」

「ほら、あんたの！」

バーンと前に突き出されるアスカの両手。

黒のビキニ（パレオ装備）。

かゝっと全身が真っ赤になるシズク。

「ア、ア、ア、アスカ！こういうのは、僕には早いって！！」

「そう？あんた私ほどでは無いけどそれなりに胸あるし、悔しいことに腰もくびれてるから似合うと思うんだけど」

「ぼ、僕もレイみたいなのでいいよ！」

「それはダメよ、あんたたち双子みたいにそっくりなんだから同じような水着つけてちゃ面白くないじゃない」

「…別に誰に見せるわけじゃないんだからいいじゃないか」

シズクがそう言うときアスカは人差し指を立ててこう言った。

「ちつつ、女捨ててるわよ、その発言」

元々女じゃないもん…

結局、シズクは押し切られるようにその黒のビキニを買った。

しかし、女物の水着って高いんだな…

そう思いながらクレジットカードをスリットに通す。

ちなみにシズクたちチルドレンはネルフからきちんと給料が支給されている。

エヴァパイロットという危険な職業からかその給料も高い。

アスカは浪費が激しいためにそんなに残っていないが

シズクやシンジ、レイは普段からそんなに使っていないためにその残高は軽く500万を超えていた。

そんなに残っていない、というアスカでも100万以上はあるのだ。

- 夜 -

「えーーーーー!!?! 修学旅行に行っちゃダメーーーー!!?!」

「そっ」

ぐびぐびとえびちゆを飲みながらミサトが端的に答える。

「そんなの誰が決めたのよ!」

「作戦部長である、この私」

「シズク!シンジ!なんとか言いなさいよ!」

「なによおシズク、そんなに驚くところ？今の」

「だ、だって僕たち全員？」

「そうよ、仲間外れいたら可哀想じゃない」

「もし使徒が来たら…！」

「A級命令でこっちに引き返せるようにしてあるわ」

「でも…」

シズクが頑なになってるのを見てアスカが怒る。

「なんでそんな拒否してんのよ！行ってもいいってんだから行くんじゃない、

それともあんた、いやなの？」

「い、いやな訳ないじゃないか、凄く嬉しいよ…でも」

「なら文句言わない！」

そう言つとアスカはミサトの手から許可証をふんだくる。

「えーと、何々、各チルドレンの修学旅行を日数制限を布いて許可する、

尚、護衛は1名、加持リョウジ…」

「加持さんが護衛ですか」

「そうよん、あいつ暇だから」

- 5時間前・ネルフ本部 -

「ですからチルドレンたちに修学旅行へ行く許可を頂けないかと！」

ミサトは必死になって上層部を説得していた。

「そんなこと、許されるわけないでしょ、

第一パイロットがいない間に使徒が来たらどうするつもり？」

リツコの冷めた目線がミサトに突き刺さる。

「戦自の沖縄基地からネルフまで1時間で戻ってこれるわ」

「大体、パイロットの危険が高すぎるわ、護衛だって手配するのに
日数かかるのよ」

「それなら大丈夫」

そう言つてミサトは加持の肩に手を置く。

「え？俺か？」

「どうせ暇でしょ、あんた」

「いや、俺にも俺の都合が…」

「ひまよね？」

ぎろりとミサトに睨まれ加持はそんな顔するなよと両手を前に出す。

「わあかったよ、引率、すればいいんだろ」

「よろしい」

にっこりとミサトは笑うとゲンドウたちの方へと振り向く。

「司令！どうか許可を！！」

暫しの沈黙。

「…いいだろう」

「司令！？」

ゲンドウの了承の許可と驚くりツコの声が同時に響く。

「ただし、一日だけだ、それ以上は認めん」

その言葉にミサトの顔が明るくなった。

普段から一般の中学生とはかけ離れた彼らに少しでも中学生らしい生活を送らせてやれる。

「ありがとうございます！」

ミサトはビシッと敬礼するとその場を後にした。

その後は急ピッチで許可証の作成。

第壱中に連絡を取り、加持の護衛の許可を取り付けた。

・そして、現在、葛城邸リビング・

「まあ、そういうわけだから、一泊だけでも楽しんでらっしゃい」

ミサトはそう言つとウィンクを飛ばす。

サンダルフォンは確かトウジたちが
修学旅行に行つてから3日目だったはず……まあ、一泊なら安心、
かな

そう思つとシズクはやつと微笑み

「じゃあ、お言葉に甘えて」

と言つた。

「あゝあ、それにしても護衛付きか」

「仕方ないよ、でも加持さんと一緒ならアスカも嬉しいんじゃないの？」

「べつにつく、私、コブ付きの男に何時までも興味ないもん」

そう言っでちらっとミサトを見る。

「なあんでそこで私を見るのよ！！」

ミサトは真つ赤になってアスカを怒鳴った。

「はいはい、いいわね、幸せそうで、

ユニゾン特訓の時、二人でこそこそ私たち見てたのどこのどなたでしたっけ？」

「うぐっ…き、気付いてたの…？」

「あつたりまえでしょ、それに、別にミサトなら加持さん取ったって恨まないわよ」

「アスカ…」

いい方向に吹っ切れたな、とシズクは思った。

先日のシンクロテストでも確か88%をマークしていた。

一つ、心の籠が外れたのだろう。

この調子なら心配は無さそうだ。

レイは床に座り込みトランクケースを開けていた。

「何やってんの…綾波…？」

シンジが声をかける。

「…………準備」

「今から？修学旅行明後日だよ！？」

「…………旅行、初めてだもの…とても、楽しみ」

そう言つとレイは昼間買ったワンピースをトランクケースに仕舞い込む。

「レイに負けてらんないわ！私も準備するわよ！シンジ、鞆取ってきてー！」

「自分で取りに行けばいいだろ……」

「文句言わない！早くー！！」

「はいはい……」

はあ、と溜め息をつくとしんじはアスカの部屋へと入っていく。

「言っとくけど、タンスの中覗いたら殺すわよ！」

「覗かないよ！！！」

しんじの怒鳴り声が返ってきた。

そしてあっという間に次の日は過ぎ、修学旅行の朝がやってくる。

「どうしてこんな大事な日に寝坊するわけえ！？」

「僕だけじゃないだろ！アスカやレイやシズクだって寝坊してんじやないか！！！」

「……………あまり、眠れなかった……」

「とにかく急いで！待ち合わせの時間まであと30分しかないよ！！！」

バタバタと用意をして、朝食も取らずに出ていく四人。

「よつ、四人とも、遅かったじゃないか」

加持が軽く手を上げる。

「はあ…はあ、今日は…すいません、加持さん」

シズクが汗びっしょりでそう言った。

「いや、いいんだよ、パイロット護衛も立派な仕事の一つだからな」

「アスカ、レイ、はい、これ」

ヒカリは四人を見つけて駆け寄ってきてドリンクを渡す。

「シズクと碓くんにも、はい」

「ありがとう、委員長」

と、そこできよろきよると辺りを見回すシンジ。

「あれ…？トウジとケンスケは？」

「何か予備のバッテリー買ってくるのか言っさっき売店に行ったわよ」

「そう」

「ふふっ、ヒカリー」

後ろからアスカがヒカリに抱きついた。

「きゃっ、何よアスカもう!？」

「修学旅行よ、チャンスじゃない、決めなさいよ」

ひそひそと耳元で囁く。

途端に朱に染まるヒカリの顔。

「な、な、な」

「あんなジャージのどこがいいのか知らないけど、応援してあげるわ」

「アスカ!！」

ヒカリはアスカの腕を振りほどきながら真っ赤なトマトのような顔をして怒鳴った。

「…何の話？」

レイがひょっこりと顔を出す。

「ヒカリはねえ」

「わー!わー!…!何でもない、何でもないから!！」

「平和だねえ…」

出しかけた煙草を「おっと」とポケットにしまつて加持は呟いた。

「それだけみんな、楽しみにしてたんですよ…」

シズクも嬉しそうに呟く。

「そうだな、君も含めて、みんなまだ14歳だもんな、
クラスメートと一緒に旅行出来て嬉しくないわけないか」

「はい」

そう言つてシズクは微笑んだ。

飛行機が空を飛んだ。

「投機は第3新東京市空港から沖縄空港行き…」

アナウンスが流れる。

「アスカ、太るわよ」

アスカは朝食べてこなかったのがよほどお腹に堪えたのか
売店で買ったお菓子をバカみたいに食べている。

「らつて、あさははん、はへへ、んぐ、来なかつたんだもん」

「だからって、お菓子で空腹満たしてたらダメじゃない」

ヒカリがじろつとアスカを見る。

全く、この食欲でどうやってこのプロポーション維持してんのかしら…

そんなことを思いながら右の席へ目をやると

同じように黙々とお菓子を食べているレイの姿があった。

この子もね…

はあ、と溜め息をつくお年頃な14歳。

シンジとトウジ、ケンスケはトランプに興じている。

シズクは加持と隣り合わせの席だった。

「何してるんですか？」

「ん？ああ、行動予定表のチェックさ、一応ナイト役だからな」

そういう加持の手元にはしおりに書かれた一日目の行動一覧表があった。

10:00、沖縄着。

10:30、セカンドインパクト以前の歴史を振り返る、戦争博物館見学、

12:00、昼食

13:00、ビーチにて自由行動

16:00、ホテルにチェックイン

21:00、消灯

と書かれている。

「シズクちゃんは何が楽しみだい？」

「そうですね…」

シズクは自分のしおりを見ながら考える。

「海もいいですけど、やっぱり戦争博物館ですね、セカンドインパクト以前のことであまり授業でも習わないです」

「あまり、気持ちのいい話じゃないと思うぞ」

「ええ、でも知らないよりは知ってるほうがいいと思います」

そして、10時丁度、飛行機は無事到着する。

「くうゝ…長かったわね」

結局アスカとレイは二人で20袋ものお菓子を平らげていた。

「見てたこっちが胸焼けしそっだわ…」

げっそりとヒカリが続いて降りる。

「…………満足」

ぽんっとお腹を叩き、レイが降りる。

「くっそゝ、あそこでババを引かなければワシの勝ちやったのにな
ゝ」

「ふふん、あんな単純な陽動に引っかかるなんてトウジもまだまだ
だな」

「はは、でもあそこでババを引くのがトウジらしいよね」

続いてシンジ、トウジ、ケンスケのトリオ。

最後にシズクと加持が降りた。

【めんそゝれ、沖縄！！ようこそ第3新東京市第壱中学校のみな
さん】

と書かれたのぼりが目に付いた。

クラスメートたちは一斉に走り出す。

バスに揺られて一行は戦争博物館へと目指す。

「セカンドインパクト以前は日本で一番の暑さを誇っていたこの沖縄ですが

今ではみなさん知つてのとおりどこもかしこも真夏ですので魅力は半減かと思っています、

それでも折角いらしたので楽しんでいってくださいね」

バスガイドの声が心地よくシズクの耳に残る。

「間も無く、戦争博物館です、ここはセカンドインパクト前に起こった戦争、

つまり第二次世界大戦などの資料の展示や説明などが行われております」

「ねえねえ加持さん」

「どうした、アスカ？」

「なんで沖縄に戦争博物館が出来てんの？」

「そりゃ、残った土地の中で一番の戦地だったからじゃないか？セカンドインパクト後に残ったありったけの資料を集めて作られ

たらしいぞ、

俺も入るのは初めてだけだな」

「ふゝん…何だかつまんなそうね、早くビーチに行きたーい」

「……歴史、私の知らない世界…楽しみ」

そう言うレイの頭にぼすっと手を置いて、

「まっ、レイの勉学のために付き合ってあげますか」

とアス力は言った。

- 戦争博物館内 -

物々しい雰囲気に関われたその建物は元は別の地方にあつたらしい原爆ドームというものを模して作られたらしく細部にいたる傷まで再現されていた。

中にあるのは戦争中の写真、泣き叫んでいる赤ん坊や血だらけの看護師など。

その圧倒的な存在にクラス一同、言葉を失ってただ資料を眺めていた。

「なんか暗いところねー」

アスカが退屈そうに腕を頭の後ろに組んで欠伸をする。

「…人って何で争いを繰り返すんでしょうね」

シズクがぼつりと呟く。

「それが、人間ってやつなのさ」

加持はシズクの肩に手を置いてそう言った。

「みなさんお待ちしました、これより、特別攻撃隊のガイダンスを始めます」

ブーっとブザーが鳴る。

巨大スクリーンが中央より下りてきて特攻のシーンが映し出される。

全員、息を吞んでそれを見る。

「当時、関大尉他6機による4度目の出撃で1機のアメリカ海軍の護衛空母セント・ローを撃沈しました。

日本政府はこれに対し彼らに最大の賛辞として二階級特進を与え

…」

「ふざけんじゃないわよ!!」

ガイダンスの声を途中で遮って大声を張り上げたのはアスカだ。

「何が最大の賛辞よ！何が二階級特進よ！！死んだら何も意味ないじゃない！！」

全部終わりなのよ！！そんなの狂ってるわよ！！！」

アスカは今にも爆発しそうな勢いで捲くし立てる。

奥の方に座っていた館長らしき老人が立ち上がり、アスカに近づいた。

「な…なによ？なんか私、間違ったこと言っただけ？」

「チムジュラサン」

「はっ？」

意味不明な方言を囁かれアスカは目が点になる。

ガイダンスのお姉さんはくすりと笑みを零しこう言った。

「沖縄の方言で心の美しい、優しい子だって意味ですよ」

その言葉を聞いてアスカは途端に赤くなって俯く。

「あ…いや…その…どうも…」

「確かに日本政府のやったことは非人道的なことかもしれませんが、でもここから学べる多くのこともあるはずですよ、」

みなさんにはそのことを学んでもらいたいのです」

そう言ってガイドスは締めくくられる。

アスカはもじもじしながら館長の目からヒカリの後ろに隠れていた。

戦争博物館の見学を終えた一行は昼食を取り終えて次の目的地、ビーチへと向かった。

「はーっ、やっと泳げるわねー！」

博物館でのやりとりから今ひとつ調子が出なかったアスカがんとつと伸びをして話す。

「ビーチか…」

「どうしたのよ、シンジ？浮かない顔して」

「な、なんでもないよ！」

そのシンジの慌てぶりにアスカの目が光る。

「ははーん、さてはあんた、泳げないんでしょう？」

「お、泳げなくて何が悪いんだよ！」

「別に悪いなんて言っていないわよ、いいわよ、私がコーチしてあげ

る」

「えー？いい、いいよ！ー！」

「遠慮すんじゃないわよ、

私にかかればあんたでも1時間で100kmは泳げるようにしてみせるわ」

「…………それは楽しみ」

ぽつりと呟いたのはレイだ。

レイの思わぬ突っ込みにバス中が爆笑の渦に巻き込まれた。

そんな中、シズクがそくっと手を上げる。

「あ、あのさ、アスカ」

「なによ？」

「僕にも泳ぎ方…教えて欲しいなあって…」

「はあ？あんたも泳げないの？仕方ないわねえ、

帰ったらハンバーグ作りなさい、それで手を打とうじゃない」

「うん、ありがとう」

そう言ってシズクは微笑んだ。

和やかなムードでバスが走るその光景を一人のショートカットの少女が見ている。

トランシーバーを顔に当てた。

「目標のバスを発見、これよりネルフのチルドレンに接触します」

『本来の目的を忘れるな』

「分かっています、室長」

そう言っ て少女はトランシーバーを切る。

「行くわよ、ムサシ、ケイタ」

『いつでもいいぜ』

『こっちもだ、マナ』

そう言っ た少女の背後から二体のロボットが姿を現した。

第13番機械工作隊

ザワザワ・・・

男子生徒たちがにわかに色めき立つ。

「あ、アスカたちかな？」

シンジがビーチボールを膨らませながらそう言った。

「やつほー、待った？」

「…………風が気持ちいい」

「ア、アスカ、やっぱり恥ずかしいよ…この水着…」

と、右方向に髪を結って赤いビキニを着たアスカが

左方向から浮き輪を持って白いワンピースを着たレイが

中央からかなり恥ずかしそうに黒いビキニを着たシズクが

シンジたちの方へと向かってきた。

「うはー、うちの中学の三大美女の水着姿！これは売れるぞー！！」

カメラのシャッターをきりまくりながらケンスケが言う。

ぱつとそのカメラをアスカが奪うとレイへと渡した。

「レイ、それ、海に投げちゃっていいわよ」

「……………了解」

アスカの言うとおり、ぱいつと海へとデジカメを投げるレイ。

「ああゝ、お前ら！それいくらしたと思ってんだ！！」

ケンスケが頭に手を抱えて海の中へと入っていく。

「私たちの写真売って金儲けなんて100億万年早いのよ！」

ふふん、とアスカが鼻で笑ってそう言った。

「難儀なやつちゃ」

トウジは溜め息をつきながらそう言った。

「す、鈴原」

そのトウジの横から大人しめのピンク色のワンピースを着たヒカリが声をかける。

「わ、私、変じゃ…ないかな…？」

「いや…におうとるで」

「ほ、ホントに？」

「ああ、ワシは嘘は好かん」

ヒカリはその言葉を聞くと嬉しそうに、
そしてその倍以上恥ずかしそうにシズクたちの下へと合流する。

「ア…アスカ、鈴原が似合ってるって…」

「やったじゃない、1ポイントゲットね」

小声でひそひそ話すヒカリとアスカ。

トウジも大変だな、とシズクは苦笑した。

その様子をクエスチョンマーク全開で見てるトウジ。

「……………碇くん」

レイがシンジの前へと立つ。

「あ、何？綾波」

「……………特訓」

「へ？あ、いや、僕は別に泳げなくても…」

「何言ってるのよ！折角沖縄に来て海に来て、泳ぎもしないなんて終わってるわ！」

ほら、こっち来る！」

アスカもシンジの手を強引に取って海の中へと引きずり込む。

「ちょ、アスカ！待ってよ！！」

「怖いと思うから怖いだよ、使徒相手に比べたら水なんて蟻みたいなもんよ」

シズクは使徒と海を比べるのはどうかと思いながらアスカの講義を聞いている。

「さ、まずは水に顔をつける練習よ！いち、にの…さん！！」

勢い良くアスカはシンジの頭を海の中へと押さえつけた。

「がっ…がぼぼぼぼっ！！アズ…！！」

「アスカ！！」

慌ててシズクが止めに入る。

が、時既に遅し。

シンジはうつ伏せのまま、ぷかりと海面を漂った。

「あら、浮けるじゃない」

「そうじゃなくって気絶してない！？シンジくん、大丈夫！？」

シズクが慌ててシンジを海面から引つ張りあげる。

「…ぶはっ！げほっ、げほっ、何すんだよ！僕を殺す気なのか！？」

「何よ、人が親切で教えてあげようってのに」

「教え方ってもんがあるだろ！」

「だから、今浮けたでしょ」

「もういいよ！綾波に教えてもらっから！！」

そう言うんじゃばじゃぼとレイの方へとシンジは向かう。

「何よ！綾波、綾波って！私よりレイの方がいいっての！？」

きーっと片足を海に叩きつけて悔しがる。

「いや、そうじゃなくて教え方が悪いんだと…」

シズクは苦笑しながらそう答えた。

「綾波、泳ぎ方教えて欲しいんだけど」

レイは浮き輪に乗ってぶかぶかと浮いていた。

シンジの言葉に気付きこくりと頷く。

「…全身の力を抜いて、海に漂うイメージをして」

「うん、何だか、難しいな…」

「…そのまま、仰向けになって海に浮いて」

シンジは脱力したまま、海の中に仰向けになった。

ぶかり、と浮力でシンジの体が海面に浮かぶ。

「あ、浮いた」

「…そのまま足を動かして」

シンジは言われたとおりにバタバタと海面を叩く。

「…力を入れすぎないで」

「あ、うん」

そのまま足の運動量を減らし、静かに海面を叩いた。

すると、シンジの体がすーっと動き出す。

「あ、今もしかして…泳げ、た…？」

「…………ええ、基本はそれで充分だから」

こうしていともあっさりと背面泳ぎを覚えてしまったシンジ。

シズクとアスカはぽかんとその光景を見ていた。

「ふ、ふん、中々教えるのが上手いじゃない、レイも」

「アスカの教え方とは天と地との差があったような…」

「負けてらんないわ！シズク、あんたも私の一番弟子として早くマスターしなさい！！」

「む、無理だよ、そんな急に言われたって…」

みんな、楽しんでるようだな…

加持は浜辺でシズクたちの様子を見ながらそう思った。

この分だと、俺の出る幕はない…かな。

そう思った次の瞬間、シンジの周辺の海面に違和感を感じる。

波紋が…少し違う…？

加持は思うと同時に飛び出した。

「シンジ君！そこから離れろ！！」

加持の叫び。

「え？」

シンジが聞き返すと同時にシンジのすぐ真下から巨大なロボットが二体、浮上した。

「な、なんだ？コイツ…！？うわっ！！」

ガシッと一体のロボットの右手にシンジが捕らえられる。

「碇くん！」

「あのロボット…シンジをどうするつもりよ！？」

レイとアスカが同時に叫ぶ。

シズクはもう一体のロボットの左手に乗る少女を捕らえた。

「……………マナ？」

間違えない。

前回の人生で自分たちの中学校に転校してきた少女。

霧島マナだ。

正体は戦自のスパイ。

そのマナが何で沖縄に…？

「シズク！」

アスカの声に我に返るシズク。

「追っわよ！！」

「う、うん」

シンジを捕らえたのはネルフの情報を聞き出すため…？

マナはこんな直接的なやり方はしない子だ…

シズクは走りながら考える。

「三人とも、乗れ！」

加持がどこから持って来たのか、小型のトラックに乗ってやってきた。

「さっすが、加持さん！」

アスカとレイが荷台に乗り込む。

シズクも続いても乗り込んだ。

あのロボット、細部はちょっと違うけど間違いなくトライデント

だった。

ということは乗ってるのはマナの友達か…

シズクは首をぶんぶん横に振る。

今は何より、攫われたシンジを助けるのが先だ。

マナは拷問の類はしない、と思う、が

マナの上司はそうとは限らない。

シズクは手段は選んでられない、と思った。

レイの耳元へと口を近づける。

「レイ…あのロボットの前方にみんなに気付かれないようにA・T・フィールドを張れる？」

レイは驚いてシズクの方を見た。

質問の内容にではない。

自分がA・T・フィールドを張れるという「事実」を知っているシズクにだ。

シズクはそんなレイの考えを見抜いたように

「理由は全部、後で話す…今はシンジくんを助けないと…」

少しの沈黙。

その間にもトラックとトライデントの距離は広がっていく。

「加持さん！離されてるわっ…！」

「パワーが違う！せめて奴らの動きが少しでも止まれば…！」

レイがトライデントの方を見た。

そう…今は碇くんを助けないと…！

レイの瞳が大きく開かれる。

紅い瞳が若干光を帯びた。

離れていく二体のトライデントの動きが急に止まる。

「なんだ…？」

「止まった！？加持さん！チャンス…！」

「わかってる！」

加持はハンドルを切る。

進路は真っ直ぐトライデントへ。

ジープが猛突進した。

「どうしたの！？ムサシ、ケイター！！」

『わ、わかんねえ…急に前に進まなくなってる』

『こっちもだ！』

「前がダメなら上に飛びましょっ、とりあえず基地に戻らないと」
マナがそう言うのと二体のトライデントは上空高くへと舞い上がった。

「跳んだ…！？」

「ちっ…せめてやつらの行き先さえ分かれば…！」

アスカと加持が同時に言う。

「加持さん！」

シズクの声。

「シズクちゃん、名案でもあるのかい？」

「…多分、あいつらの本拠地は戦自です！」

「戦自…？そうか、最近出回ってた二足歩行型の機兵の話は本当だったのか…！」

そう言うとか持はハンドルを急激に切りなおし、戦自基地の方へと進路を取った。

- 沖縄・戦自ベース基地 -

「手荒なご招待、ごめんなさい、碇シンジくん」

マナはそう言うとしんじに握手を求める。

「あなたたちは何者ですか…」

マナを睨みつけてしんじはそう言った。

「私は戦自、第13番機械工作隊所属、霧島マナ、あつちはそので作られた二足歩行型「トライデント改」のパイロット、ムサシとケイタよ」

そう言ってマナが紹介すると二人は軽く手を上げる。

パイロット…同年代くらいだな…。

シンジは二人を見てそんな感想を抱いた。

「それで、僕を攫って、どうするつもりですか？」

「だから、強引に招待したのは謝るってば、
私たちの上司があなたに会いたいていうから」

「上司…？戦自の人に知り合いなんていませんけど…」

プシュッとその時、ドアが開く。

「久しぶりだね、碇シンジ君」

30代中ごろだろうか…その男はそう言ってシンジに挨拶をする。

「あなたは…確か、J Aの時の…」

「そう、元J A開発責任者、今は戦自第13番機械工作隊室長、
時田シロウだ、よろしく」

勇美はそう言ってシンジに握手を求める。

「その時田さんが…僕に何の用ですか？」

「そう怖い顔をしないでくれ、J Aの件では君たちネルフに借りがある、邪険にはしないよ」

そう時田が言ったとき、地面が揺れる。

「…何だ？」

『Bブロックより侵入者を補足、繰り返すBブロックより』
けたたましいサイレンと共に非常用のアナウンスが流れる。

「もう来たのか…早いな」

「室長、迎撃しますか？」

ムサシが言う。

「いや、大事なお客様だ、上に何を言われようと手出しするな」

「はい」

「マナ」

「はい」

「迎えに行つてあげなさい」

「わかりました」

そう言つとマナはドアを開けて外へと出て行つた。

「一口に戦自の基地と言つても広いわ、どこを探せばいいのか！」

アスカが叫ぶ。

「黙つてろ！このまま内部へ突つ込むぞ！！」

加持がアクセルを更に踏み込もうとした時、扉からマナの姿が現れる。

「加持さん！止まって！！」

シズクが叫ぶ。

加持は反射的にブレーキを踏み、マナに横付けする形でトラックは止まつた。

「そつちから出てくるなんていい度胸じゃない！シンジはどこ！？」

アスカが荷台から飛び降りる。

「アスカ、不用意に近づくな」

加持が懷に手をやり、運転席から降りた。

マナは静かにお辞儀をすると

「室長のところへ案内します、私についてきて下さい」

と言った。

「…君、霧島マナだろ…？」

シズクが呟く。

驚いたようにマナがシズクの方を見た。

「私を知ってるの？」

「知ってる…いや、知ってた、と言うほうが正しいかな…」

どうも僕の知ってるマナと今ここにいるマナは違う気がする」

「？」

「君は…ここの査問部の諜報委員じゃないのか…？」

そのシズクの問いにマナはクスリと笑い。

「確かに、あなたの言ってる私とはちょっと違うようね」

マナは自分の胸に手を当てて、

「スパイ稼業は2週間前に引退したわ、今は別の部署で働いてるの」

そう言つとマナは再び背を向けて

「全部答えてあげるから私についてきて」

と言つた。

「どうすんの？」

アスカの問い。

「行くしかあるまい、どうせ行かないとシンジ君は返してくれない
だろうし、な、

但し、絶対に俺の側から離れるな」

「了解」「」

四人はマナの後に付いていく。

プシュッとドアが開くとシンジと時田、それにムサシとケイタが
いた。

「シンジ君、無事だったか」

「加持さん、みんな…！」

ここに来て、ほっとしたのかシンジの顔にようやく笑みが戻った。

「このバカシンジ！心配かけさせんじゃないわよ…！」

「ごめん」

「ようこそ、チルドレンのみなさん、そして、加持一尉」

時田がそう言って会釈をする。

「あなたは…JAの…？」

シズクが驚いたように言った。

「覚えていてくれて光栄だな、フォースチルドレン、碇シズクさん」

「で、その時田さんが俺たちに何の用だい？」

加持は懷に手を入れたまま静かに問う。

「あの時のパイロットが来ると聞いたんで御礼をしようと思ったただけですよ」

「それであんな兵器まで持ち出したのか？」

「仕方なかったんですよ、戦自だって一枚岩じゃない、ネルフを快く思っていない上の連中だって五万といます」

「礼を言うだけなら海岸であんたが出てくればいいだけじゃない！」

アスカが叫ぶ。

「それも出来なかった、
室長という立場は与えられているが私はほぼ軟禁状態の身だから
ね」

そう言うつとパチンと指を鳴らす。

スクリーンが降りてきて先ほどのロボット、トライデントが映し出される。

「これはエヴァを参考にして作られたトライデントという兵器です。
私はそれを更に改良してパイロット負荷が
ほとんどかからない状態まで仕上げることに成功しました」

「…で？」

加持が僅かに目を細める。

「恐らく近い未来、これを使って戦自はネルフへの侵攻を開始します」

シズクの肩がぴくつと上がった。

「私は反対した、エヴァのパイロットは命がけでこの世界を守っていると言ってね

でも、上の連中は納得しないんですよ」

「それを俺たちに話してどうするつもりだい？」

「別に何も…信じるも信じないもあなたたち次第ですから…私に出来るのはただの忠告です」

「加持さん…」

シズクの呟き。

「この人の言う事は…信じられます…」

加持はその言葉に少し沈黙すると手を懷から抜いて

「わかった…君がそう言うなら信じよう、そろそろホテルのチェックインの時間なんだ、帰ってもいいかな？」

と言った。

「はい、ただあなたたちは私の元から脱走した、という事にして頂きたい」

「了解だ」

そう言つと加持たちはドアを開ける。

「あ、シズクさん」

「？」

時田の言葉に振り返るシズク。

「これだけは信じて欲しい…私は本当にこの世界を憂いている…
そして戦自がどんな行動を取ろうとも、私は君たちの味方だ…」

時田のその言葉に無言で頷くシズク。

「…人の意思が割れるなんてどこの組織でも同じですよ、
僕たちは僕たちの戦いをします、時田さんも頑張ってください」

「…ありがとう」

そう言うとき田は後ろ姿のシズクにそっと頭を下げた。

告白

「シンジ！無事やったか！！」

ホテルのロビーでシンジたちをトウジが出迎えた。

「心配させやがって」

「ごめん」

ケンスケの言葉に素直に謝るシンジ。

「何にしても、無事で良かったわ」

ヒカリがほつと呟いた。

「さ、飯や飯！」

そう言ってトウジは先頭きってレストランへと移動する。

夕食はバイキングだった。

イタリアン、中華、フレンチ、和食、色とりどりの料理が並べられる。

アスカとレイはあまり食が進んでいない。

「食べないの？」

ヒカリが心配そうに声をかける。

「うん、なんか味いまいちなよね」

アスカがパスタをフォークでくるくる回しながらそう呟く。

「シズクや碇くんの料理の方が、美味しい」

そう言ってレイはエビチリを口に運んだ。

「二人とも、普段から恵まれすぎなのよ」

ヒカリはそう言っつとハマグリのお吸い物を飲んだ。

「はは…でもここのも美味しいよ？」

「あんたが作ったの比べちゃうとどうしても落ちるのよねえ」

アスカがシズクに対してぶっきらぼうにそう答えた。

「……………」ご馳走様」

レイはそう言っつて席を立つ。

「あら？レイ、もう部屋に戻るの？」

アスカが尋ねるとレイは

「…ちょっと、用事があるの」

と言ってシズクの耳元で

「昼間の理由…聞かせて、中庭で待ってるから…」と呟いて去っていった。

シズクはドキドキとなる胸に手を押さえつけて

ふうっと溜め息をつくとき、覚悟を決めたように席を立つ。

「シズクももう終わり？」

「うん、ちょっと散歩してくる」

そう言ってシズクもレイの後を追う。

「…変な二人」

アスカがパスタをちゅるりと食べてそう言った。

- 中庭 -

月が熱帯の植物を淡く照らす。

その中央にレイが立っていた。

「レイ」

静かに近づくシズク。

「……………座って」

そう言つとレイは丁度いい大きさの石に腰掛けた。

「理由…話すけどさ、突拍子の無いことで…もしかしたら信じてもらえないかも知れない」

「……………私はシズクを信じてる」

「うん」

シズクは月を見上げる。

レイはそんなシズクの横顔をじっと見つめた。

やがて、シズクはレイの顔を見る。

黒い瞳が紅い瞳と重なり合った。

「僕の本当の名前は…碇シンジ、今より未来の…サードインパクトが起こった時代から来たんだ」

時が、止まった。

レイの瞳孔が開く。

シズクが…碇…くん…？

「僕のいた世界はそれは悲惨な結末を迎えたよ…」

「…サード、インパクトが…起こったから…？」

何とか気持ちを静めながらレイは言葉を搾り出す。

「うん」

「…私は…私は何をしていたの…？」

「レイは…正確に言うと『今』のレイは、第16使徒…アルサミエ
ルと戦って、死んだ…」

「……………！」

レイが直立不動になる。

死ぬ…？

「でも直ぐに…『次』のレイがやってきた…」

「…っ、ぎの…？」

「ガフの部屋」

「!?!」

レイの瞳が震える。

「知ってるだろ…当然、レイの器がある場所だ…」

シズクは一呼吸、置いてから。

「3人目のレイは…レイであってレイじゃなかった、別人だったよ…」

「でも、最後は…最後のレイは、「人」としての意思があったと思う…」

無音の中、レイの喉が鳴る音だけが響いた。

「最後の私は…どうなった…の」

「リリースと一つになって初号機ごと僕を包み込んだよ、その時、流れ込んだ、大量のレイの記憶、父さんの計画、ゼーレの迷惑…」

シズクの瞳が悲しく揺れる。

「そして、その記憶の波に押されて僕は耐え切れなくなって、世界は崩壊した…」

僕とアスカを残して…ね」

「……私が原因で…サードインパクトが起きたの…?」

シズクはゆつくりと首を横に振る。

「僕が臆病者だったからいけなかったんだよ、レイは悪くない」

「…アスカは、残されたアスカは…どうなったの？」

「サードインパクトが起きてから何日かたった後に…L・C・Lに還ったよ…」

最後にシンジ…って言って」

シズクが俯く。

「僕は自分を呪ったよ、何でこんなに情けないんだって、好きな人一人守れやしない…そして一人ぼっちになって何もする気が起きなくて、

そのまま死のうつつで思ってたんだ…」

そこまで言っただけでシズクは再びレイの瞳を真っ直ぐに捉えた。

「気付いたら、目の前にシンジくん…自分自身がいて、自分は女になって、

この時間に飛ばされてた…何が起きたのかは自分でも分からない…
だけど、僕はこう思うことにした…これはチャンスだって、だから！」

シズクはレイの両手を握った。

レイはびくつと震える。

「レイ、これから先は君の協力が必要だ…父さんの…」

碇司令の計画を止めるにはダミーシステムの開発を阻止しなきゃならない」

「……………ダミーシステムの阻止…？」

「レイに何て説明してるかは知らないけどリッコさんから実験、させられてるだろう？」

レイの瞳がまた震える。

脳裏に浮かんだのはあの時のリッコの冷たい視線、自分を道具として扱う視線。

「それを、やめて欲しい…リッコさんや父さんに逆らうのは至難の業だと思っ…けど、

今、ダミーシステムの開発を止められるのはレイ、君しかない…！」

沈黙が二人を襲った。

突風が吹いた。

レイの唇が微かに動く。

その動きを見たシズクは優しく微笑むと

「ありがとう」

と言った。

「じゃあ、部屋に戻ろうか」

そう言ってシズクはレイの手を引っ張る。

「…………シズク」

「ん？」

「次の使徒は…いつ、来るの？対策は…？」

シズクは少しレイに近づき。

「明後日、浅間山の火口内で使徒が発見される…火口に潜るのはアスカだ、

注意すべき点は…」

それをレイの耳元に囁く。

やがて、ゆっくりと耳元から顔を離れた。

レイは静かに頷いた。

部屋に戻ったシズクたちを待っていたのはアスカとヒカリだ。

「遅かったじゃない！どこ行つてたのよ！？」

「ちょっと、散歩だよ、ね、レイ？」

「…え、ええ」

「レイ、顔色悪いわよ、大丈夫？」

「……………大丈夫…」

そう言つとレイは微笑んで見せた。

「そう、じゃ、行きましようか」

「どこに？」

「男子の部屋」

「アスカ、私は反対だつて…！」

「鈴原もいるわよー」

アスカがヒカリの耳元で囁く。

ヒカリの顔が熟れたトマトのように赤く染まる。

「決まりね！ほら、行くわよ…！」

ぐいぐいとヒカリの手を引っ張つてアスカは部屋を出て行つた。

「僕たちも行こうか？」

「…ええ」

そう言つと、レイはシズクの手を取つた。

…そう。

私もまた、知ってしまった。

未来を守る義務がある。

サードインパクトは起こさせない。

司令の思い通りにはさせない。

ミサトさんは、アスカは、碇くんは…シズクは…私が守る。

レイの紅い瞳に強い意志の光が灯つた。

マグマダイバー

つかの間の修学旅行を楽しんで帰ってきたシンジとアスカを待っていたのは

ミサトの差し出した学校の補習教材だった。

「学生の本分も忘れちゃダメよん」

「シ、シズクとレイはどうなのよ!?!」

「あの二人は成績いいのよ」

「……ぐっ」

・ネルフ内・プール・

「こんちくしょーっ!」

アスカが思いっきり水に飛び込む。

プールサイドの脇で真面目に教材と格闘しているシンジのところまで水しぶきが舞った。

「アスカ、やらないとミサトさんに怒られるよ」

「真面目ねえ、シンジは」

アスカがプールから上がってシンジに近づいた。

「で、今どこやってるのよ？」

「ん、ここだけど…」

そう言ってシンジはパソコンを指さす。

「何よ、この程度の数式が解けないの？」

アスカがマウスを数回クリックする。

「はい、とけた」

「え…？こんな難しい数式とけるのに何で学校の成績悪いの？」

「問題読めないのよ」

「それって日本語の問題が読めなかったってこと？」

「そう、向こうの大学じゃ習わなかったし」

「大学！？」

「あ、去年卒業したの、で、こっちのこれは何て書いてあんの？」

「熱膨張のことだけど…」

「熱膨張？幼稚なことやってんのね、
とどのつまり、暖めれば膨らんで大きくなるし、冷やせば縮んで
小さくなるってことじゃない」

「そりゃそうだけど…」

アスカは自分の胸に手をあてて

「私のおっぱいも暖めれば大きくなるかしら」

シンジは顔を真っ赤にして

「そ、そんなこと知らないよっ！」

と言って顔を背けた。

「アハハ、あんたからかいがあるわ、ミサトの気持ちもわかる
わね、」

ま、勉強頑張んなさい、私はもう一泳ぎしてくるから」

「う、うん」

そう言ってシンジはパソコンに目を向ける。

「シンジ、シンジー！」

アスカの声の方に目を向ける。

「見てみて！バックロールエントリー！！」

そう言うつとアスカはプールサイドからくると回転してプール内へと潜った。

気楽でいいよな…アスカは…

シンジは溜め息をつきながら苦笑した。

「これではよくわからんな」

「しかし、浅間山地震研究所の報告には気になる点が」

「もちろん、放置するわけにはいくまい」

「MAGIの判断は？」

「フィフティーフィフティーです」

「現地へは？」

「すでに葛城一尉が到着しています」

- 浅間山 -

「もう限界です！」

技術員が叫ぶ。

「あと600お願いします」

ベコツという音と共に観測機が潰れる。

「葛城さん！」

「壊れたらうちで弁償します、あと200」

ピーツと音が鳴る。

「モニターに反応」

「解析開始」

更に潰れる音がして、観測機が完全に圧壊した。

「解析は？」

「何とか間に合いましたね、パターン青です」

「間違いない…使徒だわ」

ミサトは部屋の中央へ振り返る。

「これより当研究所は完全閉鎖、ネルフの管轄となります。
一切の入室を禁じた上、過去6時間の情報は完全極秘事項としま
す」

ミサトは電話を手を取った。

「碇司令あてにA17を依頼して」

「気をつけてください、これは通常回線です」

「分かってる、早く守秘回線に切り替えて」

「使徒…これですか？」

「そう、まだサナギの状態だけど…この状態の使徒を出来るだけ
現状を保ったまま捕獲することを優先します」

リツコが呟く。

「出来なかったときは？」

「即時殲滅」

「そんなの楽勝じゃない、はいはい！私が出ます！」

アスカが手を上げた。

「私は何をすれば？」

「プロトタイプの零号機は換装出来ないのよ、今回レイは待機」

「…現地で援護くらいは出来ます、発進を許可してください」

リツコはレイの発言に少なからず驚いた。

レイの目が今までとどこか違う…？

「わかったわ、零号機も現場、火口付近で待機、これで文句ないわね」

「…はい」

「いやー！ーっ、何よこれー！ーっ！！」

ぷくーっ　と風船のように膨れ上がったプラグスーツを身に纏ったアスカが絶叫する。

「…ぷぷっ」

「シンジイ…今笑ったでしょ!？」

「わ、笑ってない、よ」

ぽんぽん跳ねてアスカはシンジに体当たりした。

「うわっ、何すんだよ」

「あははは、あんたなんかそうやって転げまわってるのがお似合いよ!」

とことことレイが高笑いするアスカに近づいた。

「ん?何よレイ」

とん、と軽く両手でプラグスーツを押した。

「ころころころころ。」

どん。

思いつきり転げまわって壁へと激突するアスカ。

「や、やったわね」

よろよろと立ち上がりバウンドしながらレイへと近づく。

「くうらえええええ!」

トウツとレイに体当たりをかますがレイはヒラリとそれをかわし

た。

アスカはそのまままた勢い良く転がって壁へと激突する。

「二人とも…何してんの…？」

シズクは苦笑しながらそのやりとりを見た。

「…出撃前の緊張をほぐそうかと」

レイがぼつりと呟く。

「緊張なんてしてないわよっ！」

アスカがゼーゼー息を乱しながら叫んだ。

「エヴァ各機、到着しました」

「各機は現場で待機」

「はい」

待機するシンジは空の上に微かに光る物体を見つける。

「何ですか…あれ？」

「UNの空軍が空中待機してるのよ」

「この作戦が終わるまでね」

リツコとマヤの声がシンジの問いに応える。

「手伝ってくれるの!？」

「いいえ、後始末よ」

「私たちが失敗したときにN2爆雷で使徒ごとここを焼き払うの」

「何それ!？ひつどい」

シズクは静かに目を開く。

「司令の命令ですか」

「そうよ」

「父さんが…」

クレーンに吊られた式号機が所定位置へつく。

『アスカ準備はいい?』

「いつでもどうぞ」

『…アスカ』

「何、レイ?」

『…プログナイフの位置、見直したほうが…』

「え?でも今身動き取れないわよ」

『…レイ?どうしたの、急に』

『…いえ、なんと、なくです』

ミサトの問いにレイは静かに答えた。

『…そう、発進!』

ミサトの号令に式号機が段々と火口へと迫っていく。

「うわぁ、あつつそー」

アスカが火口を見て呟いた。

「あ、そうだ、見て見てシンジ!」

『え?』

ガシャコンと式号機の両足が開く。

「ジャイアントストロングエントリー!」

そう言うつと式号機はマグマの中へと潜っていった。

「現在、深度170、進行速度20、視界はゼロ…何もわかんないわ、

CTモニターに切り替えます」

式号機のプラグ内がCTモニターへと移り変わる。

「これでも…透明度120か…」

- 浅間山、仮設本部 -

「…?」

「どうしたの、マヤ」

「いえ、3号機と零号機のシンクロ率が上がってます」

「式号機じゃなくて…?」

「はい、間違いなく、3号機と零号機です」

「シズク…?レイ…?どうしたの?」

- 3号機プラグ内 -

個人回線が繋がっている。

『…シズク』

「わかってる…タイミングは、外さないよ」

3号機がプログナيفを抜いた。

「3号機、プログナيف装備!」

「何してるの!?!シズク!?!?」

ミサトが叫ぶ。

3号機はプログナイフを思いっきり火口へと投げ込んだ。

「何してんの…あの子…」

「あ…」

マヤが驚きの声を上げる。

「今度は何？」

「いえ、弐号機…プログナイフをロスト…」

「なんですって!？」

「目標発見しました」

『え、ええ、それでは捕獲作業開始して』

「了解」

弐号機がゆっくりとサナギへと近づく。

キヤツチャーが使徒を囲んで捕獲した。

「捕獲完了」

『お疲れ様アスカ』

『アスカ、大丈夫？』

「あつたりまえでしょ、案ずるより産むが安しってね」

そうアスカが言った時だった。

使徒が変化を見せたのは。

『何！？』

『不味い、羽化を始めたんだわ！予想より早すぎる！！』

『捕獲中止、使徒迎撃を最優先！』

「武器が無いわよっ！」

『アスカッ！落ちてきてるだろ！使え！！』

「シズク！？」

アスカが上を見ると3号機のプログナイフが落ちてきた。

「助かったわ！サンキュー！！」

式号機がプログナイフを掴み、迎撃体制へと入る。

「こんのおおおおお!!」

式号機が渾身の力を込めた一撃は軽く弾き返された。

『この中で活動してるような物に…プログナイフじゃダメだわ…』

リッコが呟く。

『シンジくん、今日何の勉強してた!?!』

『シズク!? 何だよ今それどころじゃ…』

『…碇くん、いいから答えて』

『う、うん、熱膨張だけど…あ、そうか、アスカ!』

「私も気付いたわよ! シズク、頭良いじゃない!!」

式号機は冷却パイプを掴んで第8使徒サンダルフォンの口の中へと押し込む。

「冷却液の圧力を全て3番に回して! 早く!!」

マヤの指がアスカの指示とほぼ同時に動く。

過度の冷却液が使徒へとサンダルフォンへと流れ込み、大きく形が崩れる。

「こんのおおおおおおっ！！！」

止めと言わんばかりにアスカがナイフを突きつけた。

使徒が爆発、四散する。

「やったっ！」

そう言ったアスカの言葉とほぼ同時にガクンと弐号機が下がる。

「……！？バルブが……」

そのまま、ゆっくりと下降する弐号機。

「せっかくやったのに……ここまでなの……？」

アスカが悔しそうに呟いた。

僅かな振動を感じる。

初号機が弐号機の腕を掴んでいた。

『……大丈夫っ！？アスカ……！！』

苦しそうなシンジの声にアスカはふっと微笑んで

「無理しちゃって……でも、助かったわ、ありがとう」

「はー、温泉がこんなに気持ちいいなんて」

シンジはペンペンと肩まで温泉に浸かって一人呟いた。

「シンジー！」

「…？何ー！？」

「ボディーシャンプー、投げてくんない？こっちの無くなっちゃったのー」

「わかった、今、投げるよ」

「おーらい」

シンジは軽く、ボディーシャンプーを放った。

「あいたつ、どこ投げてんのよ！バカシンジー！」

「どれどれ、お姉さんに見せてみなさい」

「あらーアスカ肌スベスベ…羨ましいわあ」

「あん、どこ触ってんのよ、

でも肌はシズクやレイの方が綺麗なのよねー、悔しいことに」

「そ、そんなことないよっ」

「どれどれシズク、お姉さんに確かめさせなさい」

「ミサトさん！やめてくださいっ！っ！」

「何やってんのよ、レイ」

「……………確かめないの？」

「」「」「ぶっ、あはははははは」「」「」

女性陣の会話にぱかんと立ったままのシンジ。

シンジのある部分を見てペンペンが不思議そうに首を傾げた。

ざばっ温泉に勢いよく沈む。

「……………膨張してしまった……………」

シンジは恥ずかしそうに呟いた。

死角が下にしか存在しない使徒

「お断りします」

レイは強い口調できっぱりと言った。

「…何故？この実験の命令は司令からの絶対なのよ」

リツコが冷ややかな目でレイを見る。

「…誰の命令であろうと、もう私はこの実験には参加しません」

「…それはあの子…碇シズクの意味かしら」

そうです、と出かかった言葉を一口、飲み、

「…私自身の意思です」

と言った。

「この実験が成功しなければ、世界が守れないかもしれないのよ」

「…私は私のやり方でこの世界を守ります」

リツコがその言葉を聞いてかっとな手を上げる。

パシインと響く、乾いた音。

右頬を赤く染めながらもレイの瞳は揺るがない。

「何をされても、私の意志は変わりません…では」

そう言ってレイは人口進化研究所のドアを出て行った。

「…レイの謀反、か…」

冬月が呟く。

「間違いなくあの娘…碇シズクに何か吹き込まれています！」

リツコが荒々しく声をあげた。

「…ふむ、まさかとは思うが…こちらのシナリオが読まれているわけではあるまいな…碇」

冬月に問われたゲンドウはサングラス越しに不気味に笑うと

「問題ない、確かに今のレイは使えない…が、代理を用意すればいいだけのことだ」

「代理…しかし、魂が今のレイにある以上、安定しないぞ」

「ダミーの開発に支障をきたさなければ問題あるまい」

そう言ったゲンドウの言葉に軽く顎を当てて冬月は考え込む。

「ふむ… 赤城博士」

「はい」

「至急、『3人目』の用意を… もちろん全てに内密にな」

「了解しました」

「以後の実験は全て3人目を使って行え、データの入力書き換えも忘れるな」

「はい」

そう言つとリツコは司令室を出て行く。

「…しかし、やはり只者ではなさそうだぞ、あの少女は…」

「構わんよ、どうせ後もう少しの命だ」

冬月が巨大な窓の外を眺める。

「…例の3号機のシナリオか… 予定ではシンジ君の級友を使うのではなかったのか？」

「あの娘も今や級友だろう…」

ダミーの起動、使徒の殲滅、そしてあの娘の処理、全てが一度に

行える」

そう言ってゲンドウは手をサングラスに当てた。

「…シズク」

昼休み、レイはシズクへと声をかける。

「何？レイ」

シズクはお弁当のミートボールを飲み込むとそう答えた。

「…話があるの…屋上につきあつて」

レイの真剣な表情を汲み取るとシズクはお弁当箱を包み、

「わかった」

そう言ってレイと共に屋上へと向かった。

「…私、断つたの」

「何を…？」

「…例の、実験」

その言葉にシズクの顔が明るくなる。

「ホント!？」

「…ええ」

「良かった…ともかく、これは大きな一歩だよ!」

シズクは大はしゃぎでレイの手を取りぴょんぴょんと跳ねた。

「…………シズク」

「ん？」

「…………未来での私は…道具だったの？」

シズクはレイの問いにはしゃぐのをやめて真顔になる。

「…父さんやリツコさんにとっては、もしかしたらそうだったかも知れない…」

でも、僕の中では綾波レイはれっきとした1人の女の子だったよ」

それを聞いてレイの顔に微笑みが宿る。

「…そう、でも『今回』の私は司令や赤城博士の道具にもならない」

わ
」

「うん、レイはレイだよ、道具じゃない」

レイの言葉に満足そうにシズクは頷いた。

「…そうだ」

思い出したようにシズクが呟く。

「何？」

「明日、使徒が来る」

「明日…？」

「うん、なんか蜘蛛みたいな形をしたやつで…
確かネルフ本部の電気系統が全部落ちる事件も同時に発生したはずだ」

「…電気系統が、全部？エヴァはどうやって出撃したの？」

「父さん…司令が手作業で準備を進めてた、パレットライフルの射撃ですんなり倒せたから」

そんなに強くないとは思っけど、万全の体制はとっておきたい」

「…ええ」

「レイは明日アスカとシンジくんを早めに本部へと連れて行って…
僕は今から遠出をする『振り』をする」

「……………」

レイがシズクの意図を掴めないで首を傾げた。

「ちょっと離れたところで使徒を発見したって言って本部に戻るよ
上手く行けば、停電前にエヴァが出撃出来る」

「……………わかったわ」

二人は頷くと屋上を後にした。

- 翌日 -

レイは朝から学校へ行かずシンジとアスカをネルフ本部へと連れ出した。

「ちょっとレイ、どうしたのよ!？」

「綾波…学校、行かないの…?」

「……………いいから、今日は本部にいて待機してて」

「訳わかんないわね…大体シズクはどこに行ったのよ？」

「そっぴや昨日から姿見かけないけど…」

「……………多分、もう本部にいるわ」

「…あんたたちさあ、修学旅行からこっち、変よ、何かあったの？」

「別に何も…ただ、覚悟と決意が固まっただけ…」

アスカの問いにポーカークフェイスを保ったままレイは答えた。

「覚悟と決意…か」

シンジがぼつりと呟いた。

「ねえ…使徒って何なんだろう？」

「はあ…？あんた何言ってるの？」

アスカがシンジを見て溜め息を漏らす。

「使徒…天使の名を持つ、僕らの敵…じゃあ、使徒は何でここにやつてくるの？」

「知らないわよ、そんなの、向かってくるんだから倒すしかないじゃない」

「……………アスカの言う通り…私たちの目的は使徒のネルフ侵入の絶

対阻止…」

「うん、それはわかってるよ…でもさ、何で使徒はネルフ本部に向かうの？」

シンジの問いにレイは一瞬、躊躇した。

そして、その次に出てきた言葉はシンジとアスカに驚愕を与えるものだった。

「…使徒の目的はサードインパクトを引き起こすこと、自分が選ばれた種であることを認識するために…だから、本部地下にあるセントラルドグマにいるアダムを目指すの」

「「アダム!?!」」

二人は同時に叫んだ。

「そう」

「最初の使徒の名前よね?なんでそいつが本部の地下にいるわけ!?!」

「…そこまではわからない…司令は考えがあってやっているんだろうけど、

私はその考えを止めたい」

「父さんが…最初の使徒を、本部の地下に…?」

「なんでレイはそんなこと知ってるわけ？」

「…私が産まれたのは、母親のお腹の中じゃなかったの」

「は…？」

「…気が付いた時には私はここにいて、

司令や赤城博士の側にいたわ…だからあなたたちより深い事情も知ってる」

レイは立ち止まって二人の方に振り向いた。

「……………二人とも、約束して、私が今言った事は絶対に誰にも喋らないで」

「誰にもってミサトさんやリツコさんや父さんにも…ってこと？」

「…ええ」

「…シズク…にも？」

そう問うシンジにレイは少し頬を緩めると

「シズクは、もう…知ってるわ」

と言った。

「癪にさわるわね…」

アスカがぼつりと呟いた。

「…何が？」

「あんただけが自分の秘密を明かすことがよ！」

アスカがそう言つてレイを指差す。

「私たちは仲間でしょ！？ならあんたも私の秘密を知る権利…義務があるわ！」

そう言つとアスカは自分の胸に手を当てる。

「私は！昔ママに首を絞められた！！！」

フラッシュバックする記憶。

人形に向かつて「アスカ」と微笑む自分の母親。

自分の首を絞める母親。

洪水のようにアスカは自分の昔のことを言い放った。

とても、苦しそうに。

全てを言い終わったあと、アスカは溜め息をつく。

「…アスカも、辛かったんだ…」

シンジは俯いて呟いた。

「だから私のところにネルフが来て、選ばれた者だって言われたときには本当に嬉しかった。

ママにも見捨てられた私が唯一存在できる場所があるって分かったから……」

レイはアスカの肩に両手を置く。

「…何よ？」

「………… アスカのお母さんはアスカを見捨ててない」

「慰め？別にいいわよ、今更……」

「………… 弐号機を信じてあげて」

「はあ？」

レイはそう言って微笑むとわからないと言った顔をしたアスカとシンジの手を引っ張り、本部へと急いだ。

「三人とも、タイミングいいじゃない」

発令所につくとミサトが待っていた。

シズクが傍らにいる。

「今、シズクに未確認物体を見たって報告受けて確認、急がせてるのよ、使徒の可能性もあるわ、各自エントリープラグで待機して頂戴」

「了解」

そう言うと四人は着替えに向かう。

「で、確認出来た？」

ミサトはモニターを見てマコトに言った。

「はい、3時間後に第3新東京市圏内に入ります、間違いありません、パターン青、使徒です」

「シズクの遠足が役にたった、か…エヴァ各機、発進準備急いで！」

ミサトの号令と共に、エヴァが次々に地上へと打ち出される。

- 3号機・エントリープラグ内 -

『シズク』

モニターに忒号機エントリープラグの内部が写る。

個人回線でアスカがシズクにコンタクトしてきた。

「何？アスカ」

『あんたにもその内事情、話してもらっわよ』

「事情？」

『わかってるんでしょ、あんた、私のこと…』

シズクはモニター越しにアスカの表情を見る。

怒っているわけではなさそうだ。

極めて冷静に、アスカは話している。

『今、言えないなら別にいいわよ…でも、いつか必ず話してよね』

「…わかった、約束するよ」

そう言つとシズクはモニターに向かって軽く微笑んだ。

「目標…そろそろ圏内に…？」

そうマヤが言おうとした時だった。

発令所が突然、真っ暗になった。

「…何！？」

「電気系統が…落ちた…？」

「ダメです、モニタリング全てダウンしています」

「モニタリングどころか全部の機能が麻痺してますよ！」

シゲルがコンソールを叩きながら大声で叫ぶ。

「…ただの停電なら主・副・予備がある本部の電源は1〜2秒で復帰するはずよ、

それが復帰しないのはおかしいわね」

リツコが顎に手をあてて呟いた。

暗い司令室から冬月とゲンドウがその様子を眺める。

「所詮、人類の敵は人類…ということか」

「エヴァは出撃している…何が狙いだっただのかは知らんが徒勞にすぎん」

・初号機・エントリープラグ内・

「…発令所との連絡が途絶えた？」

シンジが呟く。

『私もダメだわ！』

『…私も』

『僕もだよ』

見ると3号機が指をさしているのが見えた。

『あっちの方から使徒がやってくるのを見た、ミサトさんの指示が無い以上、僕らで迎撃するしかないよ』

『ま、そうよね、やってやろうじゃないの！』

『…各機…武装は…？』

「パレットライフルとプログナイフ…何時も通りだよ」

『こんだけあれば上等！どこからでもかかってきなさい！』

『来た！』

シズクの叫びとともにオレンジ色の溶解液がエヴァ各機を襲った。

『散開するわよ！四方を囲んで射撃！！いいわね！？』

アスカの指示。

「『了解！』」

四機はそれぞれ第9使徒マトリエルを囲んだ。

『てえ！』

チュトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥトゥ！

四方からの攻撃に全く怯むことなく前進するマトリエル。

全身をA・T・フィールドに包み、銃撃をものともせず本部直上へと移動する。

四機は時折飛んでくる溶解液をかわしながら、絶えず撃ち続けた。

おかしい…前回の時は一撃で沈んだのに…

シズクは溶解液をかわしながらパレットライフルを撃ち、疑問を抱いた。

あの時と何が違う…？よく考える…

『…シズク』

レイからの回線。

「…わかってる、こんな頑丈なやつなはずじゃなかった…何か見落としが…」

そこでシズクは前回との違いに気付いた。

「そうか…こいつ…下が弱点なんだ…！」

『…下？』

「うん、多分…だけど」

そう言うとシズクは全機にコンタクトを取った。

「みんな、作戦がある！」

『作戦…？』

『このまま撃ち続けても意味なさそうだし、乗ってやるっじゃない』

「僕とシンジくん、レイでこいつに接近、溶解液を受ける覚悟でやつを半身を浮き立たせる」

『私はどうすんのよ?』

「アスカは今こいつが地面を向いてる側…お腹って言うのが正しいのかな…」

それが向いたらそこを攻撃するんだ」

『…それで倒せるの?』

シンジが不安そうに呟いた。

「多分…ね」

『あんたが言うんならきつと倒せるんでしょう…』

どのみちやらないと本部に辿り着くわよ、こいつ…!』

「うん、みんな…やるよ!」

『『『了解』』』

式号機がバックステップしてパレットライフルを構える。

残る三機がその前に立ち、マトリエルの長い足を一本ずつ持つてそのまま力任せに持ち上げた。

三機に降りかかる溶解液。

A・T・フィールドを中和しながら持ち上げてるために自身のフィールドも張れず、三機はまともにそれを浴びた。

「ぐ……うつうつうつ……！」

『……………っ』

『負ける……もんかあああ……！』

三機は両腕をドロドロに溶かしながら、マトリエルを押し上げた。

「アスカ！」

『喰らいなさいよおおおおお……！』

シズクの掛け声と共にアスカはパレットライフルの引き金を絞った。

マトリエルの腹を貫通して、銃弾は轟音を轟かせる。

やがて、マトリエルから溶解液の噴出が無くなり、ゆっくりと地面に沈んだ。

『あんたたち！大丈夫！？』

「はあ…腕はぼろぼろだけど、なんとか、ね」

『…私も、無事』

『僕も大丈夫だよ』

三人はそう言つと両腕をだらりと下げた。

昇進パーティー

朝の葛城邸 -

いつもの様に朝食を用意するシズク。

アスカが加わってからメニューを余分に考えなければいけない分
手間がかかってはいたが（アスカの好物は肉全般、レイとは反対
なのである）

シズクは苦に思わなかった。

むしろメニューを考えるのを楽しんでいる節さえある。

珍しく、ミサトが早くから起きてテレビを見ていた。

アスカと雑談しながら朝のニュースを眺めている。

レイとシンジはシズクの手伝い。

先日からレイが私も料理を覚えて見たい、という真摯な意見に
たく感動した

シズクは何回も頷いて、基本的なことからレイに教えている。

興味を持つ、というのは本当にいいことだ。

と、シズクは思う。

アスカやミサトさんにも見習って欲しいのに

そう思って談笑する二人を見て苦笑する。

ピンポーン。

不意に、玄関のチャイムが鳴った。

「誰かしら、こんな朝早く？」

「アスカー、こっち手離せない、お願い」

「はいはい、わかったわよ、もう誰よ、全く」

ブツブツと文句を言いながらも特別嫌な感じを覚えることもなくアスカは立ち上がった。

「はい」

ガチャッとドアを開けるとそこには

トウジとケンスケ、ヒカリが立っていた。

「なしたの……？あんたら……」

「何って、迎えに来たのよ、ちょっと早かったけど…」

「あほ、こういうんはな、何事も早い方がええんや」

「そうそう、あ、惣流、シンジは？」

「誰か呼んだー？」

台所の方からシンジの声が聞こえる。

「誰も呼んでないわよ」

アスカが声を返す。

「おいおい、惣流」

「何ぼさつと突っ立ってんのよ、上がりなさいよ」

「あ、うん、お邪魔します」

アスカに促されると三人は葛城邸へと足を踏み入れた。

「あら、三人とも、いらっしやい」

「な、何々？どうしたの！？」

あまりの叫び声に料理陣もこぞってリビングへと集まってくる。

ミサトはきょとんとケンスケを見た。

「どないしたん？ケンスケ、そない大声だしおって」

「しょ、昇進おめでとうございます！」

そう言っケンスケはミサトに敬礼をする。

「昇進…？」

「へえ…ミサト、偉くなったんだ」

「そうか…今日だった、か」

「ん、ありがとう」

そう言っミサトはケンスケに微笑みで応える。

「なあ、明日学校休みだし、お祝いでもしようぜ！」

「そら、ええなあ！」

「いいじゃない、眼鏡のくせに中々良いこと思いつくじゃないの」

ケンスケ、トウジとアスカはノリノリであった。

「でもミサトさんにも都合とか」

「明日ね？いいわよ、別に」

「……………いいんですか？」

「何よレイまで、別に特に差し迫った仕事は無いし、明日の夕方には帰ってこれると思うわ」

「それじゃあ、明日、場所は…ここでいいですよね」

シズクが纏めに入る。

こうして、葛城ミサト一尉 三佐昇進パーティーが立案された。

翌日、ネルフ本部。

ミサトは自動販売機の前で立って自分の襟元の階級章を見る。

昇進…か…

ガコンと自動販売機からコーヒーが落ちてくる音がした。

「ほら」

差し出したのは加持だった。

「加持くん……」

「昇進、おめでとう、これからはタメ口聞けないな」

「何よそれ、嫌味？」

「いやいや、本心さ」

「……まあ、素直に受け取っておくわ、ところで加持くん、夕方から空いてる？」

「お、デートのお誘いかい？」

「馬鹿ね、子供たちが私の昇進パーティー開いてくれるって言うからあんたもどうかなって思っただけよ」

「あー、行きたいんだけどな、残念だが生憎仕事があるんだ」

「あら、珍しい」

「使徒が来る気配は無いんだろう？リツちゃんやオペレーターの面々を誘ったらどうだ」

「そうね、そうするわ」

- 発令所 -

「と、いうわけなんだけどみんな、来る？」

ミサトの問いにオペレーター三人は目を輝かせた。

普段、ミサトからシズクの料理の腕前は聞いている。

プロ顔負け。人生に一度は食べなければ損な味。

特にマヤはもう既にどこか別の世界へとトリップしたような顔をして両手を組み、天井を眺めていた。

「…料理を作るのは…シズクちゃん、ですよね？」

そう聞いたのはシゲルだ。

「多分ね」

「」「行きます！」「」

ミサトの返答とほぼ重なるように三人は即答した。

・リツコの研究室・

「昇進パーティー？あなたの？」

「そう、子供たちが張り切っちゃってさ」

「それに私も参加しろと？」

「嫌なら別にいいのよ」

「別に断ってないわよ」

「なら来るのね？」

「時間が合えば、ね」

そう言うとりツコはコーヒーを一口すすった。

・夕方・葛城邸・

食卓には全員分の料理が乗り切らないのでリビングにある大きなテーブルに次々とシズクの渾身の手料理が運ばれる。

その一品一品を運ばれてきては「おー」と言う歓声を出し、唾を飲み込むオペレーター三人組。

シンジとレイはシズクの作った料理をせっせと運んでいる。

アスカ、ヒカリは飲み物を買に出ていた。

ケンスケは記念すべき日だとか何とかブツブツ言いながらハンデイカムのチェックに余念が無い。

トウジは一人腹を鳴かせながら「まだかあ?」と言っている。

そして、全ての料理が出来上がったとき、丁度アスカとヒカリが到着。

ついでにそこで会ったとリッコとミサトも合流していた。

リッコとミサトの両手には山のようなお酒が抱えられていた。

「ミサトさん…そのお酒、どうするんですか…?」

「どうって、飲むに決まってるじゃないの、シンちゃん」

「…そんなに?」

「私だけじゃないわよ、リッコもいるから今日は」

「リッコさんも飲まれるんですか?」

「ミサトに付き合っていると肝臓の機能が強化されるみたいなの」

リッコはそう言うと冷蔵庫を開けて次々に飲み物を閉まってい

「えー、ごほん、では、葛城ミサト三佐承認を祝って、かんぱーい！」

ケンスケの音頭が高らかと響き、みんなのグラスが高く上がった。

「お…美味しい…」

そう言っただけで唐揚げに手をつけたマヤが至福の顔をした。

ああ、シズクちゃん、本当にこんなに料理が上手だなんて。

うちに来てくれないかな。

マヤが箸を口に入れたままじっとシズクを見る。

シズクはマヤの視線に気付くと微笑みを返した。

料理も出来てしかも可愛い！

ああん、もう、葛城さんばかり独り占めなんてずるい！！

- 夜 -

みんな、寝静まったところ、ミサトはちびちびとえびちゅを煽っていた。

「…昇進、か…」

「嬉しくないんですか？」

そう不意に声をかけられた。

「…シズク…寝てたんじゃなかったの？」

「たまたま、目が覚めたんですよ」

「…そう、…丸つきし、嬉しくないわけじゃないのよ、そりゃ、私の努力が認められたってことなんだからさ」

そう言ってミサトはベランダに出た。

「ね、こっち、来ない？」

「はい」

そう言ってシズクもベランダへと出る。

「私、別に偉くなりたくてネルフに入っただけじゃないのよ」

「…なら、どうしてネルフに入っただんですか？」

「使徒…」

ミサトの顔は微笑みを崩さない。

シズクはそんなミサトの顔をじっと見つめていた。

「私から全てを奪ったセカンドインパクト、その原因である使徒に復讐するため、

そのためだけに私はネルフに入って、あなたたちに常に危険と隣り合わせの目に遭わせているの

私の父はね、自分の研究、夢の中に生きる人だったわ、そんな父が嫌いだった、憎んでさえいたわ

けど…最後は私を庇って死んだ、セカンドインパクトの時に、ね…

結局、私はセカンドインパクトを起こした使徒への復讐を果たしたい、それだけなのよ」

ミサトはそう言うとしズクの方を向く。

「…失望したでしょ、こんな個人的な理由でネルフに入ってる私に」

「そんなことあるわけじゃない」

声が聞こえたのは部屋の中からだった。

アスカとレイ、シンジが立っていた。

「誰だって個人的な理由が最初の動機です、僕だって自分が変わるためにエヴァに乗ってる。」

それってミサトさんの復讐…と何か変わりありますか？」

「……………私も、失望なんかしません」

その三人の言葉に続くようにシズクがミサトに右手を差し出した。

「僕も三人に同意見ですよ、ミサトさんがどんな理由で使徒と対峙しようとするかは関係ありません。

大事なものはミサトさんが命を預けることに信頼が置けるかどうかですから」

「あんたたち…」

ミサトは目頭が熱くなるのをぎゅっと我慢した。

そして笑顔でシズクの手を取る。

「これからも…よろしく頼むわね、みんな」

「まっかせなさいよ！」

「…はい」

「はい」

「ミサトさんも…ですよ」

そう言って四人も微笑んだ。

- 数日後・元南極大陸海上 -

「いかなる生命の存在も許さない死の世界、南極、いや地獄だな」

冬月が呟く。

「だが我々人類はここに今立っている、生きてな」

「科学の力で守られているからな」

「科学は人類の力だよ」

「その傲慢が15年前の悲劇を産んだのだ…結果、この有様だ」

「だが現在の穢れなき浄化された世界だ」

「罪に犯されていても人類が存在する世界を私は望むよ…」

ブーッ。

艦内にアナウンスが響く。

『ネルフ本部より入電！インド洋上空に使徒発見！！』

- ネルフ本部 -

「映像を補足」

発令所のモニターに使徒の姿が浮かぶ。

「こりゃ…凄い」

「常識を疑うわね」

使徒の幾何学的な姿を見て呟くスタッフ。

「接触します」

サーチシステムが使徒に接近したその時、
ベコッという音がして
システムは破壊された。

「A・T・フィールド!？」

「とりあえず第一射は太平洋に大外れ」

モニターを見て、リツコが呟く。

「爆弾みたいなものですかね…」

「とんでもない威力ですね」

「さっすがA・T・フィールド」

「で、第二射はここ」

モニターが確実に日本へと迫る。

「確実に近づいてるわね」

「次は来るわね」

「本部に、本体ごと、ね」

「その時は第3芦野湖が誕生かしら」

「富士五湖が一つになって太平洋と一つになるわ、本部ごとね」

・ 作戦司令室 ・

「落ちてくる使徒をエヴァで受け止めるう!?!」

「そう」

「落ちてくる場所を誤ったら…?」

「その時はアウト…」

「そんなの作戦って言えるの？」

「言えないわ、だからあなたたちは放棄することが出来る」

暫しの沈黙。

誰も放棄はしなかった。

「…いいのね？」

「当然でしょ！」

アスカが腕を組んでそう言った。

「この前、僕たちが言ったこと…忘れたんですか？」

シズクもアスカに続いてそう言った。

「…ありがとう、これ終わったら、ステーキ奢るから」

「本当っ！？」

「わあい！」

「期待してて」

そう言つとミサトは発令所へと戻った。

ミサトの姿が完全に見えなくなるのを確認してアスカが肘でシン

ジをつんつん突く。

「何が、わあい、よ、もうちょっとマシな演技出来ないの？」

「そ、そんなこと言ったって」

「さて、と」

「ごそごそとアスカは鞆から「東京グルメ」と書かれた雑誌を取り出した。

「折角、ご馳走してくれるっていうんだから、いいところ探さないとね」

「…………ラーメン」

レイが呟いた。

「ラーメン？」

「…………私、美味しいラーメン屋さんを知ってるわ」

「じゃ、そこにしましょ！」

「後は、止めるだけだね、使徒を」

「ええ！」

そう言つとアスカは両手をパンッと合わせた。

- 式号機・エントリープラグ内 -

…式号機を、信じてあげて、か

アスカはふと先日、マトリエル戦の時にレイに言われた言葉を思い出していた。

「とは言っても、ロボットのあんたに心なんてあるわけないし…ねえ？」

そう言って操縦桿をこんこんと叩く。

『作戦、スタート！』

その時、ミサトの号令がかかった。

一斉に駆け出す、三機のエヴァ。

アスカが思考していたために一瞬出遅れる。

「…なに、やってるのよ…私は…!!」

焦って式号機を走らせるアスカ。

「急ぎないさいよ！私はあんたに命預けてるんだからね！！
あんたも、私の言う事くらい聞きなさいよっ！！！！」

そう言っ て操縦桿を握り締めた。

ドクン…

アスカの脳裏に見覚えのある光景が浮かぶ。

一面のひまわり畑。

そして、優しく微笑む自分の母親の姿だった。

…ママ…？

式号機の、シンクロ率が跳ね上がった。

音速を超え、落下予測ポイントへと駆ける。

シンクロ率は95・6%をマークした。

アスカ覚醒

ママ…間違いない、この感じはママだ！

アスカの顔に笑顔が満ちていく。

ここにずっといた！

ママは私を見捨ててなかった！

ずっとこの場所で、エヴァの中で、私を守ってくれてたのね！！

弐号機はどんどんとスピードを増す。

待ってて、ママ！！今、私がママと一緒に活躍してあげるから！！

アスカは操縦桿を強く握った。

3号機は目もくれず、前回落ちてきたポイントを目指す。

今回はスピード勝負だ。

求められるのは安定したシンクロ率じゃない。

爆発的なスピードとパワー。

それだけだ。

シズクの中のスイッチが入る。

『さ…3号機、シンクロ率…168%…！』

回線越しにマヤの驚愕する声が聞こえる。

シズクにその声は届かない。

見えているのは遥か上空より迫ってくる使徒の影。

初号機、シンジは予測落下ポイント3箇所を見つめながら、
自分に一番近い場所へと全速力で駆ける。

「僕がしっかりしないと…他の3人に迷惑だけは、かけたくない…
」

初号機はA・T・フィールドを足元に展開するとその衝撃をバネ

にして一気に目的地へと飛んだ。

零号機、レイは冷静にしかし、真っ直ぐな瞳で事前にシズクから聞いていたポイントへと走る。

「……………みんなは…私が守る…！」

だから、そのためにも、

…力を貸して。

私の分身、もう一人の私、リリース、零号機。

レイのシンクロ率もまた70%を超えた。

四機のエヴァがほぼ同時に同じ場所に着いた。

「…………ええ」

レイは張られた4つのフィールドの中央。

使徒の目玉の部分だけを確実に侵食、中和してフィールドを剥がした。

「はあああああ!!」

3号機のプログナイフが使徒の目玉に突き刺さる。

「とどめえええええええええええええええ!!」

式号機が手を真上に折りたたむように振るった。

式号機のA・T・フィールドが使徒の目玉へと凝縮する。

パアアアアアアアアアアアアアアアという音と共に、使徒の体が二つに裂けた。

そのままゆっくりと垂れ落ちる使徒。

使徒は十字の光の柱となって虚空へと消えた。

「お疲れ様」

「「「「「.....」」」」」

ミサトの労いの言葉に沈黙する四人。

「...どうしたの？」

「ミサト」

「なに、アスカ？」

「私、わかったの、A・T・フィールドの意味。エヴァの本当の意味」

アスカの言葉にリツコの眉が僅かに上がる。

「ママは私を見捨ててなかった！もう、私は誰にも負けない、ママが守ってくれるから！！」

「??？」

ミサトはわからない、といった顔をしたが、ふっと笑うと

きつとアスカが今回で「何か」を掴んだんだろうと、そう思うことにした。

それにしても驚かされた。

作戦の成功に、ではない。

今回の四人のシンクロ率に、である。

アスカの95・6%。

シンジの94・8%。

レイの74・3%。

そして、シズクの168・2%だ。

「本当にありがとう、あなたたちにはいくら感謝してもしきれないわね」

ミサトがそう言うとしズクは静かに首を横に振った。

「それは違います、僕たちが頑張れるのはミサトさんたちを信頼しているからです」

「そうですよ」

シズクとシンジがそう言った。

「…信頼、ね」

リツコが一人聞こえない声で呟いた。

「南極の碇司令より通信が入っています」

「繋いで」

モニターにSOUND ONLYの文字が浮かび上がる。

『…良くやった、葛城三佐』

「いえ、褒めるのは私じゃなくてパイロットにしてあげてください」

『…そうだな』

少し、沈黙を置いて。

『初号機パイロット』

「は、はいっ」

『…よくやったな、シンジ』

「…は…はい」

シンジは若干戸惑いを覚えつつも、素直にその言葉を受け取った。

・ルノー車内・

「さ、約束なんだから、奢ってもらわよ」

「わかってるわよ、大枚下ろしてきたからフルコースにだって耐えられるわよ」

…給料日前だけど

ミサトは内心うげつと唸った。

「あ、ここ、右ね」

「はいはい」

ルノーが右に曲がる。

「ここよ、ここ」

「ここって…ラーメン屋？」

「レイがこのラーメンすっごく美味しいって言つたのよ」

「いや、でもラーメンなんて何時でも食べれるわよ？」

「じゃあ、ミサト、シズクの料理以上の店にでも連れてってくれる

わけ？」

「うぐっ」

シズクの料理以上、となると間違いなくそれは5つ星がつく超高級レストランになるだろう。

はつきり言ってミサトにそんな金は無かった。

「…………私、にんにくラーメンチャーシュー抜き」

「私はふかひれチャーシュー！大盛りでね！、シンジとシズクはどうする？」

「あ、僕は普通の醤油ラーメンで」

「何よ、ミサトの奢りなんだから遠慮すること無いわよ、シンジ」

「す、好きなんだから仕方ないだろ、醤油ラーメン」

「ま、いいわ、シズクは？」

「あ、僕も醤油ラーメンでいいかな、あ、ネギ大盛りで」

「へい、まずはふかひれチャーシュー、お待ちね！」

アスカの前に豪勢なふかひれが器に乗ったラーメンがやってくる。

「どれどれ」

豪快に音を鳴らし、ラーメンを啜るアスカ。

「うん！確かに美味しいじゃない！良くこんな店知ってたわね、レイ」

「…………ええ」

レイも次に出てきたにんにくラーメンを音を立てずに食べながらそう言った。

「……ミサトさん」

「うん？」

「今日、父さん……褒めてくれましたよね」

「そうね」

「今まで、シズクに会ってから、結構色んな人に褒められたけど今日のが一番嬉しかったです」

「あんたバカア？」

アスカが横に割って入る。

「な、なんだよ、僕、何か間違ったこと言った！？」

「違つわよ、逆よ逆」

「…逆？」

「身内に褒められるのが嬉しいの決まってるじゃない、あんたそんなことに今まで気付かなかったわけ？」

「…うん、そう…だね、気付かなかった、確かにアスカの言う通りだ」

「これから、もっと褒められるようにすればいいのよ、簡単なことじゃないの」

「そう、だね、うん、そうだ」

「もちろん、だからと言って手を抜いたりはしないわよ、私だって見てもらう人がいるんだから」

「え…？」

「いいの、どうせ言っただって信じるわけないし、私だけが納得すればそれで」

二人の会話を聞いてシズクとレイは顔を見合わせる。

そしてくすくすと笑い出した。

「何よ、二人して、私、何か面白いこと言った？」

「ううん、違うよ、ただ良かったなって」

「……………信じれたのね、式号機のこと」

レイの言葉にアスカがラーメンを啜るのを止めて、少し沈黙した後、微笑を漏らした。

「…さあ、どうかしら、私、捻くれ者だもの」

そう言つと五人は楽しい夕食を終えた。

第一回シズクを女らしくしようの会

とんとんとん。

日曜。朝の葛城邸。

シズクは何時も通りに半袖とジーパンという格好で包丁を握り、器用にネギを刻んでいた。

「ふあゝあ…おはよう、シズクウ…」

アスカが欠伸をしながら椅子へと腰掛ける。

「あ、おはよう、アスカ、今、朝ご飯できるから」

「シンジたちは？」

「シンジくんなら顔洗ってるよ、レイはもうすぐ来るんじゃないかな？」

「ミサトさんはまだ寝てる」

「相変わらずの寝ぼすけなのね」

アスカは肩肘をテーブルに乗せて顎へと手をやるとぼんやりとシズクを眺めた。

「…シズクウ」

「何？」

振り向かずに包丁を動かしながらアスカの声に反応するシズク。

「あんたさあ、何でいつもそんな男っぽい服着てるわけ？」

「…はっ？」

予想だになかった質問を受けて思わず手が止まってしまっ

「べ、別に何を着ようと僕の勝手だろ？」

「あんた、いい線行ってるんだから、勿体無いわよ」

「そ、そんなこと言っ たって…」

「そっだ！今日付き合いなさいよ、買い物行くわよ！！」

「え？」

「……………賛成」

と、どこから入ってきたのかいつの間にかアスカの側に立っていたレイがぽつりと呟いた。

「うわぁ！？レイ！何時からいたの！？」

「し、心臓に悪い登場の仕方、やめてくんない！？」

二人は胸を押さえながらレイに向かってそう言った。

「…………早くご飯食べて、行きましょう」

「…ホントに行くの？」

「…………ええ」

そう言つとレイはシズクの耳元まで口を当て、

「あなたは女であることにもう少し自覚を持ったほうがいい」

と言つてのけた。

ちなみにレイも最近はお洒落をするようになってきている。

もっかお気に入りはネコの小物と淡い青のワンピースの収集である。

アスカにいたつてはもつと派手だ。

ネルフの給料をほとんど洋服やアクセサリーにつぎ込んでいるのではなからうか。

「うゝ…わかったよ、行けばいいんだろ、行けば」

「よろしい、じゃ、さっさと朝食にしましょ」

そうアスカが言った所でシンジが洗面所の方から出てきた。

「何？どっか行くの、みんなして？」

「女同士の話よ、シンジには関係ないでしょ」

「な、なんだよその言い方、酷いなあ」

「アスカとレイが服買いに行こうって…」

ははっと笑いながらシズクが言った。

「服か…いいんじゃない？三人で行って来なよ」

「言われなくったってそうするわよ」

そうアスカが言ったときガラツとリビングの扉が開いた。

「ふっふっふ…聞かせてもらったわ、今の話」

「ミサト…寝癖、直したら？」

アスカに指摘されて、ミサトは手櫛でぱっと頭に手をやると「ほん、と一つ咳払いをした。

「その作戦、私たちネルフサイドも参加しようじゃない！」

「……はあ…？」

突然意味不明なことを言い出すミサトに呆れ顔で答える。

昨日のお酒がまだ残ってるのかもしれない。

シズクがそんな失礼なことを考えていると、ミサトは携帯を取り

出して電話を掛ける。

「あ、リツコ？今日暇？え、ダメ？何よ、けち」

ブツツと電話を切って次のところへ電話。

「あ、マヤちゃん、今日暇よね？え、仕事？日向君にでも押し付けなさい、

大至急頼みたいことあるの、ええ、30分後、家に来て頂戴、お願いね」

そう言つとピツと携帯の電源を切るミサト。

そしてシズクの姿をまじまじと見つめる。

「いやゝ、前つからシズクにその服は似合わないと思ってたのよ」

「でしょ？どんなのが似合うかしら」

「……………少し思い切つたのとか」

女三人寄れば姦しい。

ミサトとアスカとレイの会話を聞いてシズクは頭が痛くなってきた。

30分後、玄関のチャイムが鳴る。

「…大至急頼みたいことつて…これですか…？」

マヤは急いで来たのが馬鹿らしくなって大きくため息をついた。

「そうよん、それにマヤちゃんにもちゃんと恩恵あるわよ」

「恩恵？」

「シズクが一番いいと思った服を選んだ人は、

なんと1日朝、昼、晩、シズクが手料理を振舞ってくれるわ！」

次の瞬間、がしつとミサトの両手をマヤの両手が包み込んだ。

「やります！」

キラキラと目を輝かせて、もう気分は5つ星レストランの展望台にいる気分のマヤ。

それってマヤさん以外は全員毎日やってもらってるような…

シンジは単刀直入に突っ込んでいいのかわからず
苦笑いしながら女の戦いを見守っていた。

・第3新東京市・ショッピングモール、ブランド品売り場・

ネルフの職員ともなると高給取りである。

ブランド品の値段などそこらのセール品と変わらない感覚で買え

てしまう。

と、いうわけでシズクを引き連れた
アスカとレイ、ミサト、マヤご一行はブランド品売り場へとやってきた。

「勝負は3時間、それまでにシズクにこれだ！って言わせた人間の勝利よ、いいわね？」

アスカがひそひそと話す。

「……………了解」

「OK！」

「わかりました」

三者三様の答えを出して四人はそれぞれ四方へと散った。

ぽつんと残されたシズクは仕方ないので大人しめのワンピースあたりを見て回る。

「シーズークツ！」

一番手に名乗りを上げたのはミサトだ。

「どう、これ！？」

シズクに突きつけられたのは何ともミサトらしいというかまあ、
アダルティな感じが
ぶんぶん匂ってくる衣装だった。

「中学生にこの服は似合いませんよ…」

はあ、と溜め息をついてシズクはNGを出す。

「次々、私ね！」

二番手、アスカが登場。

これまた、中学生にしては飛びすぎている、というかなんという
か。

「二人とも…真面目に選んでくれる？」

流石に突っ込んだ。

「露出が高いよ…」

「こんなん高いとか言ってるようじゃダメよ」

「ねー」

アスカとミサトは二人できゃいきゃい笑い合いながらそう言った。

「ほら、試着、試着」

どんとシズクの背中を押して試着ルームへと誘うアスカ。

「もう、強引なんだから…」

ぶつぶつ言いながらシズクは試着ルームに入った。

「こんなの…似合うわけじゃないか…」

露出狂のサンタにでもなるのかというその赤い衣装をとりあえずは着てみるシズク。

文句を言いながらも着てしまうのはシズクだからといったところだろう。

「出来たー？」

「うん」

シャツと仕切っていたカーテンが開けられる。

「へえ、やっぱり似合うじゃない」

「そうかな…派手すぎるような気がするけど…」

「キヤー！」

そのシズクの姿を見て叫んだ者がいた。

マヤだ。

「な、なんて格好させてるの！アスカ！！」

顔を真っ赤にしてマヤは試着ルームのカーテンを閉めた。

「直ぐに脱ぎなさい、シズクちゃん！」

「は、はい」

余りの勢いにちよつとたじろぎながらシズクは返事した。

「やっぱり私が来て正解だったわ、あんな格好、不潔よ」

マヤは一人うんうんと頷きながら手に持つてゐる服をカーテンの奥にいるシズクに渡す。

「脱いだらこれに着替えてね」

「…はい…って、ええええええ！！？」

マヤから受け取った衣装を見てシズクは驚愕した。

正直、こんな服着て歩いている人見たことが無い。

何と言えはいいのだろう、

まるで漫画やゲームに出てくるキャラクターのフリフリとした服がそこにあった。

嫌な予感しかしないが一応試着するシズク。

どこまで行っても律儀である。

「あ、あのお…着ましたけど…」

「どれどれ？」

シャツとカーテンを開けるマヤ。

「キヤー！やっぱり思ってた通り似合うわ！シズクちゃん！」

「あの…マ、マヤさん、本当にこれ着て、表出るんですか？」

「そうよ、何か変かしら」

「変に決まってるじゃないの！どこのコスプレよ、この服は…！」

「えー、可愛いのに」

「……………次」

四人の後ろにまたもいつの間にかレイが立っていて両手に抱えきれないほどの服を持っていた。

「レイ…それ、全部着るの？」

「……………ええ」

「はあ、わかったよ」

そう言うとしズクは服を受け取って三度、カーテンを閉める。

レイの選んだのはどちらかと言うと機能美が優先されたデザイン
のものが多かった。

色は淡いものが多い。

自分に重なるのだろうか、心なしかワンピースが多めだった。

その中で少し、シズクの目に留まったのが大人しめの淡いピンク
の水玉の
シフォンワンピース。

胸元にリボンは付いていたがそれ以外にはそんなに装飾品は付い
てなく、

着心地も悪くない。

うん、これで…いいかな。

シャツとカーテンが開いた。

「い、これにするよ、レイの選んできたこの服に」

「えー!!」

一番がっかりしたのは当然マヤだ。

シズクの作ったあの料理もこの料理も泡となって消えたのだ。

膝からがつくりと崩れ落ちよよと泣いている。

「マヤさんも選んでくれてありがとうございます、お礼と言ってはなんですけど今晚、家でご飯食べませんか？」

そのシズクの言葉にがばっと涙を重力に引かれさせながらマヤが起き上がった。

「い、いいの!？」

「ええ、ミサトさんが強引に付き合わせたんですからそれくらいしないと悪いですし」

そう言つとニツコリと微笑む。

ああ、神様ありがとう！

前に食べたシズクちゃんの料理の味が忘れられなくて、自分でも散々勉強してみたけど、どうしても美味しくないかなくて半ば諦めかけてたあの味にもう一度ありつけるなんて…！

マヤは一人夢の世界へとトリップしていた。

「んじゃ、会計済ませて帰りましょうか」

アスカがそう言うのとレイの持ってた服を全部カゴの中にぶちまけた。

「ちょ、アスカ、それ全部買うとは……」

「何言ってるの、あんた、マトモな服ほとんど持ってないんだから、このくらいパーツと買ったほうがいいの！」

そう言うつとアスカはシズクからカードをふんだくる。

「これ、お願いしまーす」

「ぜ、全部でございますか？」

店員の顔が若干引きつっているのがわかった。

普通の中学生に買える金額ではない。

当然の反応だろう。

「そ、全部よ、いくら」

「は、はい、少々お待ちください……」

そう言うつと高速でレジを打つ店員。

その死闘は20分に及んだ。

「合計で42万6570円になります」

「カードで、お願いね」

「畏まりました」

「シズク、暗証番号」

「ちよつ、待つてよ、約43万だよ!？」

「いいじゃない、あんた、今いくら残ってるのよ?」

「うつ…5ゝ600万、だと思っけど…」

「何の問題もないじゃない」

結局、アスカに強引に丸め込まれてシズクは泣く泣く暗証番号を押した。

こうして第一回「シズクを女らしくしようの会」はレイの勝利で幕を閉じた。

しかしシズクは知らない。

この直ぐ後に第二回「シズクに女らしい小物を集めさせようの会」が

レイから提案されるのを…。

そして、小物なのに何故か20万を越す出費を捻出されることを…。

とりあえず、シズクの今考えていることは。

この服、どこに仕舞おうか……であった。

第一回シズクを女らしくしようの会（後書き）

完全なお遊び回です^^；

加持、動く（前書き）

ここもレビューにあつたパクリに近い内容になっています。
人と違う文章を書きたいorz

加持、動く

「あれ？シズク、出かけるの？」

アスカたちに半ば強引に買わされた洋服を身に纏ってシズクが出かける準備をしていた。

「うん、ちょっと本部に用事があって」

「ふうん…あんた、まだ一人で何でも解決しようと思ってるんじゃないでしょうね」

アスカがテレビ画面を見て横になったままぽつりと呟いた。

「…違うよ、みんな信用してる、大丈夫だから」

「なら…いいんだけどさ」

「じゃあ、行ってくるから」

そう言ってシズクはドアを開けた。

空は快晴。

今日も30度を越す真夏日。

歩いているだけで汗が滲み出る。

女の子の服って通気性いいんだな…

そんな呑気なことを考えながらシズクは道を歩いていた。

- ネルフ本部・加持の部屋 -

こんこん。

控えめにノックの音がした。

「開いてるよ」

加持はそう言ったが反応が無い。

葛城ならノックしないだろうし、リツちゃんなら今ので入ってくるはずだ。

…誰だ？

加持はそう思って扉を開けた。

立っていたのはシズクだった。

「やあ、シズクちゃん、今日は随分と可愛い格好をしているね」

取り立てて驚いた素振りを見せることなく加持はそう言った。

「加持さん…お話があります」

「なんだい？」

「その…ここでは、ちょっと…」

「……………」

加持は自分の机に向かうと上着を取って再びシズクの方へと向かった。

「よし、じゃあデートでも行こうか、お姫様」

「…すみません」

「別に謝ることじゃない」

なんか…加持さんの前だと「シンジ」に戻っちゃうな…

謝ってばかりの自分。

レイと同じ素直になれる存在、お兄さんの存在。

それがシズクにとっての加持だった。

二人は加持の車に乗って海辺を走っていた。

「…で話つてのはなんだい？」

「…あの、盗聴とか…大丈夫、ですかね」

「ああ、それなら問題ない、その類のものは事前に全て外してあるし、追っ手も撒いたからな」

やっぱりこの人凄いな…

シズクは呆けて加持の顔を見る。

「なんだい？ 惚れ直したかな？」

「ち、違いますよ！ 大体、加持さんにはミサトさんがいるじゃないですか！」

「はははっ」

そして沈黙。

車の走る音だけが車内に聞こえた。

「加持さんは………S2機関って、知ってますか？」

「…タバコ、吸っていいかな？」

「あ、はい、どうぞ」

加持は軽く窓を開けるとタバコに火をつける。

「ソレノイド・パワー・ジェネレーター、
葛城博士が提唱したスーパーソレノイド理論に法って開発が進め
られている機関だな」

「かつらぎ…博士？」

「そう、葛城の父親だ」

シズクは驚きに目を見開いた。

同時に加持はそんなシズクを見てちよつとだけ安心をした。

「君でも知らないこともあるんだな」

「…知らないことだらけですよ、僕なんて」

「で、S2機関がどうかしたのかい？」

「近々、アメリカの第二支部でS2機関を使用した実験があるのは
知ってますか？」

「ああ、何でも向こうのお偉いさんが駄々を捏ねたらしい、まあ良
くある権力争いってやつさ」

「…加持さん」

「なんだい？」

「…S2機関は、危険です…」

シズクはきゅっと手を握って自分の膝元に当てた。

「こんな、断片的な情報しか提供できなくて…すいません、
ただ、この実験は放って置くと何千人という死人が出かねない…
そんな実験です」

「…そうかい、いや、シズクちゃんが謝る必要なんて無いさ」

そう言いながら加持の頭の中では今後のスケジュールが綿密に書き込まれていった。

アメリカ、か…

この子の言うとおり確かにS2機関の実験の噂は聞いた。

確実な安全性を売りにしていたのも聞いている。

だが…と加持は思う。

シズクが意味もなくこんなことを言うとは思えない。

加持は自然と笑みが浮き出していた。

碇ゲンドウやゼーレの面々と初めてやり取りしたときの高揚感。

シズクに出会ってからトンと消えていたそれが再び浮上してきたからだ。

「シズクちゃん、もうデートはいいかな？」

「あ、はい、すみません、お手数取らせてしまって」

「いや、礼を言うのはこっちの方さ」

「は？」

「何でもない、こつちの話だ」

そう言つと加持は車のハンドルを切つた。

- 夜・葛城邸 -

「ただいま」

「………… おかえりなさい」

「あれ？レイ一人？」

「ええ」

「みんなは？」

「近くに出来たスーパー銭湯に行くつて、私は留守番」

「そっか、気を使って残ってくれたんだ、ありがとう」

「……………いいの」

そう言つとレイはシズクの手を取る。

と、そこで手が止まった。

「どうしたの？」

「……………タバコの匂いがする」

「あ、加持さんの…かな」

「……………加持さんのところに行っていたの？」

「うん、ちょっと、ね」

レイの瞳が真面目なものへと変わる。

「……………未来のこと？」

「……………うん」

「教えて」

レイの瞳に自分の目を見据えてシズクはゆっくりと頷いた。

それからゆっくりと丁寧に説明する。

アメリカでのS2機関起動実験。

そして…第13使徒、バルディエルについて…だ。

第12使徒レリエルのことも話しておきたかったが
対処方法が見つからない現在は保留しておいた。

「…3号機が、乗っ取られる…？」

「うん」

「パイロットは…？」

「乗ったまま、だよ」

レイの瞳が凍りついた。

3号機のパイロット、つまりシズクだ。

シズクが乗ったエヴァが、敵になる…？

「レイ」

「……………あ、ええ」

困惑の表情を隠せないままレイはあやふやな返事をシズクに返した。

「前はトウジがパイロットだった、僕はそのことを知らされていなかった。

でも人が乗ってるものと戦うなんて嫌だから拒否したんだ、そして……」

シズクの脳裏にあの時の映像が鮮明に蘇る。

「父さん……司令はダミーを発動した」

「！」

「ダミーは……強かった、完膚なきまでに3号機を叩き潰したよ、最後にはエントリープラグを握りつぶし……た」

「……鈴原くん……は……？」

「片足が無くなっていたよ」

「……………！！！」

シズクも……シズクもそうなるの……？

レイは立ち尽くしていた。

そんなレイを見てシズクは優しく微笑んだ。

「大丈夫、今はあの時と随分状況が違う、レイもアスカもシンジくんも強くなってる。」

何よりレイはダミーの実験に参加していない、三人で力を合わせればきっと勝てるよ」

レイはその言葉に黙って頷いた。

「…………シズクは傷つけさせない、絶対に」

「ん、ありがとう」

「さあ、そろそろご飯の用意しようか、みんなもそろそろ帰ってくるでしょ」

「…ええ、私も手伝うわ」

そう言って二人は台所へと向かった。

- 翌日・ネルフ本部 -

シンクロテスト中。

四人の数値は今日も順調である。

アスカとシンジ、シズクがほぼ横ばいで95〜6%前後。

追ってレイが78〜82%を行ったり来たりしている。

「非常にいい傾向だね」

ミサトが嬉しそうに呟いた。

「そうね、ここ最近の四人の成長には目を見張るものがあるわ」

リツコもコーヒーを一口啜ってそう答えた。

「それにしても、前回のシズクちゃんのシンクロ率はマグレだったんですかね？」

マヤがコンソールをなぞりながらそう言った。

「多分、本物よ」

リツコは端的に言う。

あの子はシンクロ率をコントロールしてる、そんな節がある。

何者なのだろう。

ゼーレの人間は何も言っていない。

かといってそれ以外の組織にあれだけの「物」は作れない。

だとしたら、一体彼女は何者…？

無駄だとは思っけれど、もう一度MAGIに演算させてみようかしら。

そう、リツコが思ったときだった。

急に警報になったのは。

「ど…どうしたの!？」

「M…M A G Iがハッキングを受けています!」

「なんですって!？」

「とんでもないスピードです!既にメルキオールが乗っ取られた模様!…!」

「相手の特定、急いで!リツコ!…」

「分かってるわ、マヤ、パターンAの防御プロテクトを展開、急いで」

「は、はい」

ピピツという音と共にM A G Iに記されたハッキング状況の進行速度が鈍った。

「特定元!判明、本部内、サブコンピュータです!」

シゲルが叫ぶ。

「本部内…?誰がやってるの!？」

「人の反応はありま…なっ…?」

シゲルの目が大きく開かれた。

「パターン…青…?」

「なんですつてえ!？」

「パルタザールに進入! M A G I が本部の自爆を提案、賛成1、反対2で否決です!」

「自己進化して防御プロテクトを突破したのね…このままじゃ時間の問題だわ…」

「いけない! 直ぐにエントリープラグを打ち出して!」

「は、はい」

言われるがままにマヤがコンソールを叩く。

バシュツという音が四回なり、エントリープラグは人造湖へと打ち出された。

- ネルフ本部・作戦司令室 -

「対処方法は…?」

ゲンドウは地面に映し出される現状を問いただした。

「現在、パルタザールの三分の一が乗っ取られた状況です」

「恐らく使徒の目的は本部の無力化」

「パルタザールが占拠されれば自爆が可決…か」

「一つ、方法があります」

「言ってみよ」

「使徒は自己進化を繰り返してM A G I内部へと侵入しています、だから進化促進プログラムを投与して進化を逆に促進させます」

「…進化の終局か」

「はい、恐らく最終まで進化を遂げれば、自壊する…と」

「間に合うかね？」

「間に合わせます」

「赤城博士」

「はい」

「頼んだ」

「わかりました」

・MAGIメインコンピュータ内部・

「ふわぁ…凄いですねえ、MAGIに関する裏コードがびっしり」

「母さんね…これだと思ったより早く終わりそうだわ」

そう言うトリツコはMAGIのコネクタにキーボードを繋げて片手で弾き出した。

「流石先輩…片手なのに凄いスピードです」

「その内、マヤもこうなるわよ」

「そ、そんな私なんてとても…」

ぶんぶんとう首を振ってマヤは全力で否定した。

・同時刻・某所・和食レストラン・

「よう！」

加持が近づいてきたカップルに軽く手を上げる。

「加持…いきなり呼び出してなんだ？」

「私たち、この稼業からそろそろ足を洗うんだけど」

「ああ、結婚するんだってな、おめでとう」

長髪の男は加持の向かいの椅子に座る。

「…で、何のようだ？ただお祝いするのに呼び出すお前じゃあるまい」

ショートカットの女が男の隣に座る。

「そうよね、加持くんにそんな酔狂があるとは思えないわね」

「酷いな二人とも」

そう言う加持はメモを二人に差し出した。

「何だこれ…？」

「一度だけ誰にも気付かれずに読んでくれ、読んだ後は完全に処分してくれ」

そこには加持の考察がこと細かに書かれていた。

ゼーレによる人類補完委員会の全体像。

碇ゲンドウによるシナリオの補完。

「これは…真実か？加持」

「顔が笑ってるぜ、比井」

ニヤリと笑みを零したまま比井タケルはメモを燃やした。

「最近、連絡よこさないから何やってるのかと思えば…こんな危ない橋渡ってたなんてね」

そう言つと木佐木ナオもメモを燃やす。

「…この結論に達するのに数年を費やした…がそれだけの価値はあると思ってる」

そこで加持は店員に注文をとった。

「だが…若干14歳の少女が何の後ろ盾もなしに俺と同じ…いや、それ以上の情報を得ているとしたら…どうする？」

タケルとナオはお互い顔を見合わせる。

「それは非常に興味深い話だが…在り得ないだろ」

「俺が取引で嘘つくほど俗呆けしてるように見えるか？」

「…残念だけど見えないわね」

「その少女が言うには、だ…数週間後に行われるアメリカ第二支部で行われるS2の実験があるな？」

「ああ…実験的にS2機関を搭載してやるって例のあれだろ？」

「そこでどうやら事故が起きる、らしい。死人も出る…と言っていたな」

「それを信じているのか？」

「わからん…だが、嘘をついている目では無かった」

「あらあら、随分買ってるのね、その子のこと」

「俺の人の見る目は確かなつもりだ」

「あら、じゃあそのお眼鏡に適ったのかしら？ 私たちは」

くすくすと笑みを零すナオ。

「そういうことだ、この業界、何人も知り合いはいるが俺が真に信用を置けるのはお前達二人だけだよ」

「…そこまで言われて断ったら俺の立つ瀬がないじゃないか」

そうタケルが言う。と。

「それが狙いだからな」

と加持が言つてニヤリと笑つた。

「…で、何をすればいいわけ？」

「アメリカに飛んでちよいと情報操作の方を、な」

「被害を必要最小限に食い止めればいいんだな？」

「話が早くて助かる、彼女は実質被害を0にしたいんだろうが、それは流石に無理があるからな」

「…わかった、早速取り掛かるう」

そう言っ てタケルが席を立とうとする。

「慌てるなよ、まだ料理が出てきてない」

そう言っ て加持はタケルを制止した。

「そうよ、最後の仕事の前だもの、ゆっくり晚餐を楽しみましょう」

ナオがタケルの腕を引つ張る。

タケルはぽりぽりと頭をかくと

「わかったよ」

と言っ て再び椅子へと座った。

・ M A G I ・ メインコンピュータ内 ・

「間に合うの!?!」

「大丈夫、0・1秒も余裕があるわ」

「0・1秒って…!」

「マヤ、準備は?」

「OKです」

「いくわよ」

リツコの合図でマヤとリツコが同時にエンターキーを押す。

瞬間、十分の九くらいまで埋まっていたハッキング状況が見えるうちに治っていった。

「MAGI、回復しました」

「再ハッキングの兆候も見られません」

「お疲れ様、リツコ」

そう言つとミサトはリツコにコーヒーを手渡す。

「ありがとう」

リツコはコーヒーを受け取って一口啜った。

「これ…ミサトが?」

「ええ」

ミサトのコーヒーが美味しく感じるなんて、ね。

- 人造湖・四つのエントリープラグ -

「もう！どっなってのよー！！」

アスカの絶叫が高々とこだました。

母親たち

- シンクロテスト・プラグ内部 -

アスカは静かに目を閉じていた。

意識をプラグの底へと集中させる。

そこに確かに感じられる「母」の意識。

今やこれを感じたいがためにアスカはシンクロテストを受けていた。

『アスカー』

と、心地よい流れを遮って入るミサトの通信。

少し不機嫌になりながらアスカは通信に答えた。

「何よ、ミサト」

『シンクロ率98%突破、おめでとう!』

98...?

「ほ、本当!？」

『嘘ついてどうするのよ』

やった！やっぱりだ！

やっぱりママと一緒にいると私の調子は鰻上りなんだわ！

『それからシンちゃんとシズクも98%ね』

「やるわね、二人とも」

『アスカこそ』

『はは…マグレマグレ…』

『……………私は？』

『レイも新記録よー、82・2%！』

『……………そう、ですか』

何やら残念そうな声が響いた。

「何落ち込んでんのよ、大丈夫よ、その内私たちに追いつくって」

シズクはこのアスカの言葉を聞いて、

ああ、アスカは本当にもう大丈夫だ、と心の底から思った。

もうアスカはエヴァで一番になることに執着していない。

当面の問題は次の使徒…レリエル、そして、バルディエルだ。

アメリカの方は加持に話しておいたからきつと何とかなる…

シズクはレリエルについて考えはじめた。

第12使徒レリエル。

ゼブラ模様の丸っこい形をした使徒。

だがそれは本体ではなく、地面にある影が本体。

球体の方に攻撃をしたら影に取り込まれて何やらこことは別の次元へと行ってしまう…

さて、どうやって迎撃したものか…

シズクが顎に手をやり考えていると警報が鳴り響いた。

「状況は？」

「パターンオレンジ…MAGIは判断を掴みかねてるようですね」

ミサトの問いに日向が答えた。

「とりあえず、エヴァ各機の出撃用意を」

「はい」

ミサトの合図と共に一斉に出撃するエヴァ。

アスカが一番に地上へと出ると近くの兵装ビルからライフルを取った。

「ふん、どんな奴が来ようと今の私が負けるもんですか！」

遅れて三機が地上へと出る。

『アスカっ！？迂闊だ！』

シズクが叫んだとき、既に式号機はライフルの引き金を絞っていた。

そしてライフルの弾はシズクの予想通り、レリエルの球体をすり抜けていく。

『パターン変化！青です！！』

発令所からの通信が四人に聞こえた。

「何よ？今の！？」

『アスカっ！下だ！！』

「下っ！？」

はっとなり見下ろすと黒い影が弐号機の下を包んだ。

「な…なによ、これえ！」

ずぶつと埋まっていく弐号機。

「ちよっ…！離しなさいよ！」

影に向かってライフルを乱射する弐号機。

だが銃弾は跡形も無く、影に吸い込まれていく。

ガシツと弐号機の右腕が持ち上げられた。

『アスカっ…！』

初号機が沈んでいくビルを足場にして弐号機の右腕を掴んだのだ。

「シンジっ…！」

『……………私たちも！』

そう言って弐号機に近づこうとした零号機を3号機が止めに入っ
た。

『…シズク！何故、止めるの！？』

『あいつは…あの使徒は普通のやり方じゃ倒せないんだ…あの二人に、懸けるしかないんだよ…!!』

シズクはぎりつと唇を噛んだ。

じわりと血の味が口内に広がる。

不甲斐ない…情報はあるのに普通にやって倒せる自信がない自分に憤りを感じた。

「シンジ…！もう離しなさい、あんたまで巻き込まれるわ…！」

『嫌だっ…!!』

「……………あんた」

とぶつという音がして式号機と初号機は影の中へと消えた。

『一旦、帰還して、対策を練るわ』

ミサトからの通信。

「了解」

『……………了解』

帰還したシズクとレイを待っていた報告は
シズクにとっては予想通りのレイにとってはかなり衝撃の。

「虚数空間…ですか」

「ええ、ディラックの海、とも言っわね」

リツコがシズクを見下ろしながらそう言った。

「あの使徒の本体は恐らくあの影、ね…使徒のA・T・フィールド
が内部に形成されていて

それによって支えられている厚さ約3ナノメートルの実体があ
の使徒の正体」

「……………二人を助ける方法は？」

「一つだけ無い、ことも無いわ」

そう言うリツコは再びシズクを見る。

「あなたはどうかしら？シズクちゃん」

「え…？僕…ですか？」

シズクはリツコの問いに少し頭を捻る。

どう思っったって…前回取り込まれて僕このときの作戦知らないんだよな…

「あの、こづいづのはどうでしょう…?」

「言ってみなさい」

「僕とレイもあの、ディラックの海でしたっけ、あの中に入るんです、そして四機の力で内側から使徒を殲滅」

「現実的じゃないわね」

「はあ…」

「それとも、何か必ずそうなると言った根拠でもあるのかしら?」

「い、いえ、そうじゃないですけど…」

何かリツコさん、やけに突っかかるな…

シズクは目を合わせづらくなって視線を伏せる。

ずっとシズクの前にレイが立った。

それを見てリツコは小さく溜め息をつく、シズクから視線を外した。

「で、シンジさんとアスカが持つ時間は?」

ミサトの問い。

「そうね、生命維持を最優先にしていればあと16時間は持つはず

「よ

「それまでに何とかして二人を助け出すことを考えないとアウト…
か」

・ディラックの海・

二体のエヴァが並んで浮かんでいた。

生命維持モードに切り替えてお互いをモニター出来ないの
で手を握って直接通信で話をしている。

「シンジ…何で手を離さなかったのよ」

『別に…そんなの当たり前だろ？』

「当たり前前って…それであんたまで取り込まれちゃってんのよ!？」

『大声出すなよ、酸素消費するよ』

「うっ…とにかく、軽率な行動だわ」

『アスカ、仲間を助ける行動ってそんなに駄目かなあ……？』

「……………」

アスカはパシッと両手を打ちつけた。

違う、シンジが軽率なんじゃない。

私が軽率だったんだ。

「……ごめん、シンジ、謝るわ」

『……いいよ、別に……ただ、生命維持モードに移行しても後16時間以内に助けが来なかったら……』

「アウト、ね。二人ともこの変な空間でお陀仏よ」

それから長い沈黙が続いた。

「…シンジ、生きてる？」

『…うん』

「私さあ、今までエヴァが一番だって言ってたじゃない？」

『うん』

「あれさあ…間違いだっただわ、エヴァに乗るのは確かに大事よ。ママがいるもの、ただそれよりも大事なものもあるってこと…最近気付いたんだ…」

『ママ…？』

「気付いてないの？よくエヴァの内部を探ってみなさい。式号機の中には私のママがいるのよ」

『へえ…』

シンジは目を瞑る。

『……………ははっ、駄目だ、何も感じられないや』

「いいわよ、別に、この状況でそんな感じなくても…」

アスカは操縦席に横たわったままふうつと溜め息をついた。

「で、さっきの話の続きだけど」

『あ、うん、エヴァより大事なものだっけ』

「そうそう、それってさ、結局のところあんたたちだったわけなのよ」

『僕たち…？』

「あんた風に言うなら仲間ってやつ？

まさか私が仲間意識に目覚めるなんて夢にも思わなかったわ」

『……………』

シンジは黙っていた。

アスカも今の状況がわかっている。

もしかしたらこれが最後の会話になるかもしれない。

だからこそこの…告白。

「レイもシズクもミサトも加持さんもリツコも学校の友達もネルフのみんなもみんな、大事な仲間」

『……………アスカ』

「もちろん、あんたもね」

生命維持モードでモニターは表示されないが確かにシンジには笑みを零しているアスカが見えた。

『僕も…みんな大切だよ…もちろん、アスカも…』

「それはどうも…」

再び少し沈黙。

沈黙はまたアスカが破った。

「シンジ…シズクのこと、どう思ってるの?」

『…え?どうって…?』

「鈍いわねえ…好きなのかってことよ」

『え、え?す、好きっていや、そりゃ、好きだけど、そうじゃないって…』

『……………』

「…なによ、ハッキリしなさいよ」

『…うん、憧れ…かな、シズクは』

「憧れ…?」

『うん、あんな風になりたい、目標とかそういうのに近いと思う。確かに好きだけどそれはそういう意味であって恋愛とかそういうのとはちよつと違うかな…』

通信越しにアスカの溜め息が聞こえた。

「そう…そっか…」

『アスカこそ…どうなのさ?』

「へ?わ、私?」

『うん…僕のことばかり聞いてズルイよ』

「わ、私は今のままで十分…これ以上何か望むのはちょっと贅沢よ…」

『加持さんは…?』

「加持さんは…そうね、あんたにとってのシズクみたいな存在だったのよ、

大人の男に憧れてただけ、別に恋愛感情なんて今は無いわよ」

『……………そうなんだ』

「……………そうなのよ」

少しずつ息が苦しくなってるのをアスカは感じた。

「はぁ…そろそろやばくなってきたわね」

『…うん、シズクや綾波はどうしてるかなあ…?』

「なんとかしてくれんでしょ…とは言え…ちょっとやばいわよね…」

『…死んじゃうのかな…僕たち』

「…何、弱気になってんのよ」

『…ごめ…ん？』

「どうしたの？」

『…いや、今、なんか変な感じが…』

変な感じ…？

ドクン。

「…なにっ？これ…？」

『アスカも感じた？』

「ええ…でもこの感じ、不快では無いわね、むしろちょっと安心で
きるっていうか…」

『あ、それは分かる、包まれてるって言うかさ』

「そう、それよ、何か包み込んでくれて私を守ってくれるような……
ママ!？」

『えっ!？』

「ママ!ママよ!~!」

式号機の体が動き出す。

四つの目は光に包まれ顎が外れ、大きく咆哮を上げた。

『これが…アスカの…母さん…?』

ドクン。

続けて、初号機に変化が起きる。

シンジが見たのはシズクに良く似た大人の女性の姿。

かあ…さん…？

シンジ

「母ちゃん…」

ワタシガママモッテアゲルワ…

初号機の目が光る。

顎が外れて生命維持モードが強制的に解除される。

生命維持モードが解除されたのに関わらず内部電源に切り替わらない。

これも母さんがやってるの…？

初号機と弐号機が同時に前方の空間に手を伸ばした。

・ネルフ作戦司令室・

「リッコ！あんた本気で言ってるの！？」

「そうよ、最優先されるべきは初号機と弐号機の奪還」

「そのためにはシンジくんやアスカは犠牲になってもいいっていうの！？」

「そうは言っていないわ、あくまで優先事項の確認よ、生命維持モードで待機してるのなら

上手くいけばパイロットも助かるわ」

「あの子たちはついででってわけ…!？」

ミサトは勢い余ってリツコの胸倉を掴む。

「ここで討論してる暇にも時間はどんどん進むわよ」

「……………っ!」

ぱっとミサトはリツコを突き放してシズクとレイの元へと向かった。

「N2爆雷でディラックの海をこじ開ける…?」

「そうよ」

「……………それで二人は助かるんですか？」

「残念だけど…可能性は、低いわ」

「…やりましょう、やって後悔するよりもやらないでする後悔の方が大きい」

シズクが立ち上がってそう言った。

「そう、ね…もし二人が出てきたときはシズクとレイ、サポート、よろしくね」

「……………わかりました」

配置についた零号機と3号機。

シズクは再び唇を噛んだ。

こんなの…作戦じゃない…

こんな強行作戦じゃ下手すれば二人の命が危ない。

…母さん。

シンジくんとアスカを守ってあげて…

そう、シズクが思ったときだった。

『シズク…！』

「…！？」

バギッ

バギギイッ!!

球体にヒビが入る。

「何だ……？ミサトさん!？」

『わからないわ!』

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

レリエルの球体から血飛沫が舞った。

夥しい量の血が第3新東京市を染める。

3号機と零号機は返り血を浴びながらその光景を見守っていた。

やがて出てくる二本の腕。

それは、初号機と貳号機の腕だった。

力任せにディラックの海をこじ開けて外の世界へと戻ってくる二体のエヴァ。

『…………シズク、これ、は……？』

「母さん…だ…守ってくれたんだ…シンジくんをそして、アスカの母さんもアスカを…」

その光景を目にしてリツコは震えていた。

「私たちは…なんてものをコピーしたの…」

ミサトも同様にその光景から目が離せない。

「これが…エヴァの本性…？」

何故かしら…これで二人は助かったはずなのに…

あの二体のエヴァを見ていると私たちがとんでもないことをしている気がしてくる…

ララララララオララララララオラオオオオオラオオラ！！

!!!!

ララララララオラララララオラオオオオオラ！！！！

!!!!

二体のエウアの咆哮が重なり合い、レリエルは崩壊した。

墓参りとアスカのデート

「ただいま」

「おかえりなさい」

帰ってきたアスカを出迎えたのはミサトだった。

「シンジたちは？」

「夕飯の買出し」

「あ、そ」

玄関に靴を放り投げてアスカはリビングへと上がる。

「あーあ、メンドクサイなあ……」

「なしたの？」

アスカは自分の部屋に行き、私服に着替えながら二の句を告げる。

「ヒカリから知り合いとデートしてって頼まれたのよ、私そんな気ないのに」

「あら、いいじゃないデート」

「どこの馬の骨とも知らないやつなんて願い下げよっ！」

「ただいまー」

「ただいま」

「……………ただいま」

「お帰りなさい」

「おかえりー」

続いて夕飯の買出しからシンジたちが帰ってきた。

「あ、そうだ、シンジ！」

「へ、何？」

荷物をテーブルに置いたところでシンジがアスカの言葉に反応する。

「ちょっと明日、付き合いなさいよ」

「え、僕が？」

「あんた以外に男いないでしょうがっ」

「話が飲み込めないんだけど…」

「実はさ」

アスカは明日デートすることを告げる。

そのためにシンジに彼氏役を買ってもらい体よくお断りしようという算段だった。

「あ、でも僕明日は墓参りが…」

「墓参り？」

「うん、母さんの命日なんだ」

「そう…あんたのママの」

そう言つとアスカは顎に手を当ててうーんと唸った。

「……………デートの時間は？」

「へっ？ああ、午後1時だけど」

「……………碇くん、お墓に行く時間は？」

「午前9時…だけど」

「……………午前8時40分、ここを出発、
速やかにお参りを済ませたら帰宅、多分11時には帰ってこれる
わ」

「綾波？」

「……………碇くんはアスカが他の人とデートするの、いいの？」

レイにそう問われてシンジはアスカが知らない男と二人きりで歩
いている姿を想像した。

……………？

何故だろう。

胸のあたりがちくりと刺されるような感覚があった。

何だ…、この感覚…。

「だったら時間的には何の問題もないわけねっ、シンジ、明日お願い
いね！」

「あ、う、うん」

シンジは胸の棘のようなものを必死に振りほどきながらそう言葉を
返した。

・翌日・

「いってきます」

「いい？ちゃちゃっとお参りしたら直ぐに帰ってくるのよ！」

「わかってる、じゃあ行ってくるね」

「あ、待った」

「何さ？」

「やっぱ、私も一緒に行くわ」

「へ？」

そう言うつとアスカは靴を履き始める。

「なんでアスカが一緒に？」

「うるさいわねえ、すっぱかされたら困るから、予防線を張っておくよ」

「そんなことなくてもちゃんと帰ってくるって……」

「いいから、行くわよ」

「う、うん」

こうして二人は連れ立ってシンジの母親、碇ユイの墓標を目指し

た。

「シンジのママってどんな人だったの？」

「…知らないんだ、顔も覚えてない」

「写真とかは？」

「さあ…父さんなら持つてるかも知れないけど、僕は一枚も見たと無いなあ…」

「ふうん」

墓地へとつく。

ユイの墓前の前に一人の男性が立っているのが見えた。

「…父さん？」

「司令？」

「…シンジと惣流・アスカ・ラングレーか」

ゲンドウは顔だけをシンジたちの方に向けるとそう言ってまた墓

前を見た。

「…父さん…母さんは…」

「ユイは、私の心の中にいる、ここにはいない」

そうじゃなくて…

エヴァの中にいるあの母さんは…何者なの？

そう問いたかったがシンジは言葉が出てこなかった。

「じゃ…写真とかは残ってないの…？」

何とか搾り出した台詞がこれだ。

「全て処分した」

「そう…」

「あの、司令」

「何だ」

「司令の奥様って司令にとって大事な人じゃないんですか？写真も残さないなんて」

「ユイは私にとって唯一無二の存在だ、私の中にいるユイ、それで十分だ、写真など必要ない」

「そうですか…」

何か…どうも隠してるっぽいよね…

このサングラス親父…

「喋りすぎたな…私はもう行く、シンジ」

バラバラという音を立ててネルフのヘリが降りてきた。

「何？」

「……………」

ヘリの轟音で何を言っているのか聞こえない。

「父さんっ、今何て!？」

ゲンドウは振り返ることなくヘリに乗ってそのまま去っていった。

「最後…何を言いたかったのかな…」

「さあ…ね」

二人はゲンドウの去った後を呆然と眺めていた。

「なんか…どうも隠してるくさいわねえ…」

ぽつりとアスカが呟く。

「え…？隠してるって何を…？」

シンジが疑問に思っアスカに問う。

「ここにあんたのママが眠ってるわけないじゃん、エヴァの中にいるんだから、

それを私たちには言わないところとか、なあんかきな臭いっていうかさ」

「……………」

「あ、ごめん、あんたの父親のこと悪く言っつもりじゃないんだけど…」

シンジは小さく首を横に振る。

「いや、いいんだ、父さんは昔からああだから…自分の考えを人に言わないんだ」

シンジはヘリの飛んでいった方向を見上げ目を細めた。

「多分…ネルフの中でも父さんのことを完全に分かってる人なんていないんじゃないかな…」

アスカも同じ方向を見上げる。

「なんか…それはそれで寂しいわね」

シンジは地面に視線を落として、直ぐにアスカの方を向いた。

「さ、もう行こう、待ち合わせに遅れちゃうよ」

「あ、ええ」

下りの電車に乗ってシンジたちは遊園地へと向かう。

「で…どんな人なの、今日の相手…？」

「知らないわよ、ヒカリに頼まれたただけだもん、顔も知らない」

「ふうん…」

「まあ、あんたと付き合ってるフリしてとっとと諦めてもらってから少し我慢してよね」

「う、うん」

- P M 1 : 0 0 ・ 遊 園 地 -

「待ち合わせはこの辺なんだけど…」

アスカがキョロキョロと辺りを見回す。

「惣流さん、こっちこっち！」

威勢のいい声が聞こえてきた。

あいつか…

顔はまあまあね…まあ、断るんだからどうでもいいんだけど。

「アスカ、呼んでるよ」

シンジがアスカに声をかけると男の表情が途端に険しくなった。

「惣流さん、それ、誰？」

「ああ、こいつ…じゃない、この人は私の彼よ、だからあんたとは付き合えないの、悪いわね」

「彼氏…？こいつが…？惣流さんの…？」

ジロジロと男がシンジを見る。

「ああ、はい、そ、そうなんです、ははっ」

シンジは後ろめたさ全開の声でそう言った。

男はふうつと溜め息をつく。

「やめなよ、惣流さん、こんなやつ彼氏にすんの、別れて俺と付き合おうぜ」

ムカ…

と、平常心、平常心。

アスカは二、三度深呼吸をすると。

「いえ、私、こいつの事が好きですから」

と、きっぱり言った。

うわ、アスカ、演技とはいえ、よくそういうことをズバズバ言えるな…

「だから別れるって、そんな何も取り得の無さそうな奴、相手にするだけ無駄だって、なあ坊主？」

「……………ははっ」

シンジが言われない放題言われて乾いた笑いを残した時だった。

アスカの方からプチッという小さな音が聞こえたのは。

どすん！と地鳴りが起きそうな勢いでアスカの右足が男の前に置かれる。

右手人差し指をピシッと男の鼻先に指差して早口でアスカは捲くし立てた。

「ちょっとあんた、黙って聞いてれば何調子に乗ってんのよ！シンジに取り得が無い！？あんたにシンジの何がわかるってのよ！！！」

シンジはバカでマヌケでおっちょこちょいだけどあなたの1億倍は遥かにマシよ!!

あんに命がけてマグマの中に飛び込む度胸ある!?

あんに命がけて訳の分からない異次元空間の中に入る勇氣あるわけえ!!!?

アスカは鼻息を荒くふうふうと息を弾ませながら言った。

「ア…アスカ、僕は別になんとも思っていないから…」

「シンジもシンジよ!

こんな顔だけの大馬鹿野郎にここまでコケにされて何で怒らないわけ!?!」

アスカの顔がシンジの顔にぐぐつと接近した。

「アスカ…顔が近いって…」

そうシンジに言われてはとなり顔を真っ赤にさせてアスカは後ろを向いた。

「と、とにかく、私、人を小ばかにするような男なんて付き合う気ないから、バイバイ!」

そう言ってアスカはシンジの手を取ってずかずかと去っていった。

取り残された男は呆然と二人の後ろ姿を見送っていた。

帰りの電車の中、シンジは椅子にすわりアス力は手すりにもたれ掛かってた。

「……………ねえ、シンジ」

「何？」

「あんた、ホントに何も取り得無いの？」

アス力は外の景色を向いたまま、その表情は読めない。

「取り得…か、強いて言うなら料理だけど料理ならシズクの方が上手だし…」

腕を組んでうーん…と考え込むシンジ。

「あっ」

「何かあるの!？」

アス力が途端にシンジの方へと振り向いた。

「齧った程度だけど…チエロが少し弾ける…かな」

「チエロ? いいじゃない!」

「5歳の時からやってるんだ、確か引越してきたときに持ってきてたと思ったけど…」

「継続は力なり、か：ねえ、帰ったら聞かせてよ、あんたのチエロ」

「ええ！？いいよ、恥ずかしいし…」

アスカはシンジの隣にぼすつと座ると意地悪そうな笑みを浮かべて肘でシンジを突いた。

「いいじゃない、減るもんじゃないしい」

「わ、わかったよ」

- 夜・葛城邸 -

即席でシンジのチエロコンサートが開かれた。

シズクは自分も出来ることを黙っていた。

アスカがとても楽しみそうにしていたからだ。

演奏が始まり、そして時が流れて、終曲に終わる。

終わったシンジが小さな動作で弦を置いた。

四人から割れんばかりの拍手が起きた。

「シンちゃんやるじゃない！」

「……………素敵な演奏だった」

「うん、とっても良かったよ」

「全然いいじゃない！何が取り得が無いよ！ざまあないわ、あの男
！！」

「は…はははっ」

シンジは頭をポリポリと書く嬉しそうに笑って

「みんな、ありがとう」

と照れくさそうに呟いた。

シズク対リツコ

ふあゝあ…

アスカは欠伸をしながら両手を伸ばし、リビングへと続く廊下を歩いていた。

「あ、シズ…」

と、そこで立ち止まる。

シズクとレイが真剣な顔をして話をしていたからだ。

アスカは思わず壁を背にして隠れてしまう。

何？何で私隠れてるわけ？

ドキドキとなる胸を必死に押さえながらアスカはそーっと二人の方を見た。

「……………赤城博士のところへ？」

「うん、今、リツコさんを説得しておかないと…」

「危険だわ」

「うん…わかってる、つもりだよ」

「…………あの人も司令と同じ、目的のために手段を選ばないタイプの人間…

一歩間違えればシズクも殺されるわ」

殺される？シズクが？リツコに？

「アスカ…？何やってん…」

シンジが向こうから歩いてきてアスカを呼ぼうとしたのをアスカは咄嗟に振り向いて

両手を伸ばし自分の方へと引き寄せた。

「何すん…！」

「いいから静かにしてなさい」

シンジはアスカの胸に蹲る様に抱きかかえられて顔を真っ赤にして反抗しようとしたが

妙に真剣なそのアスカの一言にただ黙ってしまった。

そしてアスカが見ている方を見る。

シズクと…綾波…？

「大丈夫、リツコさんも僕を殺したりはしないよ、多分、シナリオ上、殺さなくても時期に死ぬと思ってるはずだから」

「…万が一という場合があるわ」

「アスカ…二人は何の話をしてるの？」

「知らないわよ…ただシズクがリツコに何か話をしにいくとか、それでリツコがシズクを殺すとか何とか…」

ひそひそ声で話すシンジとアスカ。

「その時は仕方がないよ、とにかく…」

計画の阻止にはリツコさんの計画遂行を阻止する必要がある。そして今、その時が来た、それだけだ」

シズクは一步も引かずにレイを見た。

レイもまた、引かずにシズクを見る。

「…わかったわ、私も一緒に行く」

「レイ？」

「私が貴方を守る、私はシズクから色んなものを貰った。
まだそれを返していないうちに死なれるのはとても困るもの」

レイの瞳は揺るがない。

ただ真っ直ぐにシズクの目を射抜いていた。

「…わかった、でも無茶は駄目だよ？」

「…ええ」

「ちょっと待ったああああ！！」

アスカがシンジを抱えたまま、二人の前へと立ち上がる。

「ア…アスカ…？」

「何だか知らないけど、あんたまた一人で何かやるつもりね！？
言っただでしょ！？抜け駆けは無しだって！！」

「げほっ、アスカ、絞まってる…」

「あ、ごめん」

ぱっとシンジを離すアスカ。

「ごほっ、でも、アスカの言うとおりだよ、シズク。前に言っただろ？何でも一人で守ろうとするなって」

シンジは咳き込みながら笑ってシズクを見た。

「シンジくん……」

「そーいう訳だから、私たちも一緒に行くわよっ！」

「でも……もしかしたら危ない目に遭うかもしれないよ？」

「尚更だよ」

「……………行きましょう、みんなで」

「みんな……ありがとう」

シズクはそう言つと静かに頭を下げた。

- ネルフ本部・廊下 -

四人が歩いていると前の方から加持が歩いてきた。

「よう、揃ってどこへお出かけだい？」

「ちょっとそこまで」

ははは…と笑ってシズクは答えた。

「そうかい、ところで」

と加持はそつとシズクの耳元へ顔を近づける。

「例の事故だが…被害者は百数十人だそうだ」

「！…そう、ですか」

「まあ、この数字が多いか少ないかを取るのは君次第だ」

「…少ない、と思います…ありがとうございました」

「いや、俺は何もしちゃいないさ」

そこまで会話すると加持は顔を上げた。

「何よ？何の話？」

アスカがシズクと加持を交互に見ながら言った。

「シズクちゃんをデートに誘ったのさ」

「加持さんにはミサトがいるでしょっ!？」

「はは…こりゃ失敬、まあ断られたよ、葛城でも誘うか」

そう加持は言つと片手をひらひらさせて廊下の向こう側へと消えていった。

「ホントにデートの誘いだつたわけ？」

ジト目でシズクを睨みつけるアスカ。

「うん、加持さんも駄目だよな」

そう言つてシズクは微笑んだ。

「あんな軽い男には見えないんだけどなー、ちよつとショック」

「アスカ、やっぱり加持さんのこと…」

「ち、違つわよっ! 前にも言つたでしょ!?! 加持さんは憧れ!! 恋愛対象とかじゃないんだからっ!！」

「じゃあ何でショック？」

「シッコイ男ね、あなた、憧れの男の人が
ほいほい女の尻追い掛け回してたらショックに決まってんじゃない」

「あー…」

「あんたはそうならないでよね」

アスカのぼそつと呟いた言葉にシンジはきよとした。

「え？何か言った？」

「な、なんでもないわよっ！」

そんな二人を見て思わず吹き出すシズク。

「何笑ってんのよっ！」

「いや、仲いいね、最近」

「そ、そんなんじゃないんだからね！ってこらレイ！先行くなっ！！
聞いてんの！？待ちなさいってば！！！」

顔を真っ赤にしながらアスカはレイの後を追う。

「行こうか、シンジくん」

「う、うん……」

訳がわからない、といった顔をしたシンジに
優しく微笑んでシズクもアスカたちの後を追った。

こんこんと比較的短いノックが鳴った。

「誰かしら？開いてるわよ」

プシュツという音と共にドアが開く。

左から順にシンジ、アスカ、シズク、レイが立っていた。

「…揃いも揃って何の用事かしら？」

「単刀直入にお話します」

口火を切ったのはシズクだ。

黒い瞳は真っ直ぐにリツコに向けられている。

…遂にこの時が来たわね。

この子が行動を起こすときが。

リツコは思いを顔に出さないまま、静かに椅子へと腰をかける。

「何かしら？」

「司令の計画への手伝いを止めてください」

その言葉にリツコはゆっくりとコーヒーを啜った。

「…計画？何のことかしら？」

「司令の進めている人類補完計画のことです」

「…それは貴方の意思かしら？それとも貴方の上の意思かしら？」

「…僕に上司なんていませんよ、これはゼーレも委員会も関係ありません、僕の意味です」

「私、貴方の上…とは言ったけど『ゼーレ』や『委員会』なんていう単語は発していないわよ、どこで知ったのかしら、その言葉」

「今話すべきことはそこじゃありません」

「重要なことよ、前から聞きたいと思っていたのよ、貴方、一体何者なの？」

「…僕は碇シズクです、それ以上でもそれ以下でもありません」

レイは二人の会話をじっと見つめている。

アスカとシンジは二人の会話についていけず、ただ流れる無音のプレッシャーに息を呑むのも忘れて見入っていた。

そこでリツコは机の引き出しから小さなポリ袋を取り出した。

中には一本の毛髪。

「これ…貴方の髪の毛よ、シズクちゃん」

「それが何か？」

「貴方が初めてネルフに来た時に採取させて貰ったわ、当然検査もした、結果を知りたい？」

「…別に」

「私は知りたいわ、だってそうでしょう？貴方はある人物に似すぎている、あまりにも、ね」

「…碇ユイに、ですか」

「わかってるじゃない、自分が何者なのか言う気になった？」

「僕は僕です、碇ユイじゃない」

「そうね、貴方はユイさんじゃないわね、MAGIもそれを証明している。」

そして、もう一つの答えもMAGIは出したわ」

そう言つとりツコはポリ袋から髪の毛を地面に落とす。

「貴方のDNAが100%、そこにいるシンジ君と同じだっていうことをね」

「…えっ？」

今の発言に驚いたのはシンジだ。

シズクのDNAが僕と…同じ？

「今、議論したいのはそこじゃありません、司令の計画に加担するのをやめてください」

シズクは動じずにそう言った。

「私はこのことを議論したいのよ、貴方は誰に作られたのかしら？少なくとも私たちネルフじゃない…でも貴方ほどの物を作る組織となると

かなり限られてくるのよ」

「僕には昔の記憶がありません、気付いたらシンジくんに助けられていた、それだけです」

「そんな子供みたいな言い訳が通用すると思っているのかしら？」

「事実です」

シズクが一步前へ出た。

レイも静かにそれに続く。

「リッコさん、リッコさんは司令を愛していますか？」

「あら、急に何を言い出すのかしら？」

「だけど司令はリッコさんを愛してなんかいない」

「！」

リッコの眉が若干だが上がった。

「あの人が愛してるのは世界でただ一人、碇ユイだけです。息子であるシンジくんですらその対象には入っていない。

……いや、シンジくんは息子だからこそ碇ユイの愛情を受けたことに対し嫉妬すらしている」

「何が言いたいのかしら……？」

「リッコさんはレイが何でこの姿なのか想像したことありませんか？」

「……………」

リッコは黙って机の引き出しを開ける。

中にちらりと見えたのは一丁のハンドガン。

「あっ」

と思わず声が出たのはアスカだ。

「レイと碇ユイを重ねたんですよ、司令は、
リツコさんはどんなに頑張っても碇ユイの代わりにはなれません」

「……黙りなさいっ！」

リツコはバツと右手でハンドガンを取ってシズクに銃口を向けた。
銃口を向けられてもシズクは微動だにしなかった。

眼差しはリツコの目を捉えたまま動かない。

「……脅しだとも思っているのかしら？」

「リツコさんは司令と世界とどちらを取るんですか？」

「……私はネルフスタッフである前に一人の女なのよ」

「それ以前に一人の人間です」

「もう、貴方と議論を交わす気は無いわ」

パンツと乾いた音が一発鳴った。

リツコは当然、シズクの脳天に撃った……つもりだった。

が、弾丸はシズクの目の前で止まっていた。

レイの目が若干の光量を帯びていた。

「A・T・フィールド…！」

「何…？レイがやったの…？」

驚きを隠せないアスカとシンジ。

「…………シズクは殺させない」

「レイ、思ったよりずっと愚かになったようね、
こんな所で正体を曝け出して、アスカやシンジ君に受け入れられ
るんでも思っているの？」

「…………拒絶されても構わない、それでシズクが守れるなら」

「そう、なら教えてあげる、よく聞きなさいシンジ君、アスカ」
リツコはハンドガンを持った腕を下げ、二人の方を向いた。

「この子、レイは人間じゃないわ、第2使徒リリスのコピーよ」

「「!？」」

「ネルフの持つクローン技術で碇ユイによく似た肉体を作り出し、そこにリリスの魂を注入した人であらざる者、それがレイよ」

「ほんと…なの？」

シンジが恐る恐るレイへと聞いた。

「…………ええ」

「驚いたでしょ？でもシズクちゃん、貴方は驚かないのね」

「レイはレイです、例え何者でもその事実に変わりはありません」

「そう、でも貴方たちもそう思えるかしら？」

そう言った所でアスカがリツコの白衣を強引に驚掴みにして自分の元へと引き寄せた。

「あつたりまえでしょ！そりゃちよつとはびつくりしたけどね、シズクの言うとおりよ、レイはレイよ、シズクも同じ！

正体がどうのとか計画がどうのとか、そんなの良く知らないけど私たちの仲間なのよっ！！」

白衣を持つ手に力がこもる。

「その仲間に対して、銃を向けられて、私が平気でいるとも思ってたわけ!？」

そっちの方が誤算じゃないの!？」

「……………」

リツコは黙ったまま、ハンドガンを床に落とした。

そつとアスカの手に自分の手を置くと静かに引き剥がす。

「悪かったわ、ちょっとシズクちゃんと語ってみたかったのよ」

「司令の計画に加担するの、やめてもらえますか？」

「…約束はしないわ」

「…わかりました、帰ろうか、みんな」

「う、うん」

「ちょっと待ちなさいよつ、一発殴らせなさい!」

「……………アスカ」

レイが静かにアスカの肩に手を置いた。

ふーふーと肩を上下させながらアスカは最後までリツコを睨んで部屋を出て行った。

四人が出て行ったドアをリツコは見てから足元のシズクの髪の毛を見る。

髪の毛にシズクの姿とユイの姿が重なって見えた。

司令は私を愛していない…

そんなの、わかってるわよ。

でも、今更どうしろって言うの？

私は、貴方たちみたいにもう若くないのよ…

- ネルフ司令室 -

「松代で起動実験？3号機の？」

ミサトが何故、というようにゲンドウと冬月に言った。

「そうだ、実験は極秘裏に行く」

「しかし、現状3号機は普通に稼動しています、何故今更起動実験なんて…」

「答える必要はない」

「なら、何故ここではなく松代なんですか!？」

「葛城三佐、先の使徒との戦闘は記憶にあるかね？」

冬月が静かに口を開いた。

「はい」

「あの時の初号機と弐号機のような状態に3号機もなる可能性がある」

「!」

「もしそうなつてここで暴れられたら少々面倒だ、つまり保険だよ、起動実験では無く実際には暴走しないかの実験だ」

ミサトは冬月の言葉に少し俯いた。

確かにあの時の初号機と弐号機の姿…

思い出しただけでも寒気が走るものがある。

制御できるものならいい。

だが、もし制御できないものだったとしたら…？

「……わかりました、日程は？」

「明後日だ」

ゲンドウがそう言うつとミサトは一礼をして、司令室を出て行った。

「…これで良かったのか？碇」

「ああ…もうあの娘に用は無い、そろそろ退場してもらおうでしょう」

ゲンドウの視線にはモニターに写ったリツコの部屋があった。

「仕上げたダミーを試す頃合にもなる、何よりチルドレンたちの中であの娘は大きな存在のようだしな」

「…自分たちの大事なものを自らの手で壊させるシナリオか…
何時聞いても嫌な気分になる」

「全てはシナリオ通りに…だ」

モニターの中でうな垂れるリツコの姿を見るとゲンドウはニヤリと笑ってそう言った。

乗っ取られた3号機

「松代で起動実験、ですか」

「ええ、それとこのことは…」

「シンジくんたちには内緒にしておくんですね？」

「よ、よくわかったわね」

「まあ…僕だけ呼び出して伝える意味がそれしか考えられませんし」

「そうね、お願いね」

ミサトはそう言うとシズクを家に帰した。

シズクはマンションへと帰る途中にふと空を見上げた。

「いよいよ、か。」

「恐らく、いや、100%と言ってもいい。」

「3号機はバルディエルに寄生される。」

「自分が乗った状態のまま。」

戦うのはあの三人だ。

シズクは小さく首を横に振る。

… 大丈夫。

あの三人ならやってくれる。

僕は一人じゃない。

一人、頷くとシズクは再び歩き出した。

- 後日・松代実験場 -

「いい？シズクはいつも通りにやっていればいいから」

『はい…あの』

「何？」

『リッコさんは、そこにいますか？』

「…何かしら」

『…考えてもらえたでしょうか』

「…さあ、ね…もしこれが無事に終わったら…
これを引っくり返す程の度量が貴方にあるなら…考えなくも無い
わ」

「何？何の話？」

ミサトは一人蚊帳の外で話がさっぱり飲み込めない。

「女同士の話よ」

「あのねえ、リツコ…私だって女よ？」

「失礼、恋人がいない女同士の話よ」

「なっ…！」

ぼふっという音を立ててミサトの顔から湯気が立った。

「起動実験、開始します」

「あ、え、ええ、お願い」

「シンクロスタート…98.3%…安定…えっ！？」

「どうしたの！？」

「神経ノイズに異常発生！」

「パイロットとの通信、途絶えました！」

- 3号機・エントリープラグ内 -

「…っ！」

全身が栗立つような感覚にシズクは身震いした。

始まったか…

- 松代実験場・施設内 -

「3号機のプラグ壁面に粘着状の物質を確認！」

「これは…パターン青…っ!？」

「まさか…使徒…?」

ミサトがそう言ったとき、3号機は無理やり拘束具を引き剥がし

て施設を破壊した。

- ネルフ本部 -

「使徒が出たって!？」

「そつらしいのよ、どんなやつか知らないけど！」

シンジとアスカが一枚のカーテンに仕切られた着替え場でプログスーツに着替えながらそう言った。

「もう、シズクはまたどっか行っちゃうし！」

「……………」

アスカの言葉にレイは何も言わずプログスーツの空気を抜いた。

- 発令所 -

「エヴァ各機、位置につきました」

「目標の映像、出ます」

マコトがそう言うとメインモニターに目標の映像が出力される。

「これ、は…」

「まさか…」

「3号機…?」

- 初号機・エントリープラグ内 -

「あれは…まさか…3号機…?」

『そうだ、あれが目標だ』

ゲンドウの通信が入る。

「何言ってるんだよ、父さん…そんなの、出来るわけないだろ…あれにはシズクが乗ってるんだっ!」

『やらなければお前がやられるぞ』

「それでも…嫌だっ！」

『碇くん』

二人の通信にレイが割ってはいる。

「綾波…綾波は平気なの…？」

『……………現状シズクを助けるのにはあの3号機を止めなければいけない』

更にアスカから通信が繋がる。

『要するに、なるだけ怪我させずにエントリープラグを引っこ抜けばいいわけよね？』

『……………そう』

「でも、シズクと戦うなんて…」

『……………同じことをシズクも考えているわ』

「！」

そうだ…

例えば自分の意思では無くても僕たちと戦うということが一番嫌がるのは、シズクじゃないか…

シンジは両手で頬を叩いた。

「行くよ、アスカ、綾波！シズクを助けるんだ！！」

『了解』

- 3号機・エントリープラグ内 -

モニターが死んでいるわけではないのか外の景色が見える。

見えるのは三機のエヴァ。

戸惑いを見せるような動きをしていた各機だが
やがて戦闘体勢に入るのがシズクには確認できた。

…頼んだよ、みんな。

瞬間。

3号機が跳んだ。

それはとてつもないスピードで。

バルディエルの寄生によって強制的にシズクのシンクロ率は上げ

られていた。

モニターはされていないが、恐らく150%前後、と言った所だろう。

宙を飛んだまま3号機は右腕を在り得ない長さに伸ばして式号機へと迫る。

「このっ！」

式号機は反射的に前転してその腕を回避した。

瞬発的に零号機が3号機の右腕を捕まえる。

「……………碇くんっ！」

「うわあああああああ！！！」

初号機が飛んだ。

3号機は残った左腕で初号機を迎撃しようとする。

その左腕をA・T・フィールドが包んだ。

「大人しくしてなさいよっ！」

式号機が宙にA・T・フィールドを張ったのだ。

「シンジッ!」

ガシッと3号機の背中に取り付く初号機。

「これかつ!」

白い糸のようなもので粘着されたエントリープラグを見つけると初号機はそっとそれに手を伸ばす。

刹那。

3号機を取り巻く光の量が跳ね上がった。

「きゃあああああ!」

「うあああああああ!」

「……………っ!」

爆発的に広がるA・T・フィールドが三機を吹き飛ばす。

式号機がいち早く体制を立て直した。

「…やってくれるじゃない、流石はシズクのシンクロっ!」

アスカが呟くと式号機は3号機へと再び突進した。

レイもシンジもそれに続く。

三人はよく戦っていた。

純粋な力ではえばシズクの乗った3号機の方が圧倒的に上だったろう。

だが絶妙とも言えるコンビネーションで三機は3号機を翻弄していた。

・ネルフ発令所・

「頃合だな……」

「ああ」

冬月とゲンドウがそう呟くとゲンドウは下にいるマヤに指示を出す。

「初号機のシンクロをカット、ダミーに切り替える」

「!?!」

マヤは驚いてゲンドウを見上げる。

「な…なんですか？三人は善戦しています、ダミーを使う必要は無いかと…」

「善戦しているからだ、下手に苦戦しているときに未完成のものを使うわけにはいくまい」

「…しかし！」

「これは命令だ」

「……………わかりました」

マヤが唇を噛み締めながらコンソールを叩いた。

次の瞬間、初号機の動きが止まる。

『シンジ！？何してんのよっ！』

「わからないよっ、急に動かなくなっ…て…」

プラグ内の景色が七色に光り輝き、また外の景色が映る。

・ 零号機・ エントリープラグ内 ・

…これが、ダミーシステム…？

あんなものを作る実験に協力していたの私は…

猪突猛進する初号機を目の当たりにしてレイは身がすくんだ。

両手で体を押さえ、はっはっと思を弾ませた。

「…アスカ」

何とか操縦桿を握りしめ、アスカへと通信を送る。

『何よっ、あれ、どうしちゃったのよ！？』

「今初号機を操ってるのは碓くんじゃないわ、

私が3号機を抑えるから、アスカが初号機を抑えて…！」

『どういことっ？』

「…説明は後ですから、急いで！」

『ああ、もうわかったわよ、とにかく、今初号機を使ってんのはシンジじゃないのね！？』

「……ええ」

『そうよね…あのバカがあんな行動するわけ、ないもんねっ！』

弐号機は後ろから初号機を羽交い絞めにする。

対して3号機の目の前には零号機が立った。

「……シズク、今、助けてあげるから」

レイの瞳に赤い光が宿った。

初号機は力任せに弐号機を引き剥がすとそのまま宙へと放り投げる。

「このっ…！バカシンジ！なんとかならないのっ！？」

『無理なんだ！どうしてもいう事効かない…父さん！？父さんの
仕業なのかつ！？』

両手を合わせて力比べをする式号機と初号機。

「リツコも司令も…どいつもこいつも、勝手なのよっ！これだから
大人は！！」

式号機の目が光る。

箍が外れ、顎を開き、初号機に押されかけてた腕を盛り返した。

「シンジツ！ちよつと手荒くさせてもらっからね！」

『いいよ、父さんたちの勝手にみんなを困らせるよりずっといい
！』

式号機が後ろ回し蹴りを初号機の顔面へと決める。

そのまま飛び、蹴りを放つ。

初号機は蹴りを放った式号機の腕を途中で掴むとそのまま地面へ
と叩きつけた。

「…っ！？」

『アスカ！』

「こんくらい…なによおおおおおおおおお！！」

式号機はそのままブレイクダンスのように回転すると力任せに初号機の手を解きそのまま腹へと両足で蹴りを叩き込む。

一方。

3号機と零号機も熾烈な戦いを繰り広げていた。

とてもじゃないがレイに3号機の動きはついていけない。

それでも踏みとどまっていたのは、レイの強い思いと、特殊な体質。

…つまりA・T・フィールドだ。

零号機がA・T・フィールドを張って3号機の動きを止めようと
しても中和され動かれてしまう。

そこにレイ自身のA・T・フィールドを更に展開しワントempo、
3号機の動きを鈍らせていた。

結果、両者の差が縮まる。

だが、これは賢い戦い方では無かった。

エヴァの操縦には非常に高い精神力を要する。

そしてA・T・フィールドを展開することにも、だ。

その二つの作業を同時にこなしているレイの肉体はもうボロボロだった。

シズク…私はシズクを助けるんだ…！

レイの瞳の光量が一層増した。

シズク

- 3号機エントリープラグ内 -

シズクは焦っていた。

ダミーの起動。

弐号機と初号機の戦い。

そして、レイの負担。

全て自分の認識不足のせいだ。

どうすればこの状況を打開できる？

…どうすることも出来ない。

今、3号機は自分の制御下でない。

シンクロ率をコントロールすることすら出来ない。

シズクは静かにだがプラグ内に確実に聞こえる音で自分の頭を操縦桿にぶつけた。

【簡単なことだよ】

気付いたらそこは電車の車内だった。

前回の時にも嫌というほど見た自分の内部の光景。

目の前には碇シズク自身が立っている。

「…簡単なこと?」

シズクの問いに目の前の「シズク」が優しく微笑む。

【そう、自分を解き放てばいい】

「自分を…解き放つ?」

【疑問に思わないようにしていたことがあるだろう?】

「何を…?」

【何で過去に来て性別までもが変わっていたのか】

「…!」

シズクの目が見開かれた。

「…確かに、そうかも知れない、でも、今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ？」

【違うよ、今だから、それを思うのさ】

「どついうこと？」

【発想を逆転させてみようよ】

「…？」

【誰かが碇シンジを過去へと導いたんじゃない、

碇シンジが自分自身の意思で過去への回帰を望んだんだ】

「…どう…いう…？」

【君は後悔しただろう？アスカの最後を見て、ミサトさんの最後を見て、人類の最後を見て】

シズクは押し黙って俯いた。

「シズク」は構わずに言葉を続ける。

【だからさ、君は思った、過去に戻ってやり直したいって、でも躊躇もしたね】

電車が僅かに揺れる。

【その結果が性別の変換、そして別の碇シンジの形成だ】

「…それじゃ、まるで僕が神様なんかみたいじゃないか」

【だから、「そう」だって言ってるだろ？】

「……………」

【僕は選ばれし存在なんだよ、リリスと一つになって、
アダムから産まれなかった唯一の使徒、

第18使徒リリンを超えた存在、第19使徒、それが僕だ】

「嘘だっ！」

シズクは思わず立ち上がって叫んだ。

「シズク」はぐにやりと形を変えて楕円形に曲がりながらシズクの顔へと迫る。

【本当は気付いているんだろう？自分の性格が前とは微妙に異なっていることに

「シンジ」だった時とは明らかに違う強さが自分の中にあることに】

くすくす、くすくす、と笑い声がそこら中からこだました。

【だけど困ったな、アスカやシンジを助けるということは
リリンを生き延びさせるということだ、

知ってると思うけど使徒は別種の使徒とは存在できない、
僕もレイも結局はリリンのために滅びるしかないんだ】

「違う、違う違う！みんな、みんな幸せになる未来があったっていいじゃないか！

だから僕はっ！！」

そこまで叫んでシズクは気付いた。

だから僕は『過去』に還ることを決めた…？

【答えは出た？じゃあ僕の手を取ってよ】

シズクは静かに目を閉じる。

そして数秒、シズクの中では数時間に感じたかもしれない。

シズクはゆっくりと目を開けた。

「受け入れるよ、だけど僕もレイも滅びはしない…そのための力があるから…」

【…いい答えだ、確かに君は僕たちの結晶だよ】

最後に放った「シズク」の言葉は渚カヲルと綾波レイ、そして碇シズクの声が入り混じった声だった。

シズクは「シズク」の手を取る。

目の前に光が開いた。

気付いたら、目の前で零号機がボロボロになっていた。

だが決して膝をついていない。

3号機の動きに必要な最小限の動きでA・T・フィールドを展開し続けて動きを封じている。

式号機も限界に近い。

ダミーの初号機とほぼ互角の戦いを続けてはいたが、ダミーと違いアスカはスタミナと精神を消費する。

シズクの黒目の部分が小さく凝縮される。

刹那 -

3号機から光が走った。

あまりの眩い光にシンジもアスカもレイも、発令所でモニターしていた人間も全員が目を瞑った。

「何っ！？この光…レイ！大丈夫！？」

「……………私は平気、だけどシズクは…？」

『…初号機が…いう事を効く…？』

そのシンジの発言に初めて動揺を見せたのが発令所にいたゲンドウだった。

ガタツという音とともに机に手を当てて立ち上がる。

何だ…何が起こっている…

あの娘は一体何者だ…？

『…ザ…みん…ザ…な』

ノイズに混じってシズクから通信が入った。

「「「シズク！？」」」

『…無…ザ…事…？ザ…ザ…』

「あんたこそ、平気なの！？」

『僕は…ザ…大丈夫…ザ…夫』

「……………一体、何をしたの？」

『使…徒の…ザ…寄生…能…ザ…力…を一時…封…た』

三機はだらりと立ち尽くす3号機の方を見た。

『殲滅は……ザ……流石に……無理……だ……ザ……から……エントリープ
ラグ……引き……ザ……抜い……て』

シズクの通信が最後まで入り終わる前に三機は行動を起こしていた。

零号機と式号機がしっかりとだが、優しく3号機を抱える。

「シンジ！」

「……………碇くん！」

「わかってる」

初号機は丁寧に粘着性の糸……つまりはバルディエル本体を剥がしていく。

全て剥がし終わると、イジェクトボタンを押してプラグを放出した。

バシャアッ！とL・C・Lが大量に放出される。

「シズク！」

初号機のエントリープラグを放出してシンジは外に出た。

そして、はつきりと確認する。

プラグから出てくるシズクの姿を。

「……ただいま、シンジくん」

「おかえり、シズク」

「少し、初号機を借りていいかな？」

「え？うん、別に構わないけど……」

そう言うとしズクはシンジと一緒に初号機のエントリープラグに乗り込んだ。

「あの白い糸みたいなのが使徒の正体だよ……自身ではほとんど何も出来ない。」

せめてA・T・フィールドを張るくらいかな……エヴァに寄生して初めて活動を開始できるんだ」

そう言うとしズクは操縦桿を握った。

「さあ、目標はあの使徒だ……A・T・フィールド展開」

初号機が空へ向かって大きく手を広げる。

初号機の頭上に巨大なA・T・フィールドが展開された。

フィールドは僅かに、少しずつ、少しずつ凝縮され、一本の槍と化する。

「はあああああああああ！！」

シズクの叫びと初号機の動きが完全に重なり
バルディエル本体に向かってA・T・フィールドの槍が発射され
る。

バルディエル本体が些細な抵抗とばかりに張られた
A・T・フィールドはいとも簡単に碎け散り、

槍はバルディエルの本体を貫いた。

「シズク…今のは？」

シンジが呆然と見つめながら聞いた。

「別に…フィールドの流れを少しいじっただけ、それよりもありが
とうシンジくん」

「え？何が…？」

「僕を助けようとしてくれたでしょ？」

そう言ってシズクは優しく微笑んだ。

「いや…でも初号機が急にいう事効かなくなったりして…ダメだよ、
僕…」

「そんなこと無い、シンジくんは僕を助けてくれようとした、その

気持ちに僕は嬉しいよ」

そう言うとシズクはくすりと笑い

「もちろん、この会話を聞いてる二人にも感謝してる」

『！！』

『あ、あゝ…別に礼なんていいのよ、結局あんたが自分で何とかしてんだからっ』

『…………シズクが無事なら私は別に何もいらぬ』

アスカは聞き耳を立てていたのがばれていたのが相当焦ったらしく少しどもりながら、

レイは純粹にシズクの帰還を喜んだ。

「レイ」

『…………何？』

「僕は決めたよ…レイもアスカもシンジくんもみんな、みんなが幸せになれる未来を目指す」

『…………』

その中に…何故貴方は入っていないの…？

レイはそう問おうとしたがきつと入れるのを忘れたただ、と思

い込むことにした。

シズクは私に未来へと案内をしてくれる。

なら、私もシズクにとっての未来への案内人へとなろう、と。

心からそう思った。

『ぐ……………』

式号機の方から大きな腹の虫が鳴った。

「ぶっ……あははははは！」

『わ、笑わないでよっ！安心したらお腹空いたの！シズク！今日はご馳走いっっぱい作ってよね！』

「うん、任しといて」

そう言つと四人は本部へと戻った。

- ネルフ司令室 -

「碇…シナリオが大幅に狂い始めたぞ」

「…まだだ、こちらにはまだ切り札がある。

あの娘が何をしようと…結果は変わらんよ」

そう言つとゲンドウは小型のアタッシューケースを開ける。

中にはベークライトで固められたアダムが小さく息づいていた。

最強使徒ゼルエル（前書き）

破の影響受けまくってます）、・、（

最強使徒ゼルエル

「大体！ダミーシステムつてのが気に入らないのよ、何よ、そんなにシンちゃんが信用できないわけえ！？」

居酒屋でドンッ！と空になった中ジョッキを置いて叫ぶミサト。

「飲みすぎだぞ、葛城」

「ハイペースね、ミサト」

「あによっ！加持もリツコも何とも思わないわけ！？」

そう言いながら追加で出された中ジョッキをごくごくきゅと飲み干す。

「結果、シンジ君はダミーに打ち勝った、それでいいじゃない」

そう、このシナリオもあの子たちは超えていった。

後から見た映像記録からしか推測出来ないが

使徒に寄生された3号機から放たれた光の直後に
初号機のコントロールがシンジに変わっている。

これが…あの子の力…

司令のシナリオをも覆す力。

「…約束は、守らないとね」

「あん？何ですって？」

「独り言よ」

そう言うとりツコもグラスのビールを飲み干した。

「大体さ、ゼーレって何よ？委員会がネルフの上じゃなかったの？」

「ゼーレと委員会は基本的に同じものよ、

ゼーレが行動するときに委員会の名を語っているだけ」

「補完計画ってのは何よ」

「そこまでは知らないわ、私は司令の命令を聞いてただけだもの」

「今更隠し事してんじゃないわよ」

「してないわよ、神に誓ってもいいわ」

リツコの言葉にむうと唸るとミサトはジト目で加持を睨む。

「あんたも何か掴んでんでしょ？教えなさいよ」

「俺が言えるのは、このことにあまり首を突っ込まないほうがいい、それだけだ」

ミサトは空になった中ジョッキを静かに置くと、

「そういうわけにいかないでしょ、あの子たちの命預かってんのよ、こっちは」

と呟いた。

・翌日・

シンジはネルフ本部の自動販売機の前にいた。

「やあ、シンジ君」

「加持さん」

「どうだい？俺とデートでも」

「…僕、男ですよ」

そう言うシンジの顔に加持の手が伸びる。

「愛に性別なんて関係ない」

「えっ…ちよっ」

ゆっくりと近づいてくる加持の顔。

「あ——————っ!!」

シンジの絶叫が本部内をこだました。

「冗談だよ」

加持はシンジの耳元でくくつと笑った。

「か、加持さんはもっと真面目な人かと思っていました」

「大人はこのくらいの方が丁度いいんだ」

シンジは加持と本部の外にある畑へと赴いた。

「これって…スイカ、ですか？」

「そうだ、可愛いだろう？俺の趣味さ」

「へえ…」

「物を作るのってのはいいぞ、シンジ君」

「…僕もそう思います」

そう言ってシンジは雑草を引っっこ抜く。

「時にシンジ君」

「はい？」

「シズクちゃんやアスカやレイ…それに葛城のこと、好きかい？」

「え？…まあ、はい」

「みんな女性だ、男の君が守ってやらないとな」

「……………はい」

真面目な顔で返答するシンジを見て加持は満足そうに笑った。

「いい返事だ」

その時、凄まじい爆音と共にジオフロントに大きな穴が開いた。

「なんだ…！？」

「おいでなすったようだ、シンジ君、行ってこい、好きな人たちを守るために」

「…はい！」

シンジは畑から一直線に本部へと走った。

『18もある特殊装甲を一撃で溶解させるなんてただごとじゃないわ、

アスカ、レイ、シズク、頼んだわよ、

シンジくんも到着しだい直ぐに上げるわ』

『『「了解」』』

ジオフロント内に配置される三機のエヴァ。

それを見たシンジは歩幅を広げて走った。

「喰らいなさいよおおおおお!!」

両手にライフルを装備し、次々に撃ち出す弐号機。

しかし使徒・ゼルエルは全くそれを意に介さず空中を浮遊しながら近づいてくる。

「なんて奴っ!?! A・T・フィールドが堅すぎるっ!?!」

『…アスカ、遠距離が駄目なら近距離から』

レイからの通信。

「わかってるわよ! レイ、サポート頼んだわよっ!?!」

『……………了解』

弐号機が跳んだ。

片手には新型の剣付きのロケット砲を携えている。

バキイイイイインッ！！

ゼルエルが張る幾重ものA・T・フィールドに阻まれながら一枚ずつ中和して、接近する。

「こんのおおおおお！！」

もう一步、弐号機が近づこうとしたその時、ゼルエルの帯状の腕が展開されて弐号機を襲った。

ドオオオオン！！

弐号機に当たる直前に零号機がロケットランチャーでその腕を撃つ。

僅かに軌道が逸れて弐号機を掠めるようにカッターのような腕は宙を切り裂いた。

残ったもう片方の腕が再び弐号機を襲う。

『はああああああ！！』

ズガシィッ！！

カッター状の腕の平らな部分を3号機が蹴り落とした。

「ナイスサポート！シズクっ！！」

式号機のロケット砲の剣の部分がゼルエルのコアに密着する。

「貰ったっ！」

引き金を絞るアスカ。

ドオン！ドオン！ドオン！！

3発、コアに直接ロケット弾を撃ち込む。

が、それも堅牢なA・T・フィールドによって弾かれた。

「嘘でしょっ！？」

そのA・T・フィールドに式号機も弾かれてきりもみしながら地面へとバウンドする。

「…っ！？」

『アスカ！』

「大丈夫よっ！…やばっ！？」

式号機が立ち上がろうとした瞬間にゼルエルの伸びた腕によって式号機の右腕が吹っ飛んだ。

「くあっ！！！」

アスカは激痛に右腕を押さえる。

『このっ！！』

3号機の右踵落としがゼルエルの頭部に当たる、その瞬間。

また幾重ものA・T・フィールドが展開されて3号機が弾かれた。

弾かれた3号機は空中で回転してプログナイフを抜き、そのままゼルエルのコア目掛けてナイフを投げる。

ナイフが接近してくるのをゼルエルは目視すると目と思われる部分が光を放ち。

ナイフごと3号機の両足を吹き飛ばした。

『……………かつ！？』

『……………シズクっ！』

「まだまだああああ！！！」

アスカが叫ぶと右腕を失った弐号機が四つの目を光らせ大きく口を開けた。

数百メートル離れた間合いを一瞬で詰めて残った左腕を渾身の力で振り下ろす。

7、8枚、A・T・フィールドを砕いたところで左腕が止まった。

「こんな奴に…今更…負けるもんですかああああ!!」

弐号機は再び左腕を振り下ろす。

瞬間、ゼルエルは弐号機の方を見て光を放つ。

今度は弐号機の左腕が飛んだ。

「……………あくつ!!」

「…アスカ、離れて」

アスカは激痛に耐えながら零号機の方を見た。

N2爆雷を片手に持ち、ゼルエルの方を凝視している。

『レイ!? よせ!!』

シズクの通信。

アスカもレイのしようとしていることが分かった。

『……………大丈夫、エヴァが、守ってくれるから』

そう言つと零号機はゼルエルに向かって突進した。

N2爆雷を持った右手をゼルエルに向かって伸ばす。

ゼルエルからA・T・フィールドが展開され、阻まれる。

『A・T・フィールド…全開!!』

零号機からもA・T・フィールドが展開された。

『…これだけじゃ足りない、私のも…!』

レイの目に光が帯びる。

二重にA・T・フィールドが展開されて若干、押し返すもそれでもゼルエルの優位に変わりは無かった。

『…………ダメ、届かない』

そうレイが呟いた瞬間。

式号機が大きく口を開けてゼルエルのA・T・フィールドを噛み千切る。

『…アスカ?』

「ごめんね、ママ!でももう少しだから、我慢してっ!」

アスカが叫ぶと式号機は再びA・T・フィールドを噛み千切る。

「あと…一枚っ!」

首を振り、両手で両肩を押さえながらアスカは絶叫した。

そして最後の一枚のA・T・フィールドを噛み千切る。

自由になった零号機の持つN2爆雷がゼルエルのコアへと迫る。

当たる直前、コアの外から瞼のようなシールドが張られたのをシズクは確認した。

『レイ、アスカ、離れろっ!!』

シズクが叫んだ直後、大爆発が起きた。

「遅れました!」

シンジが息を切らせながらケージへと入った。

『シンジ君、急げ!三人が危ない!!』

飛んだ。

血飛沫が舞い散る中、初号機は怯まず、残った片手で強引に昇降機にゼルエルを追いやる。

「ミサトさんっ！」

「ロック、全部切り離して！急いで！！」

シンジの声にミサトは咄嗟に反応して命令を下した。

全てのロックが解除されて昇降機が射出される。

ゼルエルの背中と壁の間に火花が奔り、初号機と共に宙へと飛んだ。

空中に飛んだシンジの目に飛び込んできたのは
両足を失った3号機、全身が丸焦げになった零号機、
そして両腕を失って倒れている弐号機の姿だった。

ぶつん、とシンジの中で何かが切れた。

「お前はああああああああああ！！！！！！」

空中にいるうちにゼルエルの体に馬乗りになって左手で何度もコ

アを殴る。

「よくもみんなを……！」

地面に激突するゼルエル。

「よくも綾波を……！」

殴る。

「よくもシズクを……！！！」

殴る。

「よくも、アス力をつ……！！！！！」

そう叫んで殴ろうとした時、突然モニターが死んだ。

内部電源の残量を示す液晶には00:00の文字。

発令所より外に出たミサトたちもそれを目の当たりにする。

「初号機……活動限界です……」

「シンジくん……」

動かなくなつた初号機をゼルエルは腕を伸ばして胴体を突き刺し

空中へと放り投げる。

引き裂かれた胴体は初号機のコアが露出した。

地面へと叩きつけられる初号機に尚もゆっくりと接近する。

ガチャツ、ガチャツ、と何度も何度もシンジは操縦桿を引いた。

「動いてよ、動いてよ！今動かなきゃ何にもならないんだ、加持さんと約束したんだ！みんなを守るって、大事な人たちを守るって！好きな人たちを守るって！！」

ドクン。

「だからっ…動いてよっ！！母さんっ！！！！」

ドクン。

初号機の目が赤く光った。

全身が淡く赤い光を放ち、ぐぐつと起き上がる。

「…そんな活動限界はとっくに超えています、動けるはずがありません！」

「暴走っ!？」

ゼルエルの腕が初号機に向かって伸びる。

初号機は左手を前に出すと、まるで裂きイカを裂くようにゼルエルの腕を裂いた。

そのままゆっくりと立ちあがる。

『やめろ…シンジくん…戻れなく、なる…』

シズクは3号機の腕を地面に立たせ、逆立ちのような格好をして立ち上がらせた。

「僕はどうなったっていい、
みんなを酷い目に遭わせたこいつを今倒せるなら他に何もいらな
いっ…！」

シンジの叫びと共に初号機が跳んだ。

ゼルエルの展開した幾重ものA・T・フィールドを軽々と左手一
本で引き裂く。

その衝撃波でゼルエルの体も引き裂かれた。

初号機が無くなった右腕を前へと突き出す。

すると、瞬時に生身の人間の右腕のようなものが無くなった所か
ら生えた。

「信じられません…初号機のシンクロ率が400%を超えています
…！」

「いけない…シンジ君は人の垣根を捨ててシンクロしている…
こちらに戻ってこられなくなるわ…」

マヤの言葉にリツコが初号機を見て呟いた。

初号機が倒れたゼルエルに馬乗りになると、
そのまま乱雑にゼルエルの体を千切ってそのまま捕食する。

「使徒を…食ってる…？」

「S2機関を自ら取り込んでるというの…？初号機が…」

ヲヲヲオヲツヲツヲオヲオヲヲヲヲヲヲヲヲオヲオヲオ！

！！

ゼルエルを捕食し終えた初号機が空に向かって高らかに吼えた。

『シンジくん…！！』

両足を失った3号機が初号機に取り付いた。

【僕はこいつを許さない…！】

これは…シンジくんの心が…

【みんなを酷い目に遭わせたんだ、絶対に許すもんか、それで僕がどうなったって構わない…!!】

シンジの心の叫びだけを聞いてシズクは同じように心で叫ぶ。

僕が構うから…人じゃなくなる僕を見るのはもう沢山だから、だから…

『戻って来い！シンジくん』

3号機の腕が初号機のコアに入った。

そのままシズクの精神が初号機の中へと入っていく。

中にいるのはシンジとそれを守るように抱くユイ。

【…シズク？】

【シンジくん、帰ろう、みんなのところへ】

そう言って右手を伸ばすシズク。

伸ばした右手の皮膚が剥がれ落ちる。

【シズク…！】

【ミサトさんもレイも、アスカも、みんな待ってる、だから…！】
叫んだシズクの顔の皮膚も剥がれ落ちた。

【みんな、待ってるから】

皮膚が剥がれ落ちて赤く染まるシズクの顔はそれでも慈愛に満ちていた。

シンジは制止するかのように抱くユイの手を振りほどき、シズクの右手を取る。

シズクはそれを確認すると、思いつきりシンジを引っ張り上げた。

初号機は急速に目の光が失われて活動を停止する。

「初号機、活動を停止…パイロット…無事です…！」

マヤが泣きながら叫んだ。

『…今度は僕がお帰りって、言う番かな…』

エントリープラグ内で気絶しているシンジをモニターしながらシズクが呟いた。

最強使徒ゼルエル（後書き）

特殊装甲の数が間違ってるかもです

フィフス・チルドレン

ふう…と加持はタバコを吸うととんとん、と灰皿へと灰を落としました。

呼び出しを受けている。

相手も誰だか分かっていた。

そして、自分が何をされるのかも。

「俺が納得しててもあの子は納得してくれないんだろうな…」

そう呟くと、加持は自分の部屋を後にした。

- 某所 -

加持は呼び出された人物を待っていた。

不意にかかる声。

加持は振り向くとニヤリと笑って答えた。

「よお、遅かったじゃないか」

パンツ。

乾いた銃声が響いた。

倒れたのは、加持ではなく、声をかけた男の方。

加持の目は倒れた男の後ろにいるタケルを見ていた。

「遅かったか？」

タケルがニヤリと笑ってそう言った。

「いや、何なら早すぎたくらいだ」

加持もくくつと笑みを零すとそう言う。

「助かったよ、俺は本来ここで退場すべきだったんだろうが、俺が死ぬと困る人がいるんでね」

「何だよ、良く話に出てくる大学時代の恋人か？」

「いや…そいつもそうだが、一番はやはりあの少女さ」

「随分と夢中だな、恋人に逃げられるぞ」

「その心配はない、さ、葛城もその少女のことが大好きだからな」

リツコはノートパソコンに向かって目を通す。

ディスプレイにはここ最近の活動記録が載っていた。

・使徒との交戦記録

第15使徒・衛星軌道上で確認。

アスカが単独で出撃。

使徒に心理攻撃、精神に揺さぶりをかける攻撃を受けるも

動じることはなかった。

肉体的ダメージはなし。

衛星軌道上への使徒への通常攻撃の方法が不可能と判断され、

零号機によるロンギヌスの槍の使用が許可。

放った槍によつて第15使徒は殲滅。

第16使徒・第3新東京市郊外にて確認。

四機全て出撃。

零号機に侵食、汚染を試みるも

またも3号機から謎の光が発光。

侵食が止まる。

その後、全エヴァによる一斉攻撃により殲滅。

-

リツコはここまで読み終わるとコーヒーを一口啜る。

第15使徒との戦いは特に問題はなかった。

アスカの精神は予想以上に頑強だったのか精神汚染の類も見つか
らず

今日も元気に過ごしている。

問題は第16使徒との戦い。

3号機が使徒に寄生されたときにも見せたシズクのあの力だ。

あの光にはどうやら使徒が保有する特殊能力を封じる力がある、とリツコは推測した。

「これがもし本当なら、あの子は本当に世界の切り札となり得るわね」

リツコはコーヒーを飲み終わると、ノートパソコンの電源を落とした。

- 朝・葛城邸 -

「あら、おはよう」

「おはようって何やってんの？アスカ…」

シズクが目を覚ますとアスカが台所に立っていた。

「何って、見りゃわかんでしょ、料理よ、料理」

「へえ…なんでまた急に？」

「そりゃシンジに…じゃないっ！レイもこの頃作れるようになってきたし、

私も一端に作れるようになってくれないと面子ってもんがあるですよ」

アスカはそう言うとお玉でスープを掬い一口飲む。

「うん…もうちょっと薄味の方がいいかな、シズク、味見してよ」

「いいよ」

シズクはアスカからお玉を受け取ると一口スープを飲んだ。

「うん、基本はいいよ、もうちょっと薄い方がいいけど、水で薄めたらちゃんと出汁を調節するのを忘れないでね」

「あ、そっか、ただ薄めるだけじゃ駄目なのね」

「何なら今日のシンジくんのお弁当、アスカが作る？」

シズクの言葉にアスカの顔が紅潮した。

「え、でも、あいついつつもシズクの弁当食べてるから、私の弁当なんて食べても美味しく感じないわよ」

「そんなことないよ、アスカが作ってくれたっていうだけできつと喜んで食べてくれる」

「そう…かしら」

「そうだよ」

「そう、よね、よしっ！私も女よ！一度言ったことは曲げないわ、シズク、手は出さないでよね、実力で美味いって言わせてやるんだから」

「わかってるって」

シズクは微笑むとアスカの弁当作りを見守った。

- 昼休み・教室 -

アスカが弁当箱を持ってシンジの前へと立った。

手には無数の絆創膏が貼られている。

「シンジ、これ、食べない？」

「え…これ、アスカが作ったの？」

「そ、そうよ、ちょっと練習がてら作ったの、折角作ったんなら食べなきゃ勿体無いでしょっ！」

シンジはしばらく呆けた顔をしていたが

「ありがとう、有り難くいただくよ」

と言って笑った。

シズクもレイもヒカリもその様子を見てくすくすと笑った。

「何や、センス、今日は新妻からの愛妻弁当か」

「新妻とか言うな！！」

トウジの言葉にアスカが怒鳴る。

「綾波やら碇やら惣流やら、羨ましいなっ、お前はっ！」

「痛いっ、離せてケンスケ」

ケンスケはシンジにヘッドロックをかけると心底羨ましそうにそう言った。

学校の帰り道。

トウジとヒカリ、ケンスケはトウジの妹が退院して日が浅いということもあり

トウジの家へお見舞いへ。

シズクたちも行きたかったがシンクロテストの日だったために三人とは別れ、

本部へと歩いていった。

「あれ…誰か、いる」

湖から突き出してる瓦礫の上に銀髪の少年が座って空を眺めていた。

銀髪の少年はシンジたちに気付くと微笑みを絶やさずに瓦礫から降り、

シンジたちの方へと向かってきた。

「やあ、お揃いで」

「あんた、誰よ？」

アスカはジト目で少年を見る。

「渚カヲル…フィフス、だよね」

シズクの呟きに三人は驚愕の表情をしてカヲルとシズクを交互に見た。

「よく知ってるね、いや、当たり前か、碇シズクさん」

「カヲルくんこそ、何で僕の名前を？」

「正気かい？君は自分の今までやってきたことがどれほどのことが理解しているかい？」

有名なんだよ、君も、もちろん、他の君たちも」

「……………私たちのことも知っているの？」

「もちろん、君は綾波レイさん、君が惣流・アスカ・ラングレーさん、で…」

君が碇シンジくん、だろ？」

「う、うん」

「カヲルくん」

「なんだい？」

「僕は君とは戦いたくない…」

シズクの呟きにまたも頭が混乱するアスカとシンジ。

「戦いたくないって…逆でしょ逆、こいつがフィフスなら仲間ってことじゃん」

カヲルは満足気な笑みを浮かべると

「何でも知ってるようだね、シズクちゃん、その話はまた今度にしよう、今は新しい仲間として迎えてくれなかな」

「…わかった、よろしく、カヲルくん」

そう言っ て差し出された右手をシズクは握り返した。

「フィフス？初耳よ、それ」

ミサトはシズクお手製の弁当を摘みながら呆けたように言った。

「昨日、マルドゥックから報告が上がってきたわ」

リツコがそう言って箸を口に咥えたミサトに書類を渡した。

「…マルドゥックたって、単なるお飾り機関でしょ、裏ではどうせまたゼーレが絡んでるんじゃないかな」

書類を片手でヒラヒラさせながらミサトはそう言う。

「そういうこと、あまりこの場所で発言しない方がいいわね、どこで聞かれてるかわからないわよ」

「でも乗るエヴァが無いわよ」

「必要ないわよ、彼にエヴァなんて」

「どついつことっ」

「あくまで推測に過ぎないけれどね…シンクロテストをやってみればはっきりすると思うわ」

- シンクロテスト -

五人のモニターがシンクロ数値と共に映し出される。

レイ・89・1%

アスカ・98・8%

シンジ・99・2%

シズク・99・7%

カヲル・100%

「嘘……」

思わず眩きが出たのはマヤだ。

「これで、彼の正体はつきりしたわね」

「どづいづいとよっ」

「ここでは色々と問題があるわ、後でそうね、加持君の部屋でも

話しましょうか、

出来ればシズクちゃんも呼びたいわね」

「シズクも？」

「恐らくは、あの子も気付いてると思うわ、渚カヲルの正体に」

- 加持の部屋 -

「いらっしやい、三人とも」

加持はそう言うとコーヒーを注いで三人へと差し出す。

「加持、この部屋、本当に盗聴の恐れ無いんでしょうね？」

ミサトの問い。

「大丈夫さ、なんならこの命を賭けたっていいぞ」

「べっつにあんたの命なんていららないわよ」

「そう言うなよ、葛城以外には賭けたりしないさ」

「二人とも、独り身には目の毒だからそういうの、やめてくれないかしら？」

リツコの言葉にミサトは真っ赤になってそっぽを向いて、加持は飄々とした顔で両手を上げた。

「…で、話題戻すけどフィフス…渚カヲル、何者よ？」

「ここからの話は全て憶測に過ぎないわ、それでも構わないかしら？」

「勿論よ」

ミサトが頷くと、リツコは淡々と語りだした。

「多分…彼はゼーレが送り出した最後の使徒よ」

「使徒…彼が！？」

「ゼーレが描いてる人類補完計画、そのシナリオが大幅に狂い始めてる今、

早急に手を打つ必要がゼーレにある。その依り代が渚カヲル。

狙いはセントラルドグマの侵入、そしてサードインパクト、かしらね」

「前から思ってたんだけどさ、何で使徒ってサードインパクトを起こしたい訳？」

「それは、私よりシズクちゃんの方が詳しいんじゃないか？」

そう言ってリツコはシズクを見た。

以前のような冷たさは無い。

どちらかといえば知的好奇心が疼いている、といった目だ。

「シズクが？何で？」

「あら、言ってなかったかしら？彼女、シンジ君と同じなのよ」

「何がよ？」

「DNA」

「へ…？」

「つまり、シズクちゃんはシンジ君のクローンである確率が高いのよ
本人も思い出せないようだから、あまりその事で議論を費やす時
間は無いですね」

「リツコさん、僕はクローンではないですよ」

「そうね、例えクローンだったとしても、今や完全に別人、失敗作
よ」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「で、シズクちゃん、使徒がサードインパクトを起こしたい目的、
わかるかい？」

加持が話を元に戻す。

「使徒というのは人類とは別の進化の可能性を秘めた、いわば別種の人間です。

使徒の肉体構成が人間に限りなく近いのは三人とも知っていますよね？」

「そうね」

「使徒は自らが生き延びるためにサードインパクトを使って単独の種となることを目指します」

「ちょっと会話についていけないんだけど、生きたいならどっかで勝手に生きればいいじゃない、
どうして人類を滅ぼす必要がある訳？」

ミサトの質問にシズクは静かに目を閉じて答えた。

「人間も使徒だからです、使徒は別種の使徒と共存できません」

「人間も…使徒…？」

「そうです、第18使徒リリン、人間は遙か昔アダムの手によって産まれた使徒

一種一体の使徒と違い、不特定多数が存在するいわば未完成の使徒なんですよ」

シズクの答えにミサトは驚愕した。

「なんで…シズクはそこまで知っているわけ？」

「僕も、使徒だからです」

シズクは目を開けずに答えた。

「なん…ですって…？」

ミサトは尚も驚愕する。

リツコと加持はある程度予想していたためか、それほど驚いた様子は無かった。

「でも、僕は人類…リリンに生き延びて欲しい、だからもしカラルくんがサードインパクトを引き起こそうとするなら戦いますよ、彼と…」

少し沈黙を置き

「仮にセントラルドグマにあるのが本当にアダムなら、の話ですけど」

と言った。

「違うのかい？」

加持が聞く。

「加持さんが聞きますか？」

「やれやれ、手厳しいな」

加持は肩を竦めると口を開いた。

「確かにセントラルドグマにあるのはアダムじゃない、リリースだ。アダムはアス力を運んできたときに司令に渡したから今も司令が持っているはずだ」

「あんた、何で今までそんな大事なこと黙ってたわけ？」

ミサトがジト目で加持を睨む。

「そう怖い顔するなよ、あまりこの件に関して首を突っ込んで欲しくなかったただけだ」

「とにかく」

シズクが話を元に戻す。

「カヲルくんは近日中に行動を起こすでしょう。多分、どれかのエヴァと同期してセントラルドグマを目指すはずです。」

カヲルくんもあそこにアダムがあると、そう思っているはずですから」

「エヴァと同期…？」

「カヲルくんの能力ですよ、エヴァとほぼ同じ体組織を持つ使徒ならではの能力です。」

13使徒：バルディエルも使っていましたがかヲルくんは遠隔で

「行うことが可能です」

「貴方の力ならそれ、封じることが可能じゃなくて？」

リッコの問い。

力、とはあの光のことだ。

「出来なくはない、と思いますが、意味がありません。そうしたらカラルくんは単独で向かうだけですから」

そこで一息つくようにコーヒーを啜った。

「…ちょっと、苦いですね」

そう言って微笑む。

「ああすまない、砂糖とミルク入れるの忘れてたな」

「はあ…人生生きてきた中で今日が一番驚いたわ…」

「とにかく、彼の今後の行動には十分な注意が必要ね」

「…そうね」

- ネルフ・大浴場 -

「風呂はいいねえ…体の疲れが癒される」

「そうだね」

カヲルとシンジは体についたL・C・Lを洗い流すために風呂に入っていた。

「あの…カヲルくん、何でチルドレンに…？」

「理由が必要かい？」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど」

「僕も君たちと同じく仕組まれた子供なのさ、一番近い存在はシズクちゃんだろうね」

綾波さんも似たような存在だけど」

「シンジくん」

「なに？」

「君はこの世界が好きかい？」

カヲルの質問にシンジは少し考えると

「正直言つと、前、ここに来る前までは嫌いだった、無くなってもいいとさえ思ってた。」

でも、今は違つ、毎日が楽しくて仕方ないんだ、僕はこの世界が好きだよ」

「そうかい」

「いいね、君は、好意に値するよ」

「いいつて…何が？」

「好きつてことさ」

カヲルはそう言つて微笑んだ。

「え、あ、いや、どうもありがとう…」

シンジは顔を真っ赤にして俯く。

「面白い反応をするな、君は、とはいえ君を取ったら惣流さんに怒られてしまうかな」

「ア…アスカが何でそこで出てくるのさ？」

「気付いてないのかい？面白いな、君は」

カヲルはそつとシンジの耳元へと顔を近づける。

「惣流さんも僕と同じ気持ちを持っている、君に好意を抱いているんだよ」

吃驚した表情でカヲルを見るシンジに対し、カヲルは絶えず微笑みを浮かべ続けた。

フィフス・チルドレン（後書き）

アラエルとアルミサエルに関してずっと飛ばしすぎた感がWWW

最後の使者

「ネルフは我らが手を離れつつある」

無数のモノリスが円卓上に並ぶ。

「左様、だからこそあれを送り込んだ」

中心にはバイザーを被った白髪の老人がいた。

「我らが悲願を成就するために……」

「我ら人間が神に対して贖罪するために……」

「もしあれが失敗したらどうする？」

「裏死海文書による使徒の出現は全部で17体……
これ以上の使徒でのネルフ侵攻は不可能だ」

「心配はいらない、使徒がダメならば人間がある、
それに保険のためのエヴァシリーズとそれを動かすための根源も
既に完成しつつある」

「……では、全ては我らがゼーレのシナリオ通りに」

老人がそう呟くとモノリスは一斉に消え去った。

夜・葛城邸。

カヲルの歓迎会。

ミサトの提案で開かれた催しが行われていた。

聞こえはいいがミサトから言わせればこれは観察である。

シズクから聞いた情報、カヲルの正体。

そしてサードインパクトの真実。

全てを踏まえ、ミサトはカヲルの存在を危険と判断した。

それに、シズクのこと、だ。

語弊の無いように言っておくがミサトは心からシズクを信頼している。

シズクに自分が使徒だと聞かされたときは確かに驚愕したしそれ以上に自分たち人間が使徒だということに一番ショックを受けた。

まさか仇だと思っていた使徒と自分たちが別の可能性というあやふやな表現だけで

同じ素体だとは思っていなかったらだ。

だが、ミサトはそんなことを言っていられる立場ではないし状況でもない。

なんとしてでも人類の滅亡は防がなければならない。

そうしないと今まで戦ってくれたチルドレンたちにも申し訳が立たないからだ。

だが同時にミサトはシズクやレイも一緒に生き残る方法も模索していた。

これはミサトのスタンドプレーではなく、加持とリツコも協力している。

ミサトはテーブルを挟んで会話している五人をえびちゅを飲みながら見つめた。

信じられないわね、この五人のうち三人も人間じゃないなんて。

そう思ったところで小さく首を横に振る。

馬鹿な考えはよそう、シズクもレイも今まで自分たち人間のため

に頑張ってきた。

何より信頼の置ける仲間だ。

「大丈夫ですか？」

そこまで思慮していたところで不意にミサトに声がかかる。

銀髪の少年はにこやかに微笑みながらミサトに話しかけた。

「あ、ああ、大丈夫よん」

ミサトはそう言うとい気にえびちゅを煽った。

そのカヲルの笑顔からはセントラルドラマに
侵攻する気配が微塵も感じられない、とミサトは思った。

深夜。

カヲルはベランダで手すりに背を持たれながら月を見上げていた。

カラツという音が鳴って、窓が開く。

カヲルはこちらに近づく人影を見て「やあ」と声をかけた。

「…カヲルくん」

「どうしたんだい、こんな時間に」

「いや、別に」

「早く寝たほうがいい、何せ明日はきっと朝が早い」

カヲルの言葉にシズクは思わずカヲルの目を見た。

穏やかな赤い瞳は月を映し出している。

「明日…やる気なんだ」

「そうだね、それが僕がここに存在する理由だから」

「…誰も人形みたく縛られる必要なんてないのに」

シズクが悲しそうに呟くとカヲルは笑ってシズクの頬に右手を添える。

「君は優しいね」

「そんなこと、ないよ」

シズクは悲しそうに微笑んだ。

「予告しておこう、君と綾波さんのエヴァをに使わせてもらうよ、惣流さんとシンジくんのは魂の存在が強すぎて介入できないからね」

「…止めて見せるよ、カヲルくんを」

そのシズクの言葉にカヲルは満足そうに微笑むとベランダから中へと入ろうとする。

途中シズクと擦れ違いざまにぽつりと。

「楽しみにしているよ」

と呟いた。

翌日。

- ネルフ本部・ケージ -

「さあ、行こう、アダムの下に」

カラルが3号機と零号機の前でそう両手を広げると
3号機と零号機が拘束具を解除して自動で動き出す。

そのままカラルは二機を伴いセントラルドグマへと侵攻を開始した。

サイレンが鳴り響く。

モニターに映し出されるカラルの姿。

「カラル…くん…？」

エントリープラグの中でシンジが呟いた。

『ミサト、どういふことよっ！？なんであいつが！！？』

『彼は使徒よ、現在セントラルドグマに侵攻中』

アスカの問いにミサトは直球で答えた。

「使徒：カヲルくんが！？」

『渚カヲル…いえ、目標は現在セントラルドグマへと降下中、3号機と零号機を遠隔操作で操って中央にいるアダムと接触するつもりだわ』

「…そんな」

『仲間のふりして近づくななんて随分卑怯なことやってくれんじゃないっ！』

『二人とも、すぐに追って、何としてもサイドインパクトだけは避けなくてはダメよ』

「でも…カヲルちゃんと戦うなんて…」

『あんたね！このままじゃ人が滅びるのよっ！！やるしかないでしょうがっ！！？』

回線越しに話しているアスカの声もどこか納得のいっていない、という感情がこもっていた。

初号機と式号機が出撃する。

追ってくる二体のエヴァを見てカヲルは微笑んだ。

『シンジ、3号機をお願い、私は零号機を抑えるわっ!』

「…了解っ!」

初号機と式号機はプログナイフを同時に構えてそれぞれナイフを振り下ろした。

「ここで足止めしてしてくれ、いい子だから」

カヲルは二体のエヴァにそう言うとな、スピードを上げ降りていく。

『不味い!逃げられる!!』

ミサトの通信が響いた。

『…このっ!』

式号機が零号機を蹴り飛ばすと持っていたナイフをカヲルに向かって投げた。

カヲルに当たる直前にA・T・フィールドによってナイフは弾かれる。

「A・T・フィールド…!!」

シンジはここであやうやく、カヲルが使徒であることを思い知らされた。

「何をそんなに驚いているんだい?君だって持っている、心の壁、

絶対領域。

別に不思議な現象じゃない」

そう言い残すとカヲルは真っ直ぐ下に下りていった。

『逃がすもんですかっ!』

式号機が追おうとしたところを思いっきり零号機が蹴り飛ばす。

『…くあっ!?!』

「アスカ!」

初号機も3号機の両腕を掴んだ状態で膠着していた。

セントラルドグマの底へと辿り着き、そのまま十字架に貼り付けにされた巨人を目指すカヲル。

その巨人の目の前に二対の人影があった。

「やあ、随分、早かったね」

「…昨日、忠告してくれたからね」

「……………」

シズクとレイがカヲルの前に立った。

「どうしても邪魔をするのかい？」

カヲルの声にシズクは巨人を指差すと。

「あれはアダムじゃないリリスだよ、カヲルくん」

と言った。

カヲルは目を見開く。

「……………」

ふわり、と空に浮かびリリスへと手を伸ばす。

「……………確かに、君の言うとおりだ、これは計られたな」

シズクはカヲルに向かって右手を振った。

「だから…サードインパクトは起こせない、僕たちが戦う理由は無
いんだよ！」

「戦う理由？それは確かに消滅したね、でももう一つ消滅したもの

もある」

「……………何？」

レイがカヲルに厳しい視線を送りながら問いただした。

「僕の存在意義だ」

カヲルはそう言うのと地面へと降り立った。

「僕はここでアダムと同化してサードインパクトを起こす、
そのただけに作られた運命の子だ、それが無くなったならいなくなるのが道理だ」

「違う」

シズクは右手をぎゅっと握り締めて呟く。

「何が違う？ どうせ生き残ったって後に待つのは滅びのみだ
ならば、せめて自分の死に方くらい、自分で選ばせてくれ」

「違う、違うっ！ 違うっ！！」

「可笑しいな、シズクちゃん、何をそんなにムキになる？」

「だっておかしいよ！ 誰がカヲルくんを滅ぼすって決めたの！？
誰が使徒同士は存在できないって決めたのっ！？」

僕もレイも使徒だけどシンジくんやアスカと一緒に生活出来る
！！！」

シズクは握り締めた右手を前方に振り払って叫んだ。

「それだって一時的なものだ、僕たちはリリンが生き残るためには滅びるしかない」

そういうカヲルの表情に変化はない。

「……でも、滅びの時が来るまで自分の意思で生きることには出来るわ」

レイが一步前に出てそう言った。

「……確かに何時か私たちは滅びる運命なのかも知れない、でも、だからと言って死と生が等価値とは思わない」

「それは君の思想だろ、綾波さん、僕にとっては死と生は等価値なんだよ」

「だったらそれをこれから変えていけばいいだろうっ！」

「僕は綾波さんとは違う、そう簡単に変われない」

「そんなの…やってみなくちゃわからないじゃないかっ!？」

ドボーーーーー！

四体のエヴァが同時に着水した。

カヲルはシズクとレイに軽く微笑むと初号機に向かって歩き出す。

「さあ、シンジくん、君の出番だ」

「カヲルくん！」

シズクの叫びを無視するようにカヲルは続ける。

「僕は退場する時間だ…殺してくれ、君の手で」

初号機と弐号機は動かないまま沈黙だけが過ぎていった。

『……………いやだっ』

シンジから聞こえるか聞こえないかという声量で返答が返ってくる。

「…何故？」

『カヲルくん、僕のこと好きだって言ってくれたろっ！？あれは嘘だったのかっ！？』

「嘘じゃない、君のことが好きだ、だから頼んでる」

『僕だってカヲルくんが好きだ、まだ会って日が浅いけど、それでもカヲルくんを、好きな人をこの手で殺すなんて出来ないよ！』

「それを僕が望んでいるとしても？」

『…出来ないよっ！！』

突如、式号機のエントリープラグがイジェクトされる。

ザバアツという音と共にL・C・Lが放出されてアスカが怒りの形相で出てきた。

滑り降りるように地面へと立ち、カヲルの下へと歩幅を上げて歩んでいく。

カヲルの胸倉を掴み、自分の方へと引き寄せた。

「あんたバカア！？シンジに何残酷なこと頼んでんのよっ！！
死にたきゃ自分で死ねばいいでしょ！自分の都合に人様巻き込んでんじゃ無いわよっ！！」

カヲルはそう怒鳴ったアスカを見てふっと微笑むと。

「やっぱり思ってたとおりだ」

と言った。

「何がよっ！？」

「君もシンジくんが好きだと言っ事さ」

「なっ…！？」

「照れなくてもいい、今の言葉を聞けば分かる。
でもそれなら僕の気持ちも理解してもらえないかな、せめて最後
は好きな人の手で死にたい」

「だからっ！何でそこで自分が死ぬ結論に達するわけっ！？」

アスカの問いにカヲルは少しだけ驚いた顔をする。

「どうせ僕は死ぬんだ、これに失敗すればゼーレは黙ってはいない。
全力で僕の存在を抹消しにかかるだろう、どうせ死ぬなら好きな
人の手で死ぬのがいい」

「だったら！あんたを！私たちがっ！守ればいいんでしょうがっ！
！」

アスカがガクガクとカヲルを揺さぶりながら一言一言にアクセシ
ントをつけて怒鳴り散らした。

「使徒なら絶対滅びるべき！？だったらレイはどうなるのよっ！？
レイも何時か滅びるとでもいうの…！？」

「その通りだ、僕も綾波さんもシズクちゃんも、
君たちリリンが生き延びるためには滅びなければならない」

『シズクも…ってどういうこと？』

「シズクちゃんも使徒という意味だ」

シンジの疑問に答えたカヲルの答えはシンジとアスカに少なからず衝撃を与えた。

だがアスカの怒りの沸点は今、そこにはない。

”そんな些細な問題”はアスカにとってどうでも良かった。

「私はねっ、そんな未来絶対に認めないわっ！」

レイもシズクも勿論あんたも、そして私たちも全員生き延びる未来を選んでみせる！！」

「強情だね、惣流さん」

「あつたり前でしょっ！？人の生死にが懸かってんのよ！！」

「僕は人じゃない、使徒だ」

「そんなこと関係ないつつてんでしょうが！！」

アスカの堪忍袋の尾がぷつんと切れて勢いのままカヲルを殴り飛ばした。

はぁ、はぁ、と息を乱しながらアスカがカヲルに近づく。

再度カヲルの胸倉を掴むと今度は自分から顔を近づけた。

「いい？物分りが悪いようだから何度でも言うわよ！

私はあんたを、仲間として迎えたのっ！！シンジだってそうよ！！だから、私もシンジもシズクもレイもあんたを殺さないし、殺さ

せない！！！」

カヲルは呆けたようにアスカを見ると。

くくつと笑い出して遂にはセントラルドグマが
カヲルの笑いで包まれるんじゃないかというくらいに笑った。

「何がそんなに可笑しいのよっ!？」

「いや、失礼…一口にリリンと言っても色んな思考の持ち主がいる
ものだと思って、

老人たちとは実に対照的な考え方をするな、君たちは……
面白い、実に興味深いよ、君もシンジくんも」

「カヲルくん」

そう言つてシズクがカヲルに近づく。

「なんだい？」

「…これから、かつて無い戦いが起きる…分かるだろ？」

ゼーレがこれに失敗したら次にどんな行動を起こすかくらい。

それに司令の計画だって全て防げたわけじゃない、だから…さ」

シズクは右手を差し出す。

「…カヲルくんが飽きるまでで構わない、手を貸してくれないかな？
人類が…リリンが正しく生き延びるために…」

「僕が惣流さんやシンジくんに飽きるまでという意味かい？」

「別にそう捉えてもらってもいい」

「途中でリタイアするかもしれないよ？」

「構わない」

「アダムを見つけたらその場でサードインパクトを引き起こすかもしれないよ？」

「それはさせない、けど…お願いする」

レイもシズクのすぐ側まで立ってそつと右手を差し出した。

沈黙が辺りを支配する。

暫く経つとカヲルの口から溜め息が漏れた。

胸倉を掴んだアスカの手をそつと解くと、カヲルはシズクとレイの方を向く。

「シズクちゃん」

「何？」

「君は僕が質問している間もずっと右手を差し出したままだね」

シズクはちらりと自分の右手を見た。

「うん」

「…まあ、自らに好意を抱いて差し出される手を振りほどくというのは僕の趣味では無いし、

それにシンジくんの気持ちも少し、理解できた」

「…………じゃあ」

レイがそう呟くと。

「…ああ、僕が飽きるまで、という条件の下、
進化への可能性を拒絶した三人組結成ということで…」

そう言つてカヲルはシズクとレイに右手を伸ばす。

三人の右手がそれぞれこつん、と触れ合った。

シンジが初号機から降りてこちらへ向かってくるのが確認できた。

「アスカッ！」

「…ま、成るように成るんじゃない？」

生きるための理由はなんか気に入らないけど、だからと言って仲間だつたら使徒でも殺す、なんて真っ平ごめんだし…」

満更でも無さそうな微笑みを浮かべてアスカはそう呟いた。

「…そう、だね」

シンジもシズクたちを見て呟く。

「そう…言えば、さ」

「何よ？」

「僕のこと…好きっ、て…」

真っ赤になって俯きながら口に出したシンジの台詞に
アスカも顔を真っ赤にしてシンジから顔を背けると

「か、勘違いするんじゃないわよ、友達としてよ、友達としてっ！」

と早口で捲くし立てた。

「…そっか、そうだよね」

そう言ってシンジは、はははっと笑う。

「……………この超鈍感男っ」

アスカは明後日の方向を向いたままぼそつと誰にも聞こえない声で呟いた。

カヲルが加わった日常

「えー、今日から転校してきた、渚カヲル君です」

老教師がそう言うとカヲルを紹介する。

色めきたつ女子の声。

「よろしく」

そう言うとカヲルは軽く微笑んだ。

「けっ、なあにかいけ好かないやつちやのお」

トウジが両手を頭の後ろに組んで足を机に投げ出してそう言った。

「そんなこと無いよ、僕たちの仲間なんだから」

シンジが苦笑してトウジに言う。

「仲間って、じゃあ、あいつネルフのパイロット!？」

「え、うん、そう…なるのかな」

「くっ、いいなあ、俺も乗りたいなあ、エヴァー!」

ケンスケは両手を握って羨望の眼差しでカヲルを見た。

「面白い所だね、ここは」

カヲルがシズクに向かって話しかける。

「死なないで、良かったろ？」

「さあ、それはどうかな」

意外にカヲルくんって強情だよな。

そんなことを思っただけでシズクはくすりと笑みを零した。

「いいね」

シズクを見てカヲルも笑みを零す。

「何が？」

「やっぱり君は笑うところが似合うよ」

カヲルにそう言われてシズクの顔が赤面する。

「そ、そんなこと、ない、よ」

「………… 貴方は碇くんが好きなんじゃなかったの？」

若干、不機嫌そうにレイが呟いた。

「僕はシンジくんは好きだけど同時に惣流さんも好きなんだ。
だからシンジくんは惣流さんに譲る、そしたら次に好きな人は？
答えは君だ、シズクちゃん」

「な、な、な」

シズクはカヲルの言葉に思わず口が回らなくなる。

「どうだろう？ 同じ人で有らざる者同士、仲良くしてくれないかな」
そう言ってカヲルが目を細めて微笑んだ。

シズクはちょっとだけ視線をカヲルからずらすと、

「か、考えさせて」
とだけ呟いた。

「…………シズクは渡さない」

嫉妬心を丸出しにしてレイがシズクとカヲルの前に立つ。

「いいだろう、勝負するかい？ 綾波さん、シズクちゃんを賭けて」

「……………望むところよ」

レイは至極真面目に、カラルは実に楽しそうに会話する。

両者から火花がバチバチ、というよりは一方的にレイから火花が奔っており

カラルはそれを真正面から平然と受けている感じだった。

シズクはそんな二人を見ておろおろと両手を右往左往していた。

「さいってえ！シンジに振られたからってすぐにシズクに行くの？
節操ないわけあんた？

しかも何？そもそもあんたホモなの？普通なの？」

アスカがジト目でカラルを睨みながらそう言うのと別段気にした様子もなくカラルは

「僕は使徒だよ、惣流さん、使徒に性別の概念は無い。

それ単体が完全な生命体へと昇華しているわけだけらね。

君らリリンのように無意味に増えることもなければ生殖行動を行うことも無いよ」

「せ…生殖行動ってカラルくん…」

「じゃあ何でシズクな訳？シズクが女だからじゃないの？」

「別に、単純にシズクちゃんに興味を持ったからさ、もちろん君にも興味がある。

まあ君一人じゃない、もう少し言うと君とシンジくんが一緒にいるところを見ることに興味があるんだ」

カヲルのその言葉にアスカとシンジは同時に赤面し
「あ…うつ…」とか呟きながらモジモジとお互いを見合わせた。

- 放課後 -

「歓迎会？僕のかい？」

「うん、ミサトさんが前のは本当の歓迎会じゃないから
今度は本当の意味で歓迎したいって…何か今日用事あった？」

シンジの言葉にカヲルが微笑むと。

「いや、何もないよ、そうだな、お邪魔させてもらおう」

「当然よ！あんたの歓迎会なんだから主役が来ないとお話にならないでしょっ！」

そんなアスカを見てカヲルは

「ああ、でも惣流さんとシンジくんの邪魔はしたくないな」

と若干、意地悪そうに言う。

「な、何であんたが来ることと私とシンジがどうとかと関係があるのよっ！」

アスカが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「冗談だよ、本当に見ていて飽きないな、君は」

からかわれた、というのが分かってアスカの頬はますます赤みを帯びる。

「何よっ、何でも分かったような顔してさっ」

そう言つとアスカはふんつとそっぽを向いた。

- 夕方・葛城邸 -

「言っておくけど、私、シズクたちほど貴方の事、信用してる訳じゃないからね」

ミサトがえびちゅを飲みながらカヲルだけに聞こえるように呟いた。

「構いませんよ、僕もその方がやりやすい」

「何かやる気…？」

カヲルは肩を竦めると

「別に何も、今はシズクちゃんのやる事に付き合うこと、シンジくんたちの未来を見てみたいこと、それだけですよ」

と言った。

「おまたせー」

シズクがそう言っていると料理を運んできた。

「これがシズクちゃんの料理かい？とても美味しそうだ」

カヲルはそう言って微笑むと箸を掴んで唐揚げに箸を伸ばした。

「あ、こらあんたっ！その唐揚げ私が狙ってたんだからねっ！！」

アスカがそう言ってカヲルの掴んでた唐揚げに自分の箸を伸ばした。

「アスカ、二人箸はしたらダメだよ、まだ沢山あるから」

シズクが苦笑しながら残りの唐揚げを2、3個小皿に取り分けるとアスカの前に置いた。

「二人箸？何よ、それ」

アスカがカラルの唐揚げから箸を離して自分の目の前の唐揚げを口の中へと放りながら聞く。

「箸のマナーの一つだよ、二人一緒に料理を挟んじゃダメっていうやつ」

「そんなマイナーなマナーなんて知らないわよ、楽しく食べればいいじゃないの」

納得いかない、といった顔でそれでも唐揚げの美味しさに思わず顔が綻びながらアスカが呟いた。

「郷に入っては郷に従え、日本にいるんだから日本の仕来りを守りなさい」

ミサトがそう言いながらどれにしようかな、とか言いながら料理を探った。

「……………ミサトさん、迷い箸もマナー違反」

ぼそつとレイが呟いた。

「あ、あら、やだ、レイ、わかってるってば！ほほほ……」

ミサトは焦って近くにあったサラダを掴みひょいと口の中に入れ

た。

「ぷっ……」

「あ、シンちゃん、今笑ったでしょ？」

「い、いえ、笑ってませんよ、別に」

シンジは慌てて両手を前に出してブンブンと手を振った。

カヲルはそんな光景を楽しそうに眺めていた。

- 深夜 -

「楽しかったかい？」

みんな眠りについたところ、まだ起きていたシズクがカヲルに向かってそう言った。

「そうだね、こんな愉快的な気持ちは生まれて初めてかもしれないな」
カヲルは微笑んでそう言う。

「カヲルくん、死んでたらこんなことは味わえないんだよ、生きるから楽しいとか愉快とか

そういう気持ちになれる。それは人も使徒も変わらない、と僕は思ってる」

「…そうかもしれないね」

「だけど、楽しかった日々もきつと今日まで、明日はきつとネルフ本部は

今までで一番の地獄を迎えることになる…」

シズクが悲しそうに呟いた。

「老人たちは恐らくリリン同士で潰しあわせる気だろうね、でも君たちのエヴァがあれば他の兵器なんて問題ないように思えるけど」

「…戦自だけが介入してくるだけなら確かに問題はないよ」

「君が危惧しているのはエヴァシリーズのことかい？」

カヲルの言葉にシズクの瞳が揺れた。

「…そうだよ、たぶん乗っているのはカヲルくん、君のダミーだ」

「S2機関搭載のエヴァシリーズ9体を戦線に送り込んでくると確かに厄介だ」

「それに、司令もまだ何をするかわからないし、ね」

「全部明日になればわかるよ、シズクちゃんは自分の思った通りの行動をすればいい、

僕は、君との約束を守ろう…シンジさんと惣流さんが幸せになる世界を作る。

あの二人はいいね、見ていて飽きない、決心が鈍りそうだ」

カヲルはそう言うത്微笑んでリビングで寝ているシンジたちを見た。

「そう、だね…カヲルくんの言うとおりだよ」

シズクもシンジたちを見て薄く微笑んだ。

戦自突入

「了解、これより突入を開始する」

重装備に身を固めた男たちが通信をしている。

直後、巨大な爆発と共にネルフ本部の外壁に穴が開いた。

揺れる本部内。

遂に…来た。

戦自がネルフへの侵攻を開始した、とシズクは確信した。

「ミサトさん」

「わかってるわ、状況は!？」

「既に第4地区まで占拠!狙いはケージの模様!」

「…しゃらくさい…エヴァが狙いつつうわけね」

ミサトがちつと舌打ちをするとチルドレンたちの方へと振り向い

た。

「各パイロットはすぐにエヴァに乗り込んで！生身のままでいたら殺されるわよ！！」

「ころ…される…？なんで戦自が僕たちを…？」

「ゼーレが裏流しでもしたんじゃないかな」

シンジの問いにカヲルが答える。

「ゼーレが…？」

「そう、多分、ネルフの真の目的はサードインパクトによる人類の抹消…とかね」

「そんな…」

「戦うんだ、シンジくん」

「でも…相手は使徒じゃない、人間だよ…」

「じゃあ、君は僕が相手だったら戦っていたのかい？」

「！…それは…」

「シンジくん」

シズクがシンジの肩に手を乗せた。

「何が正しいのか何が正しくないのかなんて、後で考えればいいとりあえず、今は生き延びる…それだけを考えるんだ」

シズクの言葉に少し俯いた後シンジは静かに頷いた。

「それじゃあ、僕は行くよ」

「…頼んだよ、カヲルくん」

シズクの言葉にカヲルは軽く手をあげると

「嘘つきは、嫌いだよ」

と言って発令所を出て行った。

・エレベータ前・

「フィフス発見！これより排除する！！」

カヲルの前に5、6人の男が立ちふさがった。

手にはライフルを持っている。

男たちのライフルが一斉に火を吹いた。

ガキキキイイイイイイイン！！

カヲルの目の前でライフルの弾が全弾、弾かれる。

「…なっ…！？」

男の一人が動揺を隠せずたじろいだ。

「悪いけど、ここから先へは進ませないよ」

カヲルが軽く手を前へと出した。

吹き飛ぶ男たち。

次々来る増援もカヲルは紙くずを千切る子供が戯れるかのように増援を吹き飛ばす。

- 式号機・エントリープラグ内 -

ママ…私を、みんなを…シンジを、守ってね…

式号機が静かに起動した。

- 零号機・エントリープラグ内 -

シズクの話では”これ”が最後の戦い。

たとえ私は消えてもいい、滅んでもいい。

碇くんとかスカ、それにシズクが生き残る未来を掴むために…！

レイの瞳に強い意志の力が宿った。

- 初号機・エントリープラグ内 -

まさか人間同士で争うことになるなんて…

シンジは懸命に首を横に振った。

シズクの言うとおり、今は生き延びることを考えないと。

シンジはそっと操縦桿を握った。

- 3号機・エントリープラグ内 -

遂に…というべきか。

やっと、というべきか。

この時が来たな、とシズクは思った。

本部の中はカヲルが抑えてくれる。

なら、外の侵攻、そしてやってくるであろうエヴァシリーズとの戦い。

それを抑えるのは自分の仕事だ。

シズクは静かに目を閉じた。

「エヴァ各機、発進！！」

ミサトの号令と共に四機のエヴァがジオフロント内へと飛び出した。

『あれは…！？』

周りを囲んでいたのは戦車や戦闘機が大多数を占めていたが

その中に見覚えのあるロボットが何体かいた。

『トライデント改…』

シズクが呟く。

『…あの時田とかいうおっさんの言う事がドンピシャしたってわけかつ！上等じゃない！！』

『アスカ！くれぐれもケーブルの断線には気をつける！』

『わかってるわよっ！！』

そう言つと式号機は空中で一回転してそのまま戦闘機に踵落としを喰らわせる。

碎け散る戦闘機を確認する間もなくそのまま右手を戦車大隊に向けて振るつた。

展開されるA・T・フィールド。

その強靱なフィールドの前に次々と戦車は碎け散つた。

「くっ…ケーブルを狙え！！」

指揮官らしき男の言葉が轟く。

『……………やらせない』

零号機が式号機の横に着いた。

レイのA・T・フィールドが式号機のケーブルを守り、
零号機のA・T・フィールドが零号機自身を守る。

『綾波っ！』

『……………平気』

『助かったわっ、レイ！』

初号機に三機のトライデント改が襲い掛かる。

シンジは初号機の身を捻らせてそれらを回避し、一機の攻撃をA・
T・フィールドで防いだ。

『…何で、何で、僕らが戦わなきゃいけないんだっ！！』

そのまま回し蹴りを一機のトライデント改に加える。

更に、初号機の足からA・T・フィールドが展開されてトライデ
ント改は完全に圧壊した。

「N2爆雷を準備しろっ！出し惜しみをするな…！！」

指揮官の指示が飛んだ瞬間、上空から無数のN2爆雷が投下された。

3号機が黙って空高く腕を上げる。

『A・T・フィールド、全開…！』

3号機のシンクロ率が瞬間的に200%を越す。

上空に張られた巨大なA・T・フィールドが全てのN2爆雷を遮断した。

「空が駄目なら多方向から攻めろっ！つてえ！！」

3号機に向かって全方向より発射されるN2ミサイル。

避けるわけにはいかない…

爆発した余波で本部がやられてしまう。

両手を左右に伸ばしA・T・フィールドを両面へと展開する。

左右だけじゃ…足りない…!?

シズクがそう思った瞬間。

前後のN2ミサイルが急に沈静化して、地面へと落ちた。

『なんだ…?』

「な、何が起こった!?!」

『はい、碇シズクさんその他のチルドレンたち、元気してた?』

エヴァ各機に通信が入る。

霧島マナの声だった。

『…マナ?』

『正解、私たち第13番機械工作隊は室長命令により、ネルフへ

と協力します』

マナの通信と同時に後方にいた二機のトライデント改が別のトライデント改を襲う。

『覚えてる？シンジくん、あの時は強引に誘ってごめんね、これでチャラってことで』

『う、うん、助かった、ありがとう』

『いいのよ、私はトライデント改の操縦を出来ないから後方支援に回るけど、

お礼は改めてムサシとケイタにも言っておいてね』

そう言つと通信が切れた。

『あのおっさん…自分の立場が危くなるでしょうに…全くお人好しなんだからっ！』

そうアスカがどことなく嬉しそうに叫ぶとムサシとケイタが乗っているであろう

トライデント改の前にA・T・フィールドを展開する。

攻撃を受けそうになった二機への攻撃はそのA・T・フィールドによって無効化された。

「忌むべき存在エヴァシリーズ…そして戦自も一枚岩では無かった」

「やはり毒には毒を持って制さねばなるまい」

黒い空間にモノリスだけが浮かび静かに言葉が響いた。

「この感覚は…?」

ほぼネルフ内部を鎮圧したカヲルが呟いた。

「流石だな、渚カヲル君、これが使徒の力か」

加持が拳銃に弾を込めながらそう言った。

「大したことじゃないですよ、不完全な生命体に負ける要因が見当たらない、

それよりも…来ましたよ」

「…何がだい？」

「ゼーレが完成させたエヴァ量産型…流石にみんなもこいつらには苦戦…？」

そこでカヲルの言葉が止まった。

「どうした？」

「この感覚は…アダム…？場所は…地下か、
…加持さん、すみませんがこの場は任せますよ」

加持は何も聞かずにマガジンの交換を終えると

「任せろ」

とだけ言った。

- 人口進化研究所 -

「始まったか…」

ゲンドウは硬化ベークライトで固められたアダムを解放する。

「…人に必要なのは贖罪などではないという事を教えてやろう」

そう言うゲンドウは右手でアダムを掴み自らの口の中へと放った。

ジオフロント上空に九機のグロテスクな容貌のエヴァが空を円に描く。

『エヴァシリーズ…完成していたの?』

アスカが廻る量産機を見てそう呟いた。

『あれにも…パイロットが?』

これはシンジだ。

『…いや、ダミーシステムによる無人操作だ』

シズクが答える。

『手加減はいらないってわけね、上等っ!』

『…………アスカ、気をつけて』

『わかってるっ!』

降りてきた一機の量産機の攻撃を避けながら
式号機はそのまま両手でその量産機の首を掴む。

『はああああああああっ!!!』

式号機が力を込めるとゴキッという音がして一機はその場にだ
りと両腕を下げた。

『みんな!あの剣はA・T・フィールドで受けるな!ロンギヌ
スの槍だっ!』

『ロンギヌスの槍!?!』

『…………了解』

『ちっ、厄介なもん、持ってきてくれちゃって!』

迫り来る槍を避けながらアスカが吼える。

貳号機の隙間を縫うように零号機が接近してプログナイフで量産機の左即頭部を刺した。

『……………二体目！』

3号機が一機の量産機の腕をへし折ってそのまま槍を奪い取る。

奪い取った槍を真横に振るってその量産機の首を薙いだ。

ガインガインガインガインガインッ！

それを見て接近してきた別の量産機と槍同士で打ち合う。

『シンジくん！』

シズクの声に初号機が反応して3号機と敵対していた量産機の頭を蹴りで潰した。

『シンジくん、これを使って』

そう言うつと3号機は初号機に槍を渡す。

『ありがとう、シズク』

『ん、でも槍をただの武器とは思わないで…持つてる時も油断しないだね』

『わかった』

そう言うと二機は襲い掛かってきた二機の量産機の方へと振り向いた。

瞬間、二機の量産機の腹部が横から飛んできた槍によって串刺しになる。

ボゲア…と苦しそうにのた打ち回り二機の量産機は沈黙した。

シンジとシズクは同時に槍の飛んできた方向を見る。

先ほど倒した量産機から奪った槍を放り投げた弐号機の姿があった。

- 人口進化研究所 -

「さて…上手く行くといいが…いや、上手く行かないはずが無い」

そう一人呟くとゲンドウはおもむろに”レイ”の姿をしたそれに右手を伸ばす。

右手には一つの目が浮き出ていた。

「何をする気か知らないけどそこまでだ、碇司令」

ゲンドウが声のする方に静かに振り向く。

そこにはカヲルがいた。

「まさか、アダムを自身の体内に取り込むとは思わなかった」

カヲルが肩を竦めてそう言った。

「……渚カヲル、タブリスか」

「これでサードインパクトを起こせるのはエヴァシリーズとそして、貴方ということになる」

「…私を止めるつもりか」

「それが彼女との約束なんでね」

両者の間に沈黙が奔る。

同時に人口進化研究所全体を覆うほどのA・T・フィールドが展開された。

・ネルフ発令所・

「今度は何っ!？」

ミサトが焦燥気味にマコトに聞きだす。

「セントラルドグマよりほぼ直上の位置から二つのA・T・フィールドを確認。

どちらもパターン青、一方は渚カヲル…もう一方は…え…?」

「どうしたの?」

「あ、その…碇…司令です」

「なんですってえ!？」

「碇め…自らの手でシナリオを完結させる気が…」

冬月の呟きは誰にも聞こえることなく響き渡った。

司令…貴方はこれで本当に良かったんですか…?

リッコの右手がぎゅっと握られる。

訳が分からず震えるマヤの肩にそっと手を置くと

「大丈夫よ、マヤ、あの子たちがいるんだから」

と言った。

やれやれ…何時からこんな人に気を使う性格になったのかしら…
ね。

リッコはそんなことを思いながらもこんな性格も悪くはないわね、
と思った。

福音が鳴り響く(前書き)

最終話です

「S2機関でほぼ半永久的に活動するエヴァシリーズ…正に、神をも恐れぬ行為ね」

リツコがその光景をモニターで見ながら呟いた。

「何か方法はないわけ？」

ミサトがリツコに問う。

「…残念ながら今のところ、無いわね。四人がどれだけ持つか…それだけが焦点よ」

リツコの答えにミサトはモニターを見て唇を噛んだ。

何が作戦部長なのか、何が保護者なのか。

今、現実にあの子たちを救う術が見つからない。

そう思った時シゲルの叫び声が発令所内に轟いた。

「ち…地下の司令が、昇って来ます！パターン青のまま…！」

そう言った瞬間、発令所の底に穴が開きそこからゲンドウが飛び出した。

追う様にカヲルが飛び出してくる。

A・T・フィールド同士が激しくぶつかり合いながら尚も上昇していく二人。

「行くんだな…碇」

冬の呟きにゲンドウは微かな呟きを持って返す。

「…世話になった」

冬月には確かにこう呟いたように聞こえた。

ネルフ本部のピラミッド上の天辺からゲンドウとカヲルが飛び出した。

『何…あれっ…！?』

式号機が量産機の攻撃を避けながらそう言った。

各エントリープラグ内に二つの影がモニタリングされる。

『…父さん!?』

シンジの言葉とほぼ同時に空中に浮かんだゲンドウが右手をかざす。

右手の甲の目が開き、黒い光を発した。

グルエ…グルア…

『何…?』

光が発せられたと思ったその瞬間から量産機たちが一斉にもがき苦しみだす。

一体、一体が順番に行動不能に陥って、そのまま地面へと崩れ落ちた。

黒い空間にモノリスが浮かぶ。

「碇め…まさか、アダムと融合するとは…」

「このままでは我々の計画が…」

「…問題あるまい、目指す所は違っても結末は同じだ。
人類は全て等しく一つに混ざり合い、究極の生命体として永劫に
生き続ける」

「左様、我々の代わりをあの男が為そうとしているのだろう」

「では…最後の時を見届けよう」

そう言つとモノリスは空間から消え去った。

ガゴン、と初号機の顎が急に開いた。

『何だ……！？僕は何もしてないぞっ！？』

ヲヲツヲオヲオツヲヲヲオヲツヲオヲヲヲオヲヲ！！

初号機が吼えるとアンビリカブルケーブルが強制的にイジェクトされてゲンドウを睨む。

『いけない！アスカッ！！初号機を止めろ！！』

シズクが叫ぶ。

『またダミーなの！？』

ゲンドウに向かっていった初号機を弐号機が追う。

『いや、この感じはダミーじゃない……碇ユイの意味だ……！！』

シズクの答えを聞く暇も無くアスカは弐号機を解放した。

弐号機の四つの目が金色に光り輝き、シンクロ率は250%をオーバーした。

顎が大きく裂けて、初号機へと跳ぶ。

ガシツと初号機の右腕を掴む弐号機。

初号機はそんなことはお構いなしに弐号機を引きずるようにゲンドウの元へと向かう。

「来い…ユイ…」

ゲンドウが右手を差し出す。

ズンッ!!

と右腕がA・T・フィールドによって切断された。

ゲンドウは右腕から迸る返り血を浴びながら発信源を静かに睨む。

そこにはカラルが両手を前に突き出していた。

「油断したね。これでもうサードインパクトは起こせない」

「…油断？そんなものをした覚えはない」

ゲンドウがそう言うと右腕が瞬時に再生される。

「なっ…?」

カヲルが驚愕に目を見開いた。

「私はアダムと一つになった、このくらいの自己修復など容易いとだ」

そう言うとゲンドウがカヲルに向かって目を見開く。

刹那。

カヲルにA・T・フィールドが襲った。

「…くっ!?!」

空中で回転しながらなんとか止まるカヲル。

ゲンドウは再び初号機に目を向けると右手を差し出す。

『父さん、何で空に浮いてるんだよ！？初号機をどうしようってんだよっ！！？』

シンジの絶叫がジオフロント内に響き渡った。

「シンジ、少し黙っている」

そう言つとゲンドウの右手の目が黒く光る。

シンジはその光を見ると急速に意識が遠のいた。

『シンジッ！？ちよつと、返事なさいよっ！！シンジ！！』

初号機に引きずられながらアスカが叫ぶ。

『…レイ』

食い入るようにその光景を見ていたレイの零号機に個人回線が割って入った。

『……………なに、シズク』

『さよならだ…今まで、ありがとう』

そう言つと、3号機が零号機の横を駆けた。

『……………シズクッ!』

いや、いや、イヤ、イヤ、イヤッ!

私を置いていかないで!!

レイは無我夢中で3号機の後を追う。

初号機は弐号機を乱雑に振り払うと6枚の翼を展開してゲンドウの元へと跳んだ。

弐号機が地面へと落ちる。

『……………くはっ、シン……ジ……』

初号機に向かって左手を伸ばす弐号機。

その横を3号機が跳んだ。

『シズク!?!』

ゲンドウの右手と初号機のコアが重なる。

「さあ…神の誕生だ、今こそ、全人類に復讐する時が来た、
その為の力をユイよ…私に与えてくれ」

そうゲンドウが呟くと初号機のコアの中にずぶりと右手を差し込む。

『させるかあああああああ!?!?!?!』

3号機から眩い光が発せられた。

呼応するかのようにゲンドウの右手が初号機のコアの中からドス

黒い光を放つ。

「結局、最後まで立ちはだかるのは貴様か…」

『サードインパクトは起こさせないっ！もうあんな世界は沢山だっ！！』

3号機が初号機の背中を掴む。

3号機は光に包まれて一見すると薄い繭の様にもなっていた。

「人知を超えたその力…だが、私の勝ちだな、碇シズク」

『負ける…もんかあああああああ！！！！！！』

3号機の光の光量が増す。

ゲンドウの右手の黒い光の量も同時に増す。

その時、そつと3号機の肩にカヲルが手を触れた。

「僕の力も全て貸そう、君の願いは僕の願いだ…」

カヲルがそう言うと肩に乗せた手に力を込める。

僅かに3号機の光がゲンドウを押し始めた。

「……………無駄だ、私は全ての使徒の始まり、アダムとなった、
どれだけ貴様らが力を合わせたところで話にもならないことを
忘れるな」

ゲンドウの右手が更に初号機のコアの中へと沈む。

ダンッ！

後を追う様に跳んだ零号機の両手がゲンドウを掴んだ。

そのまま初号機から引き剥がすように渾身の力を込める。

『……………人類が生き延びるためには、私たちは滅ぶしかない…
なら、せめて司令、貴方は私と一緒に！』

「…レイ」

『…私は碇くんgetAsukaに渚カラルにシズクに色んなものを貰った、
貴方はくれなかったものを……………貰った！！』

両手に力を更に込める。

『……………だからっ！今度は私がみんなにあげる！！』

ゲンドウの目が怪しく光る。

瞬間、零号機の右腕が吹き飛んだ。

『……………っ！』

宙を舞う零号機の腕を見ながらレイは左腕を離さない。

『……………シズク！零号機の腕を取って！！』

『レイ…？』

シズクは言われるがままに零号機の右腕を掴む。

掴んだその瞬間に3号機の取り巻く光が膨れ上がった。

『何よ…何みんな私を置いてけぼりにしてんのよ…私も、私も仲

間でしょうがっ！！』

アスカがその光景を見て絶叫した。

式号機は何度も何度も宙へと跳ぶ。

しかし、その度に3号機が放つ光によって跳ね返されて地面へと叩きつけられる。

まるで、側に寄るなど言いたげに。

『私だけが生き残るなんて結末…認めないんだからあつ！！』

『…………シズク』

『君の力は想いを光にして形にすること、願うんだ、ありったけの想いを込めて』

レイとカヲルの声がシズクの心に届いたとほぼ同時に

3号機の光が全身から初号機を掴んでいる手だけに集中していく。

僕は…サードインパクトを防ぐ…！

この未来を… 人類を守ってみせるから…！！

シズクとレイとカラルの思考がシンクロして驚異的な光が初号機ごとゲンドウを包む。

バシュッという音と共に初号機のエントリープラグが強制イジェクトされて地面へと落下する。

『…シンジッ！』

アスカが弐号機を慌てて立ち上がらせて
エントリープラグの予測落下ポイントを割り当て、急行した。

光が急速に縮む。

3号機と零号機とゲンドウと初号機を圧縮しながら。

弐号機がエントリープラグを優しくキャッチした。

光の方に振り向く。

式号機が振り向いたとほぼ同時に光は消滅した。

ゲンドウも初号機も3号機も零号機もカヲルも全て飲み込んで。

「……………何よ…何でも、自分一人で…やるなって…あれほど、言
ったのに…」

アスカの頬に一滴の涙が流れた。

「バカ――――――――――ッ
……………」

その日を持って、ネルフは閉鎖。

ゼーレも裏舞台から姿を消し、シンジとアスカは日常へと戻った。

シンジは数日後に目を覚ました。

事の顛末をミサトに聞くと壁に何度も手を叩きつけて泣き叫んだ。
ミサトとリツコ、加持が止めに入ってようやく落ち着きを取り戻して、ベッドに塞ぎ込む。

アスカもまた、自分の部屋に閉じこもりつきりになっていた。

人は思い出を忘れることで生きていける。

辛いことを忘れることで一種の精神が壊れることを自動的に避ける構造になっている。

だが、シズクたちが残した思い出はあまりに深く、シンジたち生き延びた人類の心に爪あとを残した。

そして、学校が始まる。

「…よつと」

シンジは器用にフライパンを返すとオムレツがひっくり返った。

「ちょっとシンジ、まだなの？」

「そう言っなら手伝ってくれたっていいじゃないか」

「私は食べる専門なの」

「シンちゃん、私が手伝ってあげてもいいのよ？」

「ミサトさんは黙って見ててください」

「うぐっ…く、口調が段々あの子に似てきたんじゃない？」

「そうですか？」

そう言ってシンジはテーブルに料理を運んだ。

「行ってきます」

「いってきまーす」

「いってらっじゃい」

学校に着くと、トウジたちが待っていた。

「なんや、おまいら、ゴツツい久しぶりやなあ！」

「うん、ちょっと…ね」

「それにしても夫婦揃って登校とは仲睦まじいことで」

「そんなんじゃないわよっ」

ケンスケの言葉にふんつとそっぽを向くアスカ。

誰も三人のことは口に出さない。

出すと全てが壊れてしまいそうなのがするから。

ガラスと教室のドアが開く。

老教師が入ってくると、壇上へと上がる。

こほん、と咳払いを一つして、

「えゝ、みなさんに重大なお知らせがあります」

と言った。

「重大なお知らせ……？何かしら、進路相談とか……？」

ヒカリがアスカに耳打ちする。

「知らないわよ……どうせ大したことじゃないでしょ……」

アスカはつまらなそうに頬杖をついてそう呟いた。

「入ってきなさい」

老教師の言葉に三つの人影が姿を表した。

銀髪の少年、水色の髪の少女、そして、それに瓜二つの黒髪の少女。

思わずシンジとアスカは立ち上がった。

三人はシンジとアスカを見て軽く微笑む。

「み、んな……？」

シンジが泣きそうになりながらなんとか言葉を振り絞った。

「ただいま……シンジくん」

そう言ってシズクが微笑むと同時にアスカが三人に抱きついていった。

「でも、どうやって…?」

放課後、五人で歩いていたシンジがシズクに聞いた。

「うん、僕の力は願いを叶える光を発すること…」

あの時、僕はサードインパクトを防ぐ、それだけを願った」

「……………それを私が干渉したの」

「綾波が?」

「……………そう、私たちも生きていたい、碇くんやアスカたちと暮らしたいって」

「気が付いたら赤城博士に拾われてた」

カヲルが続ける。

「じゃありツコは知ってたの!?!」

「そういうことになるね、検査が終わるまでは内緒にしておくって言ってたから」

「何の検査よ?」

アスカがジト目でカヲルを睨んで言った。

「それは、僕たちの身体検査さ、綾波さんの願いが叶ったかどうか

…のね」

「綾波の願い…僕たちと一緒に暮らしたいっていうやつ？」

「そう、検査の結果が出て僕は思わず驚愕したね、

三人ともリリン、人間と全く同じ肉体構成になっていたんだから」

「何それ…じゃあ三人とももう使徒じゃないの？」

「……………そう、使徒と使徒は共存出来ない、

だから私は願ったの、みんな人間になれますようにって」

「じゃあ…」

「うん、僕たちはもうどこを調べても他の人と変わらない人類、人間だよ」

シズクがそう言って微笑んだ。

「あ」

カヲルがポツリと呟く。

「どうしたの、カヲルくん？」

「いや、リリンに成ったのなら男女としての垣根が出来たことになると思ってた」

そう言ってカヲルは自分の顎に手を当てた。

カヲルの考えを読んだのかレイがシズクの前に立ち塞がる。

「…………シズクは渡さない」

カヲルは暫くきょとした表情をしてレイを見ていたがやがて静かに微笑むと

「面白い、第2ラウンドを開始するかい？」

今度は人間として、どちらがシズクちゃんを幸せに出来るかを」

「…………望むところよ」

「ふ、二人とも、止めてよーっ!!」

シズクが真っ赤な顔で叫んだ。

じーわ、じーわ。

電柱に止まった蝸が鳴く。

その鳴き声は永久に続く。

これから始まる新しい人類の未来へと向かって。

く完く

福音が鳴り響く（後書き）

後書き。

初めはシンジが時代逆行した話を書こうとだけ思ってた

それだけじゃ捻りが無いからシンジをいつその事性転換させちゃえ、という行き当たりばったりな発想で出来上がったのがシズクでした。

途中レビューで某小説に酷似していると言われ確かめたら

本当にどうしようもないくらい似ていて

全部削除しようかと考えましたがもう既に全話書き終えた後だったので

せつかく書いたので掲載しておこうと思って一気に掲載という形に踏み切りました。

次回、何か書くことがあれば事前にちゃんと調査して二度とパクリのようなものにならないように努めたいと思います。

最後の最後にみんな人類になって終わってます。

基本的にハッピーエンド。

これを崩さず書いてたなら幸いです。

では、最後になりましたが、

新世紀エヴァンゲリオン〜未来への案内人〜
そろそろ幕引きの時間です。

このむやみに長い文章を読んでくださった皆さん、本当にありがとうございました。

心から感謝の念を込めて……………多謝。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8253/>

新世紀エヴァンゲリオン～未来への案内人～

2011年5月23日10時00分発行